

姓はロロノア 名はリィナ

ぽんDAリング

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゾロとオリ主が麦わら一味で無双してしまう話…のはず。

※ 無双まではまだまだ長い道のり。

一つの世界で生を全うし、死した少年は神の思惑に乗せられて転生する。

転生した先は『ONE PIECE』の世界。

複数の転生者と邂逅しつつも『兄』として慕うゾロや麦わら一味との仲を深めていく。

※ 『ONE PIECE』の謎の一部に触れながら作者の独自解釈で話が進みます。『二年後集結』までを予定し、最終的に『ラフテル』の解明をしますので捏造や改変が多々あります。そういうのがお好きで無い方はブラウザバックして下さい。

目次

1	・翡翠のあなたと生きる道	1
2	・待ち望んだ再会	16
3	・明かせぬ秘密	27
4	・暗躍と画策と焦燥	41
5	・その瞳の先に	55
6	・道を辿る者、逸れる者	73
7	・想いの向かう先へ	92
8	・力の扱い方と制限	108
9	・海への想い 空への期待	128
10	・秘め事と静観	145
11	・天災と神災	162
12	・思惑と改変	180
13	・大きな困惑、小さな転機	196
14	・蝶の羽ばたき	215
15	・脅威と危険度、その抑止力	233
16	・束の間	251
17	・デービーバックファイト	259
18	・名は能力を表す	268
19	・少年の名は：	274
20	・前途多難	283
21	・茶番	294
22	・茶番の裏側	307
23	・いざウオーターセブンへ	316
24	・上陸 そして来客	322

25・査定と八つ当たり	329
26・気易さと秘密の願い	336
27・重なる問題 続く不運	344

1 ・翡翠のあなたと生きる道

一見して、酒場として判る明るさを灯す建物を見付け思わず早足になる。

建物の外からでも数人の楽しそうに話す声や笑い声が響いてくることに安堵する。

…良かった。人が居る。

躊躇うことなく、しかし焦らず落ち着いて入り口の扉をゆつくりと開け、私は現状を打破する為に声を出す。

「こんばんは。突然で申し訳ないのですが、何か羽織るものを貸していただけないでしょうか？」

シン、と静まり返る店内。先程までの喧騒に私の声は掻き消され、耳まで届いていなかった様だ。

店内の数人の客達は私を見たまま固まっている。ある者は口を大きく開け、ある者は目を見開き、ある者は飲みかけ、注ぎかけの飲み物を零している。

仕方が無いのもう一度、今度は先程よりも音量を大きくして声を出す。

「ゴホン。…皆さん、こんばんは。お酒の席でお楽しみの所大変申し訳ないのですが、何か羽織るものを貸していただければ嬉しく思います。」

こちらは突然の乱入者なのだ。先程は礼儀を欠いたと反省しつつ頭を下げる。

頭を上げつつ店内を窺うと、カウンター席に座っていた男性が凄いい、鬼の様な形相でこちらへ向かって歩いてくる。

…ああ、やはり迷惑だよな。怒らせてしまった。

店を出ようと思いい口を開く。

「申し訳ありません。…迷惑をお掛けしました。」

もう一度頭を下げ謝罪し店を出ようとしたところで一枚の布が私を包み込んだ。

「マスター！上の宿使わせてもらおうぞ？」

頭上から聞こえた声に顔を上げると先程の鬼の様な形相は無く、無表情に徹しつと泣きそうな瞳の男性と目が合う。

と、ふいつと私から逸らすように顔を上げ、周りを見渡しながらい放った。

「こいつは明け方海軍に連れてって保護してもらおう。それまでは俺が責任もって保護する。…文句ある奴あいるか？」

店内を見渡し語尾を強める男性に対して、他の客たちは慄きながら激しく首を横に振っていた。

再び男性は私に視線を落とし、付いて来いと顎をしゃくり行く先を示す。

※ ※ ※ ※ ※

酒場の二階、宿屋の一室にて私は男性に風呂に入るよう促され脱衣所の鏡前にて唾然としている。

『現状』を打破する為に酒場へと足を踏み入れた筈なのだが、私が把握していた『現状』よりも凄惨な『現状』で『現状』よりも『現状』なのでゲシュタルト崩壊気味なのだ。

OK。落ち着け私。いや、俺。一から思い出してみよう。

まず、目が覚めると辺りは暗く、生い茂った草木の真っ只中。つまりは夜の森の中だった。

そして、なぜか全裸だ。なぜかZE☆N☆RAだった。大事なことなので（ry

そう、だからこそ何か服を着ようと辺りを探ったが服などどこにもなく困ったのだ。

仕方がないのでそのまま森の中を彷徨い歩き、茂みの隙間から見えた明かりを頼りに酒場までやってきた。

よし！ここまででは順調だ。ここまですを精査すると、夜の森というこ

ともあり、真っ暗で自身の確認も出来ない状態だった。

あと、結構混乱していた。自分の身体の変化に気付けない程には混乱していた。いくら違和感があったとはいえ、服は無い、場所も判らない状況では仕方ない。そう、仕方ない。

だから、恥をしのんで酒場で羽織るものを拝借しようとしたのだ。もちろん店内に入ってからは前は隠していた。堂々とぶら下げたまま店内に入る程、変態という名の紳士ではない。

それから、羽織る物を拝借できたら警察を呼んでもらう筈だったのだ。

だって、俺は被害者だ。何時の間にか拉致られて、身包み剥がされて見知らぬ土地に放置だなんて。

全裸で徘徊する性癖の不審者ではない。決してない。イジメ、ダメ、絶対！

ここまで俺の主観。俺の認識していた『現状』だ。

そして、俺の認識していなかった『現状』。酒場のマスター、客達の目線。

まず、各々が楽しく酒盛りしていると酒場の扉が開く。

扉から入ってきたのは女の子。入るなり羽織る物を所望する泥だらけで全裸の女の子。

：そりや固まるよ。俺だって固まる。余裕で飲み物零すね。

だって明らかに事案発生です。即通報ものです。

でも、当人がそれを認識してないんだから困ったでしょうね。

だって、俺男だし。男だった筈だし。いきなり女の子になつてるとか思う訳ない。だから、俺は悪くない。

そう、俺は悪くない。

※ ※ ※

はあ、と大きく息を吐き出す。過ぎた事を悔やんでも仕方がない。とりあえず、落ち着こう。

鏡に映る自分の姿が泥まみれであることを鑑みても、まずは風呂に入った方が良いことは明確だ。

森の中を裸足で彷徨っていたもんだから足の裏が地味に痛い。湯船にお湯を張りつつ同時に身体を洗いながら考える。

身体を洗う事に少しも違和感を感じない。

男の時には無かった二つの膨らみに恥じらいや抵抗は無い。男の時はあつたはずの棒とか無くても焦りは無い。

セミロング程度の髪の毛の長さではあるが手馴れた洗い方で素早く湯を流し、スルスルとタオルで纏め上げた。

それが当たり前であるかのように全身をくまなく洗い終えてから湯船に浸かる。

「ああ〜気持ち良いい〜♪」

思わず出てしまった声は明らかに俺の声ではないのだが、もともとそうであつたかのようにその高い音に馴染んでいる。

湯船もユニットバス程の大きさしかないはずなのに今の俺では少し大きめを感じている。

脱衣所の鏡に映った自分は15、6才くらいの少女だった。しかし、それすらいつもの光景の様で俺は「男」である事実を認識するのに数秒要した。

それくらい、俺は僅かな違和感しか感じていなかった。思考でさえもすっかり保たないと少女のそれになってしまっていた。

そう、非常事態だったとはいえ公衆の面前で裸体を晒してしまったことについて絶賛後悔中なのである。男の頃に比べて羞恥心が半端無い。

…やばい。ほんとに俺は女になってしまったのか。

しかし、なぜ、と疑問は途切れないのだがこのまま悶えていても仕方が無い。湯船から上がり脱衣所に備え付けてあるバスタオルで身体を拭いてバスローブを身に纏い、意を決して客室へと足を踏み出す。

客室の椅子には先程の男性と白衣を着た初老を過ぎたくらいの男性が話しているのが見えた。男性が俺に気付き顔を向けたので、まず

はお礼を言っておこうと口を開く。

「あの、お風呂ありがとうございました。後日必ず謝礼h」医者に診て貰え。」

「…はい?」

「この爺さん。医者だから診て貰え。」

それだけ言うとうと男性は足早に部屋を出て行ってしまった。

ええと、どうすればいいの?いしゃ?イシャって何だっけ?

戸惑いつつも医者だという男性に顔を向けるとニコリとやさしい笑顔を向けてくれた。

「ワシヤ、この村で医者をやつとるガンジというもんじや。お嬢さんの怪我を診てやってくれとあやつに呼び出されてのう。診察を始める前に名前を教えてもらつていいかい?」

これはご丁寧にも、と頭を下げて口を開こうとしたのだが…
俺の名前って何だっけ?

住所は日本の…あれ?思い出せない。え…と、俺は何してたんだっけ?

「あの、すいません。名前…というよりほとんど自分のことが思い出せないのですが…あと、ここはどこでしょうか?」

「なんと…記憶障害かい?…ここは東の海イースト・ブルーのナナシノニツパ村じやよ。」

…イースト・ブルー?聞いた事無い国だな。いや、どこかの地名なのか?

考え込んでいる俺をよそにガンジさんは、可哀想に、こんな娘さんがと呟いていた。

「さ、そこに腰掛けてくれ。身体に外傷や痛む箇所は無いかい?」

「え?ああ、先程身体を洗いましたが特に外傷は無かったと思います。頭部にも特に痛みや腫れは無いと思いますよ?あ、裸足で森の中を歩いたので少し痛むくらいでしょうか。」

フムフムと何やらカルテらしきメモを取りつつ俺の腕や足を診てゆくガンジさん。視診、触診に邪魔なバスローブを自発的にはだけける

とガンジさんはビクリと肩を振るわせる。

「これ！女子が恥じらいもせず脱ぐでない！」

カアッと自身の羞恥心が込み上げる。指摘され女性の思考が表に出てくることに動揺してしまう。

「す、すみません。着たままだと邪魔になると思いました！」

「いや、怒鳴ってすまん。医者としては手間が省けてよいと思うのだがのう。女子としてももう少し貞節をと。」

まあ、うん。確かに女性が勝手に脱ぎだすのは倫理的にあまり宜しくない。でも、俺って心は男なんだよなあ…へこむ。

落ち込む俺を尻目にガンジさんは手際良く診察を進めていく。

※ ※ ※ ※ ※

「うむ、申告通り外傷は足の裏のみじゃの。視診だけじゃと健康そのものじゃわい。…あとは、記憶障害じゃが何か覚えていることはないかい？」

「気付いた時には森だったんですよね。その時点で周囲を探ってみたんですが服や持ち物はありませんでした。」

ふむ、と顎に左手を据え首を傾げて思案しているガンジさんは右手に持ったペンで机をトントンと叩いている。

「…海賊か山賊にでも身包みを剥がされたんじゃないかと聞いていたんじゃないが、そういう外傷も無い。すまんが、ワシじゃあろくに推測も出来んわい。」

「いえ、こうして診察とお話をしていただけるだけでもとても助かっています。」

事実、俺は助かっている。今の時点で自分がどういった状況にあるのかさっぱり分からないので、自分以外の情報から埋めるしかないのだから。

「そう言ってもらえるとワシも助かるよ。お嬢さんの覚えている事は他には無いかい？土地や建物、食べ物など何でも良いんじゃないが。」

「そうですね、イースト・ブルーって地名に聞き覚えは無いんですよ

ね。お r : 私は日本って所に住んでいたはずなんですが。」

俺は元々男だったことを除いて覚えていることをガンジさんに話した。

※ ※ ※ ※

「うむ…ニホンという国でアルバイトなる職に就いていたが、気付いた時にはジンの森で衣服を着けていなかった。他に名前や自身の事もほぼ覚えていない、と。それで、海軍ではなくケイサツという治安部隊が存在しとる地か。…こりやまいったわい。」

ガンジさんはうーん、と頭を掻きながら、ちよつと待つとれ、と言つて部屋を出た。

一人になつた部屋は静かで、下階の酒場から陽気な話声や笑い声が微かに聞こえてくる。

椅子から立ち上がり窓辺へ寄ると外は少しの民家から漏れる灯りが見えるだけ。雲に隠れているのか月や星は見えない。

：街灯すら無いってどんだけの田舎なんだよ。

仄暗い夜空の闇に、見知らぬ土地に、抗えない孤独感が湧き上がつてきそうになるのを顔を振って追い払う。

俺は元の生活に戻れるのだろうか。そもそも、身体が女性に変わつてしまつていて本来の意味での元の生活には戻れない、と確信にも似た絶望が沸き立つ。

不安からか背筋にゾワリと寒気が這い寄る。同時に鼻腔の奥に言い得ぬ鈍い痛みが走る。

：やばい、泣きそうだ。

身体が女性になつていて為か精神も涙腺も弱くなつてい様だ。

：泣くな。泣いても何も変わらない。

泣いても自分の弱味をみせるだけだ。泣いてはいけない。今までそうやって我慢して生きてきたんじゃないか。

：今まで？どうやって？

思い出せない。思考が止まる。

…思い出せない。

思い出せないことがこんなにも辛いことなのか。

…思い出せない。

何を思い出せないのか思い出せない。

上手く息が吸えなくて苦しい。激しい動悸で胸が痛む。

ああ、やばい。視界が…歪む。

※ ※ ※ ※

…ん、どこだここ。

気付くとそこには何も無い世界。俺が認識出来る色や形も無い。自分自身の輪郭さえも無い様に感じる。…いや、実際に無い。

…ここはどこだ？ここは何だ？

宙に漂う意識のみの存在とでもいうのか。見ているのに見えない。聞いているのに聞こえない。触れているのに触れてない。

…動けない。動かない？

ただの暗闇。星々の存在しない宇宙みたいな。重さも流れも感じない、ただ一点に停滞する俺という意識。

…あれか？魂、的なやつ。

肉体が無いからか目を閉じる事も無い。視野も全方向360°に広がる。手足を動かす感覚もなく浮遊感さえ感じない。

…ここは死後の世界、天国？地獄？

『ここは君の終着点さ。』

…いま、確かに聞こえた。

いや、肉体が無いので聞こえたというのは違う気がする。感じた。届いた。表現出来る術が無い。

『そして君の始発点だ。』

…終わりの始まり？いや、終わって始まるのかな。

『そう。君という個が終わり、君という個が始まる。』

『君という群が終わり、君という群が始まる。』

…そういう哲学的なこと言われても解りませんよ。

『唐突だけど、輪廻転生って概念、あながち間違っではないんだよ。』

…えっと、たしか仏教のやつでしたっけ？

『前世や来世ってやつだね。』

…つまり、俺の今世が終わり来世が始まるってことですかね？

『半分正解。君は地球という物語での群の役目を終えた。』

…群の役目？

『君の魂は一つ。でも器は数限りなく生まれ出る。君は一人で生み、

生まれて、死に、殺し、殺され、愛し、愛され、全人類の器を満した。』

…時間も何もかも無視して俺一人だけで転生し続けてたってこと？

『そう。それが地球という物語。』

…そっか。それが、個であり群であるって意味か。

『あつさり納得してるけど大丈夫？』

…大丈夫。役割を終えたってことはつまりそういうことだろ？

『まあね。その聡明さと諦念さは最後の器の影響ってところだろうね。』

…今じゃ、ろくに思い出せないけどな。

『さて、君には次があるんだけどどうする？』

…いや、どうするって何や？

『群を始めるもよし、他の群物語に君という名の個イレギュラーを始めるもよし。』

…出来るの？ってか良いの？

『いいよ。似た物語ばかりじゃ読者は飽きちゃうからね。』

…色々突っ込みたいけど今は止めとく。じゃ、出来るだけ個の多いところだ。

『オツケー。特典とか要る?』

…特典?何があるの?'

『原作知識とか、オリ主チートとか。』

…止めろお!!!メタいの駄目!!

『他にもハーレム√やクロスオーバーなんかもあるのに。』

…いやいや、ないわ。てか、神様転生なんてベタ過ぎだつて。

『ちえつ、身内では流行ってるのに。』

…いや、もう適当でいいよ。でも原作知識は不可!自分の人生は自分で切り開くから。

『はいはい。じゃあアレでいいかな。結構スリリングでトレジャーでスペクタクルなヤツだよ。』

…もうアニメでもラノベでもなんでも良いよ。

『原作は漫画でアニメになった有名作品だよ。』

…だったら、今の記憶は消しといてね。

『おk。じゃ、新たな始まりを楽しんできてね。』

…はいよ、いってきます。

※ ※ ※ ※

「・・・な！ま・れ・・・て・・・いな！」

・・・なんだ、そんなに耳元で叫ぶな。

「おき・・・な！お・て・・・そく・・・よ！」

・・・揺するな。首が痛い。

「・・・べっ・・・はこ・・・じゃ！」

途切れつつ聞こえる声と私を揺さぶる振動。不意を突く浮遊感。柔らかな感触。

洗濯物の良い香り、私を支える暖かな体温、強く握られる手の平から伝わる温もり。

「おい！・・・いな！やく・・・をまた・にすん・・・よ！」

・・・ああ、暖かい。右手に伝う温もり。

「・・・り・いな！」

・・・誰かが私を呼んでいる？

暖かな手。少しゴツゴツとした手。だけど、私に温もりを与えてくれる手。

私の右手を両手で包み放さない。まるで、子供のような純粋な手。身体感覚が徐々に戻ってくる。散らばった意識を拾い集め覚醒を促す。

意識をすると固く閉じていた重いまぶたが少しだけ開く。突然の集光に瞳が驚きまぶたは再び閉じてしまう。薄目を開けつつ光に慣

らす。薄っすらと視界に入るのは緑色で短髪の青年。

今にも溢れ出しそうに瞳を濡らして私に話し掛けている。

「泣か…ないで。ちゃんと、聞こえてる…から。」

やっとの思いで声を出して話掛けるが、思いの外弱々しく擦れた声しか出ない。

青年は一目見て判る程動揺して大きく顔を反らした。

「泣いてねえ！絶対え泣いてないからな！」

そんな強がりを見て、私はおかしくてその人の横顔に向かって微笑んだ。

私を必死に呼んでくれたその人の温もりを手放したくなくて右手にぎゅつと力を込めて。

「ああ、青春しとるとこ悪いが…ロロノア、そろそろいいかのう？」

ロロノアと呼ばれた青年は顔を真っ赤にして、バツの悪そうにしながら私から離れようと立ち上がる。

が、私は感覚が完全に戻った右手に更に力を込めていた。

「…放せよ。」

「いやだ。そばに居て。」

「…いやだって、おまえ…はあ、仕方無え。」

そう言つてロロノアさんは顔を背けたまま私の近くに不承と座つた。

再びガンジさんの診察を受けながら、話を聞く。

ロロノア・ゾロさんはこの海、イースト・ブルーではそれなりに名の通った海賊狩りなのだそう。医者であるガンジさんよりもロロノアさんの方が他の島にも詳しくかろう、とニホンの事を聞きに部屋を出たそうなのだが、戻ってみると私が窓辺で倒れていて、なぜかロロノアさんが取り乱したのだという。

「海賊狩りと恐れられるおまえさんが泣き叫ぶなんてのう。いいもん見れたわい。」

「な！泣いてねえ!!…その、こいつが知り合いとダブツちまってよ。なんつーか、咄嗟に。」

「ロロノアさん、ごめんなさい。私のせいで辛いこと思い出させてし

まったようで…」

「いや、おまえのせいじゃねえよ。俺の修行不足だ。まだ精神に弱いところが残ってる証拠だ。それと、…ゾロで良い。おまえとその知り合いがそっくりでよ。だから、おまえに口口ノアって呼ばれるとなんかむず痒くなる。」

思わず、ガンジさんと顔を見合わせて笑ってしまう。

背中越しで顔は見えないがきつと照れたように不機嫌な顔をしているに違いない。

「じゃあ、ゾロ。私のことおまえじゃなくてリイナって呼んで？」

「わかった。…ってか、おまえ記憶g「リイナ！」

「…で？リイナ、記憶が戻ったのか？」

ゾロは勢い良く振り返り、ガンジさんと共に私を覗き込んでくる。私はガンジさん、次にゾロへ顔を向け今の心のままに話を始める。

「ううん。記憶は戻ってない。忘れたというよりも無かったって感じかもしれない。だから、戻るかもしれないし、戻らないかもしれない。私には分かんない。」

さつきガンジさんが部屋を出てから一人で窓の外を見たの。月も星も出てなくて真っ暗で。私を知ってる人も、私が知ってる人も誰一人居ないんだと、とても孤独を感じた。

それで急に悲しくなって、寂しくなって、苦しくなって。意識も真っ暗になったんだ。それで、気付いたら何も無い真っ暗な場所で私は動けないの。

ああ、私は独りなんだ。このまま何も思い出せないまま、知らないまま暗い闇に落ちていくんだって。

でもね、ゾロが私を呼ぶ声があった。なんとなくだけど、リイナって呼ばれた気がした。

そして、ゾロが私に体温を伝えてくれた。それはきつと生まれたての赤ちゃんがお母さんやお父さんから伝えられる優しい温もり。

生まれてくれてありがとうって。嬉しいって。

だから、私は今日生まれたんだと思う。そして、リイナと名付けてもらった。そう思いたいな。」

私はきつと自然に笑えたと思う。ゾロもガンジさんも優しく微笑んでくれた。それがとても嬉しくて、その気持ち良い想いを胸に抱えたまま、ゾロの温もりを右手で感じながら自然と眠りに落ちた。

※ ※ ※ ※ ※

「ロロノア。」

「なんだ、爺い？」

「なんだかよお、子をもつって気持ちはこんなに幸せになれるものなのかねえ。」

「はっ、年い考えろ。どう見ても孫じゃねえか！」

「おっほっほ。じゃったらおぬしが父親じゃの。なんせ名付け親じゃからのう。」

「…俺あ、まだ17なんだがな。デケエ子供が出来たもんだ。」

二人の男が傍らに眠る女の子に微笑み、静かに杯を交わし静かに夜が更けていく。

2 ・待ち望んだ再会

一隻の船が海原を滑り行く。

船首の羊が風を切り、海賊旗をたなびかせ、東の海を進み行く。
イースト・ブル

「サンジィく、腹減ったあ！」

「ウルセエ!! あ、ナミすわくん、トロピカルジュースおまたせえく！」

「あら、ありがとサンジくん♪」

「うるせえぞ、昼寝のジヤマすんじやねえ！」

「ちよ！ゾロ!! そんなトコで寝んなよ！火薬星踏むなあ!!」

少々賑やかな船上ではあるが順調に進む航路に乗組員は和やかな
雰囲気を楽しんでいる。

「なあナミ！ローグタウンはまだか？」

「島は見えてるけど向かい風で速度が出ないのよねえ。だけど、今日
中には着くわよ。」

「海賊王 ゴールド・ロジャーが処刑された町かあ。勇敢な海の戦士
ウソップ！ぜひ立ち寄らねばなるまい！」

「俺は珍しい食材が調達出来るなら何処でもいいけどよ。」

「…俺あ、刀が欲しい。なあ、ナミ？」

「いいわよ。と・い・ち・ね♪」

「十日一割?! : 足元見やがって。しやあねえ、わかったよ。」

「ナ・ミ・すわくん！果物もいっぱい買っておきますねく！」

「ええ、ありがと♪」

「そうか！食材で：ドリアン星：シユールストレミング星：他にも
色々作れるな。」

「処刑台からの眺めかあ、海賊王が見た景色！うおお!! 早く着か
ねえかなあ!!! : ん？なんだあれ？」

各々が次の街に思いを巡らせ、逸る気持ちに航路の先を見据える。

その中で麦わら帽子の少年が異変に気付いた。

「…なあ、人が立ってっぞぞ？」

「はあ、おバカ。こんな海のと真ん中で人が立ってる訳：ウソ?! 立っ
てる!」

「なんだあ？…あのシルエツト、間違いなくレディーだ！ってことは人魚か？人魚ちゃんなのか?!人魚ちゃくん!!」

「まてまてまて！こっちに歩いて着てるぞ?!敵か?!敵ならゾロ!お前に任せた!!俺は持病の『船上で戦うと腕の関節が三つになってしま病』が…」

「なんだ、人魚じゃねえのか。どーやって海の上歩いてんだ?なんかの能力者かなあ!ニシシシ、スゲエなあいつ!」

麦わら帽子の少年、ルフイと呼ばれる少年は楽しげに海上の歩行者を眺めている。

刀を3本携えた緑色の短髪、ゾロと呼ばれる青年は相手の得物を見遣り僅かに闘争心を抱く。

長つ鼻の少年、ウソツプと呼ばれる少年はゾロの後ろに隠れて海上の歩行者を警戒している。

オレンジ色の髪の少女、ナミと呼ばれる少女は進路変更の為の風を読みつっいつでも逃走出来る様に構える。

金髪のグルグル眉毛、サンジと呼ばれる青年はレディーならば大歓迎と両手を広げて待ち構えている。

海の上でゆっくりと歩を進める不審者は今にも走り出したい気持ちを抑え優雅な佇まいを心掛ける。

※ ※ ※

落ち着け私。こんな時は素数を数えろってお爺ちゃんが言った。

1、3、5、7、9…ってただの奇数でした。

目測で500m程まで近付く一隻の海賊船に愛しの人が乗っている。そう思うと高鳴る鼓動を抑えられない。

今すぐ走って行って彼の胸に飛び込みたい。

会いに行こうと思えばいつでも行けたのだが、それでも黙って待つのが女の役目だと言われて我慢していた。

一時期、時々、稀に、少しだけ遠くから覗いた時もあったけど、直接会いに行つてないからセーフ!

彼と供に居たいがためにあの日から力もつけたのだ。足手まといにはならない自信はある。私の力を見せれば彼も帰れとは言うまい。女の身としては守って欲しいとも思うが、彼に背中を預けられると認めて欲しいとも思う。

そもそも結果論だが彼が一人で出て行く必要は無かったのだ。結果論だけど。

それでも、私の為を思つての行動なのだから責められない。むしろ嬉しい。愛する女の為に身を挺して守る男。とても良い！

突然だが、私はゆつくりと歩を進めてはいるが、あちらは風を帆に受けてこちらの数倍早く海上を進んでいるのだ。

深い思考の海から顔を出し、目線を前に戻した時、頭に激痛を襲い船底が見えた事は自業自得といえるだろう。

※ ※ ※

「…な、なあ。あいつ、こっちを見てない気がするんだが?!」

狙撃手でもあるウソツプが見張り台から望遠鏡を覗きながら声を荒げる。

「つってもなあ？フード被ってるから顔が見えねえ。視線も感じねえが。進路変えるか?」

見張り台の真下で伝言役のゾロが答えつつ航海士のナミへ意見を仰ぐ。

「少しでも迂回しましよ！帆を調節して少しでも右旋回！」

「おう！」

ルフィとサンジが返事と同時に帆を張るロープの調整へと素早く取り掛かる。

風を受けて船は進路を変え、海上の歩行者との接触は余裕で回避することが出来るはずだった。

「!?!」

今までの穏やかな向かい風が急に横風へと変化したのを受けて帆

を張るロープが切れたのだ。ロープの切れた帆は風の影響で右へ左へと船を走らせる。

「ルフィー！なんとかしてっ！」

重心を左右に揺らすに船に、堪らずナミが叫ぶ。普段は落ち着き無くはしやぐ船長だが、不測の事態ではやはり頼りになることを知っているからだろう。

「任せろっ!!」

ルフィーは船の手摺りに両足を絡め、悪魔の実の能力を使い両手を伸ばす。横風で荒ぶるロープを難なく掴み、両手を思い切り引き寄せる。

「あ、バカー！引き過ぎー！っ危ない!!」

風向きと思い切り引かれた帆の角度に、進路方向を咄嗟に見たナミは船頭の先に人影を確認し思わず声を出す。

「「「あっ!?!」」」

ナミ以外の4人が同時に前方へと視線を向けると同じくして、ゴン！と小気味良い音が船首の方から聞こえた。

「「「：轢いいいたあ!!」」」

「ちよ!?!ルフィーとウヰッ!ツプは急いで帆を畳んで!ゾロとサンジくんは人命救助！急いで!!」

いくら航海歴の長いナミでも、さすがに海での人身事故など初めての経験だろう。

「「「これ、過失とか賠償責任とかどうなるんだろ。」

誰にも聞こえない声で涙を流しつつ小さく呟いた。

※ ※ ※ ※

サンジがロープを体に巻き付け海に飛び込み、船に轢かれた人物を掴むとゾロがロープを引き、素早く二人を引き上げる。

事前の情報から、フードを被ったこの人物は女性である様なのでナミが応急処置に取り掛かる。フードを引き剥ぎ、呼吸の有無、外傷の確認を手早く進めていく。

そこに帆を畳み終えたルフィとウソップ、直接救助したゾロとサンジも集まる。

安否確認に駆け寄る4人にナミは無事よ、と声を出す。だが、救助者を覗き込む4人の中で一人だけ可笑しな声を上げる者がいた。

「っ!?…すまねえ、俺は船内にいるからそいつが船から降りたら呼んでくれ!」

…ゾロである。

そう言っ甲板から逃げ出そうとした。

が、ナミとルフィに素早く腕を掴まれ、逃げる事は出来なかった。

「なんだ?ゾロの知り合いかあ?」

「ちよつとゾロ!この人知ってるの?」

「おいこらクソマリモ!こちらのレディーはどちら様だ?!」

「おい、ゾロ!知り合いなら逃げることねえだろ?」

4人に詰め寄せられゾロは吹けない口笛を吹きながら知らねえ、としらを切る。

「二ルフィ並みに嘘下手だな!!!」

三人からの同時のツッコミに比喩された当人はニシシ、と笑いそっか?と首を傾げる。

ゾロは普段見せることの無いような焦りを表し船内へと逃げ込む隙を伺っている。

「…頼む、後生だ。何も聞かずに俺を逃がしてくれ。」

サンジはそれでも逃がすまいと船内への扉の前へ身体を滑り込ませて逃走を防ごうとする。

そして、ゾロの弱気な態度にナミとウソップは顔を見合わせアイコンタクトを取る。

(ゾロがこれだけ脅えるなんて、よっほど危険な子なのよ!)

(ゾロの狼狽え方が尋常じゃねえ!関わっちゃ駄目だ!!)

この場において賛同が二人になり、多数決で逃れる事の出来るはずのゾロではあるが、そもそもここは海賊船。海賊一味にとっての指針は船長なのである。その船長はというと…

「おーい!起きろおー!!」

そう、甲板に横たわる少女の頬をベチベチと叩き、ユツサユツサと肩を揺らし起こしにかかっていた。

※ ※ ※

いったい何が起きているのだろう。おでこが痛い。左右の頬が痛い。あと、後頭部がとても痛い。

霧散した意識を掻き集め、何とか思考をしようとするが、まずは物理的な痛みを意識が引つ張られる。まだ身体を動かすほどの意識は回復してはいないものの、身体を揺さぶられているのは理解出来た。

と、同時に怒りも沸く。なぜなら、身体を前後に、しかも力任せに揺らすのだから後頭部を地面に何度も強打しているからだ。

沸き立つ怒りとそろそろ致死量に届きそうな後頭部の痛みには私は半ば強引に意識を覚醒させ跳ね起きた。

「・・・痛い。痛かったー!」

女性は痛みが強いと誰が言い出したのだろう。男だろうが女だろうが痛いものは痛いのだ。

そのせいで定まらぬ歪む視界を悪魔の実の能力で正常に戻し、ついでに身体感覚も限界まで高める。左右の手の感覚を確認しつつ痛む後頭部を撫でる。

「だ、大丈夫か?」

反射的に声の聞こえた方向に顔を向け、刹那飛び掛る。

誰かが言っていた。飛び掛ろうと思った瞬間、すでに飛び掛っているのだと。

「っ!?ゾロ!会いたかった!!」

一年と半年、会えない間に溜め込んできた思いをどうやって言葉で語ろうと考えていたが、今となってはどうでもよくなった。

なぜなら、抱きしめてゾロの温もりが伝わるのだからそれ以上の幸せは無い。

「リイナ、今は離れてくれ。…仲間が見てる。」

顔を上げてゾロを伺い見ると、引き吊った顔で周りに目を泳がせて

いるので私も見渡す。

鼻ほじってる麦わら帽子、この子が船長のルフィさんね。あ、その顔お祖父さんにそっくり。

金髪の変な眉毛さん、なんだか悲しそうな顔してるけどどうしたのかしら？

鼻の長い変顔くん、良くそんなに口が開くわね。スゴいわ。何か入れてみようかな。

最後に、誰よこの子！女の子が居るなんて聞いてないわよ。あと、変顔ちゃんと良い勝負が出来そうな口の大きさね。

「いいえ、ゾロ。何も問題ないわ。今は感動の再会を喜びましょう！」
「問題しかないわっ！」

そう言っつて私を引き剥がす。名残惜しいけど仕方なくゾロの隣、腕へと継り付く。

「あ、ああ、ゾロ？その、そちらの方はどなたでしょう？」

「…えつとな、こいつはリイナ。俺の、なんだ？妹みたいなもんだ。」

「「妹!」「」」

あ、全員変顔になった。ルフィさん眼球飛び出てる。そんなトコマでゴムなのね。楽しそうな人達で良かった。

でも、ちゃんと訂正しなきゃ！

「私は！ゾロの妹であり！娘であり！恋人であり！妻の！ロロノア・リイナです！よろしくねっ！」

うわあ、みんな変顔のオンパレードだね。あ、ゾロが蹲って震えている。そんなに嬉しがらなくても良いのに♪

※ ※ ※ ※

「つまり、あなたは二年前ゾロに助けられてから父の様に、兄の様に慕い、恋人の様に、妻の様に愛を育んだのよね？もうわかったわ。」

「そうです。記憶を失い、身寄りのない私をその厚い胸で、たくましい腕で抱き止め支えてくれました。正しく愛です！だからナミさん？

ゾロは渡しませんよ！」

「取らないわよ！」

「えっ!?…うそ? そんな、こんなに頼れるのに? こんなに遅いのに? こんなに強くて格好いい男なんて他にはいないでしょう?」

「…ゾロ助けて。この子と話しているとホント疲れる。」

「…すまねえ、諦めろ。」

ゾロとリイナの間係を説明され半ば納得したナミとウソップだったが、終わらぬゾロの魅力講座でウソップは早々にリタイア。

ナミはリイナの問答により逃げ場を失いゾロに助けてを求めるが、そこに再びリイナが噛み付くの繰り返し。

サンジは、『恋人であり! 妻の!』のあたりで白く燃え尽き意識を手放していた。

「なんだ、つまりゾロの家族か! わかった!!」

と、寛大な心で受け止めたルフィはさすがだろう。あとは我関せずと船首に跨がり飛び交うカモメを追っている。

流石にこれ以上の心労は精神衛生上宜しくないと判断し、ナミは一計を案じウソップへアイコンタクトを送る。

「…リイナさん、ゾロの魅力は十二分に理解しているわ。私も女だもの。こんなに素敵な男性が傍に居て惹かれないなんて女じゃないわ!」

…だけど、ゾロの心は既にリイナさんという存在で埋まっているなら、ゾロとリイナさんの愛の為、私は身を引くわ。

だから安心して!」

「そ、そうだ!…こんなに頼れる奴なんて他には居ない! 男の俺でさえ惑わされそうになる程の男なんてゾロだけだぞっ! そんな男に愛されてるリイナさんは幸せ者だなあ! 羨ましい!!」

そう、持ち上げて持ち上げる作戦だ。

なんとかリイナを宥め、この場を落ち着ける為の苦肉の策。

二人はリイナの動向に息を飲む。

「ですよね! 私達の愛はこの世界で一番なんです♪」

助かった。二人は涙を流し喜び安堵する。その視界の端で憤怒の

炎を身に纏い再起動するサンジには気付かぬまま。

「そうそう、ガンジお爺ちゃんから伝言があつたのを忘れてました。」

「爺いから?」

「はい。子供を産む時は二人で一度帰って来い。ですって♪」

その時の事をゾロは後にこう語った。

『時間の概念を逸脱した、あの瞬間こそを無我の境地と言うのだから。』と。

「くおの!クソマリモオ!ナミさんまで誑かしやがってえ!ブツコロス!!」

数瞬意識を白く飛ばしていたゾロは勿論、安堵し脱力していたナミ、ウソップも嫉妬と勘違いで猛り狂うサンジに反応する事は出来なかった。

人の十倍は強靱だとされる魚人を容易く屠ったサンジの右脚が、放心状態のゾロのうなじへと肉迫する。

サンジの繰り出す延髄蹴りだ。並の人間ならば頭と胴が二つに離れても致し方ない威力はあるだろう。

…当たればだが。

※ ※ ※ ※ ※

左脚を支点に繰り出される右脚の蹴り。サンジの放つ右脚がゾロの延髄に当たると瞬間、サンジが後方へ30cm程移動した。そう、サンジが移動したのだ。

空を切った右脚の風圧でゾロは意識を戻し、間を置かずサンジへと向けられる殺意に意識を向ける。

「…あなた、ゾロを殺すと言いましたね?」

サンジの背後から柄だけの無刃の刀を首筋に鎌けたりイナの冷たい声はその場を支配する。その瞳に光は無く、深淵を思わせる黒い瞳は感情すらも表さない。

「サ、サンジの蹴りが当たったと思つたらリイナがサンジの背後を取っていた。何を言っているのか分からないと思うが (ry)」

ウソツプ、そしてナミも状況が上手く飲み込めず混乱している。背後を取られたサンジでさえもなぜ自分の右脚が空を切り、いつ背後を取られたのか理解出来ていない。

「…私のゾロを殺すと言うのならあなたは私の敵よね？」

「リイナ、待て！駄目だ！」

慌ててゾロが制止するも僅かに動かした見えない刃はサンジの首に一筋の赤い線を残す。

「駄目よゾロ。この人はあなたを殺すと言った。今殺らないとまたあなたを殺そうとするわ。」

このままでは一切の躊躇いも無く、一分の隙も無く、リイナはサンジの首を刎ねてしまうだろう。

「違う！そう、これは俺ら仲間の友情の深め方だ！な？サンジ！」

そう言つてゾロはサンジへ目線を送る。

「そ、そうなんですよりイナさん。くs、ゾロとはこうして本気のぶつかり稽古をして互いに高め合う仲間なんですよ！」

ゾロとサンジは互いに名前前で呼び合う仲では決してない。その事をよく知るナミとウソツプは驚愕する。

この子は本気でヤバイ。天変地異を引き起こす存在だ、と。

「あら、そうなんですか。早とちりしてしまって御免なさい。」

そう言いながらサンジから離れ、右手に持つ柄を鞘へと戻す。既に瞳の光は戻り穏やかな雰囲気醸し出す。

ゾロとサンジは緊張の糸が切れその場にへたり込むが仕方がないだろう。

「サンジさん、失礼しますね？」

すつ、と左手で切れたサンジの首筋に一瞬触れ、そして離す。すると微かに切られたはずの傷は無くなっていた。

「え？あなた何をしたの?!そうよ、刀だって柄しかないのにどうやって！」

しどろもどろになりながらナミは疑問をぶつけるがリイナはうふふと笑い、秘密です、とあしらう。

「リイナ。ゾロとサンジはしょっちゅう喧嘩してつけど本気で殺り

合ったりしねえよ。だって仲間だからな！サンジも強えけどゾロも強え！あれぐらいじゃ死なねえ。

それにおまえ本気でサンジ殺す気なかつただろ？本気で殺るなら後ろに回った時に斬ってるだろうしな！」

船首から事を見ていたルフィがやっと介入したことでなんとか場の空気は穏やかなものへと移り変わる。

「見切れた訳ではなさそうですが流石ですね。あ、そうでした！私、ルフィさんにも伝言を預かってました。」

リイナはパン！と胸の前で手を叩き、あざとく首を傾げて舌を出した。

「伝言？誰からだあ？」

ルフィも釣られて首を傾げ舌を出す。

「拳骨のお爺ちゃんです。このバカ孫がつ！そのうち取っ捕まえに行くから待つとれ！だそうです♪」

出したままの舌を驚きの勢いで噛んでしまいがえつ、と悶えるルフィを尻目に他の四人は首を傾げる。なぜルフィの祖父なのだ？と。

「爺ちゃん?!何で爺ちゃん知ってんだ?ってことは、もしかしておまえ海軍か?!」

ルフィの祖父が海軍であるという衝撃的な言葉に、そして目の前の少女が海軍かもしれない疑惑にゾロ以外の四人は身構え、ゾロは唯々驚いている。

「ああ、先日ルフィさんの手配書が出た時に辞めましたから元ですよ？因みにガーゾさんとここで少佐やりました♪」

「「:ええく「!!!?」」

3 ・明かせぬ秘密

拳骨のお爺ちゃん。つまり、海軍本部中将 モンキー・D・ガープ。
通称 拳骨のガープ。

麦わら海賊団 船長 モンキー・D・ルフィ の祖父である。

海賊の一味としては衝撃的な事実だろう。祖父と孫が海軍と海賊で、つまり敵と味方なのだ。

船長である当人は平然としているが、一味の四人はそうはいくまい。

なんせ相手は伝説の海兵。海軍の英雄と呼ばれるビッグネームである。いずれ相対しなければならぬと思えば気が重くもなるだろう。

そう、こんな風に取り乱すのも致し方ない。

「ちよつと、ガープよガープ！あの海軍の英雄よ？伝説よ!?なんなのよ！そんな人が直接出向いて捕まえに来るなんて最悪じゃない！もうイヤ〜!!」

「あ、拳骨のお爺ちゃんは本気じゃなかったみたいですよ？ルフィさんの手配書が出た時、ぶわっはっは〜って笑いながら喜んでましたから♪」

そして私、元海軍本部 少佐 ロロノア・リイナ。ロロノア・ゾロの妹であり、娘で（ry

先日までガープさんの部下でそこそこの階位を持っていた。

つまり、つい最近までの私と麦わら一味は敵対関係にあったのだ。

「そもそも、あんたもなんなのよ！英雄の部下で少佐で辞めてきたって?!二年で少佐？ないない！そんな話聞いた事無い！しかも能力者っぽいし更に訳分かんない!!」

「正確には一年半位ですね。それなりに訓練して、取りあえず適当に海賊捕まえてたら望んでないのにあつという間に佐官でしたよ？海軍って以外とチョロいんですね♪」

「…もうやだこの子。」

ナミは心底疲れたらしく涙を流しながらへたり込んでしまった。ウソップとサンジは衝撃の新事実的思考回路がショート寸前で既に蹲っている。

ゾロは頭を抱え座り込んでいた。

ルフィに至っては、まあいいか、と一言で済ませて笑っている。

リイナはゾロの隣に腰掛け、幸せそうに微笑んでいる。

リイナはともかくとして、前者の四人と後者の一人。どちらの反応が正しいのだろうか。

海賊側からすると異名である『拳骨のガープ』が先行し、姓のモンキー・Dはあまり知られてないのだろう。

自分達の船長との続柄を推測出来なくても仕方がない。

「なあ、リイナ。勝手に置いていったことは謝る。あの時はあれが最善だと判断したんだ。だが、なんでおまえが海軍に入る必要があったんだ？」

ある程度落ち着きを取り戻してから、大きく溜め息を吐き出し、ゾロは疑問に思ったことを聞く。

「謝る必要なんてないよ。ゾロは私とお爺ちゃんの為を思って島を出たんだもん。でも、実際その必要はなかったんだけどね。それも含めて説明するわ。」

五人はそれぞれ床や椅子座るなり、手摺りに寄りかかるなりと話を聞く姿勢へと落ち着き、リイナは口を開く。

※ ※ ※ ※

私はゾロに保護された翌日、酒場兼宿屋のマスターに昨夜お店を騒がせた事を詫び、ゾロと共にこの島の端に門を構える海軍支部へと向かった。

目的としては私の身元確認だ。

先ずはゾロに先行してもらい、可能性は低いが私の手配書が出てい

ないか確認してもらおう。

海賊狩りとして有名なゾロが手配書を閲覧していてもなんら疑問視される事は無いからだ。

手配書が無い事を確認すると、次は私も共に行き、事情を話して捜索願が出されていないかの確認。

出されていた場合、私とゾロが一緒にいるとゾロに迷惑が掛かってしまうからだ。もし、出ていても一度戻り、また帰ってくる計画を立てるだけである。結果、出てなかったのでよしとしよう。

そして最後に根回しである。

記憶喪失で身元不明の少女はナナシノニツパ村で心優しい医者が必要してきますよ、と事前に伝えておく必要があるからだ。

後々誘拐だなんだと問題視されてはガンジさんにも迷惑が掛かってしまう。

その日はそれだけをさっさと済ませて村へと戻りガンジさんの住まいに居候させてもらう準備だ。勿論ゾロも一緒。私が無理に頼み込んだのである。

ガンジさんは私を本当の娘の様に可愛がってくれた。ゾロの事も息子の様に接していて、当人はうっとおしがりつつも満更ではなさそうだったのが微笑ましかった。

ガンジさんは医者として診療所を開いているので、私は家事を率先して行った。手の空いた時は診療所の簡単な手伝いもした。居候しているのでせめてそれぐらいはしたかったのだ。

働くことも考えたが小さな村での働き口は限られているので悩んでいると、リイナを養う程度は俺が稼ぐ、と賞金稼ぎを再開した。

それからゾロは近隣の海賊や山賊の出没情報が挙がる度に出掛けでは迷子になり海軍のお世話になっていた。おかげで一月帰って来ない時もあった。

ゾロ、ガンジお爺ちゃんの世話になり始めて五ヶ月。迷子癖の酷いゾロに痺れを切らせて私も無理矢理同行するようになる。

最初は本当にナビをするだけのつもりだったが、初めて見た賞金首討伐でゾロの剣士としての強さに夢中になった。時間があれば木の

棒を刀に見立てて振るう。脳内に焼き付けたゾロの動きをなぞるように何度も繰り返した。

その頃だっただろうか。ゾロへの親愛が憧憬、そして恋慕へと変わったのは。

※ ※ ※ ※ ※

その日は隣の島で山賊の賞金首を討伐し、そのままその島にある海軍支部で懸賞金の換金をしたのだが、その帰りに門兵がゾロへと話しかけてきた。

「最近見ないと思ったら噂通りだったみたいだな。

女誑しこんで羨ましいなあ、海賊狩り。」

ゾロを嘲り不快に笑う門兵に私は感情のままに飛び掛ろうとしたが、ゾロに押さえ込まれた。

いつもの事だ、無視しろと、私の手を引き足早に歩を進めるゾロに引き摺られる。しかし、最後に背後で聞こえた言葉は私の我を忘れさせるのに十分だった。

「チツ！賞金稼ぎ風情が調子に乗りやがって！殺すぞ!!」

私の思考は瞬間真っ赤に染まる。ゾロへと向けられた悪意に対し、純粹な殺意が沸き立つ。

自然界においての食物連鎖や弱肉強食などでは無い。一方的に命を奪う悦びであっただけの原始的な本能。

それは何時から私のなかに巣くっていたのか分からない。半年以前の記憶を持たない私には知る由も無い。

この世界で能力者と呼ばれる者達が食したという特別な実。悪魔の実

深紅に染まる思考の中でも容易く思い描けるのは何度も真似た彼の姿。

私の思考はその実の力を、本能に従い作用させる。

右手に『目に見えない刀』、それを一閃。

門兵の首が離れた瞬間、左手で再び能力を使用し切り離れた首を

『元に戻した』のだ。

切られたはずの門兵は一度死んだ自分に驚愕し動けない。

私は次に腕、脚、胴と能力を使って斬り、戻し、最後に脳天から縦に斬り掛かろうと腕を振り上げる。

「…あんたは私が殺す。」

門兵は尻もちをつき、すでに私に対して反応を見せていない。目には生気が無く虚空を見つめている。この程度で良く威勢の良い言葉を吐けたものだ。目障りだしすぐ殺してやろう。

腕を振り下ろそうと 見えない柄に力を込める。

「リイナ駄目だ！」

その時、ゾロに後ろから抑えられ腕を振れなくなる。

体格も力も男であるゾロには敵わない。

「ゾロどいてー！こいつ殺せない!!」

「大丈夫だ！こいつはもう何も出来ねえ！こいつはもう俺を殺せねえ!!」

眼下の門兵を再び見ると、視線は虚ろで瞳孔は開き、だらしなく開いた口からは涎が垂れて地面には粗相で水溜まりを作っていた。

「…わかった。こいつはもうやめとくね。」

「…リイナ？」

「大丈夫だよ。ゾロを殺そうとするヤツは私が殺すから。ね？」

私は笑顔でゾロに抱き付いたが、その時ゾロはどんな顔をしていたのか見えなかった。

初めて悪魔の実の能力を使った反動か、気を失ったからだ。

その後、他の海兵が出てくる前にゾロに抱えられ、急いでその島を後にし村へと戻ったそうだ。

幸運にも件の門兵以外の兵は建物の外におらず、舟までの間も追ってくる兵はいなかったという。

翌日、私が目覚めたのはゾロが一人で海へ出た後だった。

そのことで私は取り乱し、追い掛けようとしたがガンジお爺ちゃんに説得された。

幸い、件の海兵は傷一つ無い状態だった様だが、明らかに何か

あつたことはバレてしまう。その場合、先ず疑われるのは直前に海軍支部へ訪れていたゾロである。

最悪、手配書の発行もあり得る。

だから一人で行くのだ、と。

もし海軍が来たら脅され従っていた、何も知らないと言えば捕らえられることは無い、と。

そして最後に、私には安心して暮らせるこの村で幸せになってほしい、と。

昨夜、ゾロとガンジお爺ちゃんて話し合つたがゾロは決して折れず、ガンジお爺ちゃんと私に迷惑のかわらない唯一の手段だと、そしてそれが私の為だと言ひ洩々ガンジお爺ちゃんを納得させたそうだ。

※ ※ ※

私の感情に任せた愚行のせいでゾロが島を出てから三日が立った。あれから海軍に動きは無い。杞憂に終わればそのうちゾロは帰つて来てくれるだろうかと、私は港で一人待つ。

港で待ち続けて二週間が過ぎた頃、海軍の船が来た。

同時に私達は絶望した。大切な人を、家族を悪人に仕立て上げなければならぬのかと。

私はゾロへの罪悪感と後悔からガンジお爺ちゃんへ身を寄せ震えることしか出来ない。それがとても辛く悲しかった。

そして数刻後、数人の海兵がやって来たかと思えば突然扉の前で宣言する。

「君たちを捕縛する気はない。増して、危害は決して加えないと誓う。」

そして扉を開けて入つて来る。

こちらが訝しんでいると、先日の件は問題にすらなっておらず、ゾロが居ても居なくても私と話が出来ればそれで良いと言うのだ。

「そもそも門兵一人倒しただけで懸賞金なんて掛けない。そんなに海軍も暇じゃない。」

と、訪れた海兵の中で一番偉いであろう人が大きく息を吐く。
私とガンジお爺ちゃんはその言葉に唯々安堵する。

しかし、とその人は続ける。

「その倒し方について興味がある。当人は女の方に斬られたと証言しているが、そんな斬り傷は無かった。」

その言葉で初めて気付いた。

『門兵本人が証言する』という事実には。

私もガンジお爺ちゃんも、もちろんゾロもそんな簡単な事に気付かず、重く捉えていたのだ。

つまり、ゾロが一人で海へ出たのは無駄足だという事。

明らかに落ち込む私とガンジお爺ちゃんを尻目にその人はそのまま話を続ける。

「同僚の優秀な剣術使いに聞いたが、殺気を飛ばし『斬られる幻覚』を見せる技もあるらしいが、それとは違うようだ。それと門兵はこうも言っていたよ。その女は何も持っていなかったにも関わらず自分の首は斬られたと。…率直に聞こう。君は能力者だろ？」

この人は確信を得て私と話をしている。その女が私であること。そして何らかの能力者だということも。直接この家を尋ねてきた来た事がその証拠だ。きつと嘘は見破られる。

「…そう、みたいです。あの時は頭に血が上っててよく覚えてませんが。あの、門兵さんのことすいませんでした。」

悪いのはゾロに悪意を向けた門兵なのだが、それでも私が仕出かしたことだ。ゾロのせいには出来ない。

そして目の前に海軍が居る手前、形だけでも謝罪はしておかなければいけない。だから私は素直に頭を下げた。

「謝らなくていい。むしろこちらが謝らなくてはいけない。本当にすまなかつた。」

自分の家族を馬鹿にされ怒らない人などいないさ。ヤツ、例の門兵は素行が悪く、左遷に次ぐ左遷で支部勤務になった阿呆だ。海兵の制服を着てただけの小物だ。

僕はね、私欲の為に正義を振りかざす者を海軍とは思わないことに

している。だか、立場上今回の件は上官として振る舞わなければならないのさ。」

私はガンジお爺ちゃんと顔を見合わせ互いに驚く。

海軍にもこんな我を通した正義を掲げる人もいるのだと。もちろん良い意味でだ。

そして、私とゾロを家族だと言ったことで確信した。この人は私のことを調べ上げた上でここに赴いているのだと。

「そういえばまだ名乗ってなかったね。僕は海軍本部で中将をやっているドリフトという。」

「ご丁寧ありがとうございます。私はリイナと申します。あの、話の腰を折るようで申し訳ないのですが、どうぞお座り下さい。すぐにお茶を用意しますので。」

ガンジお爺ちゃんと共に人数分のお茶とお茶請けを出し、椅子に座り話を再開する。

※ ※ ※

「そうか。記憶を失っている為、いつ悪魔の実を食べたのか、どんな能力なのかも分からないと。」

私はドリフトさんへほぼ全てを話した。話さずともこの人は知っていたいようなものだが、無駄な問答は意味が無いと思ったからだ。

「やはり僕が来て正解だったよ。頭の堅い右翼派だったなら、門兵への件を海軍への反逆と掲げて君を強制連行しただろう。∴それは何かかという疑問に答えるならば危険因子の早期排除の為だ。」

ガンジお爺ちゃんは私に顔を向け、その例え話に顔を青くしている。きつと私の身を案じてくれているのだろう。

私は大丈夫だよ、とそつと手を握る。

「君の能力は使い方次第では海軍にとって脅威にしかならないだろう。そうなる前に施設で薬漬けの実験動物になるのが落ちだ。」

そしてドリフトさんは私を正面に見据え訴える様に語りかける。

「絶対的正義を掲げる海軍ではあるが、その裏では数々の大罪を黙認

してきた歴史がある。非人道的な人体実験や一方的な武力行使、大量虐殺、挙げればキリがない。・・・でもね、それを善しとしない海兵はそれなりにはいるんだ。海軍を信じろとは言わない。僕の事を信じて話を聞いてくれないか？」

ガンジお爺ちゃんを見ると私に微笑み静かに頷いた。ドリフトさんの真意は良く分からないが真剣な事は理解出来る。ドリフトさんと目を合わせて私も頷いた。

「ありがとう。単刀直入にいうと、君に海軍入隊を勧めたい。これには三つ理由がある。

一つ目に、君の保護だ。先程も言ったが君の能力は危険視される可能性がある。

二つ目に、能力の特定だ。君が食べた実が何の実でどんな能力かを特定する。

最後に三つ目、君自身の強化。これは君を心身ともに鍛える事と能力を自在に扱えるようにする事だ。

入隊後は僕の部隊、もしくは僕が信用できる中将の部隊に配属するように手配する。そうすれば誰も君に手出しは出来ないからね。」

「・・・あの、このまま村で暮らすことは難しいのですか？」

出来るならば家族と離れたくはない。そして、いつでもゾロが帰って来れる様にこの村で待ちたいというのが私の気持ちだ。

「あまりお勧めは出来ない。家族と離れたくないという気持ちは尊重したいがガンジ医師も危険にさらされるかもしれない。気休めにしかならないだろうが、今生の別れではない。海兵にも休みはあるからここに帰ってくることも出来る。」

「・・・そう、ですか。」

半年、6ヶ月と言えど私にとっては唯一の家族で家だ。ゾロが私のせいで海へ出てしまった今となっては、ガンジお爺ちゃんには私しか居ないんだから。

「ガンジ医師、僕としても大変心苦しい提案だと理解しています。だが、彼女が自分自身を、そして彼女が大切に思う人を守る為の力が必要だと考えます。」

明日また来ますから、お二人でよく話して下さい。」

「いえ、ここに来たのがあなたの様な海兵殿で良かった。ただ、リイナは見ての通りまだ子供です。そして、ワシはあの子の父親だ。血の繋がりに関係無いのです。あの子が生きる道を決めたのならワシはそれを見守ります。」

ドリフトさんが帰り、静まり返る部屋で私は泣いてしまう。ガンジお爺ちゃんは何も言わずに私の隣に座っている。

幾分か過ぎた頃、ガンジお爺ちゃんが私の名を呼ぶ。

私は自分の不甲斐なさに顔を上げる事が出来ない。

「私のせいで家族がバラバラになってしまおう、と考えておるじゃろ。それは違うぞい。リイナはゾロに向けられた理不尽な悪意に怒った。それは当たり前じゃ。手段は褒められんがの。」

ゾロが海へ出たことも時期が早まっただけじゃ。あやつは世界一の大剣豪になる男。今が良い機会だったんじゃよ。

そしてリイナ。おぬしの道は誰でもないおぬしの決める道じゃ。

例えば、海軍におればゾロに会えるかもしれんぞ。賞金首を引き渡す時は海軍の船か本部、支部に寄るのだろうか？

リイナはまだ子供じゃ。成長という大きな可能性が秘められておる。その分、多くの選べる道があるとワシは思っておるよ。色々な可能性を考えてみなさい。きつとその中にリイナの進みたい道があるはずじゃ。」

そつと肩を抱き優しく頭を撫でながらガンジお爺ちゃんは続ける。

「血が繋がってなくとも、一緒に住んでいなくてもどこに居ようとリイナはワシの娘じゃ。ゾロはワシの息子じゃ。互いの心の在り方こそが家族と成すんじゃよ。」

私の涙は既に止まっている。顔を上げ大好きなお父さんを見つめる。

「お爺ちゃんって呼んでるのにお父さんだつて。変なの。」

ちよつとした事が可笑しくて、嬉しくて笑ってしまう。

「そうじゃ。そんな変なところも家族じゃ。」

「うん、そうだね。大好きだよ、…お父さん。」

「ワシも愛しているぞ、娘よ。ついでに口の悪い放浪息子もな。」

互いに笑い合い、その日はいつもより話に華を咲かせて、いつもより豪華な夕食を済ませて、早めに床に就いた。

早朝、そう多くは無い荷物をまとめて扉に手をかける。

「じゃあ、お爺ちゃん。いってきます。」

「リイナ、いってらっしゃい。」

そうして私は海兵となった。

※ ※ ※

「最初は色々な反対意見もあつたみたいだけど、海軍としては戦力の増強は必要だし、能力者は目の届く場所に置いた方が良いつてことでガープさんの部隊に配置されたの。それでも、直接の上司はドリフトさんってことになってるけど。」

と、ここまで話したところで一度話を切る。なぜなら隣に座るゾロが悶えているからだ。

「…俺あ、あの時の自分を斬りてえ。本人の証言なんて考えてなかった浅はかな自分が恥ずかしい。」

まあ、仕方なかったと思うよ？体は無傷でも精神的に何度も死んだ人の末路を考えるとね。よっぽど凶太い神経してたんでしょ。

「つい先日別れたばかりだけど、ノジコとゲンさんに会いたくなっちゃった。」

ナミさんは家族を想っているのだろう。優しく微笑んでいる。

「親父も何処かの海で俺のこと想っててくれるのかな。よし、絶対会いに行つてやる！」

ウソップさんも楽しそうに決意を改にしている。

「心の在り方こそが家族、か。確かにそうだな。なあ、クソジジイ。」

サンジさんは海の遠くを優しく見つめ紫煙を流している。

「良い爺ちゃんだな！俺なんて何度も殺されそうになったぞっ!!」

ルフィさんはコロコロと表情を変えながら怒っている。

確かに、ガープさんの愛情は過激だからなあ、なんて納得出来てしまおう。

「それからガープさんの部隊でまずは身体をある程度鍛えて、悪魔の実の能力を自在に扱えるまで特訓してからの実戦訓練でしたね。ここまで半年程かかりました。」

詳しく説明するには私自身にも精神的苦痛が襲いかかるので掻い摘まんで説明する。主にジャングルとか猛獣とかトラウマ。

「その後はガープさんと一緒に各支部を周りながら接触した海賊を捕まえまくりました。そして何故か気付いた時には佐官になって、無駄に忙しくてゾロの観察も出来なくなつて。それが三カ月くらい前ですかね。」

「ちよつと待て!!」

息の合つたゾロとウソップさんに話を止められた。もう少しで説明も終わるのに一体なんなのよ。

「俺の観察ってなんだよ!？」

「おまえどんだけスピード出世してんだよ!？」

「……?」

いや、何言ってるのか良くわかりませんね。私はあざとく首を傾げ考える。

「まあ、たまに能力使つてゾロのこと見てたけど、さすがにお風呂覗いたりはしてないから問題無いし、昇進なんてしたくないのに勝手に佐官にされた私は被害者です。」

「…ゾロ、ウソップ。諦めなさい。その方が心は楽よ?」

ナミさんは慈愛に満ちた健やかな笑顔で遠くを見ている。何かを悟つたようだ。

「まあ、それで先日ルフィさんの懸賞金会議がありましたして、ゾロも正式に麦わら一味と認定されたことなので退職願をガープさんの机に置いて、ここまで来ました。以上です♪」

とりあえず説明は済んだので私は皆を差し置いて次の町、ローグタウンへと意識を向ける。せっかくなのでゾロに会わせたい人もいる。会いたくない人も居るけれど。

「まあ、なんだ？大変だったな。それでお前が食った悪魔の実はなんだったんだ？」

ゾロは何度目かわからない大きな溜め息を吐きながら私に問う。そうか、能力の説明を省いていた事忘れていた。

「えつとね、結局分かってないの。」

と、同時に五人から胡散臭げな目で射抜かれる。

「ちよっ！そんな目で見ないで。・・・なんて名前の悪魔の实か判明してないってことです。本部の凶鑑にも載ってない実だから、もしかすると新種かもしれないんだって。」

「どんな力か分かってんなら勝手に名前付ければいいじゃねえか。」

「う・・・ん。実は本部には能力の半分は内緒にしてるんです。表向きは『欲しいものを出現させる能力』超人系で、ダスダスの実？デルデルの实って感じですかね。可愛くないので嫌なですけど。」

本来の能力は私の生死に関わる危険な能力なので秘密です。本当は自然系ロギアです。」

五人は信じられない、いう顔をしている。まあ、当然の反応だ。本来、悪魔の实は一つの系統しか持たない。私は能力を使い分けて系統すら騙しているのだから。

「なら、あの時やその柄だけの刀は能力で『視えない刃』を出現させてるってことか？」

やはりゾロは剣士として武器が気になるようで真っ先にそれを聞いてきた。

「そうよ。あと、サンジさんの首の傷は『一瞬で完治するほどの自己治癒力』を引き出させたってことに表向きはなってるわ。」

ちなみに、私がサンジさんの背後を取ったのではなく、私の目の前にサンジさんを出現させたことになりましたね。」

「・・・ちよつとそれ、表向きの能力でもヤバイじゃない。いくら悪魔の实でもめちやくちやよ。」

ナミさんは能力の異常さに顔色を悪くする。それこそ悪魔の实は『何でもあり』なので、普通の人間としては当然の反応だろうが。

「リーナちゃん、ちつと聞きたいんだが。能力使われた俺の身体はな

んとも無いのかい？」

「サンジさんの不安はごもつともです。ですが安心してください。悪影響は出ないようにしました♪」

「少しだが違和感があるのはそのせいかな。悪くなって無いんならそれで良いさ。」

少しだけど、傷を負わせてしまったので元に戻した時にサービスしたのだ。

すぐに気付くなんて凄いなと感心する。余程日頃から身体を鍛え、動かし方を意識しているのだろう。

「わかったー！リイナ、おまえ手品師か!!」

それまでウンウンと呻り、ろくろ首の様に伸びていた首をバチンと戻したルフィさんは目を輝かせている。

「ふふっ。まあ、そんな感じですよ。はい、どうぞ！」

私は右手で骨付き肉を三つ出してルフィさんに差し出す。実はガープさんも同じ反応をした事は黙ってしよう。

「おおお！すげえ!!サンキューリイナ!!」

勢い良く肉を口に放り込むルフィさんを押し退け迫ってきたのは意外にもナミさんだ。

両目がBマークになっているので言わんとする言葉がすぐに分かる。

「ナミさん、残念ですがお金はダメです。能力は私欲の為に使うものではないので。」

私欲に走る前に断りを入れなければなるまい。ケチ、と呟くナミさんだったが、お金を欲するあたりまだ常識人の範疇だろう。

その後も皆の質問に答えながら海路を進める。途中、お腹が空いたのでサンジさんの料理をご馳走になりつつ楽しい時間を過ごした。

さて、ローグタウンで何も無ければいいのだけど：

ルフィさんとか心配だなあ。

4 ・ 暗躍と画策と焦燥

月が天高く昇るとある晩。

広がる海原を漂う小舟が一つ。乗っているのは二人。

「あなたの言う通りあの子もこっち側だとして、仲間にするの?」

「いや、それは無いよ。あの子は何も知らない。だからこそ自由に動ける様にしてるんだよ?」

「あなたの娯楽に付き合ってる暇なんて無いの。さっさと今日呼んだ目的を言いなさいよ。」

「せっかちだね、君は。じゃあ、僕らとあの子。殺り合ったらどっちが勝つと思う?」

「…何が言いたいのか?」

「つまり、原作知識の代償って話をね。昔々の物語でも悪魔が勝てない相手は一つだと決まってる。」

「なにそれ?意味わかんない。」

「あのね、僕らはそれぞれ『俺TUEE』したくてここに来たの。あの子が来たらそれが出来ないでしょ?」

「まあ、ね。それでどうするのよ?」

「あの子はまだ敵じゃ無い。だから、僕らは静かに観戦しよう。」

「でも、いいの?麦わらんとこに入ったら・・・」

「いいんだよ。それでも原作通りに進むさ。計画に支障はないよ。」

「わかった。じゃあ、またなんかあつたら呼んで。」

小舟から一人飛び立ち。残った一人は小舟ごと消えた。

※ ※ ※

「」着いたあ!ローグタウン!!」

偉大な海賊の時代が終わり、大海賊時代が始まった町。ローグタウン入り口のアーチが私たちを歓迎している。

皆は各々の目的に目を輝かせる。ルフィさんなんかは下船前から絶えず処刑台、処刑台と連呼し今にも走り出しそうにしている。

なので、自然とみんな別行動をとることになった。私はゾロに会わせたい人が居たのでそちらへ向かうことにする。

「じゃあゾロ、買い物が終わったら処刑台広場に集合ね！」

「おう。わかった。」

「…迷子になったら能力使うからね？」

「ガキじゃあるまいし迷子になんてなるか！」

毎回迷子になってたのは誰よ。やはり自分が方向音痴だという自覚は無いようだ。

ゾロの背中が通行人の波間に消えるのを確認して私は海兵の詰め所、ローグタウン海軍派出所を目指す。

ガープさんの部隊で何度も訪れた時とさして変わらない。賑わう町並みと多くの観光客に自然と笑みがこぼれる。

派出所の門をくぐり、常駐している海兵を見つけ声をかける。

「どうも、ご苦労さまです。たしぎ曹長いますか？」

「お、おお?!あれ?曹長なにやってるんですか？」

「あれ?仕方ないか…」

能力でコートを出し素早く羽織り、気持ちを職務モードへ切り替える。

「海軍本部少佐 ロロナ・リイナです。再度、確認します。ローグタウン海軍派出所勤務 たしぎ曹長はいますか？」

「っ?!失礼しました!現在たしぎ曹長は不在です。すぐ戻ると思うのですが…」

「でしたら、待たせていただきますね。スモーカー大佐の部屋にいますので戻り次第部屋へ。」

「はっ!わかりました!!」

やはり素で行くの間違われる。いつもはコートを羽織っているから見分けが付けやすいが私服だと分からないようだ。

とは言っても、既に辞めたはずの私が海軍佐官のコートを羽織り、派出所内を闊歩するのはどうなのだろう。常識的にアウトだ。

それでも気を取り直して歩き出す。何度も訪れたことのある建物なので迷うことなく目的の部屋へ着く。

「モクモクさん！入りますよ！」

「あ？テメエ、何しに来た？」

海軍本部 大佐 スモーカー 私はモクモクさんと呼んでいる。常に葉巻を吸っていて、それがモクモクと煙いからだ。

私がここを訪れた理由は簡単だ。たしぎさんをゾロに会わせたいから。

「たしぎさんを貸してください！」

「たしぎは今居ねえ、それに今は忙しい。帰れ。」

「遊んでるじゃないですか。」

モクモクさんはソファアに座り、机の上で石を重ねて遊んでいる。とても忙しい様には見えない。

「つたく、テメエは。大佐になったからってわざわざたしぎ引き抜きにきやがったのか？」

「ちよつと会わせたい人が居るだけですよ！…つて、大佐?!」

「ああ!？テメエの階級くらいわかってんだろ！なんだ、自慢か？ロクノア・リイナ大佐よお？」

いえ、まったく意味が分かりません。先日辞めたはずの海軍でなぜ昇進しているのでしょうか。殉職した海兵は二階級昇進するというやつですか？海軍の退職は殉職扱いになるなんて聞いてないです。

「あの、私先日退職願ひ書いたはずなんですけど、なんで昇進してるのか本当にわかりません。」

「知るか！自分の上司に聞け。」

ふと、ガープさんの執務室を思い描く。机の上に置かれた私の退職願ひ。そして、その上に積み重なり乱雑した書類たち…

「…ちよつとガープさんの所に行つてきますので、たしぎさんが帰つてきたら待つててくださいね！」

それだけ言うとは扉のノブに手をかけ能力を発動させる。行く先は現在ガープさんが居る場所に最も近い扉。

後ろからモクモクさんの怒鳴り声が聞こえるが気にしない。気に

してはいられない。

ノブを回してその勢いで扉を開き、目標のガープさんを捉える。

「ガープさん！私の退職ねが、い…」

「やあ、リイナくん。久しいね。丁度、君の話をしていたところだよ。」

「リイナ！おまえどこ行つとつた!？」

私が辿り着いた場所は海軍中将に充てられる執務室。だが、ガープさんの部屋とは雲泥の差ほどに片付けられている。

応接用のソファアーに座る二人のうち一人はガープさんで、もう一人の姿を視認して私は自分の運の悪さを呪った。

「…お久し振りです、ドリフトさん。」

※ ※ ※

「さて、武器屋はどこだ？」

ナミから十日一割といで借りるはずだった金だが、リイナが無利子で貸してくれて助かった、と胸を撫で下ろす。ナミから舌打ちが聞こえたと聞こえない振りをした。

通りを適当に歩けば見付かるだろうと人並みに逆らわず歩く。そこに大柄な男に絡まれている女性を視界の端に見つける。

「…リイナ?!何やってんだあのバカッ!」

男二人はリイナに何か因縁を付け斬り掛かる。だが、切りかかろうとしている相手はあのリイナだ。大丈夫だろうが念のため刀に手を掛けてそちらへ向かう。

リイナは腕に抱える刀を抜き男二人を一瞬で斬り伏せる。が、そのままの勢いで足を引つ掛け転んでしまい眼鏡を落とす。

その眼鏡を右手で拾い上げ、左手をリイナへ差し出す。

「おい、大丈夫か?リイ、ナ?」

改めて考えるとおかしいことに気付く。リイナの刀は無刃だったはずだ。眼鏡はかけてはいない。誰だこいつ、と。

「ご、ごめんなさい。あ…ありがとうございます。ところで、あなたは先程リイナと?」

「いや、すまねえ。あんたとそっくりなんだが人違いだ。悪かったな。」

世には似た顔が三人いると言うが、ほんとに三人居るなんてビビツた、と内心はとても動揺している。しかも三人共刀使いなんてどんな偶然だろう。

「…綺麗な翡翠の髪、三本の刀…あなた！もしかしてゾロさんですか？」

「…そうだが、なんだ？」

「あつ！申し遅れました！私、たしぎといいます。海軍で曹長をやっています。リイナちゃん…リイナ大佐からお話を聞いて常々お会いしたいと思っていました。」

海軍曹長と聞き、まず逃げ出すことを考えたがリイナの知り合いであり、この反応から考えるとすぐに逃げ出す必要はなさそうだ。怪しまれないようにこの場を切り抜けようと考ええる。

「そ、そうか。まあ、なんだ？リイナの兄貴をやってるロロノア・ゾロだ。…ん?!リイナは少佐じゃねえのか？」

「え？先日昇進して今は大佐です！二階級昇進なんて特例も特例!!海軍初の実績ですよ!!リイナちゃんほんとスゴイですよねえ。」

「すまねえ、なんとなくスゴイつてのは理解出来るが海軍には疎くてな。あと、俺あ武器屋に行く途中なんだが…」

たしぎの口振りからリイナとの仲の良さを伺い知れて少し安心するのは兄心だろう。

しかし、規律に厳しい海軍で特例なんてそれこそ偉業なのだろうが、あのリイナが、と考えると途端にそうは思えなくなる。

一応、海軍と海賊がのんきに話など出来る訳が無いので、会話を成立させつつ逃げる算段を打つ。

「あ、私も刀を取りに行く途中なんで一緒に行きましょう！」

武器屋を探す苦労は無くなるがたしぎと一緒に行って大丈夫だろうかと疑問を抱く。それに、リイナが海軍を辞めていることも知らないようだ。一先ず余計な事を口に出さないように気持ちを引き締め付いて行く。

「…実は私、ゾロさんのことを憎く思っていたんです。」

無言で歩を進めるゾロに対し、たしぎはそう切り出した。

「私の夢は名刀と謳われる刀を自らの手で集め守ることです。しかし、そう云う刀は常に海賊や賞金稼ぎという強大な悪の手へ渡ります。刀を以て悪行を成す奴らを私は許せなかった。…海賊狩りと呼ばれたあなたも。」

でも、リイナちゃんが言っていました。あなたは世界一の剣豪を目指し数多くの賞金首と死合っただけだと。そう呼ばれるようになったのはその副産物に過ぎないと。そして、夢の為に命を賭して闘う男を悪と断ずる事があなたの正義か、と怒られました。」

「へえ、あいつがそんなことを…」

そう言われ嬉しく感じる反面、恥ずかしい思いから僅かに顔が赤くなり、たしぎから悟られぬよう顔を背ける。

「それからリイナちゃんと会う度にあなたの話を聞きました。見ず知らずのリイナちゃんを保護するお人好しなことや、口も目付きも悪いけどその裏で本当は優しいこと。恥ずかしい思いをしつつ、お土産に可愛い服を買ってあげるお兄さんなことも。リイナちゃん嬉しそうに自慢していましたよ。」

「やめてくれ、恥ずかしい…」

今度は完全に恥ずかしさで紅潮した顔をどうしたものかと、走り出したい衝動に駆られる。

「先程、転んだ私に差し出された左手はとても自然で、リイナちゃんの言った優しさは本物だと確信しました。…私は私の正義を貫く為に、あなたを捕縛しません。たとえあなたが海賊だとしても。あ、でも問題を起こしたら即座に捕まえますよ？覚悟してくださいね！」

「…買い被りすぎだ。でも、まあ今はその言葉に甘えておく。」

そう言って笑うたしぎに軽く溜め息を吐き微笑み返す顔はリイナへと向ける親しみのある笑顔だった。

「あ、話をしているとあつという間ですね。着きましたよ。」

「おう、ありがとよ。」

軽く感謝の言葉を返して、たしぎに続き店内へと入る。

※ ※ ※

「それで、今回もドリフトさんの企みですか？」

私はガープさんに促されソファーに座り、正面のドリフトさんを睨むが堪える様子も無く平然と口を開く。

「企むなんてとんでもない。麦わら一味のせいで空いた大佐の席に君を推しただけさ。」

「そうさせたのはドリフトさんじゃないですか。詭弁ですね。」

全くと言って良い程悪びれず、事も無げに話すこの人との会話はとても疲れる。

東の海最大最強と恐れられたアールン一味が拿捕された一件でこの人は策略を巡らせていた。

東の海一と恐れられた魚人海賊団が存在するにも関わらず、何故コノミ諸島の支部へ戦力を配置しなかったのかを問題視し追求した。

そして『8年も放置してきた理由』を挙げ、アールン一味と16支部 ネズミ大佐、その上層派閥の癒着を指摘し失墜させたのだ。

その際、海軍本部の上層部の空いた大佐席に私を推薦しただけだと言う。

「…あなたの言葉はいつも正しい。でも『正し過ぎる』んですよ。」

「さつきも言ったけど買い被りすぎだよ。僕はあの島の住民達の証言を元に己の正義を遂行しただけさ。その一因に麦わら一味が絡んだっただけだよ。」

いつだっこの人の言う事や予想は核心を得ていて正しい。…さも全てを知っているかのように。

「もうそれで良いです。それで、ガープさん？机の上に退職願を置いてたんですけど見ました？」

「見とらん！それに辞めさせん！」

「リイナくん、それは聞き捨てならんな？」

やはり机の上に置いたのは間違いだったようだ。ドリフトさんに

言うとは反対されるのは明確だからこそ、ガープさんの机に置いたのに。

「ゾロが賞金稼ぎだった時とは状況が違います。海賊認定されたので辞めさせてください。家族と敵対するのは嫌です。お願いします。」
「それはガープさんも同じです。でも、辞めずに職務を全うされている。息子と孫、それぞれ敵対するのは道を正そうとする親心、祖父心。立派ではないですか。敵対するのが嫌だから辞める、それは逃げるだけではないですか？」

…とはいえ、心情までガープさんと比べるのは酷というものでしょう。

一つ条件を出します。君を大佐席へ推して着任早々辞職されては僕の立つ瀬が無い。僕を助けると思っただけ聞いてくれないか？」

この人は正論と感情論の掛け合いが上手い。今までそれで何度痛い目に合ったか分からない。

「…分かりましたよ。」

「ありがとう。実は元々勅命を課す為に君を大佐にするつもりだったんだ。部隊の都合上、大佐以上の役職で無いと動員出来ない作戦だ。

…グラントラインのとある国を滅ぼそうとしている犯罪者を捕縛して欲しい。」

何とも言い難い作戦だ。一国を相手取る犯罪者。それは一つの海賊団を捕縛する規模とは違い過ぎる。

さすがに一国へと兵団で介入するには肩書きが必要になるだろう。

「これは君だから任せられる任務だ。サポートなら好きに人選しているよ。上にも許可は取っているからね。」

「…準備良過ぎないですか？」

アーロン一味の件があつてから計画したならば期間が短い。ならば、それよりも以前からの計画だろう。

アーロン一味の拿捕、私の大佐着任、そして今回の勅命。全ては既に用意されていた事の様に流れている。

「たまたまさ。別件で動いていた部隊が意外な大物の動きを察知して

ね。そこに偶然アーロン一味の件が重なり、タイミング良く君に任せられることになった。まったくもって運が良い。これは僕の正義を、天が後押ししてくれていると考えて良いと思うよ?」

「ドリフトさんは天命とか天啓とか好きですね。そんなに信仰深いなら神父にでもなつたらどうですか?」

「ふふ、それも良かったかもね。：では、ロロナア・リイナ大佐。任務内容の詳細は追って伝える。部隊の編成、並びに出立は秘密裏に行うからそのつもりで。編成は君に任せたまよ。」

：ああ、それと君に朗報だ。麦わら一味は義賊的に行動している節が見受けられるとのことで、接触しない限りは追尾不要。つまり、様子見ってことにしておいたから。」

「：はあ、元々私に逃げ道は無かつたんですね。では、失礼します! ベーっ!!」

負け犬の遠吠えよろしくドリフトさんへ舌を出し、精一杯の反抗をして即座に能力を使い逃げる。もとい、戦略的に撤退する。

「：なあ、ドリフト。ワシ、煎餅食べてただけなんだが何か言った方が良かったのか?」

「あなたはいつもそうでしょう? 良いんですよ。」

「：だな。」

リイナの去った部屋には煎餅を頬張るガープの咀嚼音だけが響いた。

※ ※ ※

私はモクモクさんの部屋に戻って来たのだが誰も居ない。たしぎさんと待っている様をお願いしたのに。

ふと、外が騒がしいことに気付く。

なるほど、海賊が現れて捕縛しに行ったのだな、と推測する。

ルフィさん達じゃなきや良いな、等と思いながら派出所を出るといつの間にか町は嵐に襲われている。こうも急に天候が変わるとは珍しい。

派出所前には部隊の人達が集まり何やら忙しく準備を整えている。

そして、私に気付いた Mok Mok さんは何故か私を能力で捕縛した。

「…これは一体なんですか？ スモーカー大佐？」

「テメエ、麦わらに寝返って何企んでやがる？」

嗚呼、やっぱりルフィさんが何かやったんだ。何だかよく分からないけど、処刑台にでも登ったのかな。

「少し縁があつて、この町に一緒に来ただけです。何があつたんですか？」

私は Mok Mok さんの能力から抜け出して説明を求める。何も分からない内から疑われて少し不機嫌だ。それを隠す事無く語尾を強めた。

「…テメエと間違われてたしぎがさらわれた。この嵐は奴らにとって追い風だからな。そのまま偉大なる航路グランドラインに入るだろうからすぐに追う。」

なるほど。驚かそうと思いたしぎさんの事を黙っていたのが仇となったのか。ついでに、ドリフトさんから無駄に時間を奪われたことも原因だろう。自分の迂闊さを悔い改めなければ。

「分かりました。私が能力を使い、たしぎ曹長を連れ戻します。それで問題ないですね？」

「いいや、問題ありだ。俺が麦わらを追う。」

Mok Mok さんの私を射抜く瞳は決して譲らぬ気が籠もっている。しかし、私にも譲れない気持ちがあるのだ。

「そうですね。まあ、当然ですよ。大事な部下、大事な相棒がさらわれたんですから。男としては自分で助けに行きたいですよ？ 男としては。」

「…ガキが知った風な口をきくな！」

互いに譲らぬのなら仕方ないので私はある人を真似て口撃する。

「ガキだから知った風に来るんですよ？ 大人がやったら滑稽なだけです。」

「チツ、屁理屈を。」

「ええ、屁理屈です。」

このままこちらのペースで畳みかける。

「私と間違われたのなら私に責任があるでしょう。私がたしぎ曹長を無傷で連れ帰ると約束します。そして、私の能力なら瞬時に帰ってこれます。それでもあなたが行くんですか？」

無理に追って戦闘になれば負傷者が出るかもしれません。あなたの我が儘に付き合わされる部隊の人達はどうなるんですか？

そもそもあなたにはこの町の管轄責任があるはずです。」

「…指図するな。俺は麦わらを追う。海賊を放っておくことの方が問題だ。たしぎはついでもしかない。」

やはり説得は失敗した。ドリフトさんみたいには出来ません。この人は自身の我を無理矢理突き通すことで有名な『狂犬』だ。私とは以前から幾度も衝突している。今さら説得は難しいだろう。

仕方ないので奥の手を出すしかない。

「…はあ、スモーカー大佐。」

私は直にある勅命を受けて『自由に動ける』部隊を編成します。人は選は私に一任してあります。

行き先はグランドラインです。

今回たしぎ曹長を私に任せてくれるならあなたに同行を願います。任務中はあなたが勝手に麦わら一味を追ったとしても私は一切咎めません。どうですか？」

「…いいだろう。今は従ってやる。」

まあ、これで断られても私は能力を使って勝手に行くのだが。

実際、この人の能力はルフィさん達との相性が良い。容易く捕縛するだろう。だからこそ行かせる訳にはいかない。

「では、行ってきます。大人しく待っていてくださいね。」

私は敢えて派出所の中に入り、目に付いた扉で能力を使い中に入る。

目的地はもちろん麦わら一味の海賊船だ。

まず、待ち合わせの約束を破ってしまったことをゾロに謝ろう。

それからたしぎさんの無事を。怪我くらいだと直ぐに治せるので

問題ない。

正直悪いとは思いますが、私の心配はゾロとたしぎさんの事。それだけなのだ。

※ ※ ※ ※ ※

扉を開くとそこは船内。

そして、突然開いた扉に驚く6人がいる。ちゃんと皆居て良かった、と安心する。

「ゾロ、待ち合わせしてたのに間に合わなくてごめんなさい。」

私は一先ずゾロに謝る。次にたしぎさんへ迎えに来たことを告げた。

「「ちよつと待て!!!」」

数刻振りに息の合ったツツコミを受けて瞬時に私は口を開く。

「まず、能力を使って一人で来ました。スモーカー大佐はお留守番してるので安心してください。

たしぎさんは私が連れて帰るので大丈夫です。怪我をしているなら治します。

ちなみに、そろそろ風カームベルトの海に入りそうですよ?対策しておきますね。」

私は出来る女なので質問を先読みして答える。ついでに、気配りも出来るので能力で船をカームベルトへ入らないようにする。

「「…もう、驚いたら負けな気がする。」」

ナミさんとウソップさんに加えてサンジさんが項垂れている。

ゾロは頭を抑えて本日幾度目かの溜め息を漏らす。

ルフィさんは甲板に出て嵐と風の狭間に興奮しているようだ。

「リーナちゃん、迎えに来てくれてありがとうございます。人違いだと認識された時には戻るに戻れなくて。でも、皆さんが快く保護してくれました。」

そう言いながら駆け寄るたしぎさんは何も無い場所で足を引っ掛け転んでいる。

そして、転んだたしぎさんへ手を貸しゾロも私の方へ来る。

「こつちも色々あつて広場で待ち合わせどころじゃなかったんだ。すまねえ。…そのコートは海軍のか。」

「まあ、戻つて来た時の騒動で予想は付いたけどね。」

これは、ガープさんじゃない方の上司と話をしに行つてたから、さすがに私服ではね。それで…私も色々あつてすぐには海軍を辞めれなかつたの。何故か昇進してるし。でも、次の指令を遂行すれば自由にして良いって！」

「そうか、おまえの好きにすりや良い。俺も俺の好きにやるさ。」

ゾロは遠慮がちに頭を撫でてくれる。だが、たしぎさんが見ているのでほんの少しだけだったことが悔やまれる。

「ホントにゾロさんは良いお兄さんですね。」

そう言つてクスクス笑うたしぎさん。ゾロはばつが悪そうに顔を背ける。

「ゾロ、たしぎさんとは町で会つてたの？」

先ほどからゾロとたしぎさんの距離が近くて、疑問に思つたことを聞く。

「ああ、武器屋に行く途中でな。リイナだと思つたら別人でビビツた。」

「ふうん、そつか。驚かそうと思つてたのに…」

私は自分の気持ちが落ち込んでいたのがわかった。

サプライズが失敗したからではない。ゾロとたしぎさんの距離が近いことへの嫉妬だということも。

そんな私に気付いたのか、たしぎさんはこつそりと耳打ちする。

「麦わらが間違えて私を連れて来た時にゾロさん凄く焦つてましたよ。とてもリイナちゃんの心配してました。待つ間も無く出航した後も港の方をずっと見てました。私なんか勝てないくらいリイナちゃんの事想つてます。安心してください。」

たしぎさんは悪戯っぽく、優しく笑う。普段ドジで鈍い癖にこんな時だけズルい。

だからこそ、顔が似ていることもあるが、それを含めて私はたしぎ

さんを姉のように慕っているのだ。

そんな姉の囁きが嬉しくて私は堪らずゾロへと抱き付く。

「本当はこんな半端な事いけないってわかってる。我が仮言つてごめんなさい。一度本部に帰って、ちゃんと任務を終わらせるから。きつとまた来るから。」

「おう、いつでも来い。」

先ほどよりもほんの少しだけ長く撫でてくれた手はやはり暖かい。

私はそれで気持ちを切り替え、ナミさんへ航路の説明をする為、ゾロから離れる。

「ナミさん、私が行った後に能力は解けます。帆を張り直してリヴァース・マウンテンへ向かって下さい。赤い土の大陸にぶつからない様に海流へ乗れば偉大なる航路へ入れます。」

「やっぱり山を昇るのね?」

「ええ、言葉で説明しても限度があるので、後は自分達で確かめて下さい。」

こればかりは説明し難いので体験するしかない。それに、その方が感動出来るだろう。

「では、皆さん。海軍本部 大佐 ロロノア・リイナ、ローグタウン海軍派出所 曹長 たしぎ 二名はここで失礼します。：海軍と海賊という立場なのであまり良い行為とは言えませんが、お世話になりありがとうございます。」

能力を発動させ扉を開く。私に続きたしぎさんが扉をくぐる時、背後からまたな、と聞こえた。

今度尋ねる時はお肉を沢山持参しようかと考えながらローグタウンへ戻るのだった。

5 ・その瞳の先に

麦わら一味と別れて数日、正式に勅命を受けて私は上司であるガープ中将を訪ねている。…はずなのだが。

「手が止まってるよ？リイナ大佐。」

「…なぜ私がガープ中将の書類処理をしているのか疑問になりました。そして、なぜそれをドリフト中将から指示されているのかも疑問です。」

そう。執務室に訪れた際、ガープさんは居らず変わりにドリフトさんが優雅に紅茶を飲んでいた。

目が合うと同時に私は手招きされ、真意の見えない笑みを向けられる。嫌な予感しかないので渋々近寄る私に書類の束を手渡された。タイムリミット制限時間は一時間です。

底冷えるような音に従い私は応接用のテーブルで作業を進め始めたのが半刻程前だ。

「ガープさんには今日中にと伝えていたんですが、書類は全くの手付かず。丁度良いタイミングで君が来たので代理を頼みました。」

ガープさんは机で作業するのが嫌いによく逃げ出す。外での訓練は言ってもないのに連れ出すのに。

「…ドリフトさん。」

「なんででしょう？。」

「私が海軍を辞める事はあなたにとって悪と成りますか？」

ペンは紙の上を走らせつつ、先日から頭の片隅で考えていた事を素直に問い掛ける。

「成るよ。」

冷たくのし掛かる重圧に思わずペンが止まる。即答された言葉には呼吸さえ許さない程の威圧感があった。

「僕は以前、君を勧誘した時に言ったはずだよ。自分や大切な人を守る力の為に海軍へ来ないか、と。」

しかし、続けて話す言葉は普段通りの掴み所の無い雰囲気へと変わっていた。今の一瞬は何だったのか理解出来ず困惑する。

「…ある海兵は優秀過ぎた故に、上の恨みを買って闇へ消された。ある海兵はその功績故に、逆恨みで海賊に妻と子を殺された。ある海兵は仲間思い故に、仲間の裏切りで死んだ。」

「年齢17にして海軍の大佐となった君はどれに当てはまるかな？」

「…突然、何が言いたいんですか？」

「実に全て当てはまるんだよ。現在、君を取り巻く環境をもっと知るべきだ。」

「…」

「君は今、地位という権力に守られている。辞せば海軍、海賊共に躍起になり君を追うだろう。それがどういった意味を成すのか分からない君ではないだろう。」

確かに上層部には私を良く思わない人達もいる。捕縛した海賊や賞金首の仲間から沢山の逆恨みも受けている。部下には妬み恨む人達もいるだろう。しかし、それを無くすることは不可能だ。全ての人から好かれるなんて無理だからだ。

「君は年の割に聡い。だが、まだ幼い。足りないものが山ほどある。元海軍という肩書きは、君が思っている程軽くは無い。そうしてしまつた僕が言えたものではないのだが。」

私は何も言えず右手に握るペンの先から視線を動かすことが出来ない。言い返せない歯痒さが鼻の奥を突く。

それから数分経つた頃に再びドリフトさんが口を開く。

「僕は全てを思つた通りに動かすことは出来ない。海賊狩りが海賊にロロニア・ソロなると思ひもしなかつた。そして、君はきっと僕の話の聞かず海軍を辞めるだろうと思つた。」

「…ドリフトさんは私を海軍に誘つてくれました。ガンジお爺ちゃんのために、村へ常駐の海兵を派遣してくれました。その恩を忘れる訳にはいきませんから。」

「やはり君は良い子だ。情に厚いな。」

そう言つてひと息吐く。ドリフトさんは少しだけ寂しげに目を細

め再び私に語る。

「君は剣技にも優れ、恐らく最上位の悪魔の実の能力者だ。海軍史上最年少にして、最速で大佐となる偉業を打ち立てた。裏で根回しした僕でも驚く程だよ。」

「階級なんて望んでなかったですけどね。ただあなたに従っていたらそうだっただけです。」

私は三等海兵から始まり、ガープさんの部隊で訓練し、海賊を拿捕し続けただけである。基本はドリフトさんが教えてくれた通りに働いた結果だ。

「本当なら君には伝えずにようと思っただが…。今の君では海賊として生きてはいけない。弱いからじゃ無い。その理由を見付けてから海軍を去ることを勧めるよ。」

そう言っただけで立ち上がり、そのまま扉へ向かう。

「丁度一時間だ。残りの書類はガープさんにやらせるから、君は行きなさい。」

そしてそのまま扉から出るドリフトさんの背中を見送る。

私に足りないもの。それが何なのかは分からない。しかし、ヒントは与えられた。

アラバスタでの任務中にそれを得てこいとの激励だったのだろう。あの人らしい言い回しだ。

部隊編成は済んでいる。出立は明日の早朝。情報漏洩を防ぐ為、壮行会や出立式などは行わない。つまり、海軍にとって今夜は普段通りの夜なのだ。少し夜道を散歩するくらいなら問題ないのである。

※ ※ ※ ※

月が高く昇る夜更けに、私は黒いスーツを着用しコートを羽織る。会議の時くらいしか着ないスーツ姿は似合っていない。威厳を保つ為とはいえこれでは馬子にも衣装だ。

背中に正義を携えたコートも、少し背の低い私にとってはただの防寒着の様にも見受けられる。

佐官以上に与えられる一人用の個室で散歩の準備を済ませて能力を発動させる。

「移動^{ムーブ} ナミさん。」

誰も居ない個室なので『本来の能力』を使い、移動した先は灯りの点いた室内だった。

てつきり麦わら海賊船のナミさんの寝室だと思っていたので吃驚してしまった。

ナミさんは私に気付いていないようで、騒がしい窓の外を眺めている。

ゾロとルフィさんは見当たらず、サンジさんとウソップさんは酔い潰れている様子から酒場で宴会でもやっていたのだと考える。

「ナミさん、少し宜しいですか?」

「っ!?!:吃驚したあ!あんたはいつも突然現れないでよ!!」

と言われても私も困る。しかし、驚かせてしまったようなので素直に謝る。

「それはすいませんでした。ところで、外が騒がしいですけど何かやってるんですか?」

ナミさんの横へ移動し窓の外を覗き込むと数人が倒れ、その奥の建物からは土煙が上がり、剣戟の音や悲鳴が聞こえる。

「ああ、ゾロが賞金稼ぎ相手に百人斬りやってるの。そのうち終わるでしょ。」

よく事態が飲み込めないがゾロなら大丈夫だ。そう信頼しているからナミさんも焦る事無く傍観しているのだろうし。

「:意外ね。てつきりサンジくんの時みたいに飛び出すと思ったのに。」

あれはゾロが仲間と認めた人達の実力を計る為の演技だったのだが:やはり本気の演技はやり過ぎだったようだ。

「:あれは一応演技です。反応出来たのはルフィさんだけのようでしたが、皆さんの実力を計らせてもらいました。」

呆れたように溜め息を吐き、再び視線を外へ向ける。

「それで、何の用?今日は随分と身分通りの格好してるじゃない。」

「今日はあなたと話がしたくて来ました。」

「…少し場所を変えましょう？」

椅子から腰を上げ裏口へと歩を進めるナミさんの後に続く。裏口を出て直ぐの樽に腰掛けたナミさんは、隣の樽をポンポンと叩くと、その意のままに私も腰を掛けた。

「…ナミさんはどうして海賊になったんですか？」

「あんたも海軍だから知ってると思うけど、私が最初に海賊になったのはアーロンの海賊団だったわ。といっても、無理矢理加入させられたんだけど…」

それからナミさんは自身の8年間を、ココヤシ村や麦わら一味の事を話し、最後にこう付け加えた。

「私はいつらが海賊だから仲間になったんじゃないわ。あいつらだから仲間になったの。それがたまたま海賊だっただけよ。」

なるほど。たまたま海賊だっただけ、か。言い得て妙だが、その言葉で私に足りないものの欠片が見えた気がした。

「ナミさん、ありがとうございます。」

あの、もし、もしもですよ？私が麦わら一味に入りたいと言ったら皆さんは受け入れてくれますかね？」

「あいつらは立場だとか気にしないわよ。きつともう、とつくに仲間だと思ってるわ。…私もね。」

そうやってナミさんは立ち上がる。いつの間にか辺りの騒音も消え静けさが広がっていた。

「さて、終わったみたいだし戻りましょう。ゾロに会ってくるのよね？」

「いえ、今日はナミさんと話をしに来ただけです。」

それに明日から私は任務でグランドラインに入ります。どれくらいの期間になるかわかりませんが、アラバスタという国に居ますので機会があれば会うかもしれないですね。」

「だったらその国には寄らずに進むわ。捕まるのは遠慮したいから。」
「それは残念です。」

私はナミさんへアラバスタへは来るなど暗に伝え、それを理解してナミさんは笑う。この人もなかなか言葉遊びが好きなタイプのように

だ。

「ちなみに、私は能力無しでも今のゾロより強いです。だから、私にあなた達を捕まえさせないで下さいね。では、またいずれお会いしましょう。」

最後に意地悪をしておきたかったので、それだけ言い残して能力で移動する。

今回の散歩は別にナミさんでなくても良かったのだ。しかし、同じ年頃で海賊の女性に知り合いなど居るはずもない。消去法でナミさんと話をしに行っただけなのだが、結果的には話を聞いたのがナミさんで良かった。ついでに忠告も出来た。

朝になれば出立しなければならぬ為、少しだけ仮眠を取ろうとスーツ姿のままベッドへ横になった。

※ ※ ※ ※ ※

翌朝、本部を出立し直接アラバスタへと向かう。海軍特別製の船底に海楼石を使用した軍艦と、本部に常備されている永久指針エターナルポースを使うことでカムペルトの海を航行することも可能とし、最短距離で天候は関係なく目的地へ直進出来る。

今作戦の部隊編成は私の部隊、スモーカー大佐部隊、そしてアラバスタ近海を管轄するヒナ大佐部隊だ。

各部隊の海兵も格闘、捕縛に優れた者のみを選抜した精鋭部隊である。

そんな捕縛のスペシャリスト三部隊を動員しなければならぬ捕縛対象は実に大物である。

王下七武海 サー・クロコダイル 元懸賞金 8100万ベリー

を社長とし活動するB・W社バロック・ワークスという秘密犯罪会社だ。

大掛かりな捕縛作戦だが、情報漏洩の危険性が高い為、三部隊の尉

官以下は近海で警戒網を張り、逃走を図るB・Wを捕縛。佐官と補佐一人のみアラバスタのナノハナという町で合流する手筈になっている。

先ずは、ドリフト中將が送り込んでいる諜報部隊と共に情報収集。クロコダイルとB・W社の動向を探りつつ、下部社員から秘密裏に捕縛し、全員を逃がさず一網打尽に出来るタイミングを練る。

クロコダイルがどういった経緯でアラバスタ侵攻を仕掛けるのかは掴めていないため慎重に行動するしかない。

確実にクロコダイルが動いた瞬間が勝負だ。言い逃れを許す事態に陥れば捕縛は不可能となり、世界政府と七武海の協定契約に違反した海軍本部の立場が一気に崩れてしまう。

※ ※ ※

航路にて大きな障害も無く、無事にアラバスタ王国 港町ナノハナに到着したのだが、スモーカー大佐が早速一人で行動していると報告を受けて到着早々私は頭を痛めている。

「スモーカー君は昔から人の話を聞かない男よ。潔く諦めなさい。」

「ヒナ大佐！お久しぶりです。今作戦で一番の要になると思いますがよろしく願います。」

「任せておきなさい。リイナから頼られるなんて嬉しいわよ。ヒナ感激。」

ナノハナ到着時、宿の一室に集合した私たちは軽く挨拶を交わし諜報員と合流すべく移動を始める。

「たしぎもスモーカー君に連れ回されて苦労してるみたいね。」

「ああ、たしぎさんは条件反射で従っちゃうところがあるみたいで仕方が無いですよ。」

「彼も黙って後ろを付いて来るたしぎに満更でもないみたいで良く分からないわ。ヒナ困惑。」

などと話ながら街中を進む。秘密裏に動かなければならない為、私は役職呼びを止めている。ヒナ大佐も理解しているので咎めたりはしない。

勿論、尉官以上に着用権利の与えられるコートは着ていない。：モクモクさんは構わずに正義ジャケットを着ているのだろうと思いきり、再び頭が痛くなる。

事前に教えられた建物に入り、数人の諜報員と挨拶を交わしこれまでの報告を受ける。

先の報告以上の事はまだ掴めていないらしく、今はナノハナで情報収集しつつ、街中でB・Wとみられる社員を捕縛、尋問に専念することに決まった。

「・・・ところでヒナさん。モクモクさんは合流する気あるんですね。」

「勝手にクロコダイルのところへ突撃しそうで怖いわね。ヒナ呆然。」

確かに自由に動いて構わないと私は言った。だが、作戦を無視して勝手に動き回る事を容認しては支障が出かねない。

「仕方ないので強制連行します。少し待って下さい。」

私は扉を開きモクモクさんの元へ向かい、息を吐かせる前に強制転移させる。辺りを見渡すがたしぎさんが居ないので再び扉からたしぎさんの元へ。

たしぎさんは買い物中だったので少し待つことになったが共に移動した。

ヒナさんの元へ戻り、椅子でふんぞり返り葉巻を二本煙らせるモクモクさんへ作戦の要項を伝えるがまとも聞いてはいないようだ。

「デメエが自由に動いて構わないと言ったんだらうが？」

「確かに言いました。しかし、今作戦の妨げになる行動は謹んで貰わないと困ります。」

「邪魔なんてしてねえじゃねえか？とつとつ行ってクロコダイル捕まえて来りや良い。」

この人は作戦も諜報の意味も聞いていないようだ。私は頭を抑え溜め息を吐きどう言葉にするか考える。

そこでヒナさんがモクモクさんへ問い掛ける。

「ねえ、スモーカー君。あなたクロコダイルに会ったことあるでしょ？どんな感じだった？」

「…奴あ、昔から頭のキレる海賊だった。今でこそ七武海で政府の犬をやってはいるが、変わらず狡猾で野望は諦めてねえってギラギラした目してるはずだぜ。」

「そんな相手が管轄権も無いのにあなたがここで動いてたり、証拠も無いのに捕らえに来た私達をどう思うかしら？ヒナ疑問。」

「…はあ、分かった。麦わらが来るまでは大人しくしといてやる。」

ヒナさんのおかげで理解してもらえたようだ。ヒナさんと視線が合うところらにウインクを投げてくる。その様はさすが大人の女性としての魅力だろう。

…ん？麦わらが来るまで？

「モクモクさん。麦わらって何言ってるんですか？」

「あ？テメエこそ何言ってるやがる。奴らはこっちに向かって来てんだ。行方不明だった王女様連れてな。」

モクモクさんが麦わら一味を目の敵にしていることは知っている。だからこそアラバスタでの任務中を通り過ぎて欲しかったからナミさんに忠告したはずだ。

そして、行方不明だった王女。恐らくネフェルタリ・ビビのことだろう。何処で知ったのかは分からないが、自国の危機に馳せ参じようとしているのか。

「俺はローグタウンから直通でここまで来たが、別動隊に麦わらを追わせている。」

数日前、ウイスキーピーク近海で爆発が起きた。島を調べたらB・Wの下っ端、ミリオンズつつたか百名程が斬り伏せられていたそう。恐らくテメエの兄貴だろう。

その後、航行する麦わら一味の中に王女様らしき人物を発見との知らせが届いた。これがどういう意味か猿でも分かるだろうよ。」

どういった経緯かは推測の域を出ないが、確かに王女様と共にここへ来る可能性は高い。というか、あの夜ゾロが暴れていたのはそれ

か。しかし、ナミさんはアラバスタへは来ないと言っていた。つまり、私が戻った後に何かがあったのだ。

「リイナ大佐の海軍本部よりも、私たちのローグタウンがここに近いのでその分早く到着しました。」

なので、既に数人のB・W社員と思われる輩を捕縛、尋問しています。

結果、ここナノハナへ向かう麦わら一味を追う様に、ビリオンズというB・W社員も向かっているそうです。

あと、それとは別に招集命令を受けてこちらへ向かっているB・W社員もいるそうです。」

たしぎさんはさも当然のように働いてくれているが、出来れば私達が到着するまで待つていてほしかった。

※ ※ ※

たしぎさんから報告を受けたように、あれから数日間で多くのB・W社員の捕縛に成功してはいる。しかし、有益な情報は出てこない。

通常、ミリオンズ、ビリオンズという下っ端社員は社長であるクロコダイルからの命令が無い限り各自で賞金稼ぎをしているそうだが、現在の命令は『各自アラバスタに到着後、別命あるまで待機』だということしか知らず、その後の命令が出ない限り新たな情報も出ないようなのだ。

そもそも下っ端社員は社長が王下七武海 クロコダイルであることも知らなかった。その名の通り秘密会社である。

だが、秘密であるにも関わらず社員は社名を体の何処かにイレズミ、若しくは衣類に刺繍、ペイントを施しているので見つけ易い。

町中を哨戒している私服海兵から時折報告を受け、即時捕縛に向かう。モクモクさんとヒナさんの二人に捕縛を任せ、私はその都度能力で捕縛者を移送する係だ。

そんな中、その日は珍しくB・Wとは別の報告が挙がった。背中にドクロのイレズミをした男を見付けた、と。その男の詳細を聞き私が

急行した。

待機場所に私しか残っていないなかった事が幸か不幸か。能力の相性上、モクモクさんとヒナさんでは相手に出来ないからだ。

その男はこの世界で最強と評される海賊、白ひげ海賊団二番隊隊長ポートガス・D・エース。通称『火拳のエース』

この男が何を目的としてアラバスタへと来たのか確かめなければならぬ。

もしクロコダイルと関係があるのなら捕縛対象として、戦闘になる可能性もある。それは即ち、クロコダイルの裏にはあの白ひげ海賊団が加担している事になり、そして世界政府への宣戦布告にもなり得る。

クロコダイルが小物にすら見える正真正銘の大物の情報に動揺を隠せない。最悪の場合、元帥に報告し、大将クラスを招集しなければならぬのだ。正直、私一人では荷が重過ぎる。実力が、ではない。責任の問題だ。

ポートガスを尾行している私服海兵と交代し、私は深呼吸をして気を落ち着かせ、無地で白い外套を能力で出す。

「そこ行く旅のお兄さん。アラバスタは日射しが強く、素肌での外出は危険ですよ？これをどうぞ。」

私は住民の振りをして外套を差し出す。この男に外套など必要無いだろうが、話し掛ける切欠を作る為に親切心を見せる。

「こりあ、親切にどうも。俺にあ、必要無いんだが…お嬢さんの気持ちに無碍には出来ねえな。有難く使わせてもらう。」

ポートガスはそう言い私に笑顔を向けて外套を羽織る。これで背中の中のイレズミも隠せたので計画通りだ。

「あ、俺は人探しをしてるんだがこいつを見なかったかい？麦わら帽子を被ってるから目立つと思うんだが。」

ポートガスが取り出したのは麦わら海賊団船長 ルフィさんの手配書だ。最近まで無名だったルフィさんをなぜこの男は探しているのだろう。もし麦わら一味を狙っているのだとするとゾロが危険だ。なんとか出来るならば今のうちに阻止しなければならない。

「…見てませんね。お兄さんは賞金稼ぎさんですか？」

「いや、会えたら良いなあ位に探してるだけさ。こいつ俺の弟なんだ。」

「え?!…そ、そうなんですか。」

駄目だ。動揺を隠せない。この男とルフィさんが兄弟だという言葉に自分でも信じられない程驚いている。

今ならガープさんとルフィさんが祖父孫の関係だと知った麦わら一味の心境が理解出来る。

…つまりこの男もガープさんの孫である。

もう駄目だ。叫びたくなる衝動を抑える事に精一杯でまともに思考出来なくなる。

「お互い名前の前に“D”もあるしな。」

「ああ、なるほど…あ…」

…しまった。

「俺はまだ名乗ってないぜ。海兵のお嬢さん？」

「…不覚です。もしかして最初からですか？」

「いや、手配書見た時の気配さ。…で？俺はどうすりやいい？」

自身の未熟さが招いた結果だ。私でなければ声を大にして叫んでいただろう。悔しいのでそう思うようにする。

こうなれば致し方ないが小細工は不要だ。一か八かの賭けに出る性分ではないがここは賭けに出る。

「あなたがクロコダイルの関係者であれば捕らえさせてもらいます。」
「クロコダイルは関係無えな。…さつきはルフィを探してると言うたがついでだ。本命は『黒ひげ』ってヤツなんだが知らないか？」

ポートガスの答えに思わず安堵の息を吐き出す。この人は嘘は言っていないと目を見ればわかる。

噂で聞く『白ひげ海賊団』のイメージが先行していたが、思った程悪い人ではなさそうだ。

なので、正直に話して出来るだけ早くこの地から離れてもらえるようにしようと考え到る。

「黒ひげという人は本当に知りません。ですが、ルフィさんの事は知っています。私の家族が麦わら一味なので、縁があり先日お会いしました。」

「おおーそうか!!あいつ元気にしてたか?」

思いの外食い付くポートガスに気圧されつつ、静かに話を出来る場所へ移動する事を承諾させ近場のカフェへ移動する。

※※※

「そうか、おめえはクソジジイの部下かよ。そんでルフィんとこの剣士の妹。仕舞いには噂の大佐『偶像リイナ』^{アイドル}ってか。」

「そんな異名で呼ばないでください。捕らえますよ。」

ぷはは、と笑うポートガスの言葉に私は頭を抑える。

『偶像リイナ』^{アイドル}それが私の異名らしい。いつの頃から呼ばれ始めたのかは不明だが、階級の上がり方が異常な私を『アイドル』と見立て、上層部に『ファン』がいるから昇進が早いという、いわば妬みから来るあだ名なのだ。まったくもって不本意だ。

「はあ。…とりあえず私達の邪魔をしないのであればルフィさんへの手引きもしてあげます。なのでおとなしくしててください。」

「おまえの言うとおり外套着てスモーカーってのに見付からなきゃいいんだろ。ルフィと会えればすぐに発つつもりだしな。大丈夫さ。しかし、海軍がそんなんで良いのか?」

確かに私が海賊に手を貸す行為は反逆と取られても仕方ないだろう。だが、今は無駄な騒ぎを起こしている余裕は無い。特にモクモクさんがポートガスに会おうものなら一悶着あるに決まっている。もし、それが作戦に支障を及ぼせばクロコダイルの捕縛は難しくなる。「今はクロコダイルの捕縛が最優先任務です。…というのは建前で、私は単にゾロとゾロが船長と認めたらルフィさんを捕まえたくないだけです。」

そのルフィさんの義兄であるあなたも肩書きほど悪い人ではない

ようですので。私は私の正義で動くだけで、厄介事に自ら首を突っ込むのは嫌ですし。」

「こつちとしては助かるが、お前の生き方は息が詰まりそうだな。：なあ、海軍辞めてウチにこねえか？」

「はあ？何言ってるんですかあなたは。私はゾロの居る所に行きますよ。」

「んじや、ルフィも誘わなきやな。」

この人は、いや、この人たちは海賊に似つかわしくない人当たりの良さを持っている。互いの立場や肩書きに左右されない自由な生き方はとても眩しいものだと感じてしまう。

いや、だからこそ海賊でいられるのかもしれない。私とは違う。その事実が胸を締め付ける。

なるほど、私に足りないものがそこにあるのだろう、と理屈ではない何かが感情を沸き立てる。

「では、私は一度戻ります。麦わらの情報が入り次第お知らせしますが、ポートガスさんは何処n「エースで良い。」

「：エースさんは何処にいてもいいです。私の能力なら関係ないの
で。」

「おう。ありがとな、リイナ。」

笑顔で私に礼を言うポートガスに会釈だけ返しカフェを出る。何か胸がもやもやすることを払い除けようと足早に移動する。

まずは潜伏場所へ戻り、モクモクさんとヒナさんの二人にポートガスのことを報告した。

火拳はクロコダイルとの関係は無く、単に人探しの為に単独行動をしていること。

ナノハナに探し人が居なければ直ぐに町を出ることと、無駄な諍いは起こさないと約束したこと。

こちらとしても白ひげと事を構えるつもりは無いので、任務に支障が無い限りは放置することにしたと告げた。

モクモクさんは不満気にしていたが、ヒナさんは今回に限り見逃すことには賛同してくれた。

ヒナさんの考えは私と同じように今作戦の不安要素を増やしたくないことと、白ひげ一味と事を構えるのは得策ではないということ。モクモクさんもポートガスに興味は無いようだが、単純に海賊を見逃す行為に納得がいかないといった様子だった。

もちろん、麦わら一味へ引き合わせことは内緒にしている。麦わら一味がナノハナに訪れたならばポートガスを内密に送るつもりだ。近海の哨戒をしている海兵から報告が来るはずなのでその後、迅速に行動すれば支障は無いだろう。

※ ※ ※

その翌朝、早速報告を受けた私はその事態に悩むのだ。

哨戒船が先ず麦わら海賊船を発見し報告を受けたのだが、すぐさま続報が入る。麦わら海賊船を追うB・W社の船が十数隻続いているという。

素早く考え効率良く事態の沈静化を図る策を思い描く。

「モクモクさんは麦わらを捕縛したいですよね？」

「ああ？当たり前のこと聞いてんじゃねえよー！」

「でしたら考えがあります。哨戒船をわざと左右に引かせ、その間を麦わら海賊船だけ通し、ナノハナ上陸を支援させます。」

麦わら海賊船の通過後、哨戒船でB・W前方足止め。モクモクさん、ヒナさん部隊で左右後方から包囲、順次B・Wを捕縛。私は周囲の連携を取れるように更に後方に回り全体の支援。捕縛済みのB・W社員を一箇所に纏めます。

そして、B・Wの拿捕が終わり次第モクモクさんには麦わらを追ってもらいます。海での混戦中に逃げられるよりアラバスタ国内で追った方が発見しやすいと思いますよ？どうでしょう？」

「私はそれでいいわ。もとよりB・W社員の一齐捕縛は作戦の内。ヒナ賛成。」

「…チツ。いいだろう。麦わらとヤル前の準備運動にや丁度良い。」

「では、各自入電。準備が整い次第先行してください。私の部隊は散

開し、お二人の部隊に続きます。」

各員それぞれの部隊の元へ向かい準備、作戦の伝播、指揮、配置を開始する。

私は能力で移動出来るため時間のロスが少なく、他二人の部隊より早く準備に取り掛かり完了後の余裕が出来る。

その合間に私はポートガスの元へ移動し用件を伝えることにする。ポートガスは宿の部屋で丁度準備を終えたところのようだ。タイミング良く突然現れた私に驚いていたがゆっくり話している時間は無いので早口に説明をする。

「間もなく麦わら一味が近くの沿岸に到着しますが、私達は近海で別船団の捕縛戦闘を開始します。その際、周囲の警戒が手薄になりますので、その際にルフィさんと会ってください。」

そして、別船団の捕縛が終わり次第、スモーカー大佐部隊が麦わら一味を追います。ですので、その前に退避することをお勧めします。時間が無いので手短に言いましたが伝わりましたか？」

「ああ、わかった。戦闘つてことはリイナも行くんだよな？」

「ええ、私は作戦責任者ですから。」

「そうか。じゃあ俺も手短に話す。リイナと会えて良かった。ありがとう。」

一度頭を下げ、そして昨日と変わらない笑みを私に向ける。

「次会うときはちゃんとウチに誘うからな。覚悟しとけよ？」

「…誘われても行きません。時間がないので私は行きますね。」

「おう！またな、リイナ！」

背後にポートガスの声を受けながら能力で部隊の船に戻る。

あの人の笑顔は心がもよもやする。端的に言えば気に入らないのだ。だが、嫌いではない。なんとも形容し難い感情に苛立ちを感じる。その苛立ちが表情に出ていることに気付いてはいるが元に戻ってこないのだ。

部隊の面々は、私が開戦を前に昂ぶった顔をしているように見えるのか口を噤んでいる。

私は部隊の先導に立つ。既に部隊人員の配置も済んでいる。横目

に他部隊の出船も確認。数泊間を置き指揮を出す。

左右に部隊を散開させB・Wの後方に回り込むように船を進める。前面からの進行阻止に加え、左右からの挟撃、討ち逃しの無い様に艦隊の合間を縫い進みモクモクさん、ヒナさん部隊の支援に船上を駆け回る。

負傷者の傷を戻し、捕縛者を回収し、襲い掛かる者を一蹴し、先程の苛立ちを発散させるように戦場を駆ける。

絶え間なく響いていた砲弾の音が聞こえなくなり、次第に剣戟や銃声、怒号や悲鳴の数も減る。停滞し連なる軍艦とB・Wの船で動く者は海軍側の人間だけとなる。

『スモーカー部隊、制圧完了だ。早いトコ麦わらを追いたい。ロロノア大佐にさつきと雑魚共の搬送をしろと伝えろ。』

『今リイナ大佐はヒナ部隊で搬送してる途中。もう少し待ってくれるかしら。』

『ちよー！私一人で搬送するのは限度があるんで手伝ってくださいよ！』

『知るか。俺の仕事は終わったんだ。後はテメエの仕事だろうが、さつきとしろ。』

『だったら捕縛するだけにしてくださいよ！全員気絶させてるから時間が掛かるんですよ？』

『私はちゃんと考えて捕縛だけにしたわよ？スモーカー君は自業自得だから大人しく待ちなさい。ヒナ嘲笑。』

電伝虫の通信で各々が好き勝手に言い合っている横目で港を確認するが麦わら海賊船は見当たらない。

ポートガスはルフィさんと会えたのだろうか。無事に探し人を追うことが出来たのだろうか。麦わら一味は何らかの目的のために先に進めただろうか。

戦闘中に余所見をする暇は無く、麦わら一味の確認が出来なかったので様々な疑問が浮かぶ。

目下の問題である総勢二百人に及ぶB・W社員の搬送に少し息を吐きつつ、もう少しだけ時間稼ぎをしてやろう、と勝手に貸しを作るの

であった。

6 ・道を迎える者、逸れる者

アラバスタ近海でのB・W捕縛作戦は短時間で終わり、ナノハナ住民にも大きな混乱を与えずに済んだようだ。

モクモクさんの部隊は約束通り麦わらを追って行った。私とヒナさんは先程捕らえたB・W社員の中で指揮を執っていたMr. 11という男を移送せず別室で尋問している。

このMr. 11という男はフロンティアエージェントといい、B・W社員の中では上位の役職らしくなかなか口を割らない。秘密犯罪会社の上位というのは口の固さも必要らしい。

「ヒナさん、私のやり方で尋問していいですか？」

「?…いいわよ。でも、拷問みたいなことは駄目。」

「わかってますよ。では…」

私は紙を用意し、左手にペンを持ち、Mr. 11の頭に右手を乗せ能力を発動させる。

「あなた達の上司、Mr. 0の情報を教えてください。」

私の能力でMr. 11と私の自我の一部を同調させる。これで私の質問に対して意識、無意識に関わらずMr. 11の知る真実のみを引き出せるのだ。

今から行う方法の説明としては物質感^{サイコメトリー}能力の要領で右手から対象の情報を引き出し、左手で情報を書き出すというものだ。

便利な能力ではあるが表向き^{サイコメトリー}の能力では、直接触れなくては情報を引き出せないことと、引き出した情報は私の左手から文字として書き出されるのみで、私自身が映像のように確認出来るものではないという難点がある。

それと、一度に読み取れる量は質問に対して知っている事に限られ、その都度質問を変えなければ読み取れない。

便利だが使い道が限られ、時間も掛かるので実は尋問には向かない、ということになっている。

その後もいくつか試してみたがクロコダイルの情報は出てこな

かった。しかし、下つ端社員の知らない情報はいくつか新たに分かった。

B・W社は基本的にMr. 13 アンラツキーズという伝達係が指令書運び届ける。

それが今は行方不明になっているようで、次点の連絡手段であるエリマキランナーズという緊急伝達係が動くらしい。

そのエリマキトカゲは『ナノハナで待機』という命令を受けたB・W社員の元へも必ず来る。それを確保出来れば新たな情報の入手となり、国盗りの防止に繋がるだろう。

あと、正確な情報ではないが興味深いものが一つ。クロコダイルが全オフィサーエージェントに召集をかけたようだ。これはクロコダイルが直接動く前触れに違いないと考える。

あとは正確に動き出す日時が分かれば私達も捕縛に踏み込むことが出来るのだが…

懸念としてもう一つの情報を挙げると、国王軍と反乱軍にそれぞれ潜入しているB・W社員の情報だった。

今のところどちらにも動きが見られないので諜報員のみ先行させているが、B・W社員が潜伏しているとすれば、互いの手引きで内乱を引き起こす可能性が高いだろう。

国王軍の居るアルバーナか、反乱軍の居るカトレアか、クロコダイルの居るレインベースか。

「私はカトレアへ赴き反乱軍内に潜むB・W社員をあぶり出し捕縛します。その後、アルバーナの国王軍内のB・Wも同じように捕縛しますのでヒナさんはモクモクさんをレインベースへ向かうように誘導してもらえますか？年下の私より同期であるヒナさんの方が良いと思いますので。」

「分かったわ。スモーカー君に念のため電伝虫持たせてて正解だったわね。」

「ええ。それから、ヒナさんの部隊でナノハナ周囲の警戒をお願いします。伝達係のエリマキトカゲを一匹でも捕まえれば指令書の内容で対策をとれます。」

「任せて。私服海兵を少し増員して当たらせるわ。内乱に乗じて国盗りなんて大層な考え許せる訳ないじゃない。ヒナ憤怒。」

「ですね。では、私は部隊の準備を整え、早朝にはカトレアへ到着するように発ちます。」

私はヒナさんと会釈し部隊の元へ向かう。いよいよ今作戦も佳境だと思ふと身が震える。

クロコダイルのやろうとしていることは許されぬ行為だ。個人的な感情だとは思ふが、海軍として最後の仕事は出来るだけ死者を出さずに終えたいと思つている。

現段階で部隊の戦力は決して多いとは言えない。連日の哨戒任務と先の海上戦闘で疲れも出てきている。肉体的には強靱な者でも精神的な疲れを感じないなんて人はいない。この地の気候も慣れぬ者にとつては肉体的、精神的にも辛いだろう。長引けばこちら側が不利になる。

近い内にクロコダイルが動くのならばこちらとしても都合が良いのだ。無駄な被害は出さない為にも早期終結を心掛けたと思う。

※ ※ ※

近海と町の哨戒任務をヒナさんの部隊に任せ、少しだが夜間に休みをとらせた私の部隊は疲れを見せず夜明け前の砂漠を反乱軍の集うカトレアへと歩を進める。

丁度、日の出のタイミングでカトレアの町が見える場所までたどり着くと、部隊員を見渡し各々の準備を確認して再び歩き出す。

「反乱軍の皆さん、話があつて来ました！リーダーとお会いしたいのですが入っていいですか？」

町の入り口付近に見張りが居ることは折り込み済みである。皆で敵対の意思は無いことを示す為にも両手を挙げ呼びかける。勿論、いつもは腰に下げている刀は外している。

見張りの一人が町の奥へと走り、もう一人はこちらへ銃口を向け警戒は怠らない。

数分間の沈黙の後、戻って来た見張りの一人に私だけ来るよう言われその通りに従い、他の部隊員は少し離れた場所で待機する。作戦のパターンとしてこれも想定の内だ。

程無くして町の広場に集う者達の前に通された。その中心に額から目尻を通り頬までの傷がある男が木箱に座り私を待ち構えている。

「反乱軍リーダーのコーザだ。こんな早朝から何の用だ、お譲さん。」

「私は先日からナノハナへ訪れているリイナと申します。私が来たのはあなた方にとって重要な事実を伝える為です。

ですが、一つお願いがあります。リーダーであるコーザさんと二人でなければ話せない事なので、ご了承頂きたいのです。」

海軍という事実は隠しているが嘘は言っていない。ちなみにこの条件が飲めないという時は信用の置ける数人くらいは良いかと考えているが、それでもギリギリのラインだと思っている。

「…良いだろう。付いて来い。」

あつさりとした承され、表には出さない程度に安堵する。反対の意を唱える数人を眼力で黙らせ奥の建物へ向かうコーザを私は早足で追う。建物の扉を閉め、ソファへ座るよう促されそれに従う。

「…単刀直入に伝えます。反乱軍の中に相当数の異物が混じっています。秘密犯罪会社B・Wバックワークスという者達です。信じる信じないはあなたの自由です。そして、ここから先の話の聞くも聞かないもあなた次第です。どうしますか?」

私は目を見開き言葉の出ないコーザを見詰めたまま返事を待つ。

「…ちよつと待ってくれ。どういうことだ?意味が分からない。」

「では、順を追って話しましょう。これは確信を持った推測です。

先ず、反乱軍の起りとなった二年前のダンスパウダー事件は聞き及んでいきます。それを手引きしたのは国王ではなくB・W社です。何故、と疑問に思うでしょう。理由は簡単、内乱を引き起こす為ですよ。二年間も内乱が続くと国王軍、反乱軍共に兵力の疲弊が表れます。そんな今ならアラバスタ王国の乗っ取りも容易いと思いませんか?」「なんだ?!」

「まあ落ち着いてください。つまりですね、二年前からこの国は知ら

ず知らずの内にB・W社から侵略を受けているんです。ここまではいいですね?」

「ああ、俺達は謀られたのかもしれないな。だが、おまえの言葉が真実である保障はない。おまえが俺達を騙そうとしている可能性もあるわけだ。」

やはりそう簡単には信じて貰えないらしい。確信を持った推測であつて事実では無いことを明言し、証拠も無いのだから当たり前だ。「ですから最初の質問に戻ります。信じるか信じないかはあなたの自由です。」

私の話した内容は反乱軍の二年間を無に帰すような話だ。自分達の意思で戦い死んで逝つた、傷ついたこの人の仲間達の犠牲は謀られた無駄なものだと言い放つ行為。剣よりも銃弾よりも傷を深く抉る言葉を私は淡々と口に出した。

それでも、過去を無かつたことには出来ないが未来で起こり得る多くの犠牲を少なくすることは出来る。私はこの人にもう少し先の可能性を、選択肢を与えているのだ。

「俺はコブラ王と旧知でな。：悔しいがおまえの推測の方が正しいと思えるほど、あの人は国民を愛していると俺は知ってる。俺は今でも王を信じてるさ。」

：だがな、皆の裏切られたと知つた時の絶望は、怒りは、恨みは今だに燃え続けている。振り上げた拳は誰かが振り下ろさなきゃいけない。俺は反乱軍のリーダーとしてコブラ王を知っている者として戦わなきゃいけないんだ。」

「ああ、申し訳ありません。私の言葉が足りませんでしたね。私は反乱軍を止めに来た訳じゃありません。その役目は国王や王女のもんです。」

私はB・W社の侵略を止めに来ただけですから。なので、内乱の継続、終結如何はリーダーのあなたが先頭に立ち考えて決めてください。そこに私は関与出来ません。」

そもそも、最初から反乱軍を止めるつもりは無いのだ。内乱を続けるも辞めるも当事者達で決めるべきことで、第三者の私が止めたところ

ろでわだかまりが残っては意味が無いだろう。

コーザも分かっているように反乱軍は一度剣を取ってしまったている為引くに引けない状態に陥っているだけなのだ。私が与えられる可能性、選択肢というのは『当事者で辞めるか続けるか考える』というものである。

「…わかった。反乱軍の中にそいつらが紛れ込んでるんだな。続けてくれ。」

「ご理解感謝します。B・W社が紛れているのは反乱軍だけではありません。国王軍にも居ます。」

なので、国王コブラ、反乱軍リーダーのあなたが和解しようとしてもやつらは裏で小賢く動き、強制的に戦闘に仕向けるでしょう。しかし、私なら今すぐどうにか出来ます。」

コーザは続きを促す様に口を閉ざしたまま私を見詰める。その瞳は先程よりも決意に満ちた瞳だ。その意思に答えるため私は微笑みを返し告げる。

「そういえば、私の仕事を伝え忘れていましたね。海軍本部 大佐 ロロノア・リーナが今よりB・W社員の一齐捕縛を執り行います。ご協力お願いして宜しいですか？」

※ ※ ※

反乱軍リーダー コーザとの話は終わり、先程の広場へと戻る。

「カトレアの同志を全員集めろ！外に出ている連中も今すぐにだ!!」

コーザの一声で辺りの人員が忙しく動く。

ある者は血気盛んに叫び、ある者は恐怖に覚悟を決め、ある者は今生の別れと涙を流す。

皆、最終決戦を思い描き、各々の想いで腹を括り、徐々に広場を人々で埋め尽くす。

私は外で待機させたままの部隊員に捕縛準備を整えさせ、私だけ再び広場に戻る。この後の動きも前日に指示済みなので各自町の外で配置に就かせる。

「全員揃ったな。…これから何があっても俺の事を信じてくれ!!」

リーダーの要領を得ない言葉に、集まった反乱軍は何事かと困惑している。私はその面々を気にする事無くコーザの横へと移動し『本来の能力』を発動する。

「^{コントロール}支配”カトレア。”」

カトレアの町を範囲とし私の絶対支配下へと世界が変わる。

私の本来の能力『世界と同化する能力』で私自身がカトレアの町そのものになる。同化するという能力は私という『人間を生成する境界線を操作する』というもので、即ち世界のあらゆる境界線を操るという能力でもあるのだ。

『全員動かないでください。無駄なお喋りも禁止です。』

語りかける私の姿は無く、声だけの響く広場で混乱する反乱軍のメンバー。私の言葉に反応し動かなくなる体に更に困惑し、パクパクと開閉するだけで音を発しない己の口に顔色は青褪め畏怖している。

現在、カトレアの町に存在する全てが私であり、皆を覆う『大気』でさえ私なのだ。Mr. 11に行った物質感応能力の応用で、広場に集まる者と自我の一部の境界線を操作し同調させることで私の言葉に対して本人の意思とは関係なく忠実に行動させることが出来る。

『自分はB・Wの社員だという人だけ立っててください。』

リーダーであるコーザを含め皆が一樣にその場に腰を下ろす。その面々は意図せず勝手に動く自身の体に驚愕の表情を浮かべている。一方、自らの意に反し動かぬ体に表情を醜く歪ませる数人が不動のまま立っている。

『…八人ですか。以外と少ないですね。では、その八人はそのまま町の外へ出て下さい。他の人達は楽にしていますよ。』

八人が町を出て、外で待ち構える部隊員に捕縛されたことを確認し能力を解除する。それと同時に私は元居た場所へ姿を現す。

白昼夢でも見たかの様に呆けていた反乱軍メンバーだったが、一人、また一人と我に振り返り混沌とした声を上げる。それを横目にコーザがこちらを向く。

「…いや、悪魔の実際の能力者ってのはスゲエな。正直何が起こったの

か理解出来なかった。

しかし、あの八人で間違い無いのか？あの中の五人は俺が入る前からの古参だったはずだ。」

「残念ながら能力の発動中は真実にしか作用しません。あなたもご自身で体験したはずですよ。」

「そうか…いや、悪かった。皆を代表して感謝する。」

そう言っ頭を下げたコーザだったが、最初こそ私の話には半信半疑だったはずだ。それが実際に仲間の中にB・W社員が存在したこと
に落胆しているのが見て取れる。だが、不安因子の排除に少なからず
安堵しているのも確かなようで表情は少しだけ穏やかになっている。

「いえ、まだですよ。反乱軍支部の方がまだ残ってますから。」

そうだな、とコーザは呟き主要メンバーを集め事の経緯を説明する。

困惑するメンバーへの説明に多少時間は掛かったが、その間に先程の八人を簡単に尋問し、めぼしい情報は無いようなので能力で移送する。

説明と今後の行動の指揮を終えたコーザと共に、借り受けた部隊員
人数分の馬で各支部を回り、反乱軍に紛れ込んだB・W社員の捕縛を
完了させた。

※ ※ ※

「リイナ、戻りました…もう、クタクタです。部隊員も本日は休ませませ
すね。」

潜伏場所へ戻り付いたのは翌日の夕刻だった。

反乱軍の各支部を回り終えたのが夜だったため、部隊員の疲れも激
しくカトレアにて一泊し、今朝アルバーナへと向かったのだ。

アルバーナ宮殿の正面にあたる南門みなみゲートから入ると宮殿内が騒がし
い。コブラ国王への謁見を海軍大佐名義で通し、単刀直入にクロコダ
イルとB・W社の侵攻を説明する。

既にコブラ王はビビ王女からの手紙でクロコダイルが黒幕である

ことを知り、遠征準備の最中であると言う。アラバスタ護衛隊 副官
ペルを敵地視察へ向けた直後だったようだ。

ビビ王女からの手紙にはクロコダイルとB・W社の計画の一部から
始まり、心強い味方と共にこちらへ向かう旨も記述してあった。ビビ
王女が麦わら一味と行動を共にしている動機が判明した。

私は前日の反乱軍での事を話し、国王軍内部のB・W社員の捕縛、遠
征の中止、反乱軍との和解を申し出て、これを快く受け入れてくれた
のである。王は即時兵士の集合を掛け遠征の中止を呼びかけた後、そ
の場を私に任せてくれたので迅速に捕縛任務を遂行出来た。勿論、首
都アルバーナの住民に成り済ましていたB・W社員の捕縛も済ませ
た。

アルバーナ離脱の前にレインベースに向かったモクモクさんと麦
わら一味の詳細を伝えたので勘違いで敵対されることはないだろう。
「お疲れさま、リイナ。エリマキトカゲの一匹を捕獲して指令書を頂
いたわ。見るかしら?」

ヒナさんはコーヒートを渡しながら重要な事を言つてのける。左手
にヒラヒラと泳がせる紙をコーヒーの後に渡してくるあたり悪戯の
つもりなのだろう。

「見ますよ!ええ、と…っえ?!」

指令書を確認して驚愕する。時間的にみて明日の朝7時にナノハ
ナが戦場になるそうだ。

「ヒナさん、これはどうします?」

「オフィサーエージェントがなんらかの方法で仕掛けてくるみたい
ね。本来ならナノハナに待機しているミリオンズ、ビリオンズがそれ
の扇動役になって反乱軍をアルバーナへ誘い込み内乱勃発つてここ
かしら。ヒナ愕然。」

「この町にはB・W社員は残っていたとしても僅かですし、国王軍と反
乱軍は和解に向けて調整中です。今となつてはナノハナで仕掛ける
メリットは無いんですよねえ。」

しかし、クロコダイルはその事実を知らないだろう。首都と国王
軍、反乱軍に潜入しているB・W社員は皆無、ナノハナや他の町には

僅かに隠れ忍ぶ者が居るかもしれない。レインベースはクロコダイルの本拠地なので当然多数のB・W社員が居るのだろうが。

社長から一方的に指令を傳達するだけで、下っ端から上司への連絡手段を用いなかった『秘密犯罪会社』の欠点が浮き彫りになっている。「モクモクさんはどうですか?」

「彼は麦わらの先回りをしてレインベースに居るそうよ。曰く、勘ですって。」

モクモクさんは王女ビビを連れて麦わら一味を追い、一度アルバーナへと向かったそうだが王女が不在なままだと知るとクロコダイルの本拠地レインベースへと向かったそうだ。

王女がクロコダイルの侵攻を知っていたとなると、麦わら一味の行く先はアルバーナかレインベースしか無いだろう。結果的にクロコダイルと決着をつける為にレインベースへ向かう可能性は高い。

モクモクさんはその事前情報は無いはずなのに勘で行く先を決めるとはなかなか馬鹿に出来ない。

「では、レインベースはモクモクさんに任せましょう。クロコダイルが事を起こせば麦わら一味どころではなくなるでしょうから。麦わらの目的もおそらくクロコダイルですので上手くいけば共闘出来るかもしれないですね。」

『白狼のスマーカー』は海賊と共闘なんて無理ね。私はナノハナを食い止めるからリイナはアルバーナでクロコダイルに当たって。奴の目的はアラバスタ王国の乗っ取りでしょ? だったらアルバーナで待ち構えた方が早いわ。ヒナ推奨。」

「でしたらナノハナはお任せします。『黒檻のヒナ』の實力に期待して朗報をお待ちしますね。私の部隊はナノハナで待機させるので有事の際は動員して下さい。」

一応の作戦も決まったので私は少し眠ることにした。昨日から能力を大きな規模で何度も使い、二日にわたる長い移動距離に心身共に疲弊してしまっている。能力で身体の疲労は消せるが精神的な疲れは寝ることが一番だ。

明日の早朝、とうとうクロコダイルが動く。奴も七武海という高み

にいる海賊であり、悪魔の実の能力者だ。全力で構えなければ捕縛など出来まい。

思い描くは無血での迅速な任務遂行であるがいつ何が起こるか分からないため全力で事に当たろうと意識を手放した。

※ ※ ※ ※ ※

全ては私の、私達の見通しの甘さか。詰めの弱さか。実力の無さか。それとも、それが原作の流れなのか。

「あなたの目的は何っ?!」

「別にねえよ。強いていうならオメエを殺りに来たって感じ?俺カツチョー!!」

私を見下ろす男は悠然と笑いながら答える。

なぜこうなった。全てはこの男が現れて狂ってしまった。

今朝アルバーナへと出向いた私を待っていたのはコブラ王の行方が分からないという国王軍副官からの報告だった。

おそらくB・Wのオフィサーエージェントの仕業だと気づき、ヒナさんへ電伝虫で通信するが繋がらない。

既に7時を回り対応に追われているのだろうと少し間を置き諜報員の居る潜伏場所へ通信を入れるが誰も出ない。

そこでやつとただ事では無いと気づき、急いで能力を使いナノハナへ戻ると瓦解した町と倒れ伏したヒナさん、部隊員達を目に捉えた。

何があつたのか聞くと、コブラ王と国王軍に変装したB・Wがナノハナを消し去ると宣言し暴動を起こしたのだという。

すぐさまヒナさんの部隊で捕縛、鎮静化するも他のオフィサーエージェントとみられる者が港へ巨大船を衝突させ、転倒する船は港近辺を巻き込み町は惨事に見舞われてしまった。その拍子に偽者のコブラ王は偽国王軍と共に逃走してしまう。

ヒナさんは各部隊員に住民の救助と避難を指示し、偽者を追おうと走りだすが喧騒の中から道を塞ぐように飛び出してきた一人の男に

部隊も含めやられてしまったと。

私はその男をオフィサーエージェントの一人だと認識し、モクモクさんへ電伝虫の通信を繋ぐとレインベースでも事態が動いているらしい。麦わら一味と共にクロコダイルの罠に嵌って檻の中で足止めを喰らったが、なんとか今は外に出れたそうさ。

そして、クロコダイルはアルバーナへ向かい、麦わら一味はクロコダイルを討つ為に追って行ったと。

『たしぎをアルバーナに向かわせる。俺はナノハナでヒナ部隊の救援と他の用を済ませてくる。』

それだけを一方的に言って通信を切られてしまう。

クロコダイルがアルバーナへと向かったのならばオフィサーエージェントやその他のB・W社員も集うのだろう。私も急がなくてはならない。

アルバーナ宮殿へと移動し、急ぎナノハナの襲撃を国王軍へ報告する。コブラ王は今だ見付かっておらず益々混乱が大きくなるだけだった。

レインベースからアルバーナへ侵攻を進めるクロコダイル、集結するオフィサーエージェントを私一人で対処するには負担が多過ぎる。国王軍の戦力でまともに戦えそうなのは副官のチャカ、ペルの二人なのだが、ペルはレインベースへ視察へ出たきり帰ってきていない。

麦わら一味はクロコダイルよりも遅れて到着するだろう。能力で迎えるに行くべきか、今アルバーナから一瞬だけでも離れて良いものなのか。短時間で多くの事が重なり思考が追いつかない。昨日の疲労が残っている事も要因だろうか。

「なあ、お嬢ちゃん。今暇なら俺と遊ばね?」

「こんな時に何を言ってるん、です…?!」

突然私に場違いなことを話しかけてきた男を見て驚愕する。なぜなら、ヒナさんが言っていたオフィサーエージェントの特徴と類似しているからだ。

「…ナノハナから早いお着きですね。ヒナさんがお世話になったそうで、お返しを考えなくてはいけません。」

瞬時に距離を取り左腰に差した柄に右手を掛ける。

「一人ならば好都合です。あなたの上司が到着する前に捕縛させてもらいます！」

鞘から柄を抜き、地を這う様な突進からの斬り上げを仕掛けるが男はヒラリと半身を捻りかわすと一歩、二歩とバックステップを踏む。

「何言ってるの？…ん？ああ、俺B・Wじゃねえよ。遊ぶ気になってくれたんなら良いけど。」

「B・Wでなければ海賊ですか？どちらにしても海軍に手出してるんですから覚悟してください。」

先程の正面からの斬り上げは余裕で回避されているので能力で背後に奇襲をかける。自身の境界を操り男の背後に跳び死角から突く。しかし、それを知っていたかのように視えないはずの刃を掴む。その右手は金属の様に黒く鈍い光沢を放っている。

「後ろからは卑怯じゃね？それに海賊でもねえし。か弱い一般市民だし。」

「か弱い一般市民が海軍大佐と互角に戦えるなんて初めて知りましたよ。」

刃の能力を解除し一足飛びで男から距離を取る。視えないはずの刃を掴んだ手は何かの能力だろうか。しかも背後からの奇襲を見抜く実力は侮れない。

「互角う？覇気も知らねえオメエが俺と互角かよ？笑わせるなあ。やっぱ無いわ。無い無い。」

ハキ？ハキとは何だ？この男は暗に私より強いと言っていることは理解出来る。なので出し惜しみをすることは出来そうにないと考え到る。

「俺らのリーダーがオメエには敵わないから様子見だっつーんだよ。でもさあ、実際やってみてオメエ弱いじゃん？様子見とか無いわ。」

この男はどこかの組織に属していることを仄めかすが意味が分からない。しかし、そういうことならば少し話を聞くことにしようとならぬ。しかし、そういうことならば少し話を聞くことにしようとならぬ。しかし、そういうことならば少し話を聞くことにしようとならぬ。しかし、そういうことならば少し話を聞くことにしようとならぬ。

「隔離・支配」

私と男の境界だけをズラし世界と隔絶させる。視覚から得られる情報、つまり見た目は元の世界と変わらないがここは異次元、異世界とも表現出来る世界なのだ。この状態では元の世界に存在しているものとは干渉出来ない。壊れることも無ければ触れることも出来ない。更にこの世界は私の支配化にあるのでこの男はもう何も抵抗出来ずに私の言葉に従うしかない。

『動かないでください。』

「…おお、マジで動けねえ。話にや聞いてたがこれがオメエの能力か。で、どーすんの?」

『あなたは何者ですか?』

「ん…まあ、いつか。俺あ、ロード。オメエと同じ転生者だ。俺は原作知識あるけどな。」

テンセイシャ? ゲンサクチシキ? 聞いた事のある単語だが、私と同じとは何だ? 天性? 転生? ロードと名乗るこの男は私を転生者と言ったのか?

「原作知識無しで内乱止めたのはスゲエけどさ、ワニ退治はルフィの役目なの。それで、最後に感動の別れが待ってたんだからさあ!…だから、オメエは邪魔。Do you understand?」

私はこの男の言葉を理解出来ずにいる。原作の知識、つまりこの世界は誰かの物語であると言っているのだ。しかし、現実はこの世界で皆生きている。そんな訳無いだろうと脳が理解を拒んでいる。

ワニとはクロコダイルのことだろう。クロコダイルがルフィさんに敗れるという未来が決まっているのだから。クロコダイル率いるB・Wのアラバスタ侵攻は最初から決まっていた運命だから傍観しているというのか。

だが、二年前より昔の記憶が殆ど無い私にとってはこの世界が私の全てなのだ。それを否定するようにこの男は邪魔だと嘲笑う。

『黙れ!』

「いやさ、俺あホントの事言ってるだけじゃん?」

『黙れ黙れ黙れ黙れ! それ以上喋るなっ!!』

「…はあ、まじウゼエ。餓鬼がイキがつてんじやねえぞコラ!!」

何故私の支配下で逆らえるのか。先程動けないと本人が認めただけなのに、今この男は自由に動き、話している。

私の能力が効かないのか、それとも能力の効果が弱いのか、それがこの男の能力なのか判断出来ない程冷静さを失っている。

男は先程刃を掴んだ時のように右手から腕までを黒く染める。そして、少し腰を落とし体を捻ると拳を握り、思い切り振り抜いた。

瞬間、私の意識を刈り取られる程の衝撃が全身にはしる。世界と同一化している私に効くはずの無い打撃。男のただの右フックに数瞬間視界が白く染まると同時に能力が解除される。

「お？戻った。んじゃ、さっきの続きな。」

朦朧とする意識の中で男の声だけが鼓膜を揺らす。

「オメエがワニ退治しちゃルフイもゾロも強くなれないっしょ？したら、この先のワンピースが続かなくなるじゃん。」

体に力が入らないまま倒れ伏す私に近付きながら男は続ける。

なんとか立ち上がるかと意識するが体が言うことを聞いてくれない。能力を使おうとするが上手く作用しない。

「オメエがゾロの妹キャラだとか海軍大佐だとかどーでもいいの。でも、原作は変えちゃダメでしょ？これでも俺ら原作キャラに干渉しないよーに自重してんのよ。おっけー？」

傍まで来た男に首を掴まれ持ち上げられる。あえて気道を圧迫するように掴まれているため苦しさから暴れるが、男は容赦無く私を殴打する。

幾度殴られ蹴られたらどうか。腕を折られ、頬の感覚も無く、為れるがまだまだ。男は飽きたのか私を投げ、そして見下ろす。男の視線を逸らさずに睨み、気力を振り絞って叫ぶことが精一杯の反抗だった。

「あなたの目的は何っ?!」

「別にねえよ。強いていうならオメエを殺りに来たって感じ？俺力ツチョー!!」

このままでは本当に殺されてしまう。私の力はこの男に届く事無く、ただ一方的に奪われるだろう。

「最後に良いこと教えてやんよ。いくら最強の自然系ロギアでも覇気使えな

きや雑魚だぜえ！俺ら原作知識とチート能力と最上級の恩恵貰ってんだ。能力だけのオメエとは違えんだよ!!」

この男の言っていることはよく理解出来なかったが、どうやら私は雑魚だったらしい。能力を過信し、大人たちに乗せられた役職の上で踊っていただけの小娘だった様だ。

視界が霞み、少しずつ意識が離れていく。死の淵に至ってゾロとガンジお爺ちゃんの顔が思い浮かぶ。

私の鼓膜は男の声に震えてはいるが、内容までは伝えてくれない。それ程も意識は残っていなかった。

男の言う原作にとつて、私はただの異物だったようで、皆と出会ってはいけなかった存在なのだ。そんな取り止めの無い思案を撒きながら。

だけど、家族になってくれてありがとう。愛してくれてありがとう。そう、感謝しながら意識を手放した。

※ ※ ※ ※

白く霞む意識の中で僅かに聞こえる波の音を認識する。

意に反して重く動かない手足に苛立ち、固く閉じた目蓋が視界を遮るため何も分からない。

なんとなく実感してしまう。私は生きているのだと。

程無くして意識を取り戻し目蓋を開けるとどこかの天井が見えた。

「目が覚めた？」

聞き覚えのある声にそちらを向くとヒナさんが微笑んでいる。

「何があったのか覚えてる？」

「…ヒナさんが言っていた男に負けました。手も足も出なかったです。」

「そう。…クロコダイルの捕縛は成功したけれど、海軍としては惨敗よ。ヒナ悔恨。」

「…詳しく、教えて下さい。」

私はロードという男に殺されかけた後の話をヒナさんから聞き及ぶ。

私は南門付近で傷だらけの状態で国王軍に保護されたが、付近には誰もいなかったそう。

その数刻後、クロコダイルが傷付いた国王を伴いアルバーナ宮殿へと侵攻。オフィサーエージェントは麦わら一味に打破され、遅れて登場したルフィさんがクロコダイルと対峙。

ミスオールサンデーという側近が国王を連れ別の場所へ移動している途中にたしぎさんが接触するも一方的に敗れたそう。

一度、クロコダイルがルフィさんを退け逃走するが、再び対峙したルフィさんがクロコダイルを打ち倒したらしい。

その後広場でクロコダイルの置き土産、広範囲威力の爆弾騒ぎがあるも国王軍ペルの働きで大きな被害は無かった。

ヒナさんはその頃、レインベースから戻ったモクモクさんと共にアラバスタ近海に留まっていたB・W社のダンスパウダー雨雲発生船を拿捕し証拠の確保に動いたという。

そして倒れ伏すクロコダイルを捕縛し今作戦は無事終了した。

クロコダイルとオフィサーエージェントを捕縛したのは海軍であるが、実際に打破したのは麦わら一味であるという事実を海軍本部は揉み消そうとし、モクモクさんが上層部に噛み付いたという。

たしぎさんは自身の力の無さのせいで、ルフィさんにクロコダイルの行く先を伝える事しか出来なかったと悔し涙を流していたそう。

「B・Wの下っ端社員捕縛や証拠集め、クロコダイルの捕縛準備への貢献で私達三部隊は褒章を受けるそうよ。階級を上げる件は断ったけ

れど、形だけでも褒章は受け取れってうるさいのよ。ヒナ遺憾。」

「そんなの私もお断りです。上の人は外面ばかり気にして嫌になりま
すね。…そういえば、モクモクさん達はもう?」

「ええ、スモーカー君の部隊はもうローグタウンに帰還中よ。リイナ
はもう少し休む?」

「いえ、能力を使えばすぐ治ります。上司に報告と文句を言わなきゃ
ならないので。」

世界と同化し境界を操る能力とは万能で、どんな怪我をしても同化
して解除する時には万全の状態で身体を復元出来る。要はイメージ
した状態に戻るるので、身長を高くイメージすると高身長に。胸を大
きくイメージすると巨乳になれる。他人をイメージすると変身だつ
て出来てしまう。万能で便利なのだ。だからこそそれに頼ってしま
う。覚悟も、信念も無く。

※ ※ ※

私はヒナさん部隊の見送り付きで部隊を率いてアラバスタ近海に
出ている。

「今回の任務では沢山お世話になりました。ありがとうございます
た。」

「私以上に走り回って働いてたのはリイナでしょ?こちらこそ、あり
がとう。またね。」

ヒナさんの挨拶にどう返事をすれいいのか少し迷ったがやはり最
初に考えていた通りに言うことにする。

「それではヒナさん。…さようなら。」

私は能力を隠す事無く使い部隊の船ごと本部へと移転し、そのま
ま用のある人の下へ移動する。

「ドリフトさん、失礼します。」

「やあ、おかえり。任務完遂ご苦労様。」

「任務の最終段階である男と戦闘になり完敗しました。その男はロー
ドと名乗り、私を転生者と呼びました。他にも色々。ドリフトさん

「何か知りませんか？」

「…分からないな。僕は僕が知っていることしかわからないよ。」

「そう、ですか。」

「…君に足りないモノ、わかったかい？」

「私見で良ければ。でも、あなたには教えません。さて、私は約束通り任務を遂行したのでこれで失礼しますね。」

「行くんだね？」

「はい。次会う時は敵ですね。あ、それともまた勧誘ですか？」

「いや、おそらく敵だ。またね、リイナくん。」

「いえ、さよならです。ドリフト中将。」

私は背中越しに別れの挨拶を残し執務室の扉から出た。

7 ・ 想いの向かう先へ

小舟に乗り、風向きと海流のままに漂い空を泳ぐ雲を眺めていると一隻の船が近付いてくる。

海軍の軍艦でも海賊船でも無い、唯の運搬船のようだ。航路の邪魔だろうとオールで少し漕いで進路を譲る。

すれ違い、遠ざかる運搬船を見送り再び自由に流れる雲を眺める。

私が漂っているのは海軍本部のある偉大なる航路グランドラインではなく、ナナノシノニツパ村の近海。つまり東の海イースト・ブルーである。

ドリフトさんの執務室を出た後、ガープさんへ辞表を直接渡すとあつさり辞職出来た。

ガープさん曰く、若い内は思うままやってみろ、だそうだ。きつとドリフトさんが手回しや手続き等を済ませていたのだろう。

その後、ガンジお爺ちゃんの元へ帰り色んな話をした。

ゾロと再会したこと、ゾロが今いる麦わら一味の話、海軍の人達の話、任務の話やアラバスタでのこと、そして私のこれからのこと。

能力を自在に操れるようになってからは頻繁に帰るようになっていた我が家だが、実は今回の帰宅は少し気が重かった。

私が海軍を辞めたことでガンジお爺ちゃんに迷惑を掛けるかもしれないからだ。海軍という後ろ盾が無くなった今、私への悪意は家族へ向かうかもしれない。そう思うと、やはり心苦しい。

しかし、子が親に迷惑をかけて何が悪い。そう言つて笑うガンジお爺ちゃん。

「本当ならば生まれてから独り立ちするまで親に世話になるもんじゃ。リーナにはそれがなかった分、今から迷惑をかけなさい。」

朗らかに諭すように私に語る。

ドリフトさんがこの村に海兵を常駐させ始めてからは近海の家賊や近隣の山賊等の賞金首は現れなくなり平和そのものなのだそうだ。

海軍中將の威光が、そしてこの村出自の元海軍大佐の私の目がある限り『最弱イーストブルー』の小物は寄り付かないらしい。

それに、常駐派兵員の海兵の中には私を良く想ってくれている人がいるらしく、村へもとても良くしてくれているそうだ。

「ゾロ程頼りにはならんがあやつになら嫁がせても良いかと思つてる。」

悪戯に笑うガンジお爺ちゃんだったが、そんな話を聞いて恥ずかしくもあり、嬉しくもある私だった。

だから気にせず行ってきなさい、と背中を押ししてくれた。

村を出る前に常駐海兵の詰め所へ立ち寄り少し話をする、私の辞職と村への派兵は継続させる旨がドリフトさんから連絡があつたそうだ。

いつでも私が帰れるように村を守る、と真剣な顔で言う真面目そうな青年に礼を言い小舟で海へ出た。

ゆらゆら、ふらふらと漂いながら、余韻に浸りながら私は次の目的へ意識を向ける。

※ ※ ※

能力で移転した先は海賊船が停泊中の無人島。以前、会ったことのある海賊の船長さんに話を聞きに来たのだ。

私が聞きたい情報を知つていそうで、まともに話の出来そうな人。尚且つ、私からも情報を出せそうな人がこの人しか居なかつたからという理由だ。

島の内部で野営でもしているのか、船には見張りの数人だけであつたので一先ず声を掛ける。

「こんにちは。船長さんとお話したいのですが取り次いでもらつて良いですか？」

突然現れた私に驚く見張り番だったが、私の事を覚えている人がいたらしくその人が島の中へ走って行った。

待っている間他の見張りの人達とは気まずい沈黙が続くが、敵意は無いですよ、と笑顔を魅せると鼻の下を伸ばしているのが少し気持ち悪かつた。

程無くして戻って来た一人に連れられ野営地へ訪れる。幹部たちが無言のまま重圧のある視線を向けるが気にせず一番奥へ座る船長さんの正面へ進む。

「久しいな。今日はガープ中将と一緒にじゃないのか？」

船長さんからの気当たりの強い視線を受け少したじろぐがなんとか踏み止まり敵意の無い事を示す。

「お久しぶりです。先日海軍は辞めました。それで海賊になろうと思うのですが、その前に聞きたいことがあって来ました。」

海軍を辞め海賊になる。その言葉にほう、と頬を緩めて船長さんは言葉の続きを促す。

「それで、私から聞くだけなのも礼儀がないので麦わら海賊団のお話でもしようかと思ひまして。」

麦わら海賊団という言葉に船長さんと幹部たちの重い雰囲気は和らぐのを感じる。

「そうか。…おい、ヤロー共！客人をもてなせえ!!」

「「おーっ!!」」

あれよあれよと私は船長さんと幹部たちに囲まれ、宴が開催される。私は事の次第に困惑するままお酒は勧められ、食事を勧められる。

「それでルフィは今どの辺りにいる？元気にやってるか？手配書が出たまでは知ってるんだがその後がてんで情報も無くてな。」

「ちよ、ちよつと待って。船長さん落ち着い下さい！幹部さんたちも!!」

この人たちルフィさんのこと好き過ぎて大変だ。確かに人を惹き付ける魅力のある人だとは思いますがこれ程とは思わなかった。

「いや、すまなねえ。つい興奮しちまった。それから、船長なんて堅苦しいからシャンクスで良い。」

「ええ、大丈夫です。では、シャンクスさんと呼びます。あ、私はロロノア・リーナです。家族が麦わら一味なんですよ。」

と、自己紹介を済ませ私が知っている麦わら海賊団の事を話した。アルビダからバギー、クリークにアーロン。手配書が発行される以

前の事から先日のクロコダイルの件。そして、アラバスタを出て今はジャヤ辺りだろうと伝える。

途中、ルフィさんと赤髪海賊団の出会いやシャンクスさんとバギーが旧知の仲であること、ウソップさんとヤソップさんが親子であること、ルフィさんとポートガスは義兄弟である事など話題は尽きず私は質問する機会を失っていた。

だが、シャンクスさん達の話はとても楽しく心踊る航海譚で各々が盛り上がり、私にとっても充実したひとときだった。この感じはやはり似ているな、と自然に頬が緩む。

ルフィさんの海賊像はシャンクスさんであり、赤髪海賊団なのだとは体感出来た。海軍は敵、他の海賊も敵などと固定概念にとらわれがちな海賊の中でも個人を視て自身で判断している。

大海賊時代と呼ばれる昨今、敵味方の判別を誤れば死に繋がる。後ろから味方に…なんてよくある話だ。

自身の感情や感覚で敵味方、良し悪しを判断する事がどれだけ危険な事なのか分かってやっているはずだ。

それでも、自分の信念に従いやりたいようにやる。この人達はそれが出来るのだ。言うなれば、それだけの想いと力を持ち合わせているからこそだろう。

私に足りないものの一つがそれだと実感している。

「…浮かない顔をしているな。騒ぎ過ぎちまったか？」

皆の輪から少し離れ考え込んでいた私を気に掛けシャンクスさんが隣へ腰を降ろす。

「いえ、私事でちよつと。」

私は上司の命令に従って働くだけで大佐という地位に立ちました。悪魔の实の能力もあって私は誰よりも強くなつたと勘違いしていたんです。先日手も足出ないまま惨敗してそれに気付かされました。」

「俺は力を持ち、力に溺れ死んでいった奴らをごまんと見てきた。だが、おまえはそれに早い内に気付けたんだ。今からまたやり直せる。それは良い事じゃないか。」

それは理解している。だからここを訪ねてきたのだ。しかし、それ

をロードという男に気付かされた事が癪だと感じてしまう。

「…シャンクスさんはルフィさんを助けた時に左腕を失い、後悔しましたか?」

「いや、全然。ダチの命を失う方が後悔するさ。」

「私は悪魔の实の能力でそれを無かった事に出来るんですよ。即死でない限り、どんな怪我でも即時全快、それこそ首を刎ねた直後、完全に命が尽きる前なら元通りです。シャンクスさんのその失った腕さえ復元出来ます。」

シャンクスさんは私が言おうとする事が分かるのか顔色を変えず口を閉ざしたままだ。

「…私は命を軽んじていました。負けて気付かされました。死ぬ覚悟も無く、己の信念も無く、能力が無ければ弱いということに。だから、強くなる手始めに知りたいことがあるんです。『四皇』のあなたなら知っていると思いい訪ねて来ました。」

「…覇気、だろ?」

「そうです。『ハキ』とは何ですか?悪魔の实の能力が効かずに一方的にやられたのは初めてでした。」

やはりシャンクスさんはハキを知っている。海賊の頂点を競う者達なら知っていると踏んで正解だった。

「…覇気とは素質にも寄るものでな。知ったから、修業したからすぐに使えるというものじゃない。俺は教えることは出来るが扱えるかはおまえ次第だ。」

「構いません。知っておくだけで幾分違うものですし、損はありませんから。」

私に素質があればより上手く扱える力。あの男は私と同じ転生者だということから、同じ素質があってもおかしくは無い。

もし、素質が無くても力を知ることと対策がとれる可能性は高いと考える。

「まず、覇気ってのは基本的に武装色の覇気、見聞色の覇気の二つのことだ。詳しく教えたいとこだが、俺はどうも言葉での説明が下手らしい。だから、適役の師匠を紹介してやるよ。」

結局、種類と用途だけは教えてもらい、師事出来る人から詳細と素質の有無を見てもらうことになった。

※ ※ ※ ※ ※

武装色の覇気とは、意思の力を体や武器、武具に纏うことで硬化させ、攻防共に強化が出来るらしい。硬化させた部分は黒い金属の様に見えるようだ。

自然系ロギアの能力者に対しては物理的に触れる事が出来る。

つまり、ロードという男が世界と同化した私を殴打出来たのはこの力だ。

見聞色の覇気とは、相手や周囲の気配をより強く察知する力。鍛え上げれば相手の思考すら読めてしまうらしい。

私が背後からの奇襲をかけたにも関わらず、事前に察知して防がれたのはこの力だろう。

覇気とは扱える者にとって莫大な戦闘力を有する事と同義であると実感する。

悪魔の实ロギアの自然系は絶対的な強さを誇ると思っていたが、それを抑える事の出来る武装色の覇気は絶大な力だ。

加えて、周囲の気配察知や相手の行動を先読み出来る見聞色の覇気は、先手を取る有利性を覆せる程の力となる。

覇気を使える者と使えぬ者とは、悪魔の实の能力者と一般人からの違いがある。

一概には言えないが、悪魔の实の能力者＋覇気使い＜覇気使い＞悪魔の实の能力者＜一般人ということになりそうだ。

「あともう一つ、特定の素質を持つ者にしか扱えない覇気もある。：これだ。」

二つの覇気の説明を受け思案している私にシヤンクスさんは殺気にも似た威圧感を放つ。背筋に冷や水が這い上がるような寒気を増していく。

私と大気の境目が直に衝撃波を受けた様にビリビリと震える。身

体が硬直し力が抜け、本能が跪けと訴えかける。そして手足の感覚を失う程の重圧は更に高まる。

この感じはかつての上司とあの男から受けたものと同じ質のものだと直感する。だが、徐々に重く鋭くなる威圧はそれらに勝っている様に感じる。本能に諍い意識を手放さないようにするがこのままではあまり保ちそうにない。

「これが王の素質、霸王色の覇気だ。今ので七割くらいか。おまえがこれに耐えられたつてことは素質はあるつてことかもな。」

「…はあ、あ…うう…死ぬかと、思いました。」

七割でこれ程ならば本気だどうなつてしまうのか。体感して本能で理解出来きてしまふ。『王の素質』というのはあながち間違いない。こんな威圧感を受けたら一般の人は知らずにひざまづにかじつ、かじつてしまふだろう。

「俺がここまでやるなんて滅多にないぞ？ありがたく思え！」

一応、この人は四皇の一人。海賊の中の最高峰の一人だ。本来ならば簡単に会うことすら出来ない人なのだ。だが、そう見えないのはシヤンクスさんの人柄だろう。

「いや、ありがたいですが予告無しはキツイです。」

「大体の格下なら泡吹いて倒れるからな。おまえを試したんだ。リイナ、文句無しの合格だ。アマゾン・リリーに送ろうと思つてたが、とつておきの使い手を紹介してやる。」

何とも手荒い試験方法だったがお眼鏡にかなつたようである。

が、今この人アマゾン・リリーと言いましたね。アマゾン・リリーといえば九蛇海賊団。九蛇海賊団といえば王下七武海の海賊女帝ボア・ハンコック率いるところじゃないですか。やはり四皇ともなれば一般の常識が通用しないのだろうか。

ともあれ、次の予定も決まつた所で宴会の盛り上がり最高潮に差し掛かる輪の中へシヤンクスさんは戻つて行つた。

※ ※ ※

赤髪海賊団の宴は夜遅くまで続き、翌朝は酔い潰れた面々と二日酔

いの面々とで死屍累々の惨状が出来上がっていた。幹部たちや他数人はまだ飲み食いしたり、介抱したりとタフな方もいるが。

騒ぎ楽しむことが好きな人たちの様だが後先考えずに騒ぐのだから自業自得だ。

シャンクスさんは二日酔いで凄く機嫌が悪いらしい。これでは師事してもらはずの方を訪ねるのは延期になりそうだと副船長のベン・ベックマンさん。

仕方ないので一言断りを入れ、シャンクスさんの手を取り触れている部分だけを同化させ、体組織と自我の一部を同調させ健康時のイメージを形成し能力の解除と共に体調を戻す。

おっ?!、と健やかな笑顔で立ち上がり伸びをするシャンクスさんは正に健康体そのものだ。

「…お、お頭?」

その時、宴会はとうの前に終えているにも関わらず骨付き肉を食べていたラツキー・ルウさんがなんと骨付き肉を地面に落とした。

その衝撃的な光景に既に起きていた幹部たちも驚き、次いでシャンクスさんを見やる。

「「「「腕が生えてる?!!!!!!!」」」」

当人のシャンクスさん^{???}も幹部たちと共に驚いている。いや、実は私も驚いている。

「…ああ、ごめんなさい。いつもの癖で健康体をイメージしたら腕まで復元しちゃったみたいですね。どうしましょう?」

普段、怪我をした人を治す要領でつい五体満足の健康体をイメージしてしまったようだ。13年前失ったはずの左腕が急に生えているのだから驚きもするだろう。人体の神秘だ。

「…まあ、いいか。」

シャンクスさんは一度驚き冷静に判断した結果、問題にしないことを選択したようだ。幹部たちも本人が良いなら、とあつさり受け流す。

「じゃ、留守は頼んだぞ。」

と、シャンクスさんは幹部たちに向かって右手を軽く挙げ、私の肩

に左手を置く。昨夜、能力で移動出来ることも話し目的地も聞いていたので無言のまま領き能力で移動する。

「移動^{ムーブ}」 シャボンディ諸島。」

※ ※ ※

ここはシャボンディ諸島。諸島と言っても島ではなくヤルキマン・マングローブという巨大な樹木が79本寄り集まっている場所なのだ。その樹の根の部分に町や施設を作り人々が住み、航海者が集うようになったことで巨大な町として機能している。

79本それぞれに1番GR^{グロップ}〜79番GR^{グロップ}という名称が付いており、私たちが今居るのは諸島の中央辺りに位置する13番GR^{グロップ}のとある建物の前だ。

『シャキー、S ぼったくりBAR』という看板が大きく掲げられているがこれで客は寄って来るのだろうかと心配になってしまう。

「客なんてどうでもいいんだ。さあ、入るぞ。」

そう言つてシャンクスさんは店の扉を開ける。昨夜あれだけ飲んで今度はこちらで飲む気なのかとも思ったが、何やら少しだけ緊張しているようにも見える。なので私は大人しく従い付いて店に入る。

「あら、シャンクスちゃんじゃない。十年振りくらいかしら？」

「お久しぶりです、シャツキーさん。」

店内のカウンターに座り煙草を吸っている女性と知り合いのようでシャンクスさんは挨拶を交わす。しかし、見たところシャンクスさんよりも若く見える女性だが、四皇をちゃん付けで呼ぶとは恐れ多い。

「レイリーさんに会わせたい娘がいて連れて来たんだが。」

「あら…後ろの娘ね？ コーヒー飲む？ ジュースの方がいいかしら？」

「あ、はじめまして。ロロノア・リイナです。ええと、コーヒーをいただきます。」

その後コーヒーを入れてもらい、シャツキーさんは店の奥へ入って行った。

シャンクスさんは軽く息を吐き、未だ緊張した面持ちでコーヒーを口にしてている。四皇 赤髪のシャンクスがこうも静かに強張っているなどと誰かに言っても信じてはもらえないだろう。

そして、先程シャンクスさんが言っていた『レイリー』という名はどこかで聞いたことがある名なのだが…

しばらくしてシャッキーさんと老人が共に店の奥から現れた。

「久しいな、シャンクス。ん？その左腕は自然に生えてきたか？そちらの娘さんは元海軍大佐の『偶像^{アイドル} リイナ』で間違いないかな？」

「お久しぶりです、レイリーさん。流星に耳が早い。そのリイナで間違いないですよ。この左腕はリイナ有能力で生えたんですよ。」

白髪で髭を生やしたお爺さんにも異名で呼ばれるのはとても恥ずかしい。

しかし、それどころではないのだと気付く。今日の前に居る老人はもはや伝説となっている『海賊王の右腕』『冥王』『シルバーズ・レイリー』。

「は、はじめまして！ろろにおあ…ロロノア・リイナと申します。よろしく願います！」

さすがに伝説を目の前にして緊張しない訳が無い。シャンクスさんが強張るのも理解出来てしまう。自分でもしどろもどろになり言葉が上手く紡げていない程動揺しているのが分かる。噛んでしまい恥ずかしくなる。

「そんなに固くならなくていい。私はどうに引退している身、ここではコーティング屋のレイさんで通っている。」

「…分かりました、レイさん。」

気さくに笑顔で語りかけるレイさんに僅かながら微笑み返す。引退している身と言いながらもこの人の纏う雰囲気、威圧感というのは凄まじく感じ取れる。全盛期の、それこそゴールド・ロジャーと共に海を駆けていた時はどれ程のモノだったのか想像も出来ない。

「レイリーさん、コイツに覇気のイロハを師事してやってほしいんだがどうだろうか？俺の覇気を耐えたくらいだから見込みはあると思う。」

「ほう…いいだろう。若者の、特に若い娘なら大歓迎だ。」

シャンクスさんの進言を快く笑顔で受けてくれたレイさんだが、何やら邪な言葉も聞こえた気がする。気のせいだということにしておきたい。

「昨夜、シャンクスさんから覇気の内容を教えて頂いたばかりの初心者ですがよろしくお願いします。」

私は教えを乞う側なので深く頭を下げる。どれだけ時間がかかるものか分からないが覇気の習得を優先しないとゾロの下へは行けないのだ。力無いまま行けば再び転生者を名乗る者が私の排除に赴くだろう。そうなれば麦わら一味に迷惑を掛けてしまうはずだからだ。

「では、詳しい説明をする前にいくつか聞いていいかな？」

先程とは一転して気を張った真面目な面持ちのレイさんに対し、私も座を正し肯定の意で頷く。

「まず、悪魔の実際の能力を教えてくださいか？覇気と能力の相性もあるからね。それを踏まえて覇気を教えよう。」

それと、レイナくんの出自を知りたい。キミからは珍しいあまり感じたことの無い気がする。

最後に、きみは何の為に力を望む？」

能力は差し当たっての問題は無いだろう。包み隠さず私の能力を話すなんて初めてなので上手く伝えられるか不安だ。

出自、というより転生したという話は荒唐無稽過ぎて真実味が無い。二年より前の記憶が無い事を正直に告げることになろう。

私が強くなりたいたい理由など既に決まっている。私の我がままを押し通す為に力が必要なのだ。

※ ※ ※ ※ ※

時間は掛かったが能力の説明と出自、目的を話し終えてレイさんはフム、と顎に手を添え考え込んでいる。

「…キミの能力は万物と同化する事の出来る能力か。その過程で境界線进行操作すると。」

「はい。大気と同化、同調し瞬時に目的の人、場所まで移動出来ます。扉の境界線を操り別の場所の扉と同調する応用もありますが、大気と同化した方が制限がありません。」

同化、同調して、能力を解除する際に私と同化した人や物の境界線を操り元に戻す事も変化させる事も可能です。ただし、私がイメージ出来ないものには変化出来ません。

後は指定区域と同化し、大気化した状態で多くの人と同調することで私の言葉通りに操ることも出来ます。覇気使いには効かないようですが。

最後に、指定した人や物の境界線を隔離し、別の世界軸のようなものを作り出せます。これは誰にも気付かれずに隠密行動する時や、戦闘時に一帯への被害を出さずに済むので便利です。」

能力の補足として私に出来る事を一通り告げるとレイさんは頭を抑えて黙り込んでしまった。

因みに、シャンクスさんはシャッキーさんを連れて買い出しに出ている。能力や私のプライバシーを考えて席を外してくれたのだ。シャンクスさんは見た目や行動によらず紳士的な事も出来る人だったようだ。

「…レイナくん、君の能力で意識の一部だけを周囲と同調する事は出来るか？」

「?…やってみます。」

身体の境界線を保ったまま、意識は常に私と周囲に保ちつつ同調。以外と難しいのかもしれない。

いや、任務中に身体は意識して動いている時でも周囲の警戒は怠らない状態。今まで何度もあったはずだ。意識してやったことは無いが少し広い範囲で意識すれば…

建物全体、建物の外、周囲に人は居ない。店内の配置や建物全体の装飾や周囲の様子が視覚イメージとして感じ取れる。

そして、目の前に座るレイさんが右手に持った棒を私に振り下ろすのが視えた。私は瞬間的に腰に差す刀の鞘で受け止める。が、一拍遅れてからレイさんの振り下ろした棒が鞘に当たり小気味よいコンと

いう音が鳴る。

「それが見聞色の覇気だ。先読みまで出来たじゃないか。キミの能力と覇気は相性が良い。むしろ、良過ぎるくらいだ。なぜ今まで覇気が使えなかったのか疑問になるくらいいな。」

自身でも信じられないが、覇気を知らなかったのだから能力の扱う方向を定めることで覇気に転用させるなど思い付く訳が無い。というのは言い訳だ。能力の研磨、日々の鍛錬などを怠り、能力を過信してその先を見出せなかった私の落ち度だ。

「さっきのが見聞色の覇気：常に展開されるには鍛錬が必要ですね。ということ、武装色の覇気は…」

まずは右手を覆う手甲をイメージする。そして、体内に散漫する気を右手に集めるイメージ。皮膚表面をイメージした手甲と同調させる。イメージばかりが拡散しない様に皮膚表面の境界線を操作し押し留める。

自身の意思を鎧の様に纏うことで成る武装色の覇気。私の右手は黒く金属のような鈍い光沢を放っている。

「…出来た！」

「大したもんだ。能力の力技でもあるが余りある天性の素質もあるんだろう。こうも教え甲斐の無い者は今まで逢った事が無い。」

あの冥王に褒められるとは嬉しい限りだが、ふと気を抜いた瞬間に武装色の覇気は解けてしまった。これも維持させるには鍛錬が必要だと考える。

「本来なら素質が有ったとしても一年ほどは修業するんだが。：若しくは、記憶を失う前に習得していたかだな。ともあれ、基礎的なものはそれで終わりだ。それと霸王色の覇気は自身のイメージでやってみると良い。こればかりは素質だけではなくある程度以上の修業も必要になるはずだ。」

記憶を失う前という言葉に違和感が浮上するが少し後回しにする。殺気に似た威圧感、王としての威厳、本能的に他者を屈伏させる程の意思の力。

目を閉じ、自身の意識の境界線を操作しその感情を引きずり上げ

る。鏡の様な水面に一滴の雫を落とした時の放射状に広がる波紋に指向性を持たせるイメージ。意思の力を留め身体に纏い、そして放つ。

イメージでは出来るが実際に目に見えるものではないのでよくわからない。レイさんに聞いてみようと思っていると、呆然とした顔で私を見ているレイさんが居た。もしやと思いきる恐る恐る聞いてみる。

「…もしかして、出てました?」

「…出とった。正直、驚いた。」

レイさんの表情を見るからに手放しで喜べない状態の私をよそに、BARの外から慌ただしい足音を立て扉を荒く開けて入って来たのはシャンクスさんだ。

「レイリーさん!子供相手に大人気ねえぞ!!」

「いや、私じゃない。」

「はあ?!じゃあ、さっきの覇気は…」

「…レイナくんだ。」

今度はシャンクスさんが呆然と目を見開き口を開けて私を見る。遅れて店に駆け寄るシャツキーさんはレイさんとシャンクスさんを見て困惑している。

「シャンクス、私がレイナくんに教えることはもう無いようだ。」

「…マジか?」

「ああ、マジだ。レイナくん、これで師事を終えるが修業は怠らないようにな。」

「あつ、はい!ありがとう御座いました!」

ほんの数刻だけであったが教えて頂いた礼を言い頭を下げる。顔を上げレイさんと顔を合わせるとなにやら浮かない表情で私を見ている。

「…先程のレイナくんの覇気、私は若い頃に感じたことがある。口ジャーンと出会う前だから50余年も前か。少し老人の昔話をいいかな?」

懐かしむように、しかし苦しむようにレイさんは窓の外を眺めながら話を始めた。

「私がまだ海へ出たばかりの頃『漂流者』と名乗る男と出会った。

その男は単に私に会いに来ただけだと言い、私にこの世界では無い異世界の話を沢山話した。

空を飛ぶ鉄の船、映像と音声を届ける小型の通信機器、ボタンを押すと食事が出てくる箱などとても信じられない空想の話に心が躍ったものだ。

二日程共に行動して別れたのだが、去り際に霸王色の覇気を見せていった。後におまえが必要とする力だと言っていたが当時は意味も分からず心底恐怖したものだ。

ロジャーと出会い航海を続ける過程で私は霸王色の覇気に目覚め、あの男の言葉の意味を知ったよ。

あれ以来、その男と会うことは無かったが、あの覇気は今でもよく憶えている。どれだけの覇気使いと相見えようともあれほど毛並みの異なる覇気とは出会えなかった。

先程のレイナくんの覇気はその男の覇気に通じるものがある。きみは『漂流者』という男と関係があるのかもしれないな。」

「漂流者という男は知りませんが、もしかすると記憶の無い二年より前に関係があるのかもしれないですね。」

レイさんの言う漂流者とは確実に転生者だろう。この世界では無い異世界の話をしていることからわかる。レイさんに接触した理由は定かでは無いが何かしらの理由があるはず。

50余年も前から存在している転生者。そして、その転生者たちによる組織が存在している。ロードという男は麦わら海賊団が原作通りに冒険を進めることを見守る風なことを言っていた。

レイさんが出会った男と私の関係、転生者組織との関係は今はまだ分からないが今後どこかで関わるはずなので一つの事前情報として憶えておこう。

その後、レイさん、シャッキーさんと少し話をしてBARを後にする。別れ際シャッキーさんに抱き締められまたね、と挨拶を交わした。次に訪れる時は麦わら一味を紹介出来るといいな、などと考えながらシャンクスさんと移動する。

赤髪海賊団の滞在する島へシャンクスさんを送り、思っていたよりも早く戻ったことに驚く赤髪一味に挨拶を交わし、来た時に停めておいた小船に乗り込み船を出す。

基本的な事だけとはいえ覇気も使えるようになったので鍛錬を積み自由に扱えるようにならなくてはいけない。

とはいえ、今はとても安堵している。扱えるかどうか分からない力だと念を押されていた覇気を扱えると体感したからだ。

それと同時に一つの懸念が浮かぶ。ロードは私を転生者と言っていたはずなのだ。しかし、それではおかしい。記憶が無い15歳まではこの世界で『誰か』として生きていたはず。『私』として転生したというのならば生まれた瞬間から『私』でなければ転生とは言えない。生まれて15歳まで別の誰かで、それで降が私だと言うのなら『憑依』と言うのではないか。そんな懸念が浮かぶ。

ロードの話に信憑性は無いのだから一蹴すれば良いだけの話なのだ。自身の出自も記憶も無い、分からないというのは実に空虚なのだ。ほんの少しだけ弱気になり自分が何者なのか不安になることが稀にある。

私にはゾロとガンジお爺ちゃんという家族が居てくれるので、それが心を支えてくれている。それでも、やはり不安がなくなった訳ではない。

だから私はすべての記憶を思い出しそのうえで二人と家族でいる為に、私の知らない真実を転生者たちから聞かなければいけない。本当の私を知り、それでもゾロとガンジお爺ちゃんを本当の家族と呼ぶことが今の私の目的だ。

そのための力を得たことは素直に嬉しい。ゾロと共に海賊として冒険することは胸が躍るように楽しいだろう。

その途中で現れるであろう転生者と対峙するのはやはり怖いが目的の為なら努力出来る。

海軍を正式に辞職し、新たに覇気の手に入れ準備は整った。大量の肉や食料、お酒を近くの町で購入し麦わら海賊団の下へ向かう。

「移動^{ムーブ} 麦わら海賊団!!」

8 ・力の扱い方と制限

そこは聖地 マリージョアの世界政府本部 会議室。

光源は照明のみで決して明るいとはいえない部屋に人知れず五老星と呼ばれる最高権力者五人と世界政府全軍総師 コング、そして海軍本部 中将 ドリフトの七人が座して介している。

「なぜロロノア・リイナの脱退を認めたのかと問うておるのだ。」

「あれの力は世界政府で管理すべき力。貴様から進言したことを忘れたわけではあるまい?」

「だからこそお主の管轄化に置き、望む様に昇進させたのだ。申し開きはあるか?」

「左様、我らが信用を裏切る行為。道理の通らぬ言い訳は聞かぬぞ。」
「我々はあれと敵対したくはない。慎重に事を構えねば戦争が起こるぞ。」

五老星は口々に言葉を発し、コングは黙しドリフトの言葉を待つ。

総師 コングとしては、脱退者など放っておけば良いだろうと簡単に言える立場なのだが、上がそれを許そうとはしないので口にはしない。なぜなら、上の五人の心情を知っているからだ。

「そもそも、あの娘の意思を尊重したままでですよ。あの娘は好んで世界を壊しはしないのはご存じでしょう?」

以前から兄を慕い追おうとしていました。それに拍車を掛ける切欠を作ったのは貴方達のはずです。上司ではありませんが、あの娘の心までもを管理するのは無理ですよ。

僕としては、あの娘は自由に伸び伸び育った方が魅力的だと思うのですが。それではダメですか?」

悪びれる様子も無くドリフトは口を開くが五人は咎めることもせず、各々考え込む。コングは天を仰ぎ深く息を吐く。

「アラバスタの件は仕方なからう。あれは世界政府の威信に関わる。しかし、それで反発心を生んでしまったというも事実か。」

「過ぎたことを言っても仕方なからう。今はリイナちゃんを速やかに

保護する方が先じゃ。」

「リイナちゃんは我々の活力じゃ。どこぞの馬の骨にくれてやるものか！ 正当な出自の貴族ですら見合わぬわ！」

「それにまだ幼いリイナちゃんが海に出るのはまだ早い。せめてあと二年は海軍で保護すべきだ！」

「左様、今は我々が管理下に置き愛でるのが好ましい。時期が来たらば見合いくらいは許そう。」

五老星が白熱した討論を開始し、コングとドリフトは蚊帳の外で両極端な反応を示している。

「…おい、ドリフト。なんで火に油を注ぐ？」

「この方が面白いでしょう？ 五老星とリイナくんを会わせた甲斐がありました。」

「面白くないわ！ 後々の処理は俺がするんだ。…こんな事なら会わせるんじゃないわかったわ。」

『偶像 アイドル リイナ』という異名はあながち間違いでも無いようで、実は本人の与り知らぬ所で数多の熱狂的なファンは存在している。

その筆頭に五老星、元帥、そして大将、中將にも孫馬鹿な老人がいるのだ。各々がひた隠しにしているので表立っていないが、それを知るコングはリイナの事を頭痛の種として認識しそれに悩んでいる。

ドリフトは自身の部下、主に若い海兵のリイナ信者を多く知り及んでいるので、上層部の孫馬鹿な言動を愉しげに見ている。

二人の喜憂を余所に五老星の討論はいつまでも収束せず、一旦の結論が出たのは一昼夜過ぎた頃だった。

※ ※ ※ ※ ※

「ルフィは1億ベリー。ゾロは6000万ベリーの懸賞金がかけられたわ。完全にクロコダイルとB・バロックワークスWの一件ね。だけどさ、リイナ！ 何をしたらこんな事になるのかしら!!」

私は赤髪海賊団と別れた後、少し手土産を買い込み麦わら海賊団の下へ訪れたのだが、挨拶もそこそこにナミさんからなぜか正座を要求され甲板に正座している。

「何をと言われても私にはさっぱりです。」

事の発端はナミさんが定期的に購読しているニュースクーに折り込まれた手配書なのだが、タイミングの悪い時に私が訪れたらしい。ナミさんの手には三枚の手配書が握られており一枚はルフィさん、もう一枚はゾロらしい。最後の一枚は予想通り私のものだ。

「あなたの懸賞金5億よ?!クロコダイル6人分!!し・か・も! 『ALIVE ONLY』って初めて見たわよ!!あなたには驚かせられっぱなしよ!!何なのよ!!!」

「あ、あと誰かに666万ベリーの懸賞金が懸かれば総合賞金額がトータルバウンティゾロ目になりますね。せっかくなのでゾロに上乗せしましょう。」

「そうね、ゾロに上乗せしましょう。ゾロ目だけに、って喧しいわっ!!」

ナミさんは軽快なノリツツコミの後、大きなため息をし私に向き直した。

「…残念だけど総合賞金額はあなた含めて7億3900万ベリーよ。」
ナミさんの言葉に疑問が浮かぶ。他の誰か、若しくは数人で7900万ベリーの懸賞金が出ている計算になるからだ。

改めて船員を見回す。ナミさん、ルフィさん、ウソップさん、サンジさん、二足歩行の動物さん、ゾロ、帽子のお姉さん。

「…あれ?何か増えてますね!!」

「…今更かよ!!」

ウソップさんとゾロ、サンジさんの息の合ったツツコミを久しぶりに堪能し、新たに増えた船員さんへと自己紹介をする。

「初めまして、ゾロの妹のリイナといいます。元海兵ですがよろしく願います。」

軽く頭を下げ笑顔で挨拶を交わす。

「私はロビン。アラバスタを出航後に仲間に入れて貰ったの。よろしくね。」

帽子のお姉さんはロビンさん。何やら見た記憶のあるお顔なのが…

「それと、私の懸賞金が7900万ベリーなの。だいぶ前に掛けられた手配書だけど。」

記憶の中で7900万ベリーの手配書を探り、思い浮かぶもの一つだけある。同時に、いくつかある海軍の暗部である『バスターコー』にて消された『オハラ』の事件が記憶を過ぎる。

そして、当時8才にして世界政府に危険視されたオハラ唯一の生き残り。

『オハラの悪魔』ニコ・ロビン

その当人が目の前にいる。

「…元海兵の私を恨みますか？」

「…いいえ。あなたはあれには関係無いでしょ？ だったらそれを恨むなんて筋違いじゃない。」

そう言っただけで微笑み右手を差し出すロビンさんはどこか悲しそうだったが、それ以上聞くことは出来ずこちらも右手を差し出し握手を交わした。

「…そう言っただけで頂けると助かります。」

そしてウソツプさんの後ろに隠れる動物さんの方を向く。挨拶をしたいのだが警戒されているようだ。警戒の仕方は間違っているようだが…

「隠れるなら身体が逆だと思っただけだな…。ねえ、私ゾロの妹のリイナっていうの。よろしくね。」

腰を落とし視線を同じ高さに合わせて話掛ける。近くで見るとなかなかカワイイ顔立ちとフカフカな体毛をしているのが分かる。

「お、おれはチョッパ…。おれが怖くないのか？ 喋るトナカイだぞ。」

何やら怯えている様に見えるが、そのオドオドした感じが加護欲をそそる。チョッパくんはおそらくトナカイなのに二足歩行したり人語を話したりで迫害を受けた事があるのだろうと推測出来る。

「…じゃあ、はい！ お近付きの証にどうぞ。」

私は右手をクルリと回し手品師の様に棒付きキャンデーを取り出してチョッパークんに差し出すと目をパチクリさせる。

「私は歩いたり話せるトナカイってカッコイイと思うけどな。だって、他のトナカイが出来ない事出来るんだよ？世界に一人？だけの存在ってカッコイイよ。」

「…よ、止せよ！そんなの何の自慢にもならねえよ！ちよつと黙ってくれよコノヤロー!!」

そう言いながら照れた顔で小躍りしながらキャンデーを舐めるチョッパークんはカワイイ。今度モフモフさせて貰おうと静かに決意する。

ロビンさん、チョッパークんと紹介も済ませ本命の話相手に向き直る。

「…ルフィさん、単刀直入にお願いします。私を麦わら海賊団に入れて下さいー!」

「おうー!いいぞっ!!」

即答だ。

「まあ、よろしくな。しかし、兄妹で同じ船たあ恥ずかしいな。」

「もう仲間だつてこの間言ったじゃない。しれつと紛れときゃいいのよ。」

「よろしくな、リイナちゃん。レディーは大歓迎さ。早速何か作ろうか?」

「海賊としては俺の方が先輩だからな!けど、分からない事はナミとロビンに聞けよ。」

ゾロ、ナミさん、サンジさん、ウソップさんからの歓迎の言葉を受けた嬉しさでつい頬が緩む。その感情のまま皆に向き直り今後の航海に思いを馳せ胸を高鳴らせた。

「みなさんと共に航海出来るのが嬉しいです!よろしくお願いします!!」

各々との再会の挨拶も程ほどに途中で買い込んで来た手土産を渡していく。

サンジさんには肉や魚介類、野菜や果物を、ナミさんには私が海軍

で貰ったお給金の一部を資金の為に渡した。

ウソップさんへはスナイパーゴーグルや指貫などの消耗品、ゾロへは予備に特別製の刀を数本とトレーニング用の鉄塊。ロビンさんとチョップくんには欲しいものがある時に出すと言っておいた。

最後にルフィさんへ骨付き肉を渡したのだが、あつと言う間に平らげてしまい苦笑してしまった。

再開ムードも良い頃合いになり、次の目的地を聞きそびれていたことに思い至ったのでナミさんの下へ向かおうとしたところで呼び止められた。

ルフィさんが皆に聞こえる様に大きな声で私に問う。

「なあ、リイナ！俺が兄貴だよなっ？皆はリイナが姉貴だっつうんだ。」

ルフィさんの言っている事の意味がわからず首を傾げる。海賊団の船長という意味合いで言えばルフィさんが兄貴分だろう。

いくら懸賞金の額が大きかろうと船長を取って変わる気は毛頭無い。なので率直な意見を言う事にした。

「そりゃ、ルフィさんがアニキですよ。私に上なんて務まりません。」言うや否やルフィさんはニシシと満足そうに笑い、ナミさんは色めき立ち、ゾロ含む男性陣は顔色を悪い方の色に変えている。

ロビンさんとチョップパーくんは冷静にこちらを見ている。いや、チョップパーくんは訳が分かっているだけのようなのだ。

「リイナ、兄としておまえの意思を尊重してやりてえ。だが、まだ早いというかなんつーか…」

まさかのゾロから海賊はまだ早い発言に私は動揺する。先程は歓迎してくれていた筈なのにいきなりの手の平返しなどあんまりだ。

「まだ早いってなんで？ルフィさんも17歳だよ！私だってやれるよ！！」

「なっ?!おまえ、女がやるなんてはしたない言葉使うな!」

今度は女だからという理由で海賊になることを反対するのか？

それ程私と一緒に居るのが嫌なのだろうかと考えてしまいついぞ目頭が熱くなる。

私はゾロとああでもないこうでもない口喧嘩が白熱します。自分でも何言っているのか分からない様な言葉の応酬を晒しているが気にする余裕は無い。

「あの、ちよつといいかしら？」

私とゾロの今にも掴み掛かりそうな雰囲気にもロビンさんが割って入る。

「リーナさんと剣士さんで話が噛み合っていないと思うのだけど…」

話が噛み合っていないとはどういう意味だろう。そもそもルフィさんの質問の意味が分からなかった事もある。

「いや、まずですね。ルフィさんは船長なんだから私にとっては兄貴分な訳で。そしたら、ゾロには年の事や女だからと海賊になるのを急に反対されるしで…」

「…ああ、そういうことか。済まねえ！おまえが海賊になるのを反対するつもりは無え。兄貴として歓迎するさ。」

ゾロは顔を茹で蝸の様にして顔を背ける。しかし、ゾロは何の話と勘違いしていたのだろうか。

「?…一体何を勘違いしてるの?どういう事なの?」

私に背を向け頑なに口を開こうとしないゾロ。そういう態度では逆に聞きたくなるのが人の性だろう。

私がゾロの正面に回り込むとゾロは反転して背を向ける。再び私はゾロの正面へと回り込み、再度ゾロは反転し私に背を向ける。そんな事を数回繰り返したところでナミさんが折れた。

「ああ、もう！ルフィの聞き方が悪いのよ！ゾロ？私から説明するわよ！良いわね？」

ゾロは渋い表情をしつつ力無く頷いた。

各々事情を知る者は一様に頷き、知らない私とロビンさんだけが静かに次の言葉を待つ。

「まず、アラバスタ王国のナノハナ沿岸でルフィのお兄さん、エースさんと会ったの。リーナが手引きしてくれたお陰で楽だったわ。」

なるほど。あの時は直接確認出来なかったが、ちゃんとポートガスと再会出来ていたようで良かった。だが、それと何の関係があるのだ

ろう。

ナミさんは蛇足だけど、と継ぎ足しロビンさんを向く。

「ロビンには悪いけど、私たちを追って来たB・Wの船を拿捕したのがリイナたちの部隊ってわけ。それとリイナ、後腐れの無いように先に言っておくわ。ロビンは元B・Wの副社長でミスオールサンデーよ。クロコダイルに利用されてただけだからもう恨みっこ無しで良いわよね？」

アラバスタにて起きた事は報告を受けており、たしぎさんが惨敗した相手がミスオールサンデーだと聞き及んでいる。

「ええ、今更です。眼鏡を掛けた女性の剣士、たしぎさんという方ですが、単にロビンさんが強くて彼女が弱かっただけです。でも、そのお陰で彼女はもつと強くなれます。なのでロビンさんには感謝していますよ。」

酷い言い方かもしれないがアラバスタにて海軍が惨敗した事は良い方へ転ぶはずだ。ヒナさん、モクモクさん、たしぎさんは特に強さを求め、より鍛えるだろう。

「裏で海軍が動いて国王軍、反乱軍のB・W社員を捕縛してくれたから内乱が起きなかったわけね。今は素直に感謝するわ。」

私の本心としては、たしぎさんへの暴行を見過ごすことは少し癪なのだが、今それを言ったところで意味は無い。おそらくロビンさんも似たようなものだと感じ取れる。だが、共に表面上は感謝で取り繕いナミさんへ話の続きを促す。

「それで話を戻すわね。エースさんと再会した時に白ひげ海賊団に誘われたんだけどそれはルフィが断ったの。」

問題はその後と！リイナを嫁に欲しいからゾロからも許可が欲しいって。あわよくば、ゾロもリイナと一緒に白ひげ海賊団に来ないかって。

ゾロは本人の意思を尊重してやりたいからリイナ本人に聞けって返してその話は一旦終わったのね。

まあ、私たちとしてはエースさんとリイナの間で恋仲の話があつての事だろうから温かく見守ろうって話になったんだけど、もしリイナ

が嫁いだらルフィ、エースさんとゾロ、リイナは義兄妹になるんだなつて。

あ、ゾロは妹が取られたのが気に入らなくて不貞寝してたけど。

そんなこんなで、年齢的にエースさんが長兄、ゾロが次兄でしょ？ルフィとリイナは同じ年だからどっちが末っ子なのかって話で盛り上がったの。

それで私たちはリイナが姉で満場一致。ルフィは自分が兄だつて譲らなくて。それが事の顛末よ。」

「…へえ。何だかとても意味が分からないです。」

本当に意味が分からない。会ったのは二度だけ、話をしたのは時間にして一刻にも満たない程である。そういえば最後に宿で別れる時、また海賊に誘うと言っていたのを思い出す。あれは次会った時に求婚するという意味で言ったのだろうか。そもそも本人の了承も無く、勝手に兄に身請け話をするのはどうだろうか。そんな話をしたら私とポートガスが既に恋仲の様な誤解を受けて当然だろう。沸々とあの半裸男に怒りが込み上げる。

「…はあ、私とポートガスは何もありません。単にルフィさんと会えるように手引きしただけで碌に話もしてないんですから、そう成りようも無いです！」

これ以上その話はするな、という意味を込めて語尾を強める。ここで覚えたばかりの覇気を使い威圧してもいいのだがこんな事で無駄使いする気は無いので抑える。

ルフィさんはつまんねえ、と呟きつまらなさそうにしているが船首の方に視線を向け目を輝かせ大きく声を上げた。

「おおお!!なんかいい感じの町が見えるぞ!急げメリー!!」

どうやら次の島が見えたらしく皆一様に先の島を向き声を張り上げる。良いタイミングで話題を切り替えることが出来そうだ。

一応、島へ到着する前に私は現状確認を行った。一旦の目的地はジャヤだそうだ。アラバスタを出立したのならば順当であろう。しかし、ジャヤへは情報収集の為に寄るだけだと言う。何の情報かと聞く『空島』へ行く為だとロビンさんが答える。

確かに空島は存在する。海軍の一部の者ならば知っている事実だ。だが、空島へは偉大なる航路グランドラインのずいぶん先にある山から登ると聞いている。もちろん私は行った事は無い。

記録指針ログポースが空を指しているのだから次は空島へ行く、と船長が決めたのなら従うのが海賊団らしい。私は野暮な事は言わず追従したいところだが、ココで得られる情報など無いはずだ。かといってここから空島へは行けませんよ、なんて言っただけで夢を壊すことなど出来まい。助言で留めた程度のことだけは許されるはずだ。

「ココで聞き込みをしても何も出てこないですよ？次のモックタウンは海賊くらいしか居ない町ですから。上陸するなら買い出しくらいですかね。」

私の知っている事をすべて話しては皆さんの楽しみを奪う事はないよう気を付ける。

「モックタウンは政府の介入していない町です。言わば海賊が集う町、略奪や殺人なんて日常茶飯事で危険な所です。なので一つ提案があります。」

ルフィさん、ゾロ、私の三人。最近手配書が出回った三人は比較的に入りやすい。つまり、私たちを狙い寄ってくる者か私たちを見て逃げる者かで騒ぎになり易いということだ。

だから、あえて三人で行動し寄ってくる者は撃退しようと提案する。

単純に私が覇気を試したいという思惑と、ルフィさんとゾロの実力を見たいというのが本音である。

建前として、三人が騒ぎ立てている間にナミさんたちはゆっくり買い出しを済ませる事が出来ると言い包める。私が手土産に食材を大量に買い込んでいたので、買い出しの必要が無いサンジさんが船の留守を申し出てくれた。

買い出し組はロビンさんナミさんで行くらしいので、ウソップさんとチョップパーくんはサンジさんと船に残るそうだ。港に船を着け上陸し、早速二手に別れて町へ繰り出す。楽しい愉しい時間を始めよう。

「ゾロ？ルフィさん？少し身体を動かしたくないですか？」

「やだ！俺は腹減った!!」

「…俺あ構わねえが。何する気だ？」

「いえ、二人の実力を見たいというのと、私の実力を見て欲しい感じかな。もしかして私に負けるのが怖いのですか？」

昔ゾロの仕事を見て以来なのでどれ程強くなったのか知りたい。私はどれ程強くなれたのかも知りたい。

単に剣の腕前だけで言えばゾロに軍配が上がるだろう。だが、海軍の訓練で得た身体の動かし方や特殊な戦闘法を扱えば悪魔の実の能力を使わずともゾロに勝てるかと自負している。

ルフィさんに至ってはゴム人間だということは知っているものの、どんな戦い方なのか知らないのを見てみたいのだ。

「わかった！でも終わったらメシ食いに行くぞっ！」

「…兄貴の威厳を見せなきゃな。」

「ふふ。では、行きますよ♪」

私は周囲10m程の円をイメージし霸王色の覇気を放出する。

レイさんの時は思い切り出すイメージだったので今回は範囲指定と敵味方の判別調整を試みる。

意識を集中し、自身を中心に半径5mの波紋を思い描く。隣に居るゾロとルフィさんを避け、放射状に拡散するイメージ。

すると周囲を行き交う人達が次々と泡を吹いて倒れていく。二度目でこうも上手くいくとは自分でも驚いてしまう。

「皆さんーちゅーもく!!賞金首がここに居ますよー!!」

私たちの周囲で倒れ伏した人達が僅かに注目を誘い、私の大声で更に注目を浴びる。

「…おまえ何した？てか、やり方がルフィより質悪りいぞー！」

「さっきのどうやるんだ？なんかすげえビリビリしたぞ。」

「ふふ。秘密ですよ♪さて、周りが逃げ惑う中で何人かこっちに来ますよ？準備は良いですか？」

「おうー！」

私とルフィさんの顔を見て億超えの賞金首だと気付いた人間が、そ

れを触れ回りながら逃げ惑っているお陰で腕に自信のある者だけがこちらへ向かって来る。

次いで私は見聞色の覇気で周囲の気配を察知する。能力を使わずとも広範囲で展開出来るようだ。レイさんに教示して貰ってから常に意識する様に心掛けていたので少し扱い成れてきた。こちらも指向性を維持することで知りたいたい方向だけを読み取れる。

武装色の覇気も衣服と外套で隠れている箇所を繰り返し反復練習している。短時間ならば問題なく扱えそう。

程なくして私たちの前に現れた数組の海賊団らしき人達。顔を見て分かるのはベラミー海賊団とロシオ海賊団くらいである。無名か記憶にも残らない小物である。

「ゾロ、ルフィさん。あつちのロン毛が3800万、額傷が5500万、こつちのドレッドバンダナが4200万です。後は手配書が出てても小物か無名ですね。周りの雑魚は私がやりますから後はお二人でどうぞ?」

「おう!任せろ!」

「いや、ルフィがやれ。俺とリイナで雑魚狩りの競争だ。」

「…じゃあ、お兄ちゃんの良いトコ見せてね?」

※ ※ ※

結論から言うと実力を見るまでも無くルフィさんの圧勝。足をバネの様に変化させて高速で飛び掛るベラミーを避け様に一撃で圧倒した。残りのロシオが激昂して襲い掛かるも瞬時にロン毛を盾にして、共に殴り飛ばしてあっさり終了した。

私とゾロは逃げる取り巻きには手を出さず、向かってくる者のみを薙ぎ払い、斬り伏せあつという間に立っている者が居なくなった。

「…ねえ、ゾロ。私十八人しか相手に出来なかった。」

「俺あ十六人だ。負けたチクショー!」

「なあ、終わったから飯行くぞ!」

偉大なる航路の前半の海ではあるがこうも実力差が激しいとは思わなかった。

海兵の時、私自身が戦闘して捕縛した海賊にも1億や2億クラスは

いたが、体感としてはルフィさんは2億クラスでいけそうだと思う。ゾロは以前よりも力みの抜けた自然体で刀を振っているように見えて、力と技が研ぎ澄まされているのがわかった。

辺りは静まり返り、これ以上仕掛けてくる者は居なさそうだ。憶測としては懸賞金5500万ベリーのベラミーがこの町の筆頭だったのだろう。それが一撃で沈むようなより強き者が現れたのならば、他の者はただ過ぎ去るのを待つしかないのだろう。

力試しのつもりが思った以上に肩透かしで終えてしまったので、お詫びに近くの酒場でご飯をご馳走しようと移動することにした。

騒ぎを起こした張本人が言うのは間違っていると思うが、お客さんが誰も居ない酒場は寂しいと感じる。私たち三人の貸切状態なのでからお店としては致命的だろう。

ルフィさんは色んなものを注文してはうまい、まずいと一人で大騒ぎしていて、戦闘の時と表情や印象がガラリと変わる。このメリハリも魅力なのだと思う。いわゆる『ギャップ萌え』というやつなのだろう。

私はコーヒーを、ゾロはビールを飲みながらルフィさんに呆れつつ話を進める。

「いつの間にか剣士として俺より上たあ、兄貴の立場が無えな。世界一の剣豪の座はまだまだ遠いと突き付けられる。」

「剣の腕は全然ゾロが上だよ。でも身体捌きは海軍の時にうんと鍛えたからそのおかげでゾロより動けるよ。」

先の戦闘では剣技の一つも出さずに終えた程なのだが、それでも互いの力を計ることくらいは出来るのだ。予想していたように剣ではゾロの方が数段格上だと実感出来た。

斬るといふ動作には実力が如実に現れる。

刃物は引く事で刃と接した部分を断裂するのだが、その所作は刀へ伝える力の加減、刀を引く速さ、刀の振り幅や引き幅などの複雑な条件を斬る対象の状態に合わせて調整、加減しなければならぬ。

私は力が無いので早さで押し切る使い方なのだが、ゾロは力の加減に加え所作に磨きが掛かっている。これだけで私は負けを認めざる

を得ないのだ。

初めてゾロの剣技を見たあの日から、私が網膜から消す事の出来ないゾロの背中には常に成長し、私の先を歩み続けている事実が誇らしくも悔しくもある。自然と緩む頬の状況から察するに大よそが嬉しいという感情なのだ と理解する。

「やつぱりお兄ちゃんは強くて頼りになって妹は嬉しいよ♪」

ゾロに身体を寄せ、肩に頭を置き悪戯っぽく笑いかけるとうるせえ、と照れた笑顔で返すのでそれがまた嬉しくて堪らない。血の繋がりは無い兄妹で独自の甘い空間を作り上げている最中だというのに、それを邪魔する輩を私の覇気が察知する。

数拍置いてドタバタとした足音と酒場の扉を荒々しく開く音が店内に響く。

「ゼハハハハ！邪魔するぜ、麦わらあ!!」

現れたのは汚い髭を生やした太い身体とは不釣り合いな短い手足のオジサンだ。シャツの前を開き醜い体毛を晒し恥ずかしくないのだろうか。

「こっちは久々の兄との触れ合いを満喫しているというのに邪魔されて機嫌が悪くなりそうなんですけど、これで謝罪すらなければ本気で怒りますよ？オジサン？」

「ゼハハハハハ！オメエが5億かあ？まだガキじゃねえか。まだ世界政府を敵に回す時じゃあねえ！今は1億の方の首貰っていくぜ!!」

このオジサンは人の話を聞いていないようだ。汚らしい見た目が不快、下品な笑い声も不快で、纏う雰囲気すらも不快だ。もう視界に入れたくないと思えるほど存在が不快だ。

「…これが最後です。せめて名前くらい名乗らせてあげますよ？オジサン？」

「おう？生意気なガキだな！オメエに用は無え！そつちのとどっか行ってる!!」

このオジサンは人の話を聞かない事に加え礼儀すらも持ち合わせていないようだ。こういう人を何と言うのだったか。唯我独尊、傍若無人、厚顔無恥、傲岸不遜…切りが無い。

「ルフィさん、この喧嘩私に買わせて下さい。 隔絶^{アイツレション}」

私たち三人とオジサンの計四人の境界を世界と切り離し、今の世界へは干渉することの出来ない別の世界を造り出す。ロードとの一戦で得た教訓を元に私は同化せずに実体のまま本来の世界から隔絶する。これで私が任意で能力を解除する、若しくは負ける以外には元の世界へは戻れないはずだ。

まず先手で覇王色の覇気をオジサンに向かって全力で放つ。格下相手ならばこれで無力化出来るはず。

「私とゾロの邪魔をしたことを謝罪しろと言いましたよね？尚且つ私たちを邪魔だと言い放ったことは万死に値します。アナタの存在自体が不快なのでココで楽にしてあげましょう。」

「う…ぐう、これは…白ひげの、親父と…」

なんとか意識はあるようだ。ルフィさんの首を取りに来る気概はあるようだが、私が共に居たことが誤算だっただろう。

私は強者の態度を取り繕ってはいるが、実は内心は心臓が異常な程早く脈打っている。

過信や慢心をしてはいないつもりだ。相手よりも格上の態度を保ちつつ、気持ちは冷静に何が起こつても対処出来る様に心掛ける。

それでも覇気使いとの戦いとなれば能力の優劣は簡単に覆ることに恐怖が湧き上がるのだ。

「覇気を覚えたてのガキになんてザマでしょうね？ルフィさんは私たちの船長ですから。船長の首が欲しいなら私を倒すしか無いですよ？」

「…クソガキッ!!…ク…ソオ……」

このオジサンも覇気使いかもしれないと仮定して全力を出さなければ、気を抜いた瞬間に負けるのは私だ。

「そうです。残念なことにはアナタはそのクソガキに手も足も出さず敗北するんですよ。」

私は左手だけに武装色の覇気を纏い、能力で大気と同化させる。すると、左手は黒い霧の様になり自在に動く。

武装色の黒い鉄の色を帯びた大気はオジサンを包み込み捕らえる。

これならば自然系ロギアであっても抑え込む事が出来るだろう。ついでにオジサンと同調し情報を引き出す。

名前と仲間の有無などだけ情報を引き出そうと思ったが、以外なほど有益情報を引き出せた。だが、それを知ってしまったからには生かしておく訳にはいかない。

「アリシエンション
同化」

なので、オジサンの人としての境界線を強制的に無くして世界を構成する元素へと還元する。

言葉を発する暇も与えず肉体はその場で塵になり世界へと流転し始めた。

私が造りだした異世界の一部へと同化したので、本来の世界へ戻ることも無い。魂という概念があるとすれば、この隔絶された世界で永遠に彷徨う事になるだろう。

オジサンの全てが塵と消えた後にポトツと何かの実が落ちたがオジサンの食べた悪魔の実だとすぐに理解し拾い上げる。

「さあ、終わりました。戻りましょうか？」

二人を振り返り声をかけたが返事も無く顔色の悪いまま私を見詰めている。

「…リイナ、さっきの奴に何した？」

ゾロが恐る恐る口を開くが微妙に声が擦れている。ルフィさんは何度も首を縦に振りゾロの疑問に同意する仕草をしている。

「…まあ、まずは船に戻ってからお話します。」

一先ず話は船に戻ってからと断りを入れ、能力を解除する。

突然目の前から消え、再び現れた私たちに酒場のマスターは腰を抜かして驚いていたが、飲食代をカウンターに置きその場を後にする。

静まり返る町を歩き、船へと戻る途中もゾロは浮かない顔色で私の後を歩く。ルフィさんは私の能力と覇気に興味があるようでソワソワしていた。

船へと戻るとウソツップさんたちが既に出航の準備を整えていたのと言う通りにすぐに船を出す。

急な出航の理由を聞くと、私が合流する前に諍いを起こした海賊が

この島へ戻ってきたらしい。

それと、ナミさんとロビンさんは買い物と空島に関する人物の情報を得てきたそうだ。

なので、再びいざこざが起こる前にモックタウンを離れ、その人物を訪ねようという話になったそうだ。

ナミさんが購入してきたジャヤの地図を広げ、島の東側に付いた×印を指差す。

「島の西にある町がさつきまで居たモックタウン。対岸にある×印がモンブラン・クリケットという人が居る場所よ。今からそこへ向かうわ。…それと、ルフィとゾロが気味悪いくらい大人しいけど何かあったの？」

「えつとですね、私が少しやり過ぎたようでした…」

私の返答に若干気まずい雰囲気になり居たたまれなくなる。

「…折角なので皆さんに私の悪魔の実の能力の説明をしておこうと思います。」

以前会った時は表向きの能力しか説明してなかったので、本来の能力を教えておかなければゾロの様に怯えさせてしまうかもしれない。

※ ※ ※

「と、いう訳で私の本来の能力は同化する能力です。ドウドウの実とでもいいますかね。前例が無いので名前は無いんですが。」

説明を終えるとナミさん、ロビンさん、チョッパーくんが頭を抑えてうなだれていた。

「同化って、境界線って…悪魔の実って言うよりも神様の実じゃない…」

「世界の何処へでも…歴史ポーネグリップの本文…いえ、自分で…」

「おれの…医者ドクトルの立場って…」

ルフィさんは私が手品師ではないことにショックを受けていたが今は別の事を考えているようだ。おそらく能力の説明に理解が追いついていないのだろう。

ゾロ、サンジさん、ウソップさんは顔を青ざめて黙り込んでいる。特に先程オジサンを元素へと分解したという件あたりで青みが増した。それほど普通の人間からすると常識外れた能力だということだ。「あの、各々感じることはあると思いますが、話を続けますね。」

続けて先程のオジサンを左手で捕らえた時に同調して得た情報を話した。

完結にまとめると、マーシャル・D・ティーチという名前らしいのだが、ポートガスが追っていた仲間殺しの犯人がこの人らしい。確かに汚いひげが生えてはいたが、あれで黒ひげと名乗るのは如何せん無理がありそうに感じる。

億超えの賞金首を手土産にクロコダイルが抜けて席の空いている七武海へ加入しようとする目論み、タイミング良く現れたルフィさんを狙ったらしい。七武海へ加入後に白ひげ エドワード・ニューゲートを討ち取り、グラグラの実を奪い取る事が目下の最終目的だった様だが、その為の計画を立てている途中だったらしく詳細なことは分からなかった。

しかし、強固な意志で遂行しようとする長年の計画だったらしく生け捕りにしておくには危険だと判断し私が文字通り消したのだ。もし、生け捕りにしてポートガス、若しくは海軍に引き渡したとしても如何なる手段を用いても生き延びようと足掻いただろう。そうなれば私にとっても今後の大きな障害になるはずだ。

そう説明し終えたとその計画の危険性を理解する数人が更に顔色を悪くし、蒼白から土気色になっていた。

「エースが探してたのあいつか！あ、でもリーナが倒しちゃったな。」
「世界最強といわれる白ひげを倒そうなんてとんでもない野望家ね。」
「俺あそんなヤツに手も足も出させないリーナちゃんに驚いたな。」

ともあれ、事前に防げた事に安堵しつつも他人の命をいとも容易く奪ってしまう事に不安を感じる。以前よりそうだったが、やはり悪魔の実の能力が強大過ぎて気付かない内に命を軽視し、力を過信してしまっている。

ここは一つ腹を括らなければいけない。

「皆さん、前から考えていたことなんですけど、私は能力に頼り過ぎる節があるので今後能力を制限しようと思うんですが…いいですか？」

私の問い掛けに皆がそれぞれ顔を見合わせ強い決意の目で私を見詰めゾロが口を開く。

「おまえが能力を使う必要が無いくらい、俺たちが強くなれば良いだけの話だ。リイナの好きにすりゃいいさ。」

「確かに便利な物に頼り過ぎるのは良くねえな。料理だっておんなじや。」

「おれはどんな怪我や病気でも治せる医者を目指すんだ。リイナの力に頼るだけじゃダメだと思う！」

サンジさんとチョップパーくんが暖かい言葉を投げかけてくれる。

「俺は手先が器用だ！リイナが出来ねえことは俺がやってやる！ドンドン頼れ!!」

「そうよ。どんな便利な力があっても海に居る以上は私の航海術に頼るしかないんだからね。」

「うふふ。戦うだけが海賊じゃないんだから良いんじゃないかしら。苦労するのも経験よ。」

ウソップさんとナミさんは頼り甲斐のあることを言ってくれて、ロビンさんは笑いながら正論を語る。

「ええ…もう手品しねえのか？じゃあ！最後に肉いっぱい出してくれっ!!」

「二二空気読めバカタレツ!!!」

相変わらずのルフィさんに、お決まりの息の合ったツツコミで雰囲気气和らぐ。

「とりあえず、モンブランって人の所へ着く前にポートガスに黒ひげの事を伝えておきましょうか。あ、能力は使わないのではなく制限するだけですから。主に急な移動や物の出し入れ、緊急時には使わせていただきます。」

ルフィさんは手品を封印した訳ではないと知り楽しそうに肉、肉と連呼してナミさんに殴られている。それを見て呆れたり、笑ったりと皆は各々私のことを気にしすぎないようにしてくれている。

ふと、モックタウン到着前の会話が思い浮かび少し気まじく感じているが、一先ずは報告の為だと割り切り、変に拗れた話にならない様に願いながらポートガスを呼び出すことにする。

9 ・海への想い 空への期待

現在私はナミさん、ロビンさんと話をしているのだが、正確にはポートガスから隔離されている状況だ。

自身でもなぜこうなってしまったのか精神的に痛む頭を押さえてしまう。

私は黒ひげの事を伝える為にポートガスを呼んだのだ。呼ぶといつでも能力で無理矢理転移させたので実際は拉致のようなものである。

目の前に呼び寄せたポートガスはストライカーという小型のボートに乗ったまま現われて皆驚いていた。

ポートガス自身も海を航行中だったにも関わらずいきなり船上へ瞬間移動したことにより混乱していた。

一先ず、急に呼び寄せた事を謝罪し、伝えなくてはならないことがあるのだが今は大丈夫か、と問うと問題無いと答える。

所用で海軍支部へ潜入した直後らしく、そこで遂に黒ひげの情報を得たのですぐに黒ひげを追うつもりだと付け加えた。

「ああ…その黒ひげの情報ですが…ええと、その…不要になりました。」

少し言いにくい事で口籠もってしまう。私は黒ひげが遺した悪魔の実を取り出しポートガスへ差し出した。

悪魔の実を受け取り顔を強張らせたポートガスに事の次第を説明する。

黒ひげの腹黒い意思とそれに伴う長年の計画を話し終え、最後にもう一度謝罪する。

「いや、いいんだ。奴の計画を止めてくれて感謝する。…はあ、この『ヤミヤミの実』が目的で白ひげ海賊団に入っていたとはなあ。」

「これでああなたが黒ひげを追う理由も無くなったのですから、早く白ひげの下へ帰って下さいね。こんな前半の海に火拳が居るなんて色々問題になります。」

経緯はどうであれ白ひげ海賊団 二番隊隊長なんて大物が前半の

海を闊歩していることが海軍に知れたら大将が飛んでくる程の事件になる。一応、『火拳のエース』は5億を超える賞金首なのだから。「ああ、わかってるさ。だが、少し話すくらいはいいだろ？アラバスタでは時間がなくてルフィたちともあまり話せなかつたしな。」

それくらいなら構わないと思い、どうぞと半身を開き一歩下がる。私としては話し掛けないで欲しいと意を込めてルフィさんの方へ誘導したのだが、ポートガスは私の手を取りこう語った。

「まずはリイナ、俺と一緒にしてくれねえか？俺ありイナが欲しい。リイナとの子も欲しい。」

その言葉を脳内で反芻し、なんとか意味を理解したところで私の思考は停止し意識が数瞬飛んだ。

「…リイナ？おい、リイナ?!」

ピクリとも動かない私を心配し詰め寄るポートガスだが、私の意識が戻ると視界を埋めるポートガスの顔。

つまり目の前に顔があるのだ。これには反射的に手が出ても仕方が無いだろう。

パアンと、小気味良い音が響くと同時に、私より後方で話を聞いていた他の皆が慌ただしく動く。

ナミさん、ロビンさんで私を引っぱり少し離れたみかんの木の所へ移動している。

「あんたアラバスタでエースさんに何したの？」

「あんな大物どうやって落とされたのかしら？」

アラバスタでの会話を思い出しつつ考えるが全く心当たりが無いのだ。だというのに子どもまで欲するとはサンジさん以上に女好きなのかと心配になる。

「…いえ、本当に軽く自己紹介して、任務の邪魔をしなかったらルフィさんに会えるよう手引きしますよって会話したくらいです。もう何が何だかわかりません。」

その後も二人から問われたことをただ答えるだけで、他に意識が回せないほどに動揺と精神的疲労を認識することしか出来なかった。

※ ※ ※

一方、男性陣ではエースの奇行を諫めるサンジとゾロの怒りを諫めるウソップ、それをただ見守るルフィとチョッパー。

「エースさんよ、まずは順序つてもんがあるだろ？いきなりプロポーズしても混乱するだけだ。まずは愛を育むべきだぜ。」

「ゾロ、落ち着け!!リイナはルフィの兄貴とはそんな関係じゃねえつて言ってる？これは片思いつてやつだ。まだお前の出番じゃねえ。」

「…なあチョッパー。なんでエースは叩かれたんだ？」

「おれもわかんねえ。」

サンジにレディーの愛し方を説かれたエースは時期尚早だと理解を示し、ウソップに兄貴の威厳を説かれたゾロは怒りを抑え心に余裕を保とうと意識する。

ルフィとチョッパーはよく分からないまま話の輪に入り込むも、サンジによるレディーと恋仲になる講座が始まっていたので興味無くただ聞くだけとなっていた。

エースはサンジの講座を受けたことで、まずはリイナに自分の気持ちを伝えようと決意するのだった。

※ ※ ※

幾分かして男性陣に連れられたポートガスが私へ頭を下げた。結論を急ぎ過ぎた、と述べて言葉を続ける。

「俺あちつとばかり事情があつて両親からの愛を知らねえ。」

幸い、ガキの頃にルフィと、もう一人の弟と盃を交わし家族になれた。今は白ひげの親父、白ひげ海賊団つう家族もいる。血の繋がりなんて関係ねえ。愛される喜び、愛する尊さつてのを知ってるつもりだ。

アラバスタでリイナに感じたのは、きつとこいつも俺と似た奴なんだつてことだ。

兄貴の話をするリイナは良い顔をしてたからな。そんなリイナからは…恥ずかしい言葉だが、母親のような、海に抱かれる様な安心と暖かさを感じた。女と話してあんなに鼓動が高鳴ったのは生まれて初めてだった。

それで、リイナと本当の家族になりてえと思ったんだ。リイナの子を愛したいと思えた。

急な話で迷惑を掛けちゃったが、俺の気持ちは知っていて欲しい。」言い終えてからアラバスタの時と変わらない笑顔を私に向けるポートガスだったが、何故この笑顔が気に入らないと感じたのか理解出来た。

誰かに愛して欲しい、誰にも嫌われたくないという誰もが持ち合わせている気持ちが私もポートガスも他者より強いのだ。私は二年より前の記憶が無い事が起因しているが、ポートガスは両親のことが起因しているのだろう。

「そうですね。今は娘として、妹として家族に愛されることに満足していますが、そのうち女として愛されることを望むかもしれません。その時は考えなくもない：ですよ？考えるだけです？あなたの気持ちに応えるかは別の話です。」

周りの皆が生温かい眼差しを向けてくるのでとても恥ずかしい思いをしている。そんな中隣のナミさんが、ゾロはいいの？と耳打ちしてくる。

ゾロは私を妹としてしか見ていない。私はそれを理性で理解しているが、感情として相反する気持ちを抱いている。

血の繋がりは無いが、いくら望もうとも報われはしないだろうと知っているからこそ妹である事を自分に言い聞かせていた。

久しく再会した時は羽目を外してしまったが、その後は妹として体裁を保つようにしている。だからこそロビンさんとチョッパーくんへの自己紹介でも妹として挨拶したのだ。

ナミさんもそこを不思議に思っていたらしいが私の返事で渋々納得してくれた。

「ゾロにとって私は妹ですから。妹でも妻でも家族であることには変わりありません。なので問題無いんです。」

ロードとの一件で命を諦めた瞬間、私が感じたのは家族への感謝だった。だから今は妹である事の焦燥や劣等感よりも、家族で在り続ける事を強く望んでいる私が居ることは確かだ。

難儀なものね、とナミさんは息を吐き皆の意識を自身に向けようとパンパンと手を叩く。

「さあ！もう少して目的地に着くから舵と帆を頼んだわよ！！リイナは未来の旦那さまを見送ってきなさい。」

最後に悪戯を成功させた子供のような顔でニヤリを笑い私の背を押す。ゾロはナミさんの言葉に過剰に反応し反論しようとするが、船の進路調整の為ウソップさんとサンジさんに引き擦られていく。ルフィさんはポルトガスと名残惜しそうに挨拶しているがその表情はとても嬉しそうにしている。

「じゃあ、世話になったな。俺たち白ひげ海賊団は偉大なる航路グランドラインの後半、『新世界』で待つてるぜ！」

「おう！またなエース!!」

ルフィさんと挨拶を済ませたポルトガスが私の前に立ったのでまたいつか、とだけ言って白ひげ海賊団が滞在しているという島の近くへ移送した。

ポルトガスは何か言おうと口を開きかけていたが、私は気恥ずかしくてこれ以上交わす言葉を持たなかったので強制的に転送したのだった。

※ ※ ※

モンブラン・クリケットという男の住む場所へ着いたのだが…

大きな宮殿の描かれたベニヤ板が見える。その裏に半分の家。単純に見栄っ張りな人なのか、家すらも半分ケチる貧乏性な人なのか理解し兼ねる。

「…ここに住んでる人が空島に関係してるんですか？」

「直接関係があるかはわからないのだけど、このジャヤには黄金が隠されていると言ってモックタウンを追い出された人らしいわ。」

うふふと張りぼての家を見て笑い、私の問いにロビンさんが答える。

それは空島に関係の無い人ではないのかと内心でツツコむが、黄金

となれば空島が関係なくても会ってみたいと思ってしまう。

やはり海賊にはお宝や冒険といったものが必要不可欠な要素であり、ドキドキワクワクするものを求めてしまっても罰は当たらないだろう。

船を停泊させお宅を訪ねるも留守の様だ。皆思い思いに辺りを見回ったり、海を見たりしている。

私は外に作られた丸太の椅子に座り、同じく丸太の机の上に置いてある童話を見つけ読もうと手に取る。

「おお、『うそつきノーランド』とは懐かしいな。北の海ノースポールのじや有名な童話だ。」

聞くとサンジさんは生まれは北の海で育ちは東の海らしい。珍しい出自もあるものだと関心してしまう。

その童話をナミさんが朗読し始め、皆静かに聞き耳を立てる。が、丁度読み終わると海の中に人の気配を感じた。

ルフィさんが覗き込んでいる辺りだと覇気で察知し、即座に移動しルフィさんを抱え一足跳びに下がる。

「誰だテメエら！ひとんちで勝手にくつろぎやがって。どうせ狙いは金だろ？死ぬがいい！」

海面から飛び出した人がこの家の住人モンブラン・クリケットのようだが、こちらの返事を聞く間も無く襲い掛かって来る。

私はルフィさんを抱えているため若干反応が遅れつつ右の前蹴りから左の後回し蹴りのコンビネーションを屈んで交わすが、すかさずそこに左の貫手が襲い掛かる。

しかし、私とモンブランの間にサンジさんが割り込み左足を絡める事で貫手を受け止める。が、腰から抜いた拳銃をサンジさんに向けて撃つモンブラン。間一髪で避けるも続け様の速射に肝を冷やしながら一旦距離を取る。

そこで加勢に向かおうとゾロが刀を抜くがモンブランに異変が起きた。急に胸を押さえ苦しんだのだ。見た目の症状は呼吸困難と身体の各所が痙攣している。突然の出来事に啞然とする面々だが、素早く処置を開始しようとチョップパーくんが声を上げる。

「この人を早くベットへ！身体を冷やすために水とタオルの準備！それと家の窓を全開にして風を入れて!!」

※ ※ ※ ※ ※

症状が落ち着きベットで寝息を立てるモンブラン・クリケットを囲み、私たちはチョツパーくんから病気の詳細を聞く。

潜水病というダイバーが稀に患う病気らしい。

海底から海上へ浮上する時の気圧の差異が原因で、体内に溶解している窒素が気泡となり血管塞栓を起こすのだ。その結果、血流が滞り循環器系に血行障害をひき起こし四肢の筋肉・関節痛、めまい、吐き気、知覚・運動障害を生じるそうだ。

この人の場合は気泡となった窒素が再び溶解する間も無い程、毎日海に潜り続けている様なのだ。呼吸器系の障害、特に呼吸困難や胸の痛み、チアノーゼが見られたことから重症だとチョツパーくんは診断する。このままだと神経に損傷を負い重篤な後遺症を残すか、最悪は死を招くという。

「この病気は自然治癒が難しいんだ。こうも重症だと医者でも完治するのは無理だ。…医者として情けないけど、お願い出来るかな？」

「…いいの？」

「この人からは空島の話も聞かなかないし、このままだと確実に死んじゃうくらい酷い状態だ。見過ごすなんておれには出来ない。」

チョツパーくんの医者としての意地プライドよりも目の前の瀕死の患者の命を優先する意思を汲み取り、私はモンブランの手を取る。同化、同調を経て体組織のイメージを組み直し能力を解除する。先ほどとは違い、血流の行き渡る赤みがかった顔色に変わっている。

私がやったことは健康であつた身体に戻すのではなく、血管内の塞栓や気泡となった窒素の境界を消して溶解させたただけだが、それだけでも結果が見て取れた事に皆一様に安堵する。

「チョツパーくん、一応気泡の処置はしたけどきつとこの人はまた海

に入ると思う。だから、医者として病状の説明と嚴重注意はきみの仕事よ?」

「うん。任せろっ!!」

私は医者 of 意地を傷つける力を持っている。それでも救えるならばとチョツパーくんは奥歯を噛み締め悔し涙を堪えていた。せめて患者のフォローを任せることで少しでも意地を保てるならばと後のことをお願いした。

突如血流が良くなった事で急激な体温の上昇や毛細血管への負担、四肢の感覚が過敏になり痛みを生じる可能性に不安もあつたが、チョツパーくんの適切な処置のおかげで容態は安定しておりすぐにも目を覚ましそうだ。

：それなのに、なぜか外が騒がしくなる。こんな時に来客のようだ。それに気付いたルフィさんとゾロ、サンジさんは扉の前に警戒心を強めて立つ。

チョツパーちゃんとウソツプさん、ナミさんはモンブランの看病を続けてもらい、私とロビンさんで不測の事態に対処出来るように構える。

「おやつさん!大丈夫かっ?!?!」

扉を慌ただしく開けたのはゴリラとオランウータンだった。人語を話す獣とは珍しいものだと思味が湧く。

「今オツサンの看病してんだから静かにしろ。そっちのサル、リベンジなら後で受けっからどっか行け。」

ルフィさんは事も無げに追い返そうとしているがゴリラとは顔見知りのようだ。

「なんだと?!:お前らしい奴らだなあ!!」

その後感涙と鼻水を流しながら感謝を述べる二匹?を伴いルフィさんとゾロ、ウソツプさんが共に外へと出る。

ナミさんとサンジさんに聞くと、私が合流する前にいざこざを起こしたのがゴリラの方だと言う。

ふと、室内の壁にかかる写真を見ると肩を組み楽しそうに笑う三人が写っている。言わずもがな、モンブランと先ほどのゴリラとオラン

ウータンだ。

※ ※ ※ ※

程なくして目を覚ましたモンブランは、黄金を狙う不埒者と勘違いし襲い掛かったことに頭を下げ、適切な医療処置で命を救われたことに再び頭を下げた。

「それで、俺に聞きてえ事ってのはなんだ？」

「俺たち空島に行きてえんだけどよ！行き方教えてくれ!!」

煙草を吹かしながらのモンブランの問いにルフィさんが答える。すると突然モンブランは大笑いしだすのだ。

「なんだ、お前ら空島を信じてんのか？」

ひとしきり笑い息を整え言葉を出すモンブランだが、人を小バカにしたような雰囲気には全く無い。逆にそれを喜んでいるように見えるのだ。

「空島はねえのか?!」

「…わからねえ。あると言ってた奴を一人知っちゃあいるが、そいつは伝説的な大うそつき。世間じゃその一族は永遠の笑い者さ。」

そして、『うそつきノーランド』モンブラン・ノーランドとその子孫であるモンブラン・クリケットの時代を超えた決闘の話を語りだした。

モンブラン・ノーランドが見つけた山のような黄金の島。その舞台がジャヤなのだと言う。しかし、再びジャヤに戻ったノーランドはその黄金の遺跡を見つけることが出来なかった。

ノーランドは地殻変動による遺跡の海底沈没を主張したが誰にも信じてもらえず、うそつきという烙印を押され笑われながら無念のまま処刑された。

それから400年の間、『正直者であったモンブラン・ノーランド』と一族の名誉の為に海へ出た者も多くいたが、誰一人として生きて戻ることはなかったという。

モンブラン・クリケットはそんな一族を恥じ、家を飛び出して海賊

になったそうさ。ただただ、ノーランドの呪縛から逃れる為に。

しかし、どういった運命のいたずらか冒険の末にジャヤに行き着いたのが10年前。

黄金があるのならそれもよし。ないのならそれもよし。ノーランドの無実を証明する為でも、一族の名誉の為でも無い。

自身の命が尽きる前に白黒はつきりさせたい。『クリケットという男』とその男の人生を狂わせた『ノーランドという男』との決闘なのだ。

その為に毎日ただひたすらに海へ潜り黄金を探す日々。一人孤独に暗く冷たい海中を当てもなく探し続けるなかで、現れたのがゴリラ似のマシラとオランウータン似のシヨウジョウだという。

ノーランドの黄金は必ずあると思う。そう言ってモンブラン・クリケットの生活に入り込み、勝手に手下となって暴れ回る。そんな一途なバカに救われている。そう言ってモンブランは幸せそうに微笑んだ。

「…と、ここまでが前置きだ。これ読んでみる。」

ベッド脇の本棚を取り出した本をナミさんへ投げて渡す。家を飛び出した際に持ち出したノーランド直筆の航海日誌だという。

ナミさんは400年も前の、しかもノーランド本人の航海日誌ということもあり緊張しながら一ページ、また一ページと丁寧に読み上げていく。

読み上げる航海日誌の中に空島が関連する言葉が出る度に皆一様に目を輝かせ、感嘆の声を上げて喜んでいる。

しかし、私は空島が存在することを知っている者として素直に喜べずにいる。何故なら、この地から空島へは行けないと知っているからである。

ルフィさんは空島に行きたいと言ったが、モンブランは行けると言った訳では無いのだ。自身の先祖が空島は存在するような事を航海日誌に書いている、と紹介しただけだ。

今なら空島は存在すると言っても良いのだろうが、この地からは行けないとは口が裂けても言えない。

喜び勇み、空島へ思いを馳せる皆の雰囲気に取り残され、私は居た
たまれず静かに家から出る。

すると、いつの間にか外に居たモンブラン、マシラ、シヨウジヨウ
の三人がこちらを振り返った。

「おう、嬢ちゃん。俺たちが一丁手え貸してやるよ!」

一体何の事だろうと訝しむ間も無く気付いてしまう。まさかと思
いを口に出してみる。

「…もしかして、空島へ?」

「おう!」

元気いっぱいに返事をするマシラとシヨウジヨウだがモンブラン
はあまり元気そうには見えない。

「なんだ? 嬢ちゃんは行きたくねえのか?」

「…なんと言うか、あのですね。他の皆さんには内密をお願いします。
実は…」

私は三人に空島は確かに存在する事と空島へ登るには後半の海の
山から行くのだと知っている事を話した。

「…そうなのか。」

「…知らなかったぜ。」

マシラとシヨウジヨウは私の話を聞き、神妙な面持ちで顔を向き合
わせている。

「いや、知れて良かった。この世界は知らねえ事や不思議な事ばかり
だ!…そっちが正規ルートだって言うなら、こっちは近道だぜ!」

モンブランはウワツハツハツと楽しそうに笑いマシラとシヨウ
ジヨウに向き直ると声を張り上げた。

「俺らが手え貸しや絶対に大丈夫だ! やるぞ!!」

「おうよっ! おやつさん!!」

※ ※ ※

「と、いう訳で俺らが手え貸すぜ!」

結局どういふ訳なのだろう。家の中にいた皆を外へ呼び出し、これ

から空島へ行く為の講義を始めるという。

ただ、ロビンさんはいつの間にか外の探索へ出ていて不在。サンジさんは食事を作るということでキッチンへ。ゾロは家の壁にもたれ掛かり昼寝をする。なんとも自由な一味だと笑えてしまう。

まず、不確かな事ばかりの話になるが信じるか信じないかは任せ、と前置きしてモンブランは話し始める。

もし、空島があるとすれば『積帝雲』にしか可能性はないらしい。何千年何万年と変わることなく浮遊し続ける化石となった雲だという。それは太陽の光さえ遮断し下界に夜が訪れるほど積み重なった分厚さの雲。その雲になれば島としての機能があっても不思議ではないだろう。もしかすると、その雲に島が乗っている可能性もある。問題はその雲にまで飛び上がって行けさえすればなのだが。

そして積帝雲に飛び乗る方法が一つだけあるというのだが、それにとんでもなく危険な方法なのだ。ノックアップストリーム 突き上げる海流に乗り積帝雲まで飛び上がるのだという。言葉だけを聞けば『お空まで一ツ跳び』で楽しげな航海を想像出来るだろう。しかし現実はそうではない。

海底の更に地下の大空洞に海水が流れ込み、地核からの熱で生じる膨大な蒸気の圧力で海を吹き飛ばし、空へ立ち上る海流を作り出す程の水蒸気爆発を引き起こす。これは大自然が作り出す災害である。本来ならば回避すべき事象なのだ。それに乗れとは正気の沙汰とは思えない。

マシラの報告にて明日、南の空に積帝雲が現れる可能性が高いらしい。

次いで、ノックアップストリーム 突き上げる海流の発生周期や予測場所も明日の南の海の可能性が高いそうだ。100%とは言えないが、明日それらが重なる確立は高く、賭けるならばそこしかないという。

ログボース 記録指針の都合上、あと一日ジャヤに滞在すると空島への磁気が書き換えられてしまい機会を逃してしまうのは確かだ。船長であるルフィさんの判断を仰ぐと空島へ行く決意に変わりはないようであるが、それにウソップさんが反論する。

麦わら海賊団の船G・M号の損傷状態ではノックアップストリーム 突き上げる海流の衝撃

には耐えられないだろう、と。

それについては万全の状態で出航出来るように船の補強、進航の補助はモンブランクリケット率いる猿山連合の一味総出で請け負ってくれるそうだ。

その言葉にウソップさんが更に疑念を深める。

今日会ったばかりにも関わらず親切過ぎると。不確かな存在である空島へ行ける絶好の機会が運良く明日であること、その為に船の補強や進航の補助を無償で引き受けること。モンブランの言っていることはとても都合が良く、確かに怪しいのだ。

ウソップさんは正しい。会ったばかりにも関わらずこうも親切が過ぎるのは、裏で何か企んでいますと言っているようなものだ。

大海賊時代にその感性は正しいのだ。自分の身を、大事な仲間を、そして大切な船を守る為に疑うことはとても重要な事である。

モンブランは静かに煙草の紫煙を吐き出し、感情を昂ぶらせたウソップさんを見る。

その時サンジさんとマシラ、シヨウジョウが家から身を乗り出しご飯が出来たと声を上げるとモンブランは口を開いた。

「…俺はうそつきの一族として蔑まれ、空想に夢見る阿呆と町を追い出された身だ。」

本気で空島を信じ、そこへ行くこうとする。そんなお前らみたいなバカに出会えて俺あ嬉しいんだ。

一緒にメシイ食おうぜ。今日はゆっくりしていけ。…同志よ。」

モンブランはそれだけ言い残し先に家へと向かい歩を進める。私は膝を着き項垂れるウソップさんのもとへ行く。

「ウソップさんは誰よりも仲間と船の安否を心配してくれたんですよ？実際、信じることはとても簡単ですが疑うことはとても難しいことです。ウソップさんは仲間の為に疑える、そんな優しい心を持っていますね。格好いいですよ。」

「こうなったからには腹括るしかないわ。空へ行く為に私たちは私たちの最善を尽くそうじゃない。ウソップ、さつきのあんた『漢』だったわよ。さつさと謝ってご飯にしましょ？」

「…おうー」

ウソップさんは、さつきはゴメンとモンブランへ飛びつくが鼻水を付けて殴られている。私とナミさんは並び家へと向かう。

「あんななかなかフオローが上手いのね。」

「ナミさんこそ。…つい先日まで沢山の部下がいましたからね。上手くもなりますよ。」

※ ※ ※

夜の宴も佳境へと突入し、各々が食べ、飲み、語り、暴れている中、私とロビンさんはノーランドの航海日誌を読んでいる。

私は酒乱の気があるらしくお酒は飲まないようにしている。ロビンさんは少しづつ自分のペースで飲むタイプのようだ。

「髑髏の右目に黄金を見た！」

航海日誌の最後のページに差し掛かったところでロビンさんの眼前でモンブランが声を上げる。日誌に集中していた私もこれにはビクリと肩を跳ねさせた。

それからモンブランは日誌の内容を暗記しているようで、黄金に関連するものを語り出す。それから奇妙な鳥の鳴き声、大きな鐘の音の逸話が終わった頃にお宝を取り出した。

小さな鐘の形と妙な鳥を型取った黄金。メッキなどではないどころも紛う方なく本物の黄金である。

妙な鳥はジャヤに現存する『サウスバード』という鳥で奇妙な鳴き声を出し、もう一つの特徴があるらしい。

「しまった!!」

突然大声は出し狼狽えるモンブラン。

聞くと、突ノックアップ上げる海流ストリームの起こる海域はジャヤの南に位置するらしいのだが、そこへ行く為に必要なものを忘れていたらしい。

偉大なる航路グランドラインにおいて信用すべき記録ログ指針ポースは島の磁気を指し示す為、南下する今回は意味を成さない。

つまり、現状で南へ向かう為の『方角を知る為の計器』が無いのだ。

そこで必要になるのがサウスバードなのだそう。この鳥の特徴に、正確に南を向く習性があるらしい。

その鳥が居なければ空島どころか目的の海域にすら行けずに絶好の機会を逃してしまうという。

「つまり、今から森へ入りサウスバードを捕まえてこいと？」

「ああ、夜明けまでに一羽捕まえて来れりゃいい。俺らは今からお前の船を補修、強化する！」

と、いう訳で私たちは森の入り口へと赴いたのだが、おかしな光景を前に皆一様に目を見開いてる。

モンブランが言っていたサウスバードが森の入り口の地面へ集結し、妙な鳴き声がり響いているのだ。

「…なあ、あの鳥たち変な事言ってるぞ？」

チョップパーくんは元々野生のトナカイだということ、ある程度の動物達とは話が出来るらしい。

チョップパーくんに翻訳してもらおうと、サウスバード達は口々に『森の神』『御降臨』『御尊顔』『感謝』と発しているそう。

よく意味が分からない私たちは困惑するばかりだが、一羽だけで良いので一緒に付いて来てほしいと頼む。

すると、より一層鳴き声が大きく荒々しく響き始める。きつと怒っているのだと思い、私たちは顔を見合わせどうしたものかと困惑する。すると、思い掛けない事をチョップパーくんは言う。

「…えつとな、誰が一緒に行くかで喧嘩してる。皆おれたちと行きたいけど、一羽だけってことで一番強いやつが来てくれるみたいだ。」

チョップパーくんの翻訳に啞然とする面々だが、時間がかかりそうだとこのことでルフィさんとウソップさんは森の探検へ入り、ゾロとサンジさんは仲良く喧嘩したり、残りの私たちは話をしたり本を読んだりしながらサウスバードの鳴き声が響く森の入り口で決闘が終わるのを待った。

「ジョッ！ジョッ！！」

「あ、終わったみたいだぞ。」

思っていたよりも早く終わったようで私たちは安心する。喧嘩と

言っても誰が一番大きく力強く鳴けるか、という勝負らしくどの鳥たちも怪我などは一切無い。

一羽のサウスバードが羽を大きく広げて私たちの前に舞い降りる。どうやらこの子が一緒に付いて来てくれるようだ。

私とナミさん、ロビンさんでよろしくね、と挨拶する。チョッパーくんは通訳係だ。

「ジョー！ジョー！」

「こちらこそよろしく。お役に立てるなら光栄です、だって。」

他のサウスバードたちが森へ入ったルフィさんとウソップさんを連れて来てくれるらしく、待っている間にゾロとサンジさんの喧嘩を止める。

ともあれ、あとは猿山連合が船の強化を仕上げれば準備は完了である。

明日予測通りに積帝雲と突き上げる海流ノックアップストリームのタイミングが合えば空島への一歩となるのだ。

その期待を胸に麦わら一味はモンブランの家へと戻る。

※ ※ ※

薄暗く湿った洞窟の様な場所。岩の壁が剥き出しでそう広くは無い空洞部に幾人かの人影を蝋燭の灯りが揺らす。

「だからあーなんであんな餓鬼を放置するんすかあ？」

「ロードくん、前にも言ったがあの子は転生者である自覚は無いし覇気すら使えない。だから、まだ放置で良いと言ったんだよ。」

なのに君はあろう事か転生者の存在を露呈し、覇気まで知らせるとは…フライトくんが止めに入ってくれて良かった。」

「私が止めなきゃ殺るつもりだったでしょ？感謝してよね？」

アラバスタでリイナと出会ったロードという青年は自分の独断行動に非は無いと言い張るだけで話が進まない。

リーダーであろう男は痛む頭を抑えるが青年の性格を理解している為、言葉での説明は意味を成さないと諦めた。

フライトと呼ばれた女性は嫌味っぽくロードの周りをクルクルと飛び回り青年に鬱陶しがられている。

「別に殺つちまっても計画に関係無えし良いじゃねえの。それとも、元上司として愛着心でも芽生えましたあ？」

「愛着…か。無いとは言わないよ。僕としては覇気を扱える様になるまで育ててから僕らのチームに誘うつもりだったのだがね。」

「私は反対！原作知識の無い子居たら一々説明すんの面倒くさいし。」
「それでも、あの子の能力は捨てがたい。その気になれば一瞬で世界が消える。それに君たちは戦闘特化の能力じゃないんだ。…頼むから大人しく言うことを聞いてくれよ？」

男は軽い笑みを浮かべてはいるが、含みのある言葉と漏れ出す威圧感に二人は戦慄を憶える。

「…わあつたよ！もう勝手に動かねえからそれ止めてくれリーダー！！」

「一応あんたがリーダーだし。私はどうせサポートだし！わかってるから怖い顔しないでよ。」

転生者集団のリーダーは霸王色の覇気を止めてより笑みを深めてから再び言葉を紡ぐ。

「わかつてくれればそれで良いんだ。では、仲良く留守番を頼むよ？」
それだけを言い終え二人の目の前から一瞬で消え失せる。残った

二人は安堵のため息を漏らす。

「…なあ、俺らは留守番してれば良いんだよなあ？」

「そうね。」

「シールのオッサン今どこに居つか知ってる？」

「…空島ね。」

それぞれの思惑はどうであれ、片や興味の無い事だと眠そうに、片や意地の悪い笑みを浮かべ持ち場へと戻るのであった。

100 ・秘め事と静観

朝日が水平線から顔を出し、眩しい暖かな光で輝く麦わら一味の海賊船 ゴライイングメリー G M号。補強が終わり一同は沿岸に集まってメリー号を眺めている。

船体には広げた翼を携え、船首の羊はトサカを被り微笑んでいる。名付けて『ゴライイングメリーG M号フライングモデル』だそうだ。

「「すげえ!!飛べそうだなっ!!」」

ルフィさんとウソツプさん、チョップパーくんは目を輝かせて楽しそうに談笑している。

「さて、積帝雲と突ノックアップストリウムストリウム上げる海流の挙動を察知する為に早めに出た方が良い。マシラ、シヨウジヨウ頼んだぞ!」

「任せろっ!おやつさん!!」

徹夜作業を進めていたはずの猿山連合だが、そんな疲れを見せることなく準備を整え各々の船に乗り込んでゆく。

モンブランはゆつくりと煙草を吹かし私たちを向き直した。

「おっさん、船ありがとな!これ礼だ、やる!!」

ルフィさんは昨夜森の探検中に採集した虫を礼だと渡すが、それが礼になるのは子供くらいなものだと思うが:

「っ?!こいつあ、アトラスにヘラクレス!ミヤマにオオクワ、ノコギリまで!!」

モンブランも意外と喜んでるようだ。猿山連合も騒ぎ立てるほど喜んでる。

メリー号も出航の準備を完了し皆船へと乗り込み、一人見送るモンブランと口々に別れの挨拶を交わす。

「小僧!過去に誰一人として黄金郷も空島も『無い』と証明出来た奴はいねえんだ!んなもん屁理屈だと人は笑うだろうが結構じゃねえか!!...それでこそ『ロマン』だ!!」

「おう!ロマンだ!!」

ニシシと笑い手を振るルフィさんは晴れやかな笑顔でモンブランへ別れを告げ出発の合図を出した。

※ ※ ※

メリー号の右側にシヨウジヨウの船、左側にマシラの船。二つの船に挟まれた状態で目的である南の海域へ航行中だ。

「いいか？目的地まで四時間程の航路だ。おやっさんが言っていた通り積帝雲と突き上げる海流ノックアップストリームの動向を事前に調査しておく必要があるが予定通りに出発出来たから問題無えはずだ。」

私とナミさんでシヨウジヨウとマシラからの説明を受けながらサウスバードを頼りに南下している。

「目的地で俺の探索サーチに目標が掛かったら二隻でお前らを引っ張って行く。その後は流れに乗って行きやなる様になる。気負わず楽に行こうぜ。」

「ええ、わかったわ。よろしくね！」

ナミさんは簡単な説明に返事をして航路前方を見渡す。目的の海域までは遠いので眼前の空は晴れ渡っているが、一度体験した怪現象を思い出しているのか表情は固い。

私は聞き及んだだけであり、昼を夜へと変えるほどの分厚い雲を見たことがない分少し楽しみにしている。結局空島の有無を一味に明かせずにいるのだが、到着してから明かせば良いか、と暢気に構えていた。

ふと、ルフィさんたちを見るとなにやらサウスバードで戯れているようだ。身体がどの方向を向こうとも、顔は南にしか向かないという習性は弄り甲斐があるのだろう。

「あまりジヨウをいじめないでくださいね。せつかく付いて来てくれたんですから。」

「んあ？ジヨウってこいつか？」

そう、私はサウスバードにジヨウという名を付けた。あの森から付いて来てくれたのはいいが何故か私に懐いて後を追ってくる。なので名で呼び、船の手摺りに泊まり方角を示してくれとお願いしたのだ。

「ジョウって鳴くからジョーか！いいじやねえか!!」

「ええ〜！もつとカツコイイのにしよーぜ？」

ウソツプさんは私の名付けに賛同してくれたがルフィさんは別の名前を提案してくる。それからジョーの名前を決める討論をしたり空島はどんな場所なのか想像を話しあったりなどして目的の海域までの時間を過ごすのだった。

※ ※ ※ ※ ※

航行を始めて三時間ほどが経ちマシラの船が慌ただしくなったのに気付く。進路方向を見ると遠くの空が暗く染まっているのが視認出来た。シヨウジョウの船でも探索が順調に進められている。

予想よりも早く現れた積帝雲に合わせて突き上げる海流の爆発の兆候を確認したマシラとシヨウジョウの船は航路を修正しメリー号を引く為のワイヤーを繋ぐ。

海底爆発の前震によって引き起こされた突然の高波に三隻の船は左右に揺られながらその中心部へと向かって進んでいく。

「流れに乗れー！この大渦に逆らわずに中心に行きや良い!!」

マシラとシヨウジョウは船のワイヤーを外し離脱していく。一方、メリー号は渦の海流に乗り少しづつ中心へと流され始めている。積帝雲が頭上に差し掛かっているのか周囲は既に夜の様に暗い。

「おう！送ってくれてありがとな!!」

ルフィさんが送ってくれた面々に感謝を述べるが、ナミさんとウソツプさんはすぐに逃げ帰ろうと反論している。ここまで来たのだからもう諦めるしかないだろうに二人はとても必死に説得している。

「おい、無駄な抵抗は意味無えぞ。ホレ。」

ゾロが言っ指を差す方を皆で振り向くと既に大渦に飲まれる瞬間だった。皆一様に襲い来るであろう衝撃に備える。一瞬、船は宙に浮き大渦へ落ちると思っただが先程までの高波が嘘の様に消え海が凧いだ。

待ち構えたはずの衝撃は来ず、急に静けさを纏う海に困惑を皆隠せないままに口々に言葉を発する。

「…来るわ。渦は海底からかき消されただけ！全員しがみ付くか船室

へ!!急いで!!!」

ナミさんが慌てて指示するもメリー号の周囲の海が隆起する。それぞれが近くの船部にしがみ付きこれから訪れるであろう最大級の衝撃に再び構えたその時。

ドオオン!!!

身体 of 芯まで揺さぶる衝撃音と急激な船体の傾きにバランスを崩しつつも手摺りに掴まることで難を逃れる。

しかし、何かがおかしい。甲板に足が付かないのだ。よく見ると他の皆も手摺りにぶら下がっていたりマストにしがみついたり、船室の壁に立っていたりする。

現在、船は垂直に空を向いているのだと理解する。ノックアップストリーム突き上げる海流に乗り航行しているのだ。

しかし、このままでは船体が浮き上がり弾き飛ばされてしまう。そうなれば空中へと投げ出され海に叩き付けられて一味も船も無事では済まないだろう。そうなる前に能力で船ごと移転したほうが良いと考えているとナミさんが声を上げた。

「今すぐ帆をはって!!これは立ち昇る海流、つまり海よ!地熱と蒸気によって下から吹く風は上昇気流!風と海が相手ならどんな場所でも航海してみせるわ!!」

頼もしい航海士の言葉に皆の士気が上がる。ナミさんからの指示を受け各々が帆を張り調整し、舵を合わせる。船首が海から離れ、このままでは落ちてしまうと息を飲み覚悟するしか出来ない。

「…船が、空飛んだ!すげえ!!」

なんと海流と追い風を推進力としてメリー号が飛んでいる。ナミさんは予想通りに無事飛べた事に安堵し息を吐く。他の皆は驚き感心し喜び最高の航海士を褒め称える。

眼前にそびえるぶ厚い雲を見上げ行く先を再確認する一同に船長は興奮気味に声を張り上げた。

「積帝雲に突っ込むぞお!!!」

「!!!うおおお!!!」

※ ※ ※

船の甲板で仰向けになる者、蹲る者と皆一様に息も絶え絶えの状態ではあるが欠ける事無く一味八人生きています。真つ先に大きな声を出したルフィさんに促され顔を上げると辺り一面真つ白な光景に感嘆の声を上げる。

ナミさんの持つ記録指針ログポースによると針はまだ上を指しているらしい。つまり今居る場所は積帝雲のまだ中層だということだろう。まだ目的的空島には到達していないということだ。

私はナミさん、ロビンさんと航路の確認と未知の雲上での哨戒について会話をしていると、ウソップさんが雲に潜りそのまま雲から落ちってしまったようだ。ルフィさんとロビンさんでウソップさんを引き上げると風船みたいな蛸や巨大な蛇みたいなひらめを連れ引き上げるなどのトラブルに見舞われる。

雲の中に生物が存在していることには驚きだが、雲というよりも海だと認識しなければいけないようだ。海底の無い空の海で生き抜く為により軽く、風船のようになつたり平たくなつたりといろんな進化をしてきたのだろう。

空の海に生息する生物の考察をしていた私たちだが、チョッパーくんは空島へ昇る為の航路を調べてくれているようで双眼鏡を覗いている。ところが、何かを見つけたのか突然慌ただしく騒ぎ出す。

「た、ただ大変だ！四角い牛が雲を走ってこっちに来る!!」

チョッパーくんの指差す方を見ると変な仮面を着けた人が雲を滑る様にこちらへ向かって来ている。ルフィさん、ゾロ、サンジさんで迎撃しようとするが動きに普段のキレは無く返り討ちにされてしまう。

変な仮面が船から跳び上がりバズーカのようなものを構えたので私が追撃に向かい刀を抜かず鞘で打ち込み雲の海に叩き落とす。しかし、再び雲を滑る様に走り去ってしまう。捕らえて情報を引き出せれば、と無力化しようとしたのが甘かつたようだ。

「ウーム、お主やるのう。」

仮面を追撃する為に数瞬私が船から出ていた隙をつき、今度は甲冑が船に乗り込んでいた。私は甲冑と向かい合い、鞘を腰に戻し刀を抜こうと柄に手を掛ける。すると甲冑はジャベリンを下げ敵意が無いことを示す。

「我輩は空の騎士！お主らは青海人か？」

「青海人？ええと、私たちは雲の下から来たんですが…」

とりあえず敵対する気はなさそうなので聞けることは聞いておかなければならないと思ひ会話を交わす。

甲冑の話によると今居るのは白海といって地上から7000mの高さにあるようだ。私たちが目指す空島は白々海といい更に昇って1万mの高さにあるらしい。

ゾロたちの動きにキレが無い原因はその為であると納得する。

地上と比べて上空は酸素の濃度が薄いので低酸素症になっているのだ。

普段通りに動こうとするも身体機能に回す酸素が足りずに思うように動けないのは当たり前だ。

ゾロもルフィさんも慣れてきたと言っているがそんなに急に慣れる訳無い。…おそらく無い。

空の騎士と名乗る老人はフリーの傭兵をしているらしく、一度笛を吹く度に500万エクストルで助けると言っている。

まずそこで私たちは理解出来ずに首を傾げるのだ。500万エクストルとはベリー換算でおいくらなのだろうか。

そして私が秘めてきたことを空の騎士は開示してしまう。正規のルートで空へ昇つて来たのではないのか、と。

「…あの、すみません。偉大なる航路後半にある山に空島のルートがあるのは知ってましたが、皆さんの楽しみを奪う気にはなれず黙ってました♪」

暫しの静寂が訪れると共にナミさんが鬼の形相で詰め寄ってくる。助けを求めるため皆を見渡すが目を逸らされてしまい、私はおとなしく正座する羽目になった。

私がナミさんから説教を受けている間にも空の騎士の話は続き、近

年では突き上げる海流ノックアップストリームで空に上がる度胸と実力を備えた航海者はなかなか居ないと褒め称え、一度だけ無料で助けてくれると言う。

「我が名は空の騎士 ガン・フォール！そして鳥にしてウマウマの実の能力者、相棒のピエール！勇者たちに幸運あれ!!」

最後にそれだけを言い残し飛び去って行ってしまった。

※ ※ ※

空の騎士 ガン・フォールが変な天馬 ピエールで飛び去り、結局何も教えてもらっていないことに落胆しつつも今後の航行を考える必要がある。

「なあ、あそこに変な雲があるぞ！」

チョツパーくんの言い示す方を見ると、他の雲とは違い滝の様に縦に伸びた雲がある。

当ても無く彷徨う訳にもいかないのでそちらへと進路を変え進むと大きな雲が鎮座している。

「ただの雲なら直進出来るんだけど、空の海に浮いてる雲だし…」

困惑するナミさんを他所に触ったらわかる、とルフィさんが手を伸ばして確かめる。すると、その雲は弾力がありルフィさんの手を弾いた。

「見ろ！ふかふかだあ!!」

いつの間にかルフィさんとウソツプさん、チョツパーくんがその雲に乗り楽しそうに跳ねている。そうになると、この手の雲を避けながら進むしかなさそうだ。

飛び跳ねる三人にそこから何か見えないか聞くと滝の方に門が見えると言うのでそちらへ向かうが、迷路の様に行く手を阻むふかふかの雲に苦戦しながら右へ左へと何とか進んで行く。

最後のふかふか雲を抜け開けた場所へ出ることが出来たが、その時船の後方から声が上がった。

「麦わら一味よ、少し良いかな？」

皆が振り向くと同時にふかふか雲からメリー号へ飛び移る壮年の

男性。紺色のスーツを着込み悠然と立つ男に皆身構える。

「事を荒立てる気は無い。私はシールという名だ。そちらのリイナ嬢と縁がある者だよ。…うちのロードが世話をかけたな、すまなかつた。」

シールと名乗る男は私に向き直ると、用があると釈明しアラバスタでの件に軽く頭を下げる。

「彼の仲間、ですか。何の目的があつてここへ？」

「君と話があつてね。どうだろう、ルフィくん。少しの間リイナ嬢と話す時間をくれないか？」

シールと名乗る男はルフィさんへ向き直り許可を求める。やはり原作知識というもので皆の名を知っているのだろう。

「んん、良いけど話すだけか？」

「約束する。」

なら良いぞ、と承諾するルフィさんだが警戒は緩めていないようだ。

「…では、皆さん先に行つて下さい。話が終わり次第追いますので。」

「それが良い。聞かれては良い話では無いからな。では、少し時間を頂くよ。」

そう言つてシールはふかふかの雲へ再び飛び移る。私は皆に後で説明する旨を伝えてふかふかの雲へ上つたシールへ視線を向ける。

「リイナ・さつさと追い付いてこいよ!!」

ゾロが心配そうに声を上げたので私は振り向き笑顔でわかった、と返して跳躍した。

私は静かにシールの後を付いて行く。いくら敵意は無いと言つても警戒を緩めるべきではない相手だ。

先ほどの場所より少し離れたふかふか雲に移動し、ここらで良いかとシールは懐から小さなナイフを取り出して壁にあたる雲に刃を入れていく。

簡易的な椅子を作り向かい合つて二人共に腰を下ろすとシールは話し出す。

「先ずは自己紹介といこう。私は通称『シール』。自身からステツカーを作り貼り付ける事の出来る『ツクツクの実』の能力者だ。主に盗聴や潜入を任されている。」

そう言つて腕から一枚のステツカーを剥がし飛ばすと、私の左側足元に落ちる。それを手に取ろうとした瞬間ステツカーから手が生え、私の左手を掴んだ。

「この様に、ステツカーは私自身であり自在に私自身を生むことが可能だ。」

最初は私の左手を掴む為の右手だけだったが、徐々に腕、肩、胸部、首、頭部と人体を成してゆき完全にもう一人のシールが生まれる。

「そして、どちらも本人として活動出来る。解除も自在だ。」

正面に座るシールと左側に立つシールとで同時に話している。瞬間、正面のシールが露と消え、左側のシールだけになると椅子には一枚のステツカーが残っている。

「分身して解除する事により移動も可能という便利な能力だね。分身は最大で10体程、どれか一人でも生存していれば死ぬ事も無い。」

淡々と話すシールではあるが実に驚異的な能力である。思わず右手を左腰の刀に掛けていた。

「敵対する意思は無いので能力を明かしたただけだ。そう身構えないでくれ。」

そう言つて再び雲の椅子に座り朗らかに両手を挙げ敵意は無いと示す。

「…それで、私と話したい事とは？」

「そうだな。君の疑問に補足を入れながら答えるというのはどうかな？ロードと話し疑問も多かろう。」

この男の真意は読めないが私にとっては有難い話である。ただ、それが真実である保証は無いが知らないよりはマシだろう。

「では、転生者とは何ですか？原作知識や恩恵といったものもお願いします。」

「うむ、ロードはそんな事まで君に伝えたのか…いや、いいだろう。」

君の場合は知らんが、我々は個々の死後に神によって生まれ変わり

を果たした者たちだ。

ある者は神の償いで、ある者は試練を乗り越え、ある者は取引で、ある者は生前の褒美としてこの『ONE PIECE』という物語の世界に転生したのだ。

その時にこの世界で有利に生き抜ける様に授かったのが恩恵と原作知識だ。

強い肉体、優れた精神、常識とはかけ離れた悪魔の実の能力と全ての覇気。それらを扱い、使い熟す才覚。それを恩恵と呼ぶ。

そして、原作知識とは『ONE PIECE』という物語の過去、現在、未来を知識として得ているという事だ。ただし、『ONE PIECE』とは麦わら海賊団の物語であり、麦わら一味に関する事柄の知識でしかないがな。」

私は言葉が出てこない。それこそ空想だ、夢物語だと笑い飛ばしてしまいたい感情が湧くほどに突拍子の無い話だからだ。

しかし、どこかそれを受け入れてしまっている私もいるのだ。恩恵を受けていると自覚は無いが私自身の力は恩恵そのものであると言える。

少しの鍛錬で誰よりも力が付き、溢れ出るイメージの通りに能力を使い熟し、覇気すらも感覚ですぐに扱えた。言わずもがな、能力も反則級の代物である。

「君は前世の記憶が無く原作知識も無いと聞いている。そこに我々と君の優劣がある様に思うが、実はその逆なのだと解釈して欲しい。

我々は原作知識を得る代償として君より下位の能力なのだ。」

原作知識とは物語の流れを知るといってもいいものでもあり、それだけで予め決められた危険を回避する事が出来る。自身の命を守るものでもあるんだ。君にはそれが出来ない分、我々よりも高位の能力を授けられたのだと予測している。

だから、君と敵対する行為は危険であるとの見解なのだ。」

「ちよつと待って！今私たちが生きてるこの世界はやっぱり誰かの作り話ってことですか？」

「…元々は作り話だ。だが、我々転生者の存在がそれを覆したのだよ。」

そもそも『ONE PIECE』に転生者など登場しない。ここは『ONE PIECE』の世界では無く、『ONE PIECE』という物語に沿っただけの別の世界ということになる。」

つまり、転生者という異物が紛れ込んだために物語そのものが破綻しているということであり、この世界に生きる者はそれぞれ自分の意思で生きているという事になる。それに、原作知識とは麦わら一味に關係する事柄のみだということに少しの安心を得る。

ゾロが転生者わたしに関わる事は物語の決定事項では無いということ。ガンジお爺ちゃんおやぢちゃんは物語の通りに動かされている訳では無いということ。

この二つが分かっただけでも私の心は平穏を保てる。

「つまり、この先物語の通りに話が進む確証は無いということですよ
ね？」

「そうだ。しかし、麦わら一味は基本的に物語に沿って航海を続けるはずだ。空島こくまでがそうだったようにな。：但し、君という不確定因子が一味に加入したことにより大きな原作改変が起きれば我々の知り得ない物語へと変貌してしまう。」

もしも私がジャヤで空島の存在と行き方を話していたならばノックアップストリーム突き上げる海流に乗ることは無かったのかもしれない。アラバスタで私たちが任務通りクロコダイルを捕縛していたのならゾロとルフィさんの懸賞金は変わらぬままだったはずだ。

「ロードは原作通りに物語を進めたくて君の邪魔をしたようだが、君が居なくとも本来存在しないはずの転生者我々が存在するが故に原作は除々に変わり最終的にはまったく別の物語になってしまう可能性もあるがね。」

何気ないたった一つの小さな変動でも時間が経つにつれて徐々に大きな変動へとなってしまう可能性。バタフライエフェクトというやつだろう。

「…あなたたちは自身の存在を否定してまで原作通りに物語を進めた
いんですか？」

自身の生きるこの世界と原作の世界での違いは転生者の有無だ。

原作通りに物語を進めるのならば転生者の存在を消さなければならぬ。それは私も含め自分達の存在すらも否定しなければいけないのだ。産み、育み、愛してくれた人すらも否定する行為。それは悲しいことだと思う。

「…私は原作に固執する気はない。だが、そうで無い者もいるのだ。転生者のチームは六人居る。私以外は原作通りに話を進めたがっている。直接君を排除しようと動く者はロードだけのようだがね。」

私を含めて七人しか存在しないのかとその少なさに驚きはするが、良く考えるとどんな理由があろうとも転生というのはそうそうあるものではないはず。七人でも多いはずである。

彼らにとつて、原作を知らぬまま勝手に動くわたしはさぞかし邪魔だろう。それでも実力行使で来たのが先日のロードだけなのは正直助かる。

「…ドリフトさんはそのチームに？」

「彼がチームのリーダーだ。彼が君に手を出すなど厳命している。」

確信があつたわけでは無い。元上司があまりにも都合良く知っている風な素振りを幾度も見せていたのだ。だからロードの一件でもしやと思いついた程度だった。

別れの挨拶で鎌をかけたが知らないとおしらわれた。それが当たりだったとは今更であり、半分納得、半分驚愕といった感じだ。

さも気付いていた様に振舞うが、内心跳び上がりそうになるくらいには驚いている。

「…アラバスタでのクロコダイル捕縛作戦はそのドリフトさんの命令だったんですけど、原作通りに物語を進めたいのなら矛盾しませんか？」

「私が聞いた話ではルフィくんの懸賞金を上げない為だそうだ。それ以上は口にしなかつたが、そうなればゾロの手配書は出なかつただろう。つまり、君を海軍に留める為の口実が必要だったのでないかと推察する。ロードが単独行動した結果、計画は狂ってしまったようだがね。君は余程リーダーに気に入られているらしい。」

私を海軍に留める事と原作通りに物語を進める事。ドリフトさん

は前者を優先させたというのか。私にそれほどの価値があるとは思えないのだが…本人の居ないここで話しても真意は分からないので思考を打ち切り別の疑問を問う。

「それから、私は本当に転生者なのですか？」

「…リーダーが言うには転生者だそうだ。」

なんとも歯切れの悪い返答に私は首を傾げる。何かしらの根拠があり私にそう言っているのだと思っていたのだがどうやら違うようだ。

「リーダーの能力を全て知っている訳では無いが、彼には転生者が判るそうだ。私を含めた全員は彼から直接誘われている。」

「つまり、ドリフトさんしか転生者を判別出来ないということですか…」

自ら「自分は転生者だ」と触れ回る人もいるかもしれないが、それを黙していれば一般の人と何ら変わらない。どういった手段かは分からないがドリフトさんはそれを見分けることが出来るらしく私を転生者だと判別したようだ。

「私が二年より前の記憶を失っているのは何故か、理由を知っていますか？」

「いや、おそろくリーダーでもそれは知り得ないだろう。我々の前世はそれぞれ世界が違う。国や時代が違うという差異ではなく、次元が違うのだ。それぞれが会った神すら違うのだから転生する過程で何らかの違いがあっても不思議ではない。君の転生に関しては君の世界の神に依る采配だと言いたいようが無いのだ。」

各々の世界に各々の神が存在している。その言葉に目眩を起こしそうになってしまう。規模が大き過ぎて許容量に収まらない。

ともかく、私の記憶に関しては彼らに問うても意味が無いと分かり、記憶を取り戻すという目的は早くも行き詰ってしまった。

「…正直に言いますと、あなたたちなら私の記憶に関して何か知っているのではないかと考えていたんです。」

アラバスタでロードから転生者だと言われて違和感があったんですよ。私は私としての記憶があるのは二年前からです。それ以前の

記憶が無いのは別の誰かに乗り移ったから、憑依したからではないのかと。あなたたちの中にそんな人は？」

「…それは面白い考えかもしれないが、我々の中にそういった者はいない。皆一様にこの世界で母親から生まれている。だが、可能性としてはあるのかもしれない。どこかで死した者、若しくは死にかけている者に君の命を移したとなればそれは転生だろう。」

以前、転生という言葉に違和感を憶え考えた事だが、それでも転生と呼ぶらしい。益々自身の出自が不明瞭になってしまったことに落胆する。

得られた情報も『転生』『恩恵』『原作知識』『転生者集団』くらいなもので肝心な『記憶』に関する事は分からず仕舞いだ。それでも敵対する覚悟でいた相手から直接話を聞いたことは僥倖だった。

「…分かりました。私にとって貴重な情報をありがとうございました。…それでは、あなたの話をどうぞ？」

そもそもが私に話があり訪ねてきたはずが、私の疑問に答えてくれたのだ。本来の目的を促すくらいは当然の行為である。

「聞いていた通り君は義理堅い娘だな。…これを。」

そう言っただけでシールは一枚のステッカーを差し出した。怪訝に思いながらもそれを受け取ると手のひらへと溶け込んでいった。

「空島における原作知識を君に貼り付けた。それを知った上で聞いてくれ。」

瞬間、膨大な量の絵が脳裏を駆け巡る。頭痛と吐き気を催す程の情報量に視界が霞み身体がふらついてしまう。

スカイピア、天の裁き、ガン・フォール、コニスとパガヤ、ダイアル、アツパーヤード、^{ゴッド}神・エネルギー、神官、シャンディア……400年前、カルガラ、モンブラン・ノーランド、大鐘楼。

「…今の何が？」

「そうだ。この空島での成り行きと結末だ。麦わら一味はそれぞれ戦いを得て強くなり、その都度絆を深めてゆく。」

「…何が言いたいのか簡潔にお願いします。」

「君が麦わら一味に加入することは彼らの成長を妨げる危険性があ

る。この先の未来、彼らは敗れる時が来る。全力で戦いそれでも勝てない相手。救いたい者を救えぬ苦しさ。大事な者を失う悲しみ。しかし、それを糧にし更なる強さと絆で立ち上がるのだ。：君にはそれが出来るか？我々と共に彼らを見守ることを視野に入れて考えられないか？」

脳裏に浮かぶ空島の原作知識。傷だらけになつて、辛うじて勝利し、それでも笑顔で航海を続ける麦わら一味。原作の一味に私の居場所などは当然無い。この世界でも私が居なければ原作の通りになるのだろう。

夢、仲間、友情、絆、勝利、努力、汗、敗北、涙、別れ、出会い：物語としてはとても美しい冒険譚だ。彼らが原作の通りに物語を進めようとするのも頷ける。私が物語を好き勝手に書き換えて良い訳は無いのだ。

「：それでも、私は私の我が侘を通します！私が皆の成長の妨げになる？だったら、私がそれ以上に鍛え上げます。ルフィさんたちも今はまだ知らないでしょうが、『六式』も『覇気』も扱えるように鍛えてみせます。

誰にも負けない、救いたい人を救える、大事な人を守れるように。：それでも足りないならレイさんやシャンクスさん、ポートガスも巻き込んで原作なんて比にならないくらいに皆で強くなります。この世界は原作なんかじゃない。あなたたちが何をしようとそんなもの知りません。」

私はこの世界で生きているのだ。転生者としてではなく、ロロノア・リーナとして生きている。ゾロの妹として、麦わら一味としてこの世界を生きていくのだ。

正面に構えて座るシールから視線を外さず睨む様に見据える。これは転生者チームへの宣戦布告であり、私の決意だ。

「ふっ、期待通りの返事で安心した。先ほども言ったが私は原作に固執する気は無い。試す様な物言いをして悪かったな。

：話が変わるが、私がシールと名乗るのはリーダーの命名だ。チーム全員が能力を名乗っている。まあ、これ以上は教えられんがな。」

片側の口を上げ意地悪く笑うシールに心の中で素直に感謝する。つまり、名前から能力を予測し対処しろという助言だ。ドリフト、シール、ロード…他の三人は知らないが今後相間見える時があるだろう。予備知識があるだけでかなり状況は変わるはずだ。

「だけど、能力を名乗ったところで不利にはならないって自信があるんですね。」

神からの恩恵と破格の能力だ。並みの覇気使い、能力者に遅れをとることなど無いだろう。それは私に対しても言えることなのだ。彼らにはそれだけの実力が備わっているという自信の表れである。

「当たり前だ。神の恩恵とは努力や運程度で覆るほどやわなものではない。…君の覚悟は受け入れたよ。後の事は君次第だ。精進したまえ。」

「ええ、お話出来て良かったです。」

シールは椅子に座ったままの体勢でそのまま消えてしまった。椅子に残されたステツカーを見て、能力を解除し移動したのだと理解出来た。私はそのステツカーを手に取り元素へと分解する。

シールとの話で一味の皆に話せる事と話せない事を整理しつつ、転生者チームの対策と一味の鍛錬を考査する。これから忙しくなりそうだが、先ずはエネルギーをルフィさんに倒してもらわなければならない。

一味の下へ移動しようと思ったのだが、おそらく今頃はコニスさん宅だろうと思い至り合流は皆がアツパーヤードにある生け贄の祭壇に戻る頃にしようと思える。

それまでに少し試しておきたいことがあるからだ。幸いにもココは白海であり、辺りには雲しかない。辺りにゲリラの気配も無いので存分に鍛錬が出来そうだ。

ふと、生け贄の祭壇で恐ろしい目に合うチョツパーくんが脳裏を過ぎる。助けに行くべきかと思案するが、彼が海賊としての決意を固める為の大事な一歩なのだ。

…そのせいでガン・フォールが重傷を負うがチョツパーくんの糧になつてもらおう。

原作知識には便利な面もある。しかし、誰かが傷付くことを予め知ってしまうのは辛い面でもある。

私は以前から身内を守る為に他の誰かが傷付くことを容認している。

私は全ての人を救うなんて出来ない。だから見知らぬ人を見捨てるでも身内は守りたいと思っている。

生きる者ならば大多数は似たようなものだろうと理解はしているのだ。

しかし、空島に登場する人物を、その思いを知ってしまった今は、まだ見ぬ知らない人にすら情を感じてしまう。

こんな思いをずっと続けていくくらいならば、やはり私には原作知識など必要無いと認識する。

気を引き締め、思考を切り替えてからこれから傷付く者たちへごめんね、と届くはずもない謝罪を言葉にするのだった。

11 ・ 天災と神災

私は白海の範囲で大気と同化し、宙を漂いつつ思考に耽っている。悪魔の実を扱う上で重要になってくることは、鮮明に想像イメーシする事であると私は考えている。

現に私の能力は、より鮮明で詳細な想像をすることで人智を超えた能力を駆使出来ている。

例えば、私の使用する刀は、刀身の部位にだけ能力で『境界線の固定』を施している。それは折れる事も欠ける事も無い『不壊の刀』を想像して作り出しているのだ。

但し、それは私の想像を具現化しただけに過ぎない。私が『勝てない』『無理だ』と諦め挫けてしまえば、それは能力にも反映されてしまう。なのでそう考えた時点で刀は折れ、欠けて使い物にはならないだろう。

ロギア自然系は圧倒的な強さを誇る悪魔の実ではあるが、特に心と想像の影響を良い方にも悪い方にも受けやすいので注意が必要だと思っている。

何故こんな基本的な事を考えているかというと、新たな能力の活用を思い付いたからだ。

私は先程まで話をして男、シールの能力に似せて私自身の意識を『二分化』出来ないかと試している。何も分身しようとしているのでは無く、意識もしくは感覚だけを二分化しようと思っている。

例えば、二分化した私の意識をゾロに貼り付ければ、『意識だけの私』から『本体である私』への情報共有が出来るのではないかと考えたからだ。

ロビンさんの能力で例えると、他人の体に耳を生やして盗み聞きをする感じだ。

原作知識によると今夜は湖畔で一泊し、明朝に探索組たんざくチームと脱出組だつしゅつチームの二手に分かれて行動するらしい。

探索組の一先ずの問題である大蛇ウラバミは既に手を打ったので、不測の事態が起こらなければある程度は大丈夫だ。

問題は脱出組の方へエネルギー、副神兵長ホトリとコトリの三人が訪れる点。原作ではサンジさんとウソップさんが早々に戦闘不能にされていた。

なので私は脱出組にて船と皆さんをエネルギーから守る役割を買って出るつもりだ。

その後、原作で巨大豆蔓中層にある遺跡群に探索組、オーム、ワイパー、ガン・フオールなどが一堂に会する場面がある。その場にも加勢したいと考えている。

私の計画通りに話が通ればシャンディアは戦線に現れないかもしれない。

上手く事が運べばチョッパーくんは誰とも戦わずに済むかもしれない。

これからの私の行動次第でどの様に状況が変化するのか分からないのだ。

なので、二分化した意識を探索組に同行させ、船を離れるタイミングを計りたいと考えた。

エネルギーの撃退と副神兵長の迎撃を済ませれば、後に遭遇するであろうシャンディアと神兵はサンジさんとガン・フオールに任せられる。都合良く進行すればの話だが。

なんにせよ、探索組に合流するタイミングを読むことと不測の事態が起こった場合に迅速に対応出来る様アンテナを張っておきたいというのが理由だ。

それに、能力の発現を成功させた後は空島での行動を画策し、更にその後の皆の鍛錬も考えなければいけない。

何故鍛錬が必要になるのか、納得のいく説明をしなければ不信感を与える事となり、この先の航海に支障をきたす可能性も出てくる。

素直に転生者だと明かしたところで説得出来る術を持たない私では疑念を深めるだけだろう。妄想癖のある可哀想な人と思われる可能性さえある。

やらなければならぬ事は多く、この場でばかり時間を費やす訳にはいかなないと雑念を振り払い、思考の海に深く潜り込んだ。

※ ※ ※

私が生け贄の祭壇へ移動すると船には誰もおらず、皆は既に湖畔の方へ移動してくつろいでいるようだ。鍛錬や考え事に集中し過ぎて想定以上に時間が過ぎてしまっていた。

「ジョー！ジョー！ジョー！！」

泣き声のする方へ振り向くとジョーが私に気付きこちらへ飛んでくるのが見えた。

青海で放すのを忘れていたため、白海で一度帰るように伝えたのだが、私に懐き同行することになったサウスバードのジョーである。

シールと話す為に船を下りる際付いて来ようとしたので、船で待つ様に言っておいたのだ。懐いて出迎えてくれるとは嬉しい限りなのだ。：多数の巨大なサウスバードの群れを引き連れていることに驚愕を隠せないでいる。

足元に降り立ったジョーと正面に集い鳴き続けるサウスバードたち。私が眼前の大合唱に身動きも取れず固まっていることしか出来ずにいると、異変に気付いた一味の皆が駆け寄ってきてくれる。

私は合流が遅くなったことを皆に詫びてからチョッパークんにサウスバードの翻訳を頼んだ。

すると、ジャヤのサウスバードたちと同様に『森の神』『感謝』などと鳴いているらしい。

ジャヤでもそうだったが、サウスバードは私に対して神と言っているようなのだ。それに関しては心当たりも無い為、困惑するしかない。

なぜ私が神なのかと問うても、『本能で感じる』ということしか答えないので手詰まりである。

一先ずサウスバードたちに大合唱を止めてもらい、私が居ない間の話聞くことにした。

話を聞く限りでは原作の通りに進行しているようだが、一カ所だけ小さな違いがあった。

紐の試練 シュラとの闘いに敗れたガン・フォールとチョツパーくん、ピエールを助けたのはサウスバードではあるのだが、ジョーが率いるサウスバードだったという。

原作ではガン・フォールを元神だと知る神の島アップバーヤードのサウスバードたちに助けられたはずなのだが、ジョー曰く、神私の仲間を助けるためにこの地のサウスバードに手伝ってもらったそうなのだ。

この小さな蝶の羽ばたきはどこで竜巻に変化するのか、と少しだけ不安に感じてしまう。

しかし、原作知識は今回限りなのでこの先何が起ころうと自分に出ることをやるしかないのだ。小さな不安はあってもそれにばかり気を取られる訳にはいかない。

ともあれ、仲間の為に動いてくれたジョーとサウスバードたちにお礼を告げて、皆と共に湖畔のキャンプへと向かう。

皆は既に食事を済ませていると聞き、私も特製シチューを頂こうと楽しみに歩を進める。

すると、キャンプファイヤーの組み木を前に雲ウルフの群れが腰を下ろして私たちを待っていた。

再びチョツパーくんの翻訳で話を聞くと、サウスバードたちと同様に私を神と称え崇めているようだ。サウスバードと雲ウルフに対して私は何をしたというのだろうか…

流石に三度目ともなると考えることを放棄したくもなる。私はルフィさんに声を掛け、どうせなら鳥も獣も仲良くキャンプファイヤーに興じようと提案する。

すると瞬く間に男性陣が組み木に火をくべて宴会が催されはじめる。女性陣は大きな木の根に腰を掛け、私は食事をナミさんとロビンさんはお酒を思い思いに楽しんだ。

私が食事を終わるとそれを待っていたようにゾロが隣へ腰を下ろす。おそらくシールとのことで聞きたいことがあるのだろう。なにやらソワソワして落ち着かない様子の兄を見て私はおかしくて笑ってしまふ。

「…なんだよ?」

「ねえ、帰りが遅くて心配した？」

「…べつに心配なんてしてねえよ。」

顔を背けて素知らぬ態度を取るが、以前と変わりない照れ隠しに嬉しさを感じてしまう。

「私は…ゾロと出会う前の記憶を知りたいと思っていたの。その為の手掛かりがシールって人の組織チームにあると思ってたのに当てが外れちゃった。」

「…記憶、か。」

「結局、記憶は忘れてるだけなのか、そもそも無いのか分からない。だけど私は私として、ロロノア・リーナとして今を生きてる。これから生きていく。それだけ十分。だから記憶なんてもう良いの。」

二年より前の記憶や前世の記憶など有ろうが関係無いのだ。それでも私は『ONE PIECE』と似たこの世界で生きていくのだから。

「ゾロから貰った『リーナ』って名前は気に入ってる。ガンジお爺ちゃんがお父さんでゾロがお兄さん、私が妹。大切に大好きな家族だよ。それはこれまでもこれからも変わらないから。」

「…くいな。俺の昔馴染みの名だ。あの時、咄嗟に呼んじまった。今さらだが、そんな安易な由来で名前決めさせちまって悪かったと思ってる。」

ゾロに保護された時に言っていた昔馴染みの名。私と顔立ちが似ているという子。詳しく聞いたことは無かったが、ゾロは私の名に小さな罪悪感を抱いていたらしい。

「…くいな…く、いな…りいな。うん、良いんじゃない？私は気にしないよ。でも、昔の彼女が名付けの由来かあ。ちよつとショック…」

「カツ?!ち、違げえ！そんなんじゃないやねえ!!」
少しばかりの悪戯に大袈裟な反応を示し慌てているゾロを見て私は笑ってしまう。

ゾロはそれで悪戯だと気付き、大きく息を吐き一気にお酒を煽る。
「…俺とくいな。どっちが先に世界一の剣豪になれるか勝負だ、つて

約束した矢先にあいつは事故で死んでしまった。それは今でも引き摺ってんのかもしれねえ。

だが、約束だから、あいつの為につて訳じゃねえ。俺は、俺の昔からの夢を叶えるために世界一の剣豪になると決めた。

だから、誰が相手でも負ける気は無え。お前が相手でもな。」

そう言つてゾロは瞳に闘志を滾らせ不敵に私を見据える。その瞳に少しだけの安堵と僅かにも闘争心が沸き立つ。

くいなさんとの約束の為、なんて言つたら軽く軽蔑していただろう。死者との約束を言い訳に剣を振るうなど誰も幸せになんてなれない。

「…じゃあ、ゾロの三刀流と私の無刀。この先の航海でどっちが名を馳せるかって勝負をしようか。まあ、剣士としてはゾロが上手でも賞金首としては私が一步リードしてるけどね？」

「…いいぜ。その勝負乗った。妹だからって手は抜かねえぞ。懸賞金なんてあつという間に追い抜いてやるさ。」

ここで新たな勝負を約束し二人で不敵に笑いあっているとガン・フォールが目を覚ましこちらへやって来る。

軽く挨拶を交わし皆の会話を眺めているのだがどうも違和感を覚えてしまう。

原作知識のせいで常に既視感デジャヴが付きまとうのだ。会話に加わろうものならば、まだ知り得ない情報を口にしないよう細心の注意が必要だろう。

これではストレスで胃に穴が開いてしまいそうだ。

なので皆の会話を聞くことに徹して、問い掛けには相槌や簡易な言葉を選ぶように心掛けた。

原作への抵抗は今為べきではない。一先ず皆が寝静まってからの行動をと言い聞かせる。

※ ※ ※

皆で取り囲んでいたキャンプファイヤーの組み木も既に鎮火し、麦

わら一味もサウスバード、雲ウルフらも安らかに寝息を立てている。私は静かにテントを抜け出して森に木霊する木槌の音の下へと向かう。霧が深く微かに目視でメリー号を確認出来る場所まで移動し、目を凝らす。

本当に愛された船にのみ宿る妖精 クラバウターマン。原作ではウソツプさんが視るはずなのだが、それよりも早い時間なので今は私一人だ。

伝説として語り継がれる妖精をこの目で拝めるとは光栄である。一番の新人りである私が彼らの絆の邪魔をする訳にはいけないので、遠目に眺めてすぐに移動した。

移動した先は神の島^{アップバーヤード}北東の離島。シャンディアが一時的に集結している場所だ。数組に別れ警戒の為に巡回しているのが覇気で察知できたので最寄の三人組みの方へ足を運ぶ。

こちらに気付いた巡回中の三人は各々がダイアルや武器を構えたので私は両手を挙げて敵意が無いことを示し用件を伝える。

「こんばんは、青海の者です。モンブラン・ノーランドのことで来たとワイパーさんに伝えて下さい。」

シャンディアの二人は私を警戒したまま残り、もう一人は疑問を浮かべた顔のまま走りだした。初対面の青海人がリーダーを名で呼び、見知らぬ者のことを伝えろと言うのだから戸惑うのも当然だろう。

幾分か経った頃、息を切らせ慌ただしく走るワイパーが現れた。シューターというウェイパーを着けていないところを見るに、余程気が動転しているのだろう。

「…青海人がっ…なんで!…ノー…ランドのお!!」
「まずは落ち着いて下さい。話はそれからしましょう。」

息も絶え絶えのリーダーに戸惑いを隠せない見張りの二人を傍目に、能力で水を取り出しワイパーに渡す。少し怪訝そうに私を睨むが水を引ったくり一気に飲み干した。

「…なぜ青海人が俺の名を知ってる?なぜモンブラン・ノーランドの名を知っている?」

「せつかちな人ですね。もう一人?の来賓もそろそろ来ますのでまず

自己紹介からしますね。

昼間あなたと交戦した麦わら帽子の人を船長とする、麦わら海賊団船員のロロノア・リィナといいます。」

そうして私はモンブラン・ノーランドの子孫であるモンブラン・クリケットと青海での『うそつきノーランド』の話を掻い摘んで話した。そして、麦わら海賊団の目的である黄金の話に差し掛かろうというところで、丁度来賓の登場のようだ。

「ジュララララ・・・」

ズリズリ、ウネウネと巨大な身体をくねらせながら離島へと身を乗り上げる大蛇ウツバミに気付きシャンディアの面々は警戒を最大限に引き上げる。そんな彼らを左手で制し、右手を挙げて私は声を出した。

「ジュララ、こつちだよ〜！おいで〜!!」

大蛇改め、ジュララには既にカルガラとノーランドの経緯を説明済みである。

言葉が通じるか不安ではあったが大人しく話しを聞いてくれたのだ。二人とその仲間達は既に没していると話すと静かに涙を流し悲しむ素振りを見せた。そして、彼らの居る天の上まで聞こえるように再び大鐘楼を鳴らす、と話すと更に涙を流し喜ぶ仕草を表した。

原作通りカルガラとノーランドの約束を、大鐘楼の音を忘れずに今でも待っているのだ。

私は400年もの間待っているこの子は人々の闘争のせいで傷ついてほしくはないと、巻き込んではいけなくと強く思ってしまう。

私の下へ首を伸ばし甘えてくるように擦り寄って来るものだから思わず撫でてしまうが、如何せん大きさが違いすぎるため一歩間違えれば押し潰されてしまいそうだ。

「この子はカルガラとノーランドが可愛がっていた大蛇ウツバミです。当時は小さな子供蛇で彼らと共に暮らしていたようです。400年でこんなに大きくなったけれど、未だに彼らを憶えている賢い子ですよ。」

「…空の主が、大戦士 カルガラの?」

「ジュラララ・・・ジュララ・・・」

ワイパーを見て、言葉を聞いて思うところがあるのだろう。ジュラ

ラは静かに涙を流している。

それをみてワイパーは膝を着きジュララを見上げて奥歯を噛み締めて必死に涙を堪えているようだ。

「私たち麦わら海賊団の目的はエネルギーを倒し、ジャイアントジャック巨大豆蔓の天辺付近の島雲にある大鐘楼を打ち鳴らすこと。青海で生きるノーランドの子孫へ、スカイピアで生きるカルガラの子孫へ、そして天の上の彼らへ鐘の音を届けてみせます。…協力しろとは言いません。私たちの行動を阻害しないようお願いしたいんです。」

その後、麦わら一味は明日行動を起こすこと、エネルギーはゴロゴロの実の能力者だということ、ルフィさんと私はエネルギーに対応出来ることなどの説明を告げる。

私としては道中の神官を含めて相手にするので任せると言いたいところだが、流石に400年間も続く抗争の決着を他人任せになどする気は無いだらう。そう思い至り自重する。

「俺たちには…シャンディアとしての誇りと使命がある。アップバーヤード神の島を、ヴァース大地を取り戻しシャンドラの火を灯す。その為に400年も戦ってきたんだ。おいそれと引く訳にはいかねえ。…だから、俺たちはやるぜ。お前たち青海人に手出しはしないと約束する。雑魚共は任せろ。」

「ありがとうございます。ですが、命は大事にして下さいね。くれぐれも排撃リジエクトタイアル貝の使用は一度までに控えて下さい。」

カルガラとノーランド、ウツバミ大蛇の事に関してもそうだが、私が知り過ぎていいる事にシャンディアたちは驚いているようだ。

「あなたたちの言う『心網』マントラですが、青海では『見聞色の覇気』と言います。私がそれを使えるだけの話です。因みに、覇気を使える人は沢山いますよ。」

実際は原作知識なのだが、嘘も方便というやつだ。彼らからすると心網マントラとは得体の知れない力らしいので、そういう事にしておけば納得してくれると考えたからだ。現にそれで納得してくれたらいい。

「…とりあえず、俺たちは明朝神の島アップバーヤードに討ち入りを仕掛ける。お前たちはやりたいようにやってくれ。」

「わかりました。必ずシャンドラの火を灯すと約束します。それと、出来ればこの子と仲良くしてあげて下さい。意外と人懐っこいですよ。」

私はジュララの口元を撫で微笑むと嬉しそうに身体をくねらせる。ワイパーは静かに首を縦に振り右手を差し出したので私も右手を差し出し握手を交わす。

「ジュララ、争いが始まったら森は危ないから入っちゃ駄目だよ。ちゃんとこの人たちの言う事を聞いて良い子にしててね。」

「ジュラ：ジュララ：」

大きな頭を何度も動かして肯く動作を表し、私に頬擦りしてくる。その光景を見てシャンディアたちは感嘆の声を上げる。

※ ※ ※

皆は寝息を立てているはずなので静かにキャンプ地へと戻る。既に木槌を振るう音はやんでおり湖畔は静寂を纏っている。

私はメリー号の下へ歩を進め、継ぎ接ぎだらけの船体を眺めてからそつと撫でた。

ゴーイングメリー号はウソップさんの居たシロップ村からの航海を支えてくれた大事な仲間だと聞き及んでいる。

海賊船としては小さな船ではあるが、皆の大きな夢を乗せここまで運んでくれたのだと感謝しなければならない。

先日加入したばかりの私は短い付き合いでしかないが、一味の皆と同じように愛することは出来る。この先の航海を共にする楽しみに思いを馳せる。

「メリーくん、これからよろしくね。」

見上げた船首の羊が微笑んだように見えたのはきつと見間違いではないだろう。

※ ※ ※

翌朝、修繕されたメリー号を見て驚いている一味を他所に、私は一人で昨日の後片付けや冒険の準備に走り回る。

私が不在の間にキャンプの準備をして食事まで作ってくれていたのだ。片付けや準備くらいは朝飯前である。

大まかな準備も済み、地図を広げたナミさんからの指示を探索組、脱出組で受ける。探索組は原作通りルフィさん、ゾロ、ロビンさん、チョッパーさんの四人。脱出組はナミさん、ウソップさん、サンジさん、私、ガン・フォール&ピエールだ。

「…さて、二手に別れる前に昨夜私が伝え忘れていた事を発表します！」

さあ、これから冒険だ！というところで引き止められた一同は呆れた顔で私を見ている。

「ゴホン…まず、シャンディアの人たち敵ではありません。私たちの邪魔はしないように説得済みなので会ったら挨拶くらいはして下さい。

それから、エネルギーはゴロゴロの実の能力者で、『雷人間』です。対処するのは『ゴム人間』であるルフィさんか私に任せて下さい。

最後に、黄金の大鐘楼は島中央にそびえ立つ巨大^{ジャイアントジャック}大豆蔓の天辺の島雲に引っかけたままなので最初に辿り着いた人を見付けて盛大に鳴らしましょう。以上です。」

ナミさんの鬼の様な形相を見るのはこれで何回目だろうか。私は無抵抗のまま正座する事を余儀なくされる。

何故そんなことを知っているのかと問い質されるが、親切なシャンディアからの

情報だと誤魔化した。本当の事を明かす訳にはいかなないので仕方ない。

「あ、それとゾロ。この前渡した予備の刀を持って来て。」

麦わら海賊団に加入した際、ゾロへの土産として渡した予備の特別製の刀を二振り、保険として持たせなければいけない。

「この白い柄の刀が刃の部分に海楼石と同じ効力を持たせた物。^{ロギア}自然系相手でも斬り伏せる事が可能で、切れ味は良業物以上を保障す

る一振りよ。エネルギーを追い返すくらいは出来ると思う。

こつちの赤い柄の刀は私の能力を付加させた物。勿論、境界線を操る方のね。あらゆる境界線を断絶する刀よ。使い手の意思に関係無く斬り過ぎるから注意してね。普通の刀では切れない雲なんかで使つて。」

「…どこでこんな物作つてんだよ。」

簡単に刀の用途を説明するとゾロは頭を抑え項垂れてしまった。

「私の無刃の刀を造る時に出来た副産物だけど、ゾロなら使えそうだったから持つて来たの。」

深いため息を漏らし、腰の雪走と三代目 虎徹を船室へ置きに行くゾロは既に疲労感を漂わせていた。

「それとチョッパークン。きみは船医なんだから無理して怪我なんかしないようにね?」

「うん、気を付ける。けど、いざという時は戦う。おれも海賊だから!」

チョッパークンの意気込みは高いようで安心するが、原作ではオームで手酷くやられている。その前に合流しなくてはならない。

私は意識の一部を切り離しチョッパークンと極僅かに同化させる。勿論、昨日新たに開発した能力だ。

意識だけを切り離しても全方向に意識が向かう為、注意散漫になつてしまい見聞きする事が上手く出来ず使い物にならないのだ。つまり失敗である。

なので、切り離れた意識をチョッパークンと同化させ、チョッパークンの視覚と聴覚を共有する方法にしたのだ。これだとチョッパークンの視覚・聴覚範囲での事柄を察知出来る。

ゾロが船室から戻り、これ以上の横槍は無いかと皆が私に視線を集める。自業自得なため蔑みの視線は潔く受け取り、出発の合図をルフィさんへ促す。

「おーしーそんじゃ行つくぞお!!」

「!!!」

※ ※ ※

現在メリー号は雲の川をゆつくりと巡航中である。雲の上なので天気は快晴、風も心地よく吹き快適な航海だ。：嵐の前の静けさでも表せばいいのだろうか。

ウソップさんは船長代理として舵を取っていて、私はなぜかピエールに懐かれている。今まで動物と触れ合う機会など無かったのだからなかったが、どうやら私は動物からは好かれる質のようだ。

ナミさんがガン・フォールの薬を船室へ取りに行き、サンジさんは船の片付けを終わらせる頃、ガン・フォールがスカイピアの歴史を語りだした。

400年前にスカイピアに打ち上げられた大地^{ヴァース}、それを『聖地』と崇めるスカイピアの住人、故郷を追われたシャンディア^{ヴァース}、大地を巡る戦い、神 ガン・フォールの前に突如現れたエネル、空の騎士となった理由、エネルの神の真似事：原作知識で知り及んでいるとはいえ、空に住まう者たちが私欲の為に行動した結果が今なのだと聞き少し気分が悪くなる。

当時のシャンディアは自然災害の被害者でしかない。そんな状況の中一人、また一人と侵略者に命を奪われ、最後には故郷さえ奪われたシャンディアたち。自分の家族や集落を守る為に、親友であるノーランドとの約束を違えぬよう故郷を守ろうと戦ったカルガラはどんな気持ちだったのだろうか…

一族の無念を、悲願を語り受け継いできたシャンディアと、それを過去の事だと割り切り和平を築こうとした神 ガンフォール。それでも、歩み寄ろうとしたガン・フォールは正しいのだろうかと思う。ワイパーにその真意は伝わらず争いは激化してしまっただのが悔やまれるが。

一通りの歴史を語り終えたガンフォールにナミさんの黄金講座が開かれ、その後はガン・フォールの空の戦い方講座 様々な貝^{ダイアル}編が催される。

私は話を聞きつつピエールと戯れていたが、常にチョッパーくんか

らの情報は確認している。

探索組はロビンさんが道を正しながら順調に進んでいるようだ。

本来ならジユララに襲われ分断される四人だが、ジユララは離島に避難させているのでその心配は無い。

原作では分断された後に交戦するはずだったシャンディアや神兵だが、ワイパーの指示なのか今は積極的に探索組を避けてくれているようで未だにシャンディアにも神兵にも接触していない。

ふと、サンジさんの口から心網マントラという言葉が出たのでそちらに気を向ける。ガン・フォールは、自分には使えない得体の知れない力で『聞く力』であるらしいと説明している。

「青海ではそれを見聞色の覇気と言うんですよ。」

私はピエールと戯れつつこの機会を待っていたのだ。ガン・フォールの説明に便乗し、覇気存在を知らせ興味を持たせることが出来れば、極々自然に会得の為の鍛錬を促すことになるからだ。

使えるかは個人の素質なので無駄になる可能性もあるのだがこの際関係ない。

「私は全ての覇気を使えますが、素質に依るらしいので皆が使える訳ではないそうです。」

見聞色の覇気は普段よりも気配を強く察知する力のこと、相手の行動を先読みしたり、心や感情の動きを読み取ることも可能です。あと、広範囲での気配を察知出来ます。」

事も無げに説明する私と呆然とした表情で口を開けたままの四人。ピエールはピエと首を傾げている。

こんなはずではなかったと心の中で後悔しながら私は本日二度目の正座でナミさんからお説教を受けている。

「あんたはいつも説明が遅いの！大事な事は最初に言いなさい!!毎回毎回後出しで聞かされるこっちの身にもなり「ナミさん、後ろに来ます。」なさい……。」

ナミさんが困惑しながら振り返ると、バリツという音が耳に届くと同時に船の手摺りに腰掛ける半裸の男が現れる。

私は覇気で事前に察知出来たが、皆にとつては突然見知らぬ男が現

れたように見えたのだろう。

ナミさんとウソツプさんは酷く狼狽えていて冷静に相手から距離を取れずにいる。サンジさんは慌てる二人の盾になろうと一歩前に踏み出す。

「はじめまして、神・エネ^{ゴッド}ル。これから黄金を頂きに行くところだったんですよ。ここであなたを倒せば手間が省けます。」

私は立ち上がりながら刀を抜き、敵意が私へ向かうように敢えて挑発する。エネルの意識がこちらへ向いている間に二人が少し離れてくれれば良い。

「ヤハハハハ、そんなもので神を殺れるとでも？」

エネルは右手をゆっくり挙げ人差し指を私に向けると瞬時に放電し数百万ボルトはあろう雷が襲い掛かる。電気の性質に従い、雷は私の脳天から身体を通り、足から船体へ、そして雲の川へと流れる。^{ミルキールード}

このときエネルは勝ち誇った顔をしていることだろうと考えると微かに笑みが零れる。

「…あれ？この程度ですか。」

エネルの放電は私を貫いたように見えるが、実際は体表面の僅か数ミリを滑り流れただけで私は無傷だ。自身の境界線をズラし私に害の無いように電気を流しただけなのだが、エネルにとっては雷が効かないように見えただろう。

雷の効かない人間など初めての体験にエネルは目を見開き、大口を開け、鼻水を出して面白い顔で驚愕している。

そこに私は追い討ちとして霸王色の覇気を仕掛けるが、こちらも初めての経験だろう。存分に畏怖を感じてもらおうべく最初は微弱に、除々に出力を高めていき気を失う寸前まで強めて発してゆく。

「雷は所詮自然災害、つまり天災です。あなた如きが神だったとしたら、私はあなたにとって何ですかねえ…神災とでも言えбайいのでしようか？」

膝を着き頭を垂れて何とか意識を保つエネルに言葉を投げ掛けるが返事は無い。思っていた以上に私の覇気が強かったのか、それともエネルが単に弱かったのか判断は出来ないが、これでは弱い者虐めの

ようで気分が良くない。すぐさま覇気をおさめ後ろに下がる。

「…つぐ。貴様、一体何者だ？」

「ただの青海人ですよ。」

「…すぐに後悔させてやる。」

それだけ言い残してエネルギーは雷化し姿を消した。おそらくマクシムへ向かったのだろう。

先ずエネルギーの撃退は済み、あとは副神兵長の迎撃だ。直に丸い双子がここへ訪れるはずなのでその前にサンジさんへ視線を向ける。

「あと二人来ます。速攻で終わらせましょう。」

サンジさんは煙草に火を付け頷く。ナミさんは何か言いたげに私から視線を離さないが、それは後でと目配せして私たちの後ろへ下がらせる。

「ほっほほーう!!」

「ほっほほーう!!」

奇声を上げながら現れたのは丸い顔と胴体の双子、ホトリとコトリ。

こちらは皆無傷のままエネルギーを追い返したが、やはり大まかな流れは原作通りに進むようだ。

私は間髪を入れず貝ダイアルを仕込んだ二人の手袋に狙いは定める。

無言のまま双子に歩み寄り、あと一歩で間合いに入る距離まで近付いたところで刀を振るう動作に移る。

双子は同時に跳び上がり後方へと下がるが、勿論双子の行動を先読みしてからの攻撃だ。

斬り結ぶは数にして八つ。

『六式』 『剃』 での瞬動とガーブさんの部下 ボガードさん直伝の瞬速の剣。

私は跳び退く双子を追い越し、彼らよりも後方へと着地し問い掛ける。

「八つの音色は聴き取れました？」

自身に掠り傷一つ付いていない事に奇声を上げ笑う双子だが直に気付いたようだ。手袋は切り裂かれ貝ダイアルが使用不能になっていること

に。

「仕上げをお願いします。」

「おう、任せろ。」

「^{ダイアログ}貝やウエイバーなどを使えなければ『空の戦い』は意味を成さないし、サンジさんなら地に足を着けた戦いならば後れを取ることは無い。安心して双子の処理を任せられる。」

これで脱出組での危険は無事回避出来たはずなので、探索組へと合流するようにナミさんへ話し掛ける。

「覇気についてや疑問などは後でお答えします。探索組は現在バラバラにはぐれて行動してるみたいです。私があつちに合流しても良いですか?」

エネル、ホトリとコトリに対峙しつつも探索組の状況把握は怠らずにいたのだが、何故か原作通りバラバラになっている。

元を質せば、一行の行く手に森に飲まれた民家の遺跡が在った事が原因だ。

ロビンさんがそこを調べたいと進言し、ルフィさんとゾロ、チョップパーくんは先に進むことになったのだが数人の神兵と接触し散開したのだ。

神兵程度ならば各個撃破は容易いだろうから心配はしなかった。ルフィさんとゾロの情報は途切れたがチョップパーくんの情報は把握している。

原作の流れでゲダツとの交戦も既に始まり直に終わるだろう。

なので、チョップパーくんがオームと出会う前に合流しておきたいのだ。

ナミさんは大きいため息を漏らして私を睨み付けて口を開いた。

「あんたが何考えてんのか知らないけど、そうやって自分一人で背負い込むのは気に入らないわ。戻ってきたらちゃんと説明して貰うからね!」

…それと、もっと皆を頼りなさい。仲間でしょう?」

「…今回ばかりはそうもいかない事情があるんです。」

戻ったら全て話します。ごめんなさい。」

ナミさんに頭を下げ、サンジさんへ後のことをお願いして私は
チョップパーくんの下へ転移する。

やはり思い通りにはいかないなあ、と反省しつつ今後の事を考える
のだった。

12 ・ 思惑と改変

マリソフオード 海軍本部 中将執務室

中年の男性将校はソファアに座して待っている。対面のソファアへ未だ現れない待ち人へ不満を募らせる事は無い。

待つ事に慣れていく彼にとって数時間など誤差の範囲でしかないのだ。

予め対面のソファアへ貼り付けているステッカーは待ち人が訪れる為の目印だ。

それと同じ位置へ突然スーツ姿の男性が現れるが、特段驚いたりはない。

「遅くなつてすまない。」

そう言いはするが頭を下げることは無い。目上の者に対する敬意の欠けた態度だが、互いに気にする素振りはない。

「いや、面倒な頼み事を引き受けてくれたんだ。助かったよ、シールくん。僕としてはもう少し時間が掛かると思ってたからね。予想より早かったくらいさ。」

朗らかに受け答えるドリフトに対しシールは大きなため息を漏らした。

「聞き及んだ以上に期待できそうで楽しみではあるが：ドリフトさん、あの娘はまだ不安定だ。記憶が欠落している為だろうが、自身の力をまるで理解していない。やはりあなたが出向き説明すべきだと私は感じたのだが？」

「確かに僕が全てを伝えればリイナくんも少しは考え直してくれるだろうね。だけど、まだ『しらほし』と出会っていないから時期尚早だ。それまでは情報を小出しにするべきなのさ。」

それに彼女は転生から二年しか経っていない。まだ子供なのだから身体的、精神的にも未発達なのは仕方が無いことだよ。僕たちのように達観していないのは当然だろう。」

転生者集団^{チーム}は当然、皆が転生者である為、互いに対等な立場であるドリダーであるドリフトは提唱している。前世での記憶が引き継

がれているので、現在の年齢や性別、立場などは重要では無いということだ。

だが、その言葉とは裏腹に、実際はドリフトを除く者達が対等なだけなのだと言っている。

何故かドリフトは原作知識では知り得ない『転生者の情報』すら知り得ているのだ。そんなドリフトを対等と呼べるだろうか。それに対してシールは前々からの疑念を深める。

「なぜ今ではいけないのか理解し兼ねるな。私たちには碌な説明も無く事を運ぼうなど対等な立場が聞いて呆れる。」

「その時が来たら説明すると以前にも言ったはずだよ。それで納得してくれていたじゃないか。」

なに、二年程度あつという間だよ。麦わら一味が新世界へと進めば僕らの計画開始だ。」

シールは険しい表情でドリフトを見詰めるが、当人は軽く笑みを浮かべ悠々と受け流している。

無言のまま数十秒の時間が流れ、それを打ち切るかの如く執務室の扉が荒々しく開かれた。

その時点でシールの姿は無く、室内にはドリフトがソファアに座っているだけだった。

「ドリフトおるかあ?」

「ガープさん、入室の際はノックをいつも言ってますよね?」

「男が細かい事を気にするなっ!」

ドリフトの苦言をブワツハツハと豪快に笑い飛ばしガープは対面のソファアへ腰を下ろそうとする。

「ん?なんじゃこりゃ?」

高級なソファアに貼り付けてある不釣り合いなステッカーを部屋の主に許可も無く剥がし、丸めてゴミ箱へと投げ入れた。

そしてドカツと腰を下ろし、事も無げに口を開く。

「リイナがジャヤで確認されたそうじゃ。どうする?」

「ええ、部下の部隊が向かったのですが、既にジャヤには不在だと報告を受けてますよ。今は空の島へ飛んだと。」

「なんと！突ノックアップき上げる海流ストリームでか!?やるのう！…で、追うか？」

「どうも出来ないでしょう。順路で追うとなると時間が掛かります。降り待マテつにしてもどのルートルートで降りてくるか分からないので現状は待機です。」

ウム、と顎あごに手を添え悩む仕草のガープと静かに微笑むドリフト。

その後も二人で元部下リイナと海賊団麦わら一味についての会話を続けるのだった。

※ ※ ※ ※ ※

探索組のルフイ、ゾロ、チョッパは数名の神兵に遭遇し、散開した後に追ってくる者を各個撃破する為にそれぞれが行動に出た。

「…おいおい。」

その過程で困惑気味に呟いたのはゾロだった。原因は足下に転がる息絶えた神兵である。

二人の神兵が追って来ることを確認したゾロは木々の開けた場所で迎え撃とうと巨大樹の森を走った。だがウェイバーの一種であるシューターを自在に繰り迫る神兵は斬撃アックスダイアル貝の攻撃を交えながらゾロへと肉薄する。

走り続けながらの攻防は難しいと踏んだゾロは襲い来る神兵の斬撃アックスダイアル貝を躲し様に刀で斬り伏せたのだが、選んだ刀が炎あいた。

妹から念のためと持たされた赤い柄の刀を試そうと抜いたのだが、あまりにも斬れ過ぎたのだ。

まるで豆腐にでも刃を立てた様に、抵抗も無く神兵を二つに裂断してしまった。

本来ならば致命傷とまではいかない程度の加減をしたつもりのゾロはその事に言葉が上手く出なかった。

『斬り過ぎるから注意して』という言葉は正に額面通りの意味であった、と二つに分かれた神兵が体現している。

その様子を理解出来ないまま呆然と立ち尽くすもう一人の神兵に声を掛ける。

「興味で抜いた刀を使って殺めちゃったのは本望じゃねえが、それでも生き死にを賭けた勝負だ。文句は言わせねえぞ。」

「…我々は神・エネルアムネンに仕える神兵。もとより命を賭ける所存だ！
メエ〜!!」

ゾロの言葉で我に返り自らの使命を遂行しようと声を張り上げ構える神兵。

相対する青海人　ゾロと神兵自身の実力差はどうに理解出来ている。

命乞いをすればそのままゾロは去り、今すぐ逃げ出せばゾロは追っではこない。それも理解出来ていた。

しかし、それが出来ないでいたのはここで命を繋ぎ止めたとしても、使命を全う出来なかつた罪でエネルに裁かれるという恐怖からだった。

「…てめえの事情は知らねえが、手加減はしてやれねえぞ。」

半身を開き腰を落として右手の平を前方へ構える神兵。対するゾロは腰に下げた刀の柄に右手を掛け自然体に構える。

踏み込み無しの状態からシューターに依る推進力を用いて迫る神兵を、ゾロは息を深く吐き一拍待つ。自らの呼吸と相手の呼吸を重ね感じ取る。既に眼前へと迫る神兵の右手の平をかわす猶予すら無い。

「メエ〜!!」

「…獅子歌シシソング！」

キーン、と抜刀と納刀の金属音が重なり聞こえる程の一瞬。

ゾロと神兵は交差し、先程とは立ち位置が逆になり互いに背を向けて立っている。

「…ぐっふっー」

「命まではとらねえ。そこで寝てな…」

勝てぬと知りながらも挑んだ神兵に対する敬意を払い、居合いの一太刀で戦闘不能にするゾロ。

その心境は、『呼吸』を会得し扱いの慣れを体感した歓喜と、神兵に根付く恐怖への興味で占めていた。

「…エネルってのはそんなに強えのか。」

妹からの情報を思い出しつつ腰に下げた三本の刀の内、白い柄を掴む。

「二丁やってみてえな…」

そう呟き目的地の遺跡を目指して歩を進めるが反対の方向へと突き進むゾロだった。

※ ※ ※

予定していた人数を変更し、精鋭のみを選抜して神の島へと侵攻しているシャンディア達。

リーダーであるワイパーを先頭に左右後方へ隊列を組み、神兵を引き寄せ撃破してゆく。

紐の試練 シュラを打ち倒した後も少数で神兵を相手取っているため疲労が溜まっていて見える。

「ここで少し休む。負傷したやつは治療を、各々装備の確認をしとけ。どれだけの神兵がいるか分からねえ。周囲の警戒は怠るなよ。」

巨大樹の枝に留まり休憩の指示を出すワイパー。しかし、当人はシューターを使い跳び回って周囲の哨戒を継続している。

打ち倒した神兵の数は既に30を超えて負傷が目立つ者、武器が心許ない者、疲労が色濃く出る者など、皆余裕が無くなってきた。

リーダーであるワイパーは先頭に立ち戦い、リジエクトダイヤル排撃 貝も一度使用している。他の者よりも負傷、疲労が激しい。

「…あいつらは必ずやってくれる！俺がこんなところで倒れる訳にはいかねえんだ!!」

仲間へ、そして自身にそう言い聞かせて今にも倒れそうな精神と肉体を奮い立たせているのだ。

ふと、哨戒途中で見覚えのある麦わら帽子を発見し地面へと降り立ち話し掛ける。

「…おい、こんなところで何やってる?」

「ん?お前昨日のやつか。…あ、リイナが言ったのってお前達か?」

「ああ、そうだ。俺たちシャンディアは神兵達を受け持つ。お前達は

さっさとエネルギーの待つ神の社へ行け！」

このままでは自身も仲間もそれ程長くは保たないと自覚し少しの焦りを覚えているワイパー。

目の前の麦わら帽子たちには早く先へ進んでもらわなければならぬのだと掻き立てられる。

「今向かってんだ。じゃあな！」

「…そっちは逆だ。」

目の前の男は道に迷いこんな場所に居るのだとワイパーは悟る。呆れつつ湧き上がる疲労と憤慨を抑えこみ大きく息を吐いた。

「俺が連れて行ってやる。背中に乗れ。」

ルフィを背中に乗せ、一旦仲間の下へ戻り巨大な豆蔓へと向かう事を伝える。
ジャイアントジャック

それぞれの隊列は崩さず警戒しながら進み、神兵を見付け次第迎撃するよう指示を出しシューターで駆け出す。

「…見た通り俺たちシャンディアは満身創痍だ。昨日のリイナって女言葉の言葉を信じてお前達に賭けるしかない。…だから、頼んだぞ！」

「なんか知んねえけど任せられた！エネルギーってやつをぶっ飛ばす!!」

ワイパーは巨大樹の森を縦横無尽に駆け回り目的地への最短距離を突き進む。

※ ※ ※

原作の通りチョッパーくんはゲダツを倒して海賊としての心構えを新たに、力強さを秘めた顔付きをしている。

「チョッパーくん！」

「あ、リイナ…なんでここにいるんだ？」

私は脱出組として船に乗っていたはずなので、当然の疑問だろう。「船の方はもう大丈夫そうだからチョッパーくんの雄姿を見に来たの。格好良かったよ！」

「そ、そうか？ バツキャロー！ おれは海賊だからな！ 当然だろうオメェ!!」

小躍りしながら罵倒する様は初対面の時に経験済みなので、それが嬉しい時の照れ隠しなのだも知っている。

「ふふ。目的の黄金はこの上だよ。一緒に上ろうか？」

巨大な豆蔓を指差して進行を促しつつチョッパークンを抱き上げ二分化した意識を回収する。

私は靴底に境界線を形成し階段を上る様に空中を登る。宙を歩くという奇天烈な行動に驚愕と感嘆の声を上げるチョッパークン。

「能力で靴底に境界線を張ればこうやって宙を歩けるんだよ。海の上も歩けるけど、ぼーつとしてたら船に轢かれるから注意しなきゃね。」
「そもそも海の上なんて歩けねえよっ！」

経験に基づいた注意を促すが冷静にツッコまれてしまう。

「そういえばルフィとゾロ、はぐれたままだ。もう先に行ってるのかな？」

原作ではルフィさんはジュララのお腹の中、ゾロは弁当を狙ったサウスバードに連れられて遺跡へ来るのだが…

四人で順調に遺跡まで辿り着けると高をくくっていたが見通しが甘かったようだ。

「…きつと二人はもうすぐ来るよ。ロビンさんは遺跡探索に夢中で遅れそうだけど。だから、上で待ってよう。ね？」

いざという時は能力で転移すれば良いと考えそのまま鉄の試練オームの待ち構える遺跡を目指し、ジャイアントジャック巨大な豆蔓の中層に架かる島雲を突き抜けて遺跡群へと到達する。

島雲を抜けて少し傾いた地面へと進むと、遺跡の中心部から大きな犬が駆け寄ってくる気配とソレを追う一人の気配を覇気で察知する。
オームとホーリーだと分かっているのでチョッパークンを下ろし身構えて待つがどうも様子がおかしい。

「待て」ホーリー！「待て」だ！…「待て」って言うてんだろーうがあ！！

飼い主の制止を聞かず勢い良く尻尾を振り乱しこちらへ駆け寄ってくるホーリーと、制止を聞かない飼い犬を必死に追い掛けるオームが視界へ入る。

私は原作とは違う出来事に更に警戒を強め、チョツパーくんは走り寄るホーリーに恐怖し私の後ろへ隠れる。

私たちの眼前まで来ると急停止し『おすわり』して私をじっと見詰めてくるホーリー。その後から息を切らせてオームが走り寄る。

「ホーリー…一体、どうした？…む、貴様ら…青海人か。」

私は警戒を緩めず領き、オームに息を整えるよう勧める。その間もホーリーは『おすわり』したまま尻尾を振り乱し、私から目を離さない。

「後から来る兄があなたの相手をしますので、私たちは待たせてもらいますね？」

「ふう、何を言うかと思えば…俺の名はオーム。ここは生く術なし、哀しみの求道。生存率0%『鉄の試練』だ。はいどうぞ、と見逃す訳なからう！」

オームはサングラスをかけ直し刀を抜いた。柄に鉄雲のダイヤル貝を仕込んだ物だと原作知識があるので対処は容易い。

私も柄に手を掛けオームへ応える。

「仕方ないですが兄が来るまでは相手してあげます。…ところで、この犬はどうします？」

「ふ、俺ブリーダーに反するなど言語道断。諸共『鉄の試練』の餌食となるがいいさ。」

冷酷に飼ホーリーい犬へと言い放つが当のホーリーは変わらず私の傍から離れない。

「…あなたが育てた犬でしょうに。チョツパーくん、ホーリーと一緒に下がって絶対に動かないでね？」

「わかった！」

チョツパーくんがホーリーと共に建物の陰へと移動したのを見計らい私も刀を抜く。

「さて、生存率0%が崩される時です。少し遊んであげます。」

「ふん、貴様も仕込み刀か。」

オームは私の無刃の刀を見て自身の刀と似た物だと勘違いしている。だが、だからこそ警戒したのだろう。互いに距離をとつての戦法

のはずだと思いつき最初の 一撃に勝負を賭ける。

オームが刀を振るうと鉄雲は瞬時に伸び、鞭の様になつて襲い掛かるが私は小細工などせず一太刀で薙ぎ払う。

「剣士としての弱点を補える遠距離からの斬撃。良い戦法ですが、その程度の速さなら簡単に対処出来ます。」

ならば、とオームは刀を振り乱し鉄雲を幾重にも生み出す。鞭の様にしなる刃の波状攻撃へと切り替えたようだ。

しかし、それらが私へ届く前に全てを切り落とす。私へ届く刃が既に無いとオームは悟り、再び無限に伸びる刃を幾重にも増やし、また伸ばして前後左右上下の全方向から斬撃を休む間も無く繰り出す。

だがその全てを私の迎撃範囲に入った瞬間に無刃の刀で切り落とす。私に触れること無く切り落とされた瞬間に無刃の刀で切り落とす。私に触れること無く切り落とされた瞬間に無刃の刀で切り落とす。

「無限に伸び、鞭の様にしなる刃だと分かってさえいけば対処は容易い。それに欠伸の出そうな遅さですからなおさらです。まだやりますか？」

「…青海には貴様の様な剣士が多く存在するのかわ？」

奥歯を噛み締め静かに問うオームに私は淡々と事実を告げる。

「私くらいの剣士は星の数程います。私以上の剣士も沢山存在します。」

あなたの剣は弱者をいたぶり弄ぶだけの見戯です。空島に格上が居なかっただけで自身は強いと錯覚し驕り高ぶっていただけ。

それが理解出来たのなら下ばかり見ていた自身を恥じて、剣士としての高みを見上げてはどうでしょうか。」

柄にも無く偉そうに剣士として説いてしまったが、私自身への言葉でもあると言ひ聞かせる。

「チョッパークン！ホーリー！出て来て良いよ!!」

オームの戦意は失せているのでこれ以上の戦闘は不要であると判断し、刀を鞘に戻してから避難している一人？と一匹を呼ぶ。

再び私の前に『おすわり』するホーリーに話し掛ける。

「オームはあなたの育ての親でしょ？それなのにあなたが私に懐い

ちやうからオームは拗ねて悲しんでるの。親は大切にしなきゃダメ！ちやんと仲直りしてね。分かった？」

ホーリーはワン！と鳴きオームの下へ駆け寄り、顔をペロツと舐め『伏せ』をする。オームは厳しい顔を緩め顎下から首下までを撫でている。

仲直り出来たようで私は安堵の息を漏らしチョツパーくんを抱き上げる。あちらがナデナデしているのを見て少し羨ましくなり、こちららはモフモフで対抗しているのだ。

そうして少しの間だけ互いに癒しを堪能していると、下層から巨大な豆蔓ジャイアントジャックを登り上がってくる気配と空を真っ直ぐにこちらへ向かってくる気配を二つ察知する。

不思議に思いながら巨大な豆蔓へ駆け寄ると、島雲を巻き上げて遺跡に着地したのはルフィさんとワイパーだった。

迷子になっていたルフィさんをワイパーが背負い連れて来てくれたらしい。下層の森で神兵を引き付けてくれたことに感謝すると自分達に出来る事をしているだけだという言葉が返ってくる。

そして徐々に近づく気配を見上げていると巨大なサウスバードの足に掴まったゾロが見えた。

森で迷い出発地点である生贄の祭壇まで戻ってしまったゾロをサウスバードが運んでくれたそうだ。サウスバードに感謝を伝えると律儀に一礼をして飛び立って行く。

ゾロから刀についての苦情が飛び出すが事前に注意したはずなので聞き入れるつもりは無く聞き流す。

「…なあ、何でリーナがここに居んだ？」

もつともな疑問をルフィさんは口に出すが私は大きな溜め息を吐き答える。

「ゾロとルフィさんがチョツパーくんからはぐれて迷子になつてのを察知してこちらへ加勢に来たんです。チョツパーくんは下層の遺跡で待ち構える神官を一人倒したんですよ？」

それなのに二人は森で迷子だなんて情けない…」

少し大袈裟に嘆き二人を煽ると、誰に対する対抗心なのか血気盛ん

に声を張り上げている。原作ではこの中層遺跡に集まった面々で生き残りの乱闘が巻き起こっていたはずなのだが、現在は穏やかな雰囲気
気が流れている。

しかし、ロビンさんが居るであろう下層遺跡でエネルギーが動けば一変
するはずだ。エネルギーの生き残り予想人数は五人だったはず。現在八
人と一匹。己のエゴで人数合わせのため暴挙に出る可能性は残って
いるのだ。

「青海人の剣士よ。俺が高みを見据える為に手合わせを願いたい。」
「おう、空島で一番の剣士たあ都合がいい。」

私が思考を深めている間にゾロとオームの勝負が決まっていて、私
たちから少し離れた場所へ移動し始めた。ふと気付きワイパーへ
シャンディアの動向を尋ねると、下層の森を哨戒して神兵を討ってい
ると答える。

^{アップバーヤード}
神の島に留まっては危険なのでシャンディアには離島で待機しても
らうようにワイパーへ頼み、エネルギーの位置を探る。下層の遺跡に一
人、上層に一人の気配は察知出来ることからエネルギーはまだロビンさん
とは接触していないようだ。

「チョップパーくん、この先はエネルギーが残ってるだけだと思うから一旦
船に戻っててくれるかな?」

「え? まだ黄金を見付けてないぞ?」

「ごめんね。あとでちゃんと説明するから今は言うことを聞いて。エ
ネルを倒したら皆を呼ぶから。」

それだけ言いチョップパーくんをメリー号へ転移させ、ゾロとオーム
の勝負の行方を確認するとゾロの防戦一方になっている。あれくら
いは簡単に捌けると思っていたのだが、存外に鉄雲の特性に苦戦して
いるようだ。

ルフィさんはゾロが勝つと信頼しているのか遺跡に座りサンジさ
んに作ってもらっていた弁当を食べている。

何はともあれ、これでゾロが勝った後オームと共にホーリーを
^{アップバーヤード}
神の島外に転移させれば残りは丁度五人になり、敵はエネルギーのみだ。
ルフィさんにエネルギーの相手をしてもらっている間に私はマクシム

による『デスピア』の阻止へ向かうように計画している。

※ ※ ※ ※

結論から言うとゾロとオームの勝負は原作通りゾロの辛勝だった。オームは剣士としての心構えを一新し、驕る事無く勝負に務めている分原作よりも隙の無い戦い方をしていた。

ホーリーは待機させ純粹に剣技での勝負だ。

対するゾロは遠距離からの鉄雲による猛攻に苦戦を強いられるが、戦いの中で『呼吸』を掴み赤い柄の刀を用いて切り落とすことで形勢は逆転。

愛刀 和道一文字から飛ぶ斬撃『百八煩惱鳳』ポンドほうを放ちオームを討ち倒した。

「…ちくしょう。刀に頼る戦いをしちまった。」

鉄雲を対処する過程で己の剣の腕の未熟さを痛感し呟くゾロ。私は敢えて厳しく言い放つ。

「相手に先手を取られて勝機を見失うなうようじゃまだだよ。ゾロの本領は剣技の応酬でしょ？どんな相手であろうと懐に入り込む為の戦い方をしないと。」

因みに、私はオームの戦意が折れるまであれを切り落とし続けました。」

ゾロはぐうの音も出ないと声を殺し拳を強く握り締める。

「でも、最後の飛ぶ斬撃は良かったかな。近付けない相手や遠距離からの攻撃への対処も予め考えていたのは自分の強さを過信していないってことだし。」

利点や有用性を考えると重宝する技だね。」

自身よりも格上の相手には懐に入り込む事が困難になる。そんな時に遠距離からの攻撃で隙を突く、若しくは隙を作る為には有効なのだ。

遠く離れた狙撃手や物陰に潜む斥候に対しても牽制、或いは迎撃として有効である。

ゾロが常に高みを目指す剣士として驕らず研磨していることは何える。

辛辣な駄目出しの後に良点には賞賛を贈る。典型的な飴と鞭ではあるが人が成長するには必要な事である。

ゾロとの会話を早々に切り上げ、倒れ伏したオームをホーリーの背に乗せて別の島雲へ転移する。

これで神の島には私、ゾロ、ルフィさん、ロビンさん、エネルギーの五人だ。下層に神兵が残っているかもしれないがそこまでは面倒見切れないので気にしない。

「ルフィさんは体力の温存が出来てるようなのでエネルギーの相手は任せますね。私は空島への被害が出ない様に動きます。」

「やつとか！任せろ!!」

道中で無駄な体力を消費せず、サンジさんの特製弁当を食べて満足気なルフィさんは元気澁刺といった風に準備運動を始めている。

それと、遺跡探索をお楽しみ中のロビンさんには悪いが一旦こちらへ転移させる。

※ ※ ※

「…へえ、そんなことになってるのね。」

ロビンさんへ簡単な説明を済ませ、ルフィさんがエネルギーと対戦中に為べきサポートをゾロとロビンさんへ頼む。

ルフィさんはいつでも良いぞと私を一瞥して上層に気を向けている。

勿論、ワイパーが下層へ降りてから今現在までの間は中層遺跡一帯の境界線をずらして状況を把握出来ない様にしてある。

エネルギーは急に心の声が聞こえなくなつたと感じ違和感を覚えるだろうが、『ゴロゴロの実』の能力で拡張された『心網』^{マントラ}で私の話を盗み聞きされない為には必要な対策である。

なので、私の能力を解除し、エネルギーに私たち四人の存在を認識させ降りて来させる。

「さて、聞こえてますよね？あなたの予想通り五人になりました。さつさと降りて来て下さい。それとも私たちがマクシムまで行きましようか？」

能力を解除し、敢えて挑発を言葉にすることでこちらへ来ざるを得ない状況を作り出す。

バリツと音が聞こえた時には目の前にエネルギーが現れていて皆が驚く。

「…なぜ青海人である貴様がマクシムを知っている？」

「あなた方という『心網』^{マントラ}ですよ。青海では覇気と言いますが…

もしかして、自分達だけが特別だと思っていたんですか？船であな
たを抑えた威圧感。あれも覇気の種類です。あなたが扱えない力を
私は扱える。それが現実です。あなたは神なんかではありません。」

「…後悔、させてやると言ったはずだ。既に準備は整っている。スカ
イピアの終焉を指をくわえて見ているが良い!!」

エネルギーは苦虫を噛み潰したように表情を歪め私たちを見渡し言い
放つと再び雷化し目の前から消える。

「…先程話した手筈でお願いします。ルフィさん、行きますよ!」

ゾロとロビンさんへ目配せし、無言で頷いたのを確認してルフィさ
んと共にマクシムへと転移する。

「…やはり来たか、青海人。」

エネルギーは黄金の棍棒を携え私たちを待ち構えていたようだ。それ
に反応しルフィさんが一歩前に出て拳を構える。

「ルフィさん、後はお願います。私は空島全域の守護にのみ徹しま
すので、何かあればゾロたちのサポートに頼って下さい。」

エネルギーをルフィさんへ任せて私は空島全域の空と同化する。

既にマクシムからは雷雲が吐き出され続けているので、能力で境界
線を操り放電の規模を調整していく。

当初、マクシムを無力化してしまうことも考えたのだが、スカイピ
アの住民へエネルギーの危険性を問う為にマクシムには原作通り空を飛
んでもらうことにしたのだ。

それと、一部分の境界線だけを解除して無人の島雲へ幾つかの雷を

落とすことで雷雲内の帯電量を調節し、尚且つ恐怖の演出効果を持たせる。これでスカイピアの住民やシャンディアたちはエネルギーが空島ごと消し去ろうとしていることに気付くはずだ。

本来ならば多数の死傷者を出し、コニスたちが命懸けで臨む事態なのだが、それを無かった事にする。

私の中層遺跡へ着いた頃にメリー号へ訪れたコニスとパガヤの気配は未だメリー号から離れてはいないので思惑通りに進行しているはずだ。

原作では多大な負傷者を出すはずだったシャンディアの侵攻部隊は、昨夜の説得が功を奏して少しの負傷者だけで済んでいるはずだ。今はワイパーと共に一時避難場所の離島に帰還しているのは覇気で察知済みである。

スカイピアの住民も今は多少の混乱はあるだろうが、原作程の被害は出ていないので今後の生活に支障は出ないだろう。

ガン・フォールが神だった時に仕えていた神隊は原作通り後ほど救出されるはずだ。

今私がすべきことは雷雲の境界を操り空島の被害を極力抑えること。

そして、空島ですべきことは原作の結末を極力変えずに、過程で起こる被害を最小限の留めること。

シャンディアの悲願、カルガラの約束、ガン・フォールの苦悩、元神達の罪、大蛇ウツバミの悲嘆、スカイピアの畏怖、他にも沢山の人のそれぞれの想いや願い。

原作で語られた筈の物語は私が知っている。書き換えてしまった物語の責任は私が背負う。あるはずだった悲哀も感動も憤怒も私が引き受けよう。

最後に大鐘楼が鳴り響き、感じるものは原作とは違うかもしれない。それでも、傷付くはずだった人たちが傷付かずに済むのならば後悔はしない。

私のやっていることは正しくはないのかもしれないが、間違っているとは思わない。

程よく皆が幸せになれる鐘の音が鳴り響く頃にその答えが見える
だろうとその時を待つ。

13 ・ 大きな困惑、小さな転機

空を飛ぶマクシムの甲板で対峙するルフィとエネル。

ルフィは中層遺跡に集まった際、リイナからエネルの目的を聞きいている。空島を青海へ墜とそうとしていること、大鐘楼の存在が知られれば奪われること。

それを阻止したいと訴えるリイナに反対する理由はなかった。

ジャヤでティーチという大男を屈伏させる姿と威圧感に少しの恐怖を感じたにも関わらず、自身の知らない未知の力を使い熟すリイナに僅かな憧れを抱いてしまったのだ。

そのリイナが空島を守ると言った以上、墜ちることは無いと絶対的な信頼をおいている。

大鐘楼を奪われる訳にはいかない。それだけが今のルフィを突き動かす行動原理になっている。

モンブラン・クリケット：猿山連合に鐘の音を届けてみせる。『黄金郷』はあつたぞと、空島は存在するんだと、俺たちは無事だぞと。「お前が私の相手か？…小娘の時のような遅れはとらんぞ！」

エネルは両手で構える棍棒に過度な電圧を掛け、電熱を用いて三叉の槍へと形状を変化させてゆく。

「貴様ら青海人には雷が効かない者が存在しているようだが、効かんとわかればそれなりの戦い方があるのだ。」

エネルの持つ黄金のトライデントには常に過電圧が掛けられ数百度という熱を帯びている。次いで、三叉の槍である形状はルフィの弱点でもある刺突を主体とする武器だ。

刺突と電熱、この二つの特性を持った武器はルフィにとって厄介な得物なのだ。

「私は神・エネル！私の前では何もかも無力！故に、神なのだ!!」
「神なら何でも思い通りになると思ってたのか!!」

言い様にルフィは右腕を伸ばし殴りかかる。

エネルは自身に物理的攻撃は効かないと高をくくり、ルフィの拳が自身の体をすり抜けた瞬間にトライデントで反撃しようと待ち構え

る。

しかし、自身の腹部にめり込んだ拳による激痛と己の能力が無効化した混乱で、地に伏す現状を受け止められずにいる。

「ハア、ハア…あの小娘といい、貴様といい…一体何だと言うのだ。」

「俺はルフィ。ゴム人間で海賊王になる男だ。リイナはよく分からねえけど、ウチの船員だ。」

「…カイゾク王？それはどこの王様だ？貴様よりあの小娘の方が風格があつたぞ。」

「海賊王は世界の偉大な海の王だ！今はリイナの方が強えけど絶対超えてみせるさ。だから、お前なんか俺が負ける訳にはいかねえんだ！」

「ヤハハハ…ご立派だな。決着を付けようじゃないか。…現在の空の王と 未来の海の王で！」

エネルより突き出されたトライデントがルフィを襲うが、避け様に転回して伸ばした足が回し蹴りを放つ。

エネルは左腕でそれを防ぎ右手に持つトライデントを幾度と振るう。

まずは躲し、次いで薙ごうとするが高熱を帯びたトライデントにルフィは思わず悲鳴を上げる。

エネルは心網^{マントラ}を駆使し、ルフィの動きを先読みして仕掛け続ける。

「ヤハハハハハ！高電熱のスピアだ。躲さぬと灼かれるぞ！それに斬撃が弱点のようだなあ!!」

「くそう、あの動きを読むやつ何とかならねえかな。…あそこだ！」

身を翻しエネルへ背を向け黄金の壁へと向かうルフィ。その黄金の壁に手足を伸ばし幾重にも連なる殴打と蹴りを打ち込む。

エネルにはそれが心網^{マントラ}のせいで攻撃の当たらぬ自身の撃破よりも船の破壊を優先するように見えたのだろう。

今なら背後からトライデントで串刺しに出来ると考え、エネルはルフィを追い掛ける。何故なら『意志を持つ攻撃』は心網^{マントラ}により避ける事が容易いと確たる自信があるからだ。

だが、エネルギーの思惑とは裏腹に黄金の壁からの『跳弾』が幾つも直撃し、視界と思考が数瞬機能を止めてしまう。

僅かな慢心が生み出した大きな隙を見逃さずルフィはエネルギーへ向き直し、勝負に打って出る。

「今だっ！ ゴムゴムのバズーカ！！」

ゴムの張力を活かし、後方へ伸ばした腕を引き戻した勢いのまま両手で打ち付ける。

数m後方より引き戻す際の腕の加速度とルフィの絶妙な加重移動による両手の掌打は凄まじい衝撃を生み出す。

あまりの衝撃に吐血し膝を着くエネルギーへの追撃を緩めず再び右腕を後方へ伸ばした。

伸ばした腕に音を立てる程捻りを加える。ゴムの特性に従い限界まで捻った腕は形状を戻そうと回転をしながら引き戻される。

「『ゴムゴムの回転弾』！！」

名に違わぬ回転する右拳はエネルギーの鳩尾を突き上げ、その衝撃でエネルギーは黄金の壁へと跳ね飛ばされる。

勝敗は決した。そう思える状況ながらもエネルギーは意識は繋ぎ留めていた。身体は上手く動かないが何とか乱れた呼吸を整え壁伝いに上半身を起こす。

「…これしきの、ことで…貴様を、今貴様を…封じれば。…再び、誰もが…私に怯え、崇め…奉る！我は、全能なる神である！！不可能などありはしない！！…見てみる、ゴム人間。墮つ島の絶望を……っ?!」

ルフィと対峙し周囲の確認に気をまわす余裕のなかつたエネルギーは気付けないのだ。マクシムは雷雲を吐き出せどその雷雲内に雷を落とす程のエネルギーが留まっていない事実。

スカイピアの住民は一斉に避難を始めてはいる。しかし、未だ実害の無い雷雲に大きな混乱は見られず、皆落ち着いて避難していることをエネルギーは察知する。

「なぜだ?! あれだけの雷雲だぞ…チツ、あの小娘か?」

「どうやってんのかは知らねえけど…ウチの船員凄えだろ?」

ルフィは純粹に仲間を自慢しニシシと笑う。その言動はエネルギーに

とって挑発としか呼べないものであった。

「…ふん。マクシムの出力を上げ、私自ら雷化すればどうとでもなる。」

既にある程度息を整え、僅かだが体力の回復したエネルギーはマクシムの出力を上げようと黄金の壁に放電する。

「っ?!させねえ!」

ルフィはエネルギーの行動を阻止しようと咄嗟に右腕を伸ばし殴りかかる。

しかし、それを予見していたエネルギーは厭らしい笑みを浮かべる。

「グロームバドリング雷 冶金”!”」

黄金の壁に放電しマクシムへの電力供給をしようと見せ掛けて、ルフィの動きを封じることが真の目的だったようだ。

不測の事態に殴り掛かる腕を戻せないルフィは策に嵌まり右腕に大きな黄金の球体を取り付けられてしまった。

「っ?!あつ熱いっ!何を…あ?抜け、抜けねえ!!外せこの野郎!!」

「ヤハハハ。なにも貴様と勝負する必要など無いのだ。邪魔立て出来ぬ様にすれば良いだけのこと。この金塊は貴様の善戦を讃えくれてやる。…さらばだ、青海のゴム人間。」

エネルギーはルフィをマクシムから落とそうと腕にはまる球体を思い切り蹴り転がす。

球体に巻き込まれ共に転がるルフィは何とか船の外枠に掴まるが、球体は船外へ落ちてしまいこのまま片腕で支え続けるのは困難な状態だ。

「…しぶとい奴だ。貴様らの居ない地で私は神として再臨させてもらう。墜ちろ、空島と共に!」

外枠を掴むルフィの腕を蹴り飛ばしマクシムから落下させ踵を返す。

一先ずはこれでいい。そう安堵するが自身の心網マントラは再び警鐘を鳴らす。

「…なんだ?船の近くにまだ声があるだ?!」

※ ※ ※

巨大な豆蔓ジャイアントジャックの中層遺跡よりも上層。神の社と呼ばれる場所にロビンは居た。

なぜそんな場所に居るのか。それは勿論、リイナからの助言に依るものだった。

『エネルはゴム人間であるルフィさんを排除しようと船から突き落とすはず。その時はロビンさんの能力でルフィさんを再び船に戻して下さい。』

眼下にマクシムを望むこの場所ならばハナハナの実の能力で腕を幾重にも伸ばしルフィを引き上げる事が出来ると考えたのだ。

マクシムの船底と巨大な豆蔓ジャイアントジャックの二方向から伸ばした手は金塊の重さを分散させ支える事に辛うじて成功する。

「うはっ！サンキュー、ロビン!!」

「うっ…この重さは、かなり堪える。少ししか保たないわ！早く上がって頂戴!!」

「おう！ちよつと待ってる!!」

右腕にはまる金塊を少し持ち上げ、下ろし、また少し持ち上げ、下ろす。ビヨンビヨンとバネの要領で金塊の振り幅は次第に大きくなり、ロビンの咲かせた腕も次第に軋みの声を上げる。

「いいか！いくぞお!!」

「ぐっ…いいわよー」

ルフィが金塊を持ち上げるタイミングに合わせてロビンも咲かせた腕を引き上げる。

それは例えるなら巨大な二段構えのパチンコだ。

勢いよくロビンの腕に持ち上げられたルフィが、反動による勢いを更につけ金塊を持ち上げる。持ち上げられた金塊は重力に逆らいグングン上昇しマクシムまでをも追い越す。

「エーネールウー!!」

空中で金塊を蹴り自分だけをマクシムへ方向転換し着地を成功させ、再びエネルへと向き直り声を上げる。

「喰らええ!!」

※ ※ ※

ゾロは神の社のある上層からマクシムへと飛び降りた。

リイナからの助言に基づき巨大な豆蔓ジャイアントジャックの幹に切れ込みを入れ、傾ける事でマクシムへ寄せてから飛び移っただけなのだ。

「よお、ウチの船長が戻るまで相手してくれや。」

マクシムへと降り立ったゾロは白い柄に手を掛け、獣のような野生的な瞳でエネルを見据える。

「…どいつもこいつも。私の邪魔ばかり。」

「ん? いや、逆だぜ。俺たちにとってはめえの方が邪魔だ。…ご託は良いからさっさとやろう。」

ゾロは言いながら白い柄の刀『海楼』を右手に抜き構える。エネルはトライデントを再び構える事に辟易する。

雷撃を仕掛けるか、とエネルは思案するが目の前の剣士にも通じない可能性を警戒する。

相手は剣士。刀による斬撃は自身には無効だと知りつつも警戒は弱めない。

しかし、効かない斬撃をわざわざ雷化して避ける事はプライド自尊心が許す筈もない。

『心網』マントラで斬撃を先読みし、トライデントで受け流す。その際、相手が感電すれば雷撃が効くという事になる。そう考えて、一先ずは相手の攻撃を待ち構える。

腰を深く落としてからの踏み込みで一気に距離を詰めるのはゾロだ。

海楼石と同じ効果のある刀を試す絶好の機会だと逆袈裟斬りを仕掛ける。エネルのトライデントに阻まれるもすぐさま刀を逆手に持ち変えてからトライデントを薙ぎ払い、その勢いを利用し横に一回転する。次いで回転の反動を用いて袈裟斬りで強襲するもトライデントで受け流される。

エネルギーはトライデントで刀を受け流した際に感電した様子がない事から、目の前の剣士にも雷が通用しないと理解し眉をひそめる。

「ふう、やっぱりその『心網』^{マントラ}ってのは厄介だな。」

一瞬の攻防ではあるが自身の攻撃が先読みされ防がれている事に苛立ちを隠せない様子のゾロ。

気を引き締め左手で赤い柄の刀『境界』を逆手に持ち構え直す。エネルギーに向かい右半身を開いて腰を落とし、左腕を伸ばし『境界』を正面に、右手で『海楼』を引き絞り突きの姿勢で構える。

それは弓を引く姿勢にも見えるが些か不格好である。

再び踏み込み距離を詰めると、左右の手に持つ刀で上下からの挟撃を仕掛けるが弾かれる。それを皮切りにゾロは幾度となく刀を振るう。

斬撃を躲されたと判断した瞬間には身体を捻り左、下、更に右、上と間髪入れずに斬り込み、トライデントで防がれようとも暇を与えぬ乱撃を繰り返しては防がれ、躲される。

身軽にアクロバティックな体捌きで動き回るエネルギーへとゾロは怯む事無く果敢に攻め入る。左右からの交差する挟撃をバク転で躲したエネルギーの死角を突き、再び弓を引く様な不格好な構えをとる。

今までよりも一層力強く踏み込み、一瞬でエネルギーへと肉薄すると『海楼』で『境界』の峰を突き、跳ね上げる。左手首を支点に下方から半円を描くゾロの意思を介しない斬り上げをエネルギーは咄嗟にトライデントで防ごうとするが、『境界』の斬れ過ぎる特性は黄金のトライデントを容易く両断する。と同時に『海楼』は突きの勢いのままエネルギーの腹部へと吸い込まれた。

エネルギーは腹部を貫通する刀に驚愕するも力が抜け落ちる感覚に陥り困惑を隠せない。

刀による攻撃は自身には通じない、という慢心がエネルギーを三度目の窮地に追いやる。

『ゴロゴロの実』の能力者であるエネルギーは自然系の中でも絶対的強者である自信があった。それこそ、神だと、唯一絶対の支配者であると自負していた。

だからこそ慢心を捨て切る事が出来なかった。

リイナに、ルファイに、そしてゾロに膝を着かされようと、未だその慢心は捨てる事が出来ない。それが己の拠り所であるが故に。

「ガフツ…何故、雷である俺に…こんなものが?！」

「…能力者の力を奪う海楼石つてのを知ってるか?それと同じ効果のある特別製の刀なんだとよ。」

「…成る程、力が入らん。」

エネルは未だに腹部を貫通する『海楼』の効果で立つ事も刀を抜く事も出来ずにいる。

ゾロはエネルを見下ろして考える。『境界』でエネルの首を刎ねれば終わりだと。しかし、剣士としての矜持がそれを許さなかった。

エネルの腹部から生える白い柄を掴むと一気に引き抜く。過程でエネルの絶叫が耳元で響くが気には留めない。

「今日は刀に頼るしか出来ない己の未熟さを痛感する日だな…大剣豪は遠い。」

「…何故、とどめを刺さない?絶好の機会だったろうに…」

みすみす好機を逃したゾロへ不敵な笑みを浮かべてエネルは問うが、当人はあつけらかなとマクシムの下方に指を差す。

「船長が戻るまでって言っただろ。」

その言葉にエネルは下方から目を見張る速度でこちらに近付く声を察知する。

「エーネールウー!!」

一度マクシムを通り過ぎたと思えば、それは巨大な黄金の球体を蹴り、その反動で船に降り立つ。

※ ※ ※ ※

「喰らええ!!」

マクシムへと一足先に降り立ったルファイは右腕を引き寄せ、自由落下を始めようとする金塊をエネル目掛けて振り抜く。

ルファイの目にはエネルしか入っておらず、傍らのゾロは急ぎ船から

離脱する。

それは完全に奇襲、不意打ちではあるがエネルギーはそれを回避することが出来た筈だった。しかし、回避しなかったのだ。

「っ?!二億^{ボルト}V 雷神^{アマール}“!!”」

自身を雷化し、マクシムから吐き出される雷雲から雷を吸収する事で巨大な雷神へと容姿を変化させ金塊を受け止め弾こうとする。

己の目指す限り^{フエリーヴァース}ない大地への還幸にとってマクシムは必要不可欠。破壊される事だけは阻止しようとする行動だ。

そして、己の身を賭し受け止めた金塊を弾くには至らず、逆にマクシムから弾き飛ばされその身は宙を舞う。

「…ぐあっー!」

「これで！終わりだあ!!ゴムゴムのお…黄金^{ライフル}回転弾!!!」

エネルギーを弾き飛ばし横方向へと伸びた金塊に捻りを加え、自らもマクシムから飛び降り宙を舞うエネルギーへと振り下ろす。

重力に逆らわず更に加速され振り下ろされた金塊は、エネルギーを捕らえたまま中層遺跡の大地にめり込み、ガラガラと辺りの遺跡が崩れ落ちる程の衝撃をもたらす。

暫し周辺の遺跡崩落が続き、巻き上がる砂塵が収まる頃にその場に立つ人影が息を荒げて雄叫びを上げた。

※ ※ ※

マクシムの動力が底を尽き、吐き出す雷雲を止める。一旦、空中で静止したかと思うとそのまま重力に従い落下していく。

それはつまりルフィさんエネルギーを倒したという事である。

しかし、そこで私は疑問に思う。大鐘楼の音が鳴り響いていないのだ。

もしかすると、原作改変の余波で大鐘楼が発見されていないのかも知れない。

マクシムの高度が巨大な豆蔓^{ジャイアントジャック}の天辺にすら到達する前に落下していったのだからあり得る話だ。

私は同化を解除すると同時に境界内に留めていた雷雲を霧散させてゾロの下へ転移する。

巨大な豆蔓上層にある神の社付近に居るゾロとロビンさんはなぜか周辺に倒れる神兵の介抱をしていた。

「…何やってるんですか？」

「何って一応生死の確認を…って、オイツ！いきなり現れんなよ…」

驚くゾロを他所にロビンさんはクスクスと笑っている。

「皆息はあるみたいだから、後で治療をしやすい様に一カ所に集めるのよ。」

ロビンさんはハナハナの能力でいくつも手を生やして怪我人を運んでいるようだ。

「二度ルフィさんの下へ向かいましょう。その後、皆さんとも合流します。」

ここの怪我人はエネルギーの率いていた神兵達なのでおそらく雲流しの刑になるのだろうが、一応二人と共に神兵の処置を済ませてルフィさんの下へ転移する。

ルフィさんは必死に金塊から右腕を抜こうと試行錯誤しているところだったので、私の能力で金塊をインゴットへと分解し、再構築する。純度の高いインゴットがこれだけあればナミさんも喜ぶだろう。

辛うじて息のあるエネルギーに「アイソレーション 隔絶」を使いこちらの世界へ干渉出来ない様に処理しておく。

「では、一度船に戻って皆さんを連れて来ます。少し待って下さい。」

三人が頷くのを確認してインゴットと一緒に船へと転移する。

ナミさんは突然現れたインゴットに歓喜する一方で、ウソップさんは私を恐れる様に一歩も二歩も引いた位置に居て話し掛けて来ない。

エネルギーに対して覇気で脅し過ぎたのが原因だと理解しつつも、こればかりは少し落ち込んでしまう。

そんな私を見かねてか、サンジさんは普段の様に飲み物はいかがかと微笑んでくれた。

チョツパーくんは医者としてガン・フォールの怪我の具合を診察し、看病しているようだ。

ガン・フォールへ元部下である神隊の所在を知らせると、すぐピエールに乗り飛び去ってしまった。六年もの間、それだけ心配していたという事なのだろう。

コニスとパガヤ親子とは初対面なので軽く挨拶を交わし、これから^{アップバーヤード}神の島で起こる事を見て欲しいと告げてエンジェル島の家へと転送する。

船に残った皆で中層遺跡へと再び転移し今後の計画を進言するが他に案も無く、ルフィさんからの早く鐘を鳴らしたいという気配を受け、早速行動へ移すことにした。

※ ※ ※ ※ ※

能力で一味全員と大鐘楼を下層遺跡へと移動させると皆が息をのんで大鐘楼を見上げる。かく言う私もその悠然と佇む存在感に圧倒されている。

「…では、行ってきますね。『^{コントロール}支配』スカイピア」

いくらでも眺めていられそうなものだが、このままでは一向に話が進まないと思ひ直し言葉に出す。

私はスカイピア全域と同化し、スカイピアの住人やシャンディア、果ては森の動物たちまでも同調し支配下へと置く。

今はまだ指示を出していないので各々は自由に動き話す事も出来る状態だ。勿論、麦わら一味は除外している。

まず、森の動物たちへと指示を出す。

『サウスバードたちは大きく鳴きながら^{ジャイアントジャック}巨大な豆蔓を旋回して。

雲ウルフたちはその場で良いから大きく吠えて。

ジュララ、あなたは出来るだけ頭を高く上げて大きく鳴いて。』

それぞれに指示を出すと途端に^{アップバーヤード}神の島が騒々しくなる。

サウスバードの鳴き声が響き、雲ウルフの遠吠えは島全体を大きく包む。

ジュララの声は離島から離れたスカイピア住人の下まで届く程だ。その異変に住人たちが気付くまでそう時間は要しなかった。先程までのエネルギーによる雷雲の恐怖が抜けきらぬ間に、アップバーヤード神の島での異変を察知した住人たちは再び顔色を悪くする。

『天上に住まう全ての者たちよ。私はシャンドラの灯に宿る大地の神。：400年の時を得て、再び大地へと根付く私の福音を聞き届けなさい。』

私の言葉を直接脳内へ届け、それを大地の神の言葉だと錯覚させる。

動物たちの行動は神の降臨を演出する一部だ。

「野郎共おー！鳴らせえ!!」

そして、それが一味の皆への合図となり、ルフィさんが指揮を取り鐘を鳴らす為の鎖を引く。

カラア…ン　　カラア…ン

カラア…ン　　カラア…ン

カラア…ン　　カラア…ン

カラア…ン　　カラア…ン

アップバーヤード神の島から美しい大鐘楼の音が響く。

合わせてサウスバードが大きな鳴き声を上げ空を旋回し、雲ウルフは島全体からの大合唱が始まる。

ここで能力を用いてスカイピア全域に降り注ぐ太陽光を巨大な豆蔓周辺を除き遮断する。ジャイアントジャック

更に大鐘楼を据えた下層遺跡を地響きを伴わせてせり上げ、巨大樹の森よりも一段高くする。

さながら、大鐘楼のライトアップステージだ。こうする事でスカイピア全域からの視線を集め、より神掛かった演出効果をもたらす。

『今一度告げる。私はシャンドラの灯に宿る大地の神。』

誇り高きシャンディアの戦士たちよ、既に詩は紡がれた。黄金都市はその役目を果たし、命を賭す時代は終わったのだ。気高き魂に哀悼

を、そして感謝を捧げよう。

空に生まれし全ての者よ、この大地は誰の物でもない。森羅万象：この世の全てに真の意味での支配者など存在しないと心せよ。

此度は青海の戦士たちによる助力で再びシャンドラの火を灯せた事を嬉しく思う。

空の者よ鐘の下へ集いなさい。青海の者たちと交流し、強き心と優しき想いに触れてみると良い。

この世界で生きとし生ける全ての者に幸多からんことを祈る…』
巨大^{ジャイアントジャツク}豆蔓の周辺から放射状に能力を解除し、スカイピア全域の明るさが徐々に通常へと戻る。

次いでスカイピア全域との同化も解き一味と合流する。

「ふう、慣れないことすると緊張しますね。…ん？皆さん、どうしました？」

大鐘楼の土台に腰を掛けたナミさんの呆れた様な半目が私を待ち構えていた。

「…あんた、どっかの教祖様にでもなれそうね。」

そう言われても困るのだが…私は苦笑いを返してゾロ、サンジさん、ロビンさんに視線を巡らせるが皆似た様な感情を視線に乗せて私を見ている。

「…わかってますよ。ちゃんと説明しますつて。でも、その前に…」

そして先程から気になっている後ろを振り返ると、ルフィさんとウソップさん、チョップパーくんが蹲っている。…いや、私を崇めていると言った方が正しいか。

「…神様、仏様、リイナ様…」

「…それ止めて下さい。神様に成りきって空島の争いを止めさせると説明したじゃないですか？」

「いやあ、だって地面もゴゴゴウってなって、パアッと明るくなって…なあ？」

「ああ、ありや誰がどう見ても神様の仕業だとしか考えられねえ…」

ルフィさんとウソップさんは向き合い何度も頷きながらその驚きを身振り手振りで表している。

光に関しては、巨大豆蔓周辺を除いたスカイピア全域に光を遮る境界線を引いただけで何てことは無い能力の応用だ。

せり上げた地面にしても、島雲に乗っている神の島の境界線を操り底から押し上げたただけなのだが、やはり規模が大きかった為か尋常では無いと認識されてしまった様だ。

能力を扱う側と見る側とでの意識の差異があるのは理解出来ていたつもりだが、認識を更に改めなければならぬと頭を痛くなる。

心の中で大きく息を吐き出し、間もなく集まるだろう空の住民たちの対応についても話さなくては、と気持ちを切り替えた。

※ ※ ※

「…と、いう訳です。掻い摘まんでの話なので、詳細は後程お話ししますから今はそれで納得してください。」

皆を見渡すが、一様に首を捻りウーンと困惑顔で思考を巡らせている。

「どっかの世界から生まれ変わって…」

「どっかの神様から恩恵を受けて…」

「未来予知的な情報があつて…」

「破格の悪魔の実とハキつて力持つてて…」

「そんなのが全部で七人も居て…」

「リイナもその内の一人で…」

「…理解が追い付かない。」

各々思う事はあるだろうが、やはり突拍子の無さ過ぎる転生の話に理解が及んでいない様だ。

しかし、神の島へと上陸する人々の気配は既に察知しているので長く考查する時間は無さそうだ。

「申し訳ないですが、そろそろ沢山の人がここへ押し寄せます。皆の大好きな宴で歓迎しましょう！」

「…よし、宴だあ!!」

悩むのは性に合わないのだろう。すぐに気を切り替えてルフィさ

んは立ち上がるとどこかへ走り去ってしまった。

ゾロとウソップさんはルフィさんが何をする気か見当がついていくようにすぐに追い掛けて行く。

私は船から調理器具や森にある神官達の食糧庫から食材を転移させ、サンジさんを筆頭にナミさんとロビンさん、チョッパーさんと共に宴料理の下拵えを進める。

大きな気配と多数の人々の気配がすぐ近くまで近付いているのでそちらを振り向くとシャンディアたちとジュララの姿を確認出来た。

「ジュララ、良い子にしてた？ シャンディアの皆さんもようこそ。今から宴を催しますので参加して下さいね。」

私に頬擦りするジュララの口もとを撫でながら、先頭を歩く酋長へ微笑み言葉を掛ける。

ナミさんとチョッパーくんはジュララを見て驚き、サンジさんとロビンさんの後ろに隠れてこちらを心配そうに覗いている。

するといきなり酋長が片膝を着いて跪き、後ろに続くシャンディアたちも同じ様に跪いた。

「我等が窮地をお救い下さった地母神　ヘカテー様に感謝を捧げます。」

『捧げます！』

「……はい？へかてー？」

酋長から原作知識に無い行動と言葉が出てきたので私はとても混乱してしまう。

能力で神の真似事をしたがあくまで真似事だ。そもそも、あれが私だと特定されてしまったては架空の神の演出として失敗ではないだろうか…

それに初対面でこういった事をされてもどう対応すれば良いのかわからない。

原作ではエネルギーを倒した後、スカイピア住民やシャンディアたちとの宴を催し、スカイピア住民とシャンディアの和解、歴史の本文の本懐などが描かれていたはずだが、地母神など出てきては居ない…私の介入が過ぎてしまったせいで大幅な改編が働いてしまったのかもし

れないと冷や汗が背を流れる。

「シャンディアに古くから伝わる言い伝えで、遙か昔の偉大な神官が予言したそうです。遠い未来に部族存亡の危機が訪れる。その時、大地の神が降り立ち我等を導く。その神こそが地母神　ヘカテー様であると。」

「…いえ、私はただの青海人です。そんな大それたものじゃないですよ。いきなりそんな事言われても分からないですし…」

私はシャンディアから向けられる期待に満ちた視線にたじろいでしまい後ずさりしてしまう。すると、私のすぐ後ろまで近付いていたチヨツパーくんが声を掛けられる。

「なあ、リイナ。動物たちが神様って言ってたのなんとなく理解出来るんだ。おれは『ヒトヒトの実』で人間トナカイになったからすぐにはピンとこなかったけど、リイナが悪魔の実の能力を使った時に言葉じゃなくて動物の本能に直接訴えかける何かを感じたぞ。」

たぶんだけど、リイナが神様だったのは本当だと思う。」

チヨツパーくんの言葉に私は空いた口が塞がらない。一体何だというのだ。ここ数日の間に色んな事態に陥り過ぎてやしないか…

アラバスタで自身が転生者だと知らされ、ジャヤでも神の島でも動物から神様だと懐かれ、昨日は他の転生者　シールから直接話を聞き、更には空島の原作知識を得て、今日は大地の神だと崇められ、このままでは間もなく私の脳は許容量を超えてしまうのではないだろうか。

「そちらの方が言われます通り、地母神とは大地に生きる者の神です。野生の生物は本能でその威光を感じ取ってしまうのでしょう。詳しくは存じませんが、伝承では『ポセイドン』の対を成す世界には重要な存在であるとだけ…」

『ポセイドン』という言葉が耳に入り、反射的に振り向く。ロビンさんは目が合うと私を見詰めたまま訝しげに首を捻っている。まだ空島の歴史の本文を見ていないのだから当然の反応だろうと思ひ至り、衝動のままロビンさんの手を掴み走り出す。

「すいませんー！話はまた後で聞きますから宴の準備を進めていて下さ

いっ!!」

走って数秒程度の距離にある大鐘楼の下へ到着し、土台に刻み込まれた歴史の本文の前でロビンさんの手を放す。困惑の色を隠せないロビンさんだが、私が歴史の本文を読むよう促すと静かにゆっくりと解説を始める。そして、目的の部分を目にして顔色を変える。

「…神の名を持つ古代兵器：『ポセイドン』のありか。…その対を成す存在であるなら、つまり『ヘカテー』も古代兵器？」

「酋長さんは私を『ヘカテー』だと呼んでました。おそらく古代兵器だという部分は知らず、単純に神様の名だという伝承なのでしょうが：あ、その右下の方も読んで下さい。」

私は原作知識で知り得ているので驚きはしないが、ロビンさんは目を白黒させている。

「かの海賊王がここを訪れた時に刻み込んだようです。ガン・フォーレルとは仲が良かったそうですね。」

「…それも未来予知的な何かなのかしら？」

「ええ、空島限定で教えてもらった情報ですが。…あの、古代兵器ってなんですか？何か知ってますか？」

ロビンさんは問いに目を閉じ、右手を顎に乗せ暫し考え込む。私はただ静かに待っていることしか出来ずにいる。

「リイナさんが本当に神『ヘカテー』なのだとしたら、二通りの解釈が出来ると思うわ。」

「二つの…解釈？」

「ええ。一つ目は神『ヘカテー』自身が兵器だったという解釈。つまり、リイナさん自身が兵器と呼ばれる存在であるということ。」

二つ目は、神『ヘカテー』の名を模して作られたなんらかの兵器が存在するということ。これについてはリイナさんが『ヘカテー』だとしても無関係ね。

この歴史の本文に綴られている『ポセイドン』についても同じ事が言えるわ。ありがたが記されているだけで詳細は何も分からないもの…」

まず、前提が可笑しいのだ。私が『ヘカテー』だという確証も無い

のだから。

動物に崇められたり、過去の予言であつたりと信憑性が無いのでそう易々と信じる訳にはいかない。

「…あなたが一味に加入した時、航海士さんが言つてたわね。悪魔の実際の能力じゃなくて神様の実際の能力だつて。あながち神様だつて話は的外れでもなのかもしれないわよ?」

そう言つてロビンさんは悪戯な笑みを浮かべるが今の私にとつては追い討ちだ。転生者である事を皆に伝えたばかりなのに、更に神様でしたなどと冗談にも程がある。

転生したということは彼らの言動により事実であると認めているので、『神』は存在するのだろうとは思っている。だが、私自身が『神』だと言われても理解は出来ない。

「この先の航海で歴史の本文を紡ぎ続けていけばきつと真実が見えてくるはずよ。因みに『ポセイドン』のありかは魚人島にあると記されている。このまま進めば近い内に通るはずでしょう?」

たしかジャヤからは比較的近いはずだ。シャボンディ諸島から海の中に進むと聞いた記憶がある。しかし、比較的近いというだけで、シャボンディ諸島まではまだまだ遠い道のりだ。

「それまでは鬱屈とした気持ちで進むんですか…いえ、確証が無い分私はまだ認めた訳ではありません。」

気を取り直すため頭を左右に振り、大きく呼吸を繰り返す。

改めて遺跡の広場の方へ目を向けるといつの間にか多くの人々が集まっている。ルフィさんたちが組んだであろうキャンプファイヤーの組み木も昨日より大きい。

「ロビンさん、ありがとうございます。一人だと訳が分からないままだったと思います。これからもよろしくお願いします。」

「…ええ、こちらこそ。」

小さく頷き微笑むロビンさんだったが、その表情はどこか悲しそうな、寂しそうな笑みで少しだけ罪悪感を覚えてしまった。彼女の生い立ちを少しだけ知る者としてはその胸中を軽々しく考えることなど出来ない。

これからの航海で彼女が少しでも自然な笑みを浮かべられるようになればと小さな願いを込めて、その手を引き私は皆の下へ向かうのだった。

14 ・蝶の羽ばたき

私は一人賑やかな人集りを抜け出して遺跡の物陰へと歩を進めている。

ロビンさんと共に広場へ戻った際には空島の住人が私たちを取り囲み、麦わら一味全員を崇め奉る摩訶不思議な光景を目の当たりにして数瞬、時が止まったのは言うまでもないだろう。

シヤンディアたちが跪く姿を見たスカイピア住民たちが、『声の主』を私だと気付くのに時間はかからなかったようだ。

それからは人から人へ伝播し私の知らぬ間に『地母神』だと共通の認識になってしまっていたのだ。

宴が始まってからも息吐く暇も無い程人に囲まれ少々…いや、多大に疲弊してしまっていた。

それにまだやらなければならない事があるので人々の輪からこっそりと抜け出しているのだ。

人目につかない場所へと移動を済ませ、深く息を吐き思考を落ち着かせて能力を発動する。

「^{アイソレーション}隔絶[〃]」

異世界、異次元とも言える断絶された世界で耳たぶの長い男は項垂れ座り込んでいた。

「…小娘か。ここはどこだ？全く周囲の音が聞こえん。」

未だ尚、不遜な態度を取るエネルギーだが、顔を上げないのでその表情は見えない。てつきり敵対した私たちへの憤怒や憎悪を撒き散らし対峙するのだと思っていたが、覇気で察するものは穏やかな気配だけだ。

「ここは私が造り出した世界。どう足掻こうと私が能力を解除しない限り元の世界には戻れません。」

「…ふっ、俺をどうする気だ？」

私は顔を伏せたままのエネルギーに話を続ける。

「別に…あなた次第ですよ。あなたが月、^{フェアリーヴァース}限りない大地へ行きたいのであれば止めはしません。本来の世界へと戻し、誰にも知られない様

にマクシムへと送ります。：しかし、空島や青海に関わるつもりが少しでもあるのなら全力で阻止しますが。」

「…もう貴様らにも空島にも関わるつもりはない。」

俺は井の中の蛙で構わん。生まれ持った心網マントラと手に入れたゴロゴロの実際の能力を使い、今は亡き故郷ビルカに伝わる聖地フエアリーヴァース限りない大地へと到達する。それこそが本懐だ。

ただ憧れ、見上げるだけであつた聖地に手が届くと、俺なら可能だと考え至つた。最初こそ単純に彼の地へ到達することが目的だった。

だが、どこで道を違えたか純粋な願いは、力を振りかざす為の野望へと変わった。

故郷すら己で消し去り、私欲の為にスカイピアを強奪し、恐怖を以て神として君臨した。野望が潰えて気付く：何とも愚かしいのは俺自身だったと。まるで憑き物が落ちた気分だ。」

項垂れたままのエネルギーは内にある想いを吐露し、大きく息を吸い顔を上げ私へと向き直る。

「…まあ、あなたがどうしようとおあなたの勝手ですが、私には関係無いですし懺悔なら他所でやって下さい。」

「…ふん、変わらさず生意気な小娘だ。」

口の端に笑みを浮かべたエネルギーは静かに立ち上がると空を見上げる。私も釣られ仰ぎ見ると、大きくて丸い月が雲一つ無い夜空に煌々と優しい光を輝かせていた。

※ ※ ※

能力を解除してエネルギーを墜落したマクシムまで移送し、ジャイアントジャック巨大な豆蔓の天辺から上昇してゆくマクシムを見送る。

エネルギーが月へと到達出来るのかは知らない。空島での原作には詳細が描かれていないので仕様のない事だ。

ふと、眼下を望む。キャンプファイヤーとその周りで宴を楽しむ人々が見渡せる。

ジュララや森の動物たちも入り乱れ、飲み、食べ、踊り、笑い、騒

ぎ、楽しんでいる。

その光景を見て大きな安堵と少しの不安が押し寄せてくるのだ。

エネルギーの者を除いて必要以上に犠牲が出ない様に配慮し原作とは違う過程を辿ったが、結果的には原作と同じように皆で宴を楽しんでいる。そう安心する気持ち。

その反面、思い描く結果の為に原作の過程をねじ曲げてしまった反動がすでに出ていることへの不安が募る。

不安に感じていることは、原作では起きえなかった事に対して。

昨日空島に昇ったばかりであるにも関わらず、すでに今日は原作には無い出来事が起きている。私が作り上げてしまった原作には登場しない『神』。これでもまだ小さな変化なのかもしれない。

この先どうなるのかは分からない。彼らと違い、原作知識の無い私には『どの様に変ったか』なんて今後は判別出来ないのだから。

これからの航海は原作とは逸脱した物語として進行して行くだろう。それが私にとっては良いものだと言える。しかし、残念ながら麦わら一味にとっても良いものだと言える確証はない：

でも、だけど、しかし、もし：過ぎた事は気にしても仕方がない。あてもない、こうでもないこれから先のことを思ったところで徐々に大きくなる揺らぎは待つてくれないだろう。

結局、思考を深めたところで行き詰まると分かっているのだ。楽観的に、されど慎重に今後の成り行きに任せるしか無い。

私は気分を入れ替えるために時間をかけて巨大な豆蔓ジャイアントジャックを歩いて下り、広場へと戻った頃には宴も終盤に差し掛かっていて、大半の人が眠りについた後だった。

それでも未だに酒盛りを続けている中に目的の人物を見付け歩み寄る。

「ワイパーさん。少し良いですか？」

「…ええ、構いません。」

尚も私を取り囲もうと集まり出す人たちがワイパーさんが制して、少しだけ輪から離れた位置に腰を下ろす。

「ほら、あなたも座って下さい。」

「はい、失礼します。」

「…はあ。その余所余所しい態度を止めて下さい。」

私は神では無い、とシャンディアたちに何度も苦言を呈しているにも関わらず聞き入れてくれないので、顔見知りであるワイパーさんには少し語尾を強める。

と、言ってもワイパーさんはわざとやっている様なので互いに顔を見合わせ笑ってしまう。

「エネルギーは聖地に旅立ちました。もう、こちらには関わらないと確言も取りましたが、念の為伝えておきます。」

「…そうか。何から何まで助かる。」

それと、生き残った神兵はこっちで拘束はしているがホワイトベレーつつう神隊に引き渡す事は決まった。神官共は『雲流しの刑』が既に決定したらしい。エネルギーさえ居なけりや大人しくしとくだらう。」

そう言ってお酒を煽るワイパーさんの表情からは大きな安堵と燦る憤怒、多くの期待と少しの虚無感…その他にも色々な感情を読み取れた。

400年…それは人にとって永い時間だ。それ程の永い時を争ってきた彼らの戦いは第三者の手で終結したのだ。手放して喜べるはずが無いのは誰にだって分かる。

しかし、私たちがそれに負い目を感じる必要は無い。彼らもそれに悔恨の念を負ってはいないだろう。ならば、謝罪を口にする事は憚られる。

「この地は、スカイピアはあなた方の住まう場所です。これまでの事、これからの事をじっくりと話し合って下さいね。きっと、良い国になります。」

「ああ、ガン・フォールや酋長が、神隊の奴らに俺らが居るんだ。必ず良い国にするさ。」

ワイパーさんの決意を灯す力強い瞳に私は微笑み返した。ワイパーさんも笑い無言で小さく頷く。

互いに少しの間だけ黙し、それから私が口を開く。

「ジュララ…空の主の事ですが、カルガラたちは『ノラ』と呼んでいたようです。あなたたちはそう呼んであげて下さい。きつとあの子も喜びます。」

「…お前も呼んでやればいいじゃないか。」

「…いえ、あの子の思い出に踏み入るなんてとても。私は通り過ぎりの青海人ですからね。400年の空白は子孫であるあなたたちと鐘の音で埋めて下さい。」

少しの時間、ワイパーさんと静かに大鐘楼を眺める。夜の帳にあつてもその輝きを失わない黄金の鐘はこれから先も、永くこの地を照らし続けるだろう事を信じて。

「…ままならねえなあ。」

「…ままなりませんねえ。」

※ ※ ※

話を済ませてワイパーさんは輪に戻り、入れ違いでガン・フオールが私の下へ歩み寄る。

「リイナ殿、疲れておるな。」

「ええ、それはもう。」

ガン・フオールは私が取り囲まれる様を見ていたのだろう。幾つかの言葉を交わして優しくに微笑み労いの言葉を貰う。

「お主たちを見ておると20年以上前に出会った青海の友人を思い出す。麦わらの小僧とお主の雰囲気マントラがそれを彷彿させる。」

「…その友人ってゴール・D・ロジャーですよね？」

原作ではロビンさんの会話なのだが、こういった改変は仕方ないと諦めるしかないだろう。

それとロジャーと雰囲気マントラが似ているのはルフィさんの筈だが、何故か私が含まれている事が疑問に感じる。

「なぜそれを…と、お主は心網マントラを使えるんだったな。確かにロジャーと麦わらの小僧に似通ったモノを感じる。」

だが、お主に感じたのはロジャーでは無く別の友人だ。其奴とは口

ジャーよりも先に知り合っただのだ。『漂流者』と名乗っていた。」

それを聞き私は耳を疑った。レイさんが50年程前に出会った『漂流者』という男。その男はガン・フォールとも出会っていたという。「其奴は不思議な男だった。何でも別の世界から来たと言い、夢物語の様な話を沢山していたな。それに、吾輩にカボチャの栽培を指導してくれた。おかげでこの地を治めていた当時の部下たちにカボチャのスープを振る舞う事も出来た。」

「…その男はおそらく私の元上司です。名前からの情報でしかありませんが『漂流』^{ドリフト}で間違い無いでしょう。」

先日シールと話をした時点で推測は確信へと変わっていた事だ。元上司が転生者だと判明してまず思い至ったのはレイさんが出会ったという『漂流者』。ドリフト中將という凶式だった。

年齢を考えると計算が合わないが、神からの恩恵に不老長寿なんてものがあるのかもしれない。もしくは、悪魔の実の能力なのか定かではないので深く考えるのは止めた。

どんな意図があつてレイさんとガン・フォールに接触したのか。憶測の域を出ないが、ロジャーよりも先に二人と出会っている事が重要なかもしれないと考える。それでも、情報が少過ぎてこれ以上考察の仕様も無い。

「ふむ、麦わらの小僧とロジャー、お主と漂流者。浅からぬ縁がありそうだな。以前訪れた青海の者にロジャーは処刑されたと聞いたが、彼は健在なようだなによりだ。」

彼らを懐かしむガン・フォールの話を聞き、そろそろ休むと言うガン・フォールを見送ってからゾロの下へ向かう。辺りの酔い潰れた面々を他所に一人で黙々と手酌しているからだ。

「お注ぎしましょうか?」

「おっどご行つてたんだ?」

突然姿を消した私を心配してくれたのかと思いきや、私が居ない事を尋ねる人集りで一騒動あったと文句を垂れる。

「…ちよつとね。隣に良い?」

「お、おう。」

少し困った様に答えたゾロの横に腰を下ろし腕に抱き付く。きつと顔を赤くして固まっているのだろうか小さく笑う。

ゾロはお酒を飲み、私は何も言わずにただ座っているだけだ。気まぐさは特に感じていないのだが、何を話そうかと思案してしまう。

転生者だと明かしてしまっただけからそう時間も経っていないので、そういう話は間を置いた方が良さだろうと話題を探しているとゾロの手が頭に乗る。

「…なんつうか、お前が何者だろうが俺の妹つつうのは変わらねえ。だからよ、もつと話せ。」

不器用に頭を撫でながらの言葉に私はうん、と短く返事をする。

「ナミの奴も心配してたぞ。昔の自分を見てみたいだっけな。一人で背負い込んで、思い悩んで、余裕そうな面の裏で泣いてるんじゃないかって。」

「…そっか。」

ナミさんのココヤシ村での話は以前聞いている。ナミさんには私が当時の自身の様に見えたのだろう。

思い返せばそれは間違いでは無いかもしれない。やはり、常に焦っていたし、どこかで悩んでもいた。上手く事が進むか不安でもあった。そうだったものは表に出さない様になっていたが、それでも感じ取られてしまったようだ。

ちゃんと話すと言っておいて、結局は事後報告でしかない。仲間なんて言いつつただ利用した様に取りられても仕方ないのだ。

終わってからの説明で事情を理解して貰えるなんて考えは独り善がりの甘えかもしれない。全てを説明したら懐疑の念を持たれるかもと恐れる事は自身への信頼を裏切る行為なのかもしれない。

それに、こうして一人で考え、行き着く答えが正解なのか判らない。だから仲間を頼り、より良い答えを求めるべきだったのだろうか今更思う。

「…後回しにしてちゃ駄目だよ。今回の事もちゃんと話すよ。」

※ ※ ※

シャンディアやスカイピア住民の殆どの人たちが眠り、キャンプファイヤーも火が衰えて宴は自然とお開きとなる頃、一味の皆が起きている内に広場の端に集まって貰っている。

「…本当にごめんなさい。」

私はアラバスタでのロードとの経緯から先日のシールとの話。転生に伴う原作知識の事をうち明け、私が勝手に行動していた理由を話し、最後に謝罪の言葉を口に出し頭を下げた。

「リイナには傷付いて欲しくない奴らが居たんだろ？」

普段とは違った真面目な雰囲気のリイさんが私を見詰め問い掛ける。それに私は目を逸らさず頷く。

「だったら良いじゃねえか。俺は黄金郷が空に在ったって分かればそれで良いし！鐘も鳴らしたしな!!」

ルイさんはニシシと普段通り朗らかに笑う。それを見て一味の皆も小さく笑みを浮かべている。

「けど、今度からはちゃんと話せよ？そしたら皆手伝ってくれるさ！…なあ？」

皆を見渡すと先ほどと変わらず私に微笑みを向け一様に頷いてくれた。

もつと早くに気付いていればもう少し違う経過を辿れたのかもしれないと僅かに後悔してしまうが、それも仮定の話でしかないのだ。

「それで…あの、原作知識の話を聞かされた時は私、凄いショックだったんですけど。皆さん平気なんですか？」

「…はあ。逆に聞くけど、あんたずっとそんなの気にして考えながら生きてくの？今この瞬間も原作なんじゃないか、なんて縛られてくの？バツカじゃないの！私はそんなのゴメンよ。」

ナミさんは大きく溜め息を漏らし、ズイツと詰め寄り人差し指で私のおでこを何度も突きながら言葉を投げ掛ける。

「あんたは何でもかんでも考え過ぎー！そんなんじゃコイツラと航海なんて出来ないわよ？な〜んにも考えてない本能で生きてる奴ばっかなんだから！

…いい？今までも、これからも自分の意思で行動して生きてくの！それを原作通りだとか言われても知らないわよ!!

あんたはリィナ。それ以上でもそれ以下でもないでしょ？自分の好きな様に生きてくしかないのよ。あんたは何の為に海賊になったの？」

原作など関係無いとシールに啖呵を切ったが、原作に一番囚われていたのは私だったとナミさんの言葉で気付き、思い知る。

…そうか。皆が狼狽えないのはそういう強さがあるからなんだ。

「…それは、私が私で在る為に、ゾロとガンジお爺ちゃんと家族で在る為に「堅っ苦しい!」…え？」

ナミさんに言葉を遮られ私は呆気に取られてしまう。いつの間にかニヤリとした不敵な笑みを浮かべた皆に取り囲まれている。

「海賊王に！俺はなる!!」

「俺あ、世界一の大剣豪に！」

「俺はオールブルーを！」

「私は世界中の海図を書くの！」

「俺は勇敢なる海の戦士に！」

「何でも治せる医者になるぞ！」

「…なら、私は『空白の100年』を知る事かしら。」

次はお前だぞ、と皆の視線が私に集まる。その視線は子供が夢を語る様にキラキラと輝いていてとても眩しい。

建前や見栄なんかでは無い純粹な夢。

他人を介しない自分だけの一途な願い。

それは私には持ち得なかった、足りないもの。

「理屈なんて要らねえ。『本当』のお前がやりてえ事は何だ？」

ゾロの言葉にふと、少し前の記憶が浮かぶ。三人で暮らした小さな村での半年ほどの短い期間の記憶と、海兵になったばかりの頃の記憶。

以前の記憶が無い私は本当に『私』なのだろうか？今の私を本当に『私』と呼べるのだろうか？

そんな不安を払拭してくれたのは家族だった。ガンジお爺ちゃん

が、そしてゾロが私に与えてくれる家族としての無償の愛情で安心を得ていた。私の名を呼び、共に暮らしてくれる二人がいたことで己を保てたのだ。

しかし、海兵になつてからは常に不安だった。ふとした瞬間に考えてしまうのだ。今の私は偽物なのではないか、いつの日にか突然記憶が戻り今の私は消えて無くなるのではないかと。

そんな不安を忘れようと訓練に励み、能力の向上に気を向け、次第に『ロロノア・リーナ』としての在り方を固め始めた。周囲の人間に合わせ、海兵として求められている私、というものを演じ始めたのだ。

社交的で誰にでも笑顔で接する様にして、職務では一層思慮深く計算的に行動し、挑戦的に強気な姿勢で何事にも取り組んだ。合理的、理性的に損得勘定をして感情を抑えつけた。

そうして、上司の期待に応え、同僚の信頼を得て、海兵としての『ロロノア・リーナ』を造り上げた。

次第にそれは演技ではなく、それこそが私自身だと思い込んで生きてきた。

無意識にそうすることで自我を確立させた気になつて心の安定を囿つたのは自己防衛の為。

自身の根底に在る『不安』を覆い隠す為の演技を今でも無意識的に続けているのだと今さら気付かされる。

今問われているのは海兵としての『ロロノア・リーナ』ではなく、ゾロと暮らしていた頃の『ロロノア・リーナ』としてであると理解する。そう考えるならば、今この胸に込み上げる感情は何だろう。

家族への、ゾロとガンジお爺ちゃんへの気持ちは変わらないう。麦わら一味へと向ける仲間としての感情も変わらないはずなのに、それ以上に自分自身の欲求が優先度を増して湧き上がっている。

「私は…」

アラバスタで死を覚悟した時の想いは、海軍を辞した時に決意した想いは何だった？

「…記憶を取り戻したい。」

勝手に言い訳をして、諦めた振りをして自分に言い聞かせて押し込めた想いは何だった？

「…本当の家族になりたい。」

他の誰かなんて含めない、自分だけの願い。単純に私が望むがままの願望。俗物的でも恥辱的な思いでも純粋な欲望。

「…ゾロと一緒に居たい！」

高鳴る鼓動と急激に上がる体温、乱れる呼吸に我を忘れて叫んでいた。いつの間にか流れる涙を拭う事もせず、嗚咽交じりでその後が続けた言葉は聞き取れなかつただろう。

きつと、とても恥ずかしいことも言ったはずなのでそれで良いと思う。

ゾロはそつと私の頭を胸に寄せ、撫でながら語り掛ける。

「なんか変わったなつてくらいに思ってたが、無理してたんだな。氣付いてやれなくてすまねえ。」

…家族と一緒に居る事に理由なんざ必要ねえさ。俺の夢、一番近くで見させてやる。前みたいに俺の後ろを着いて来い。」

久しく感じるその温もりはあの日と同じ温かさで、やつと『本当』の自分を見付ける事が出来た気がした。

※ ※ ※

いつからか、ずっと気を張り続けていたのだろう。ゾロの腕の中で泣き疲れて眠ってしまったリイナを横にして7人は座している。

「ゾロにはべつたりで甘えるくせに私たちには余裕そうな態度でさ…」

「言葉では強がっていても、どこか焦っていたり辛そうにもしていたわね…」

「…なんで氣付かなかつたの？」

ナミとロビンに同時に問われて押し黙るゾロの顔色は悪い。

「…私は色んな組織を転々としたからなんとなく理解出来る。属する組織で与えられた役割を演じて、それで得られるモノなんて何も無い

わ。この子は記憶が無い分、余計に拍車をかけて自分を見失っていたのかもしれないわね。剣士さんが唯一心の拠り所だったことは幸せだと思うわ。」

「記憶が無い辛さは分からないけど、強がり続ける辛さは分かってあげられる。本音を隠して強がって、自分が我慢すれば良いんだって諦めて…ほんとバカよ。」

…ふふっ。そういうえば最後の方で可愛い事言ってたじゃない。お嫁さんになりたいだつてよ、お兄ちゃん？」

「う、うるせえ！…妹だろうが何だろうが家族つてもんに変わりはないから良いんだよ。」

顔を赤らめているためいくら凄んでも調子が出ないゾロは顔を逸らして、大きく息を吐き気を静める。そんなゾロを悪戯に眺めつつナミは話を続ける。

「まあ、取り敢えずこれからの事を考えましょ。」

リイナが言った転生者達は敵では無いにしろ味方でもないわ。更に、そいつ等のリーダーは海軍中将だつて話だし。原作知識で私たちの行動を知ってるんだつたら、海軍が私たちを捕らえに出向いて来る可能性もあるわ。

だつたら、出来るだけ出会わない様に先へ進みたいわね。このまま空島に滞在してても危険性が高まるだけだから早めに出発しましょう。詳しくはリイナが起きてからにするとして…」

「なあ、俺は『ハキ』ってやつが知りてえー！」

ルフィとゾロはモックタウンで、ナミとサンジ、ウソップはエネルギーを撃退する際に体感している覇気に興味を持ったらしく、口々に同意の言葉を発している。

「ハキつてのは幾つか種類があるみたいに言ってたな。あと、あの素早く動くのを知りてえな。ナミさんとウソップは見ただろ？双子の^{ダイアル}貝切った時の。なんかステップ踏むみたいに踏み込んだと思つたら、一瞬で移動してて驚いた。」

サンジの説明で思い出したのかナミとウソップはあれか、と思わず声を上げる。

「…それって『六式』じゃないかしら？詳しくは知らないけれど、高速で移動したり、宙に浮いたり、砲弾すら受け止める世界政府公認の特殊な技法があったはず。海軍にも使い手が多いと聞いたことがあるわ。」

ロビンが補足説明すると皆が顔をしかめ一様に首を捻る。それを見て納得したのかロビンは声を出して笑ってしまう。

「ふふっ。リイナさんならそれを知らなくても簡単にやっつけてしまいうね。」

確かに、と皆が肯く仕草が可笑しくてそれぞれが見合わせて笑い声が増える。

「んっ…あ…」

自分の名と笑い声に反応したのか、のそりと上半身を起こし寝ぼけ眼のまま辺りを見回すリイナ。状況を把握したのか、ハツとした表情を浮かべ所在なさげにアワアワと狼狽えている。

「…あ、あのー皆様にはお恥ずかしいところを見せてしまい大変申し訳ありませんでしたっ!!」

挙動不審になりながらも深く頭を下げるリイナ。単に、恥ずかしさのあまり顔を見られたくない思いからの行動のようだ。

「何言ってるの。海賊の一味に加入したってことはそれは家族も同然なのよ？恥ずかしがることなんて無いじゃない。」

そう言っただけでナミはリイナに近付き優しく髪を撫でる。次いでロビンはリイナの肩に手を掛けて体を起こす。

「少し年は離れているけど、姉妹っていうのも悪くないかもしれないわね。妹はもつと姉を頼るものよ?」

ナミとロビンの言葉にリイナは瞳を潤ませる。

「…お姉、ちゃん?」

奇しくも、それぞれの立ち位置や身長差も作用しリイナは潤んだ瞳の上目遣いで二人に視線を送る姿勢になっている。

「あらやだっ！何この娘?!めっちゃくちゃ可愛い!!もう一回呼んで!」

「リイナさん!私の事はお姉さまって呼んでくれないかしら!!」

今までの張り詰めたものが抜けたせいなのか、年齢よりも幼く感じ

させるリイナの雰囲気二人は思わず抱き付いてしまう。

それは母性本能による加護欲を刺激されての行動なのか。それも、別の何かによる魔性の力に依るものなのか。

普段は暴走を食い止めるはずの側が暴走してしまっている状況を男性陣は少し引き気味に眺めることしか出来ない。

リイナは戸惑いつつも抱き付く二人の温もりを受け、あの日ゾロから感じたモノに似た何かを受け止めるのだった。

※ ※ ※

「お姉ちゃんの言う通り出来るだけ彼らに出会わずに進みたいと思います！」

その後の遣り取りで何故か私はナミさんをお姉ちゃん、ロビンさんを姉さんと呼ぶ約束を取り付けられた。…まあ、それも嫌では無いと感じるあたり私も絆されているのだろう。

海兵としての演技、この場合仮面とでも言うべきか。心までを覆っていた仮面を取り外し、軽やかに感じる気持ちの中に不安は未だ残るが、とても充実していると分かる。

「原作では連日の宴の後に空島から出発してるみたいだから、前倒しして今日か明日にでも出発すれば良いと思う。ルフィさん、どうかな？」

「ええ?!せっかく空島に来たんだからもっと楽しもうぜ！」

「せめて今すぐはやめてくれ。俺は貝ダイアルが欲しい。あれがあつたら色々便利そうだからな！」

ウソップさんは原作でも貝ダイアルを物々交換していたし仕方がないだろう。ルフィさんには遺跡探検とジュララの体内探検で黄金を持ち帰ってもらえば良いかと考える。

「じゃあ、夜が明けたら自由行動して、所用が済み次第出発しましょう。」

他にもナミさんはパガヤさんに頼んでいたウェイバーの試運転を、ロビンさんはまだ行っていない遺跡の調査。

サンジさんは空島でしか手に入らない食料を、チョップパーくんはガン・フォールやワイパーさんなどの怪我の診察などそれぞれにやりましたがあるらしいので各自自由行動にする。

私はゾロに修行の付き合いを頼まれたので二つ返事で了承した。それを見ていたサンジさんが落ち込んでいたが何だったのだろうかと思議に思う。

その後はまだ夜半だという事もあり各々床へ就いた。当然、女性陣はテントの中で横になるのだがいつもより狭いテントが心地良く感じるのは気のせいではないだろう。

微睡みに落ちる感覚の中、こんなにも安らかな気持ちで眠れるのはいつ振りだろうと思いつつ、その思考は霧散してゆく。

照らす朝日の眩しさを目を覚ますと、同じ様に目を細め手で日光を遮るナミさんとロビンさんの姿が見える。

その光景にホントの姉妹みたいだな、と感じてしまいついつい頬が緩む。

「お姉ちゃん、姉さんおはよう！」

※ ※ ※

原作での麦わら海賊団は、端的に纏めるならばエネルギーによる空島消滅を阻止した恩人、救世主的な扱いだった。

では、原作とは逸脱した現状はどうなのだろうか？

ガン・フォールやコニスさん、パガヤさんを除けばスカイピア住人たちは麦わら海賊団がエネルギーを討ち取った理由を良く理解出来ない。

事前に説明を聞いていたシャンディアたちからの又聞きで知る程度だろう。

神の島に集まったのも住居のある島雲が消失した為。ではなく、神アップバーヤードの振りをした私の呼びかけに応えただけである。

空に住まう者たちにとって大地とは神聖なものであり、その地に宿る神様ともなればより一層の神々しい尊さがあるのだろう。

違う過程を経たのならば、行き着く結果も変化してしまうのは摂理なのかもしれない。

遡ること数刻前。

貝ダイヤルを手に入れようと住民に物々交換を持ち掛けたウソツプさんだったが、交換ではなく献上品として沢山の貝ダイヤルを持ち帰ってきたのだ。流石にタダでは悪いということで大量の輪ゴムを渡したそうだが。

ルフィさんとナミさん、私でジュララの体内にお邪魔して財宝を持ち出した際も、住人たちはどこからかき集めたのか大量の金銀財宝を奉納品としてメリー号へ置いていった。

曰く、空には財宝なんかよりも大地の方が貴重だということだ。

ゾロとの修行最中においても見物人が取り囲み、まともな打ち合いすらままならない状況で切り上げたのだ。

他にもサンジさんが頂いたという引き摺る程大量の食料を船まで運び込み、食料でキッチンが占領される程だったり…

神兵と戦闘をしていたシャンディアの負傷者を診ていたチョツパーくんだが、何故か住人たちが列を成し健康診断を受けていたり…ロビンさんはシャンディアの酋長と原作と同じ様な会話をした後、上手く隠れながら遺跡調査が出来たようだ。

結局何が言いたいのかということ、空島の住人たちはとても信仰深いということ。現状では彼らにとつての麦わら海賊団は神様そのものであると認識されているようだ。

現在、雲クラウド・エンドの果てに向けて空島の下層である白海を進行中なのだが…左右に見送りの船が押し寄せているのだ。

海軍でも壮行会や出立式なんかでセレモニーを行う時がある。しかし、その比ではない。シャンディアの一部とスカイピア住人のほとんどが船を出し白海に花道を作り出している。

しかも、所々の船に楽団が居る様で、進めど進めど音楽は鳴り止まない。

ジャヤから付いて来ているジョーを筆頭に空島のサウサバードも隊列を組み見送りに来ている。白々海までは雲ウルフとジュララの鳴き声による大合唱も聞こえていた。

原作では逃げる様に空島を出た為、見送りはコニスさんとパガヤさんの二人と雲ギツネのスーだけでの見送りだったのだが、違う過程を経たことでここまで結果が変わるのだと改めて実感している。

クラウド・エンド
雲の果ての門が見えてきた辺りで事前に伝えていた通り帆を畳む。船外に置いていた物は既に移動だ。

一味は各々別れの言葉を発して手を振る。それに答える様に見送りに来ている人々の歓声が一際大きく上がった。

「そんじゃあ、野郎共！青海へ帰るぞお!!」

「「「「「おおお!!」」」」」

「ジョ〜!!」

ジョーは私の肩に停まり一緒に返事をする。共に空島へ上ったのだから、勿論共に下る。短い間だったがジョーも麦わら海賊団の一員なのだ。

門を抜け、スポンと雲の滑り台を飛び出して落下し始めるが、前もって知っていたればアトラクションの様で楽しいものだ。

すぐに『タコバルーン』がメリー号を掴み、ゆったりゆつくりと上空7000mを低速で落下してゆく。

カラア…ン カラア…ン

カラア…ン カラア…ン

カラア…ン カラア…ン

カラア…ン カラア…ン

心地良い風と遠く響く鐘の音が私たちの旅路を祝福してくれている様に感じ、自然と目を閉じる。

「…また来ましようね。」

「おう！次も突ノックアップ上げる海流ストリームでなっ!!」

「「「それはイヤだ!」」」

船上で共に笑い声を上げながら…

鳴り響く鐘を聴きながら…

麦かわら海賊団と共に進む航海へ新たな希望を胸に抱く。

不安が消えることは無いだろう。それでも、皆が居てくれるならきっと大丈夫。

根拠など無くともそう思える程に心が満たされている。

…だから、脳裏の端に霞み掛かるナニカはきつと気のせいに違いない。
い。

15・脅威と危険度、その抑止力

数日前に空島から青海へと下り、穏やかな航行を続ける麦わら海賊団。^{ログボース}記録指針の示す次の島の気候海域に入っているので気温、湿度共に安定している。既に島の影は見えているので数刻もすれば上陸できるだろう。

残念ながらサウスバードのジョーはジャヤの森へ帰るということで青海に降りた時点で別れた。猿山連合宛の手紙と幾つかの黄金を持たせお使いも頼んだら喜々として聞き受けてくれた。

船の甲板ではウソップさんが大量に献上された貝^{ダイアル}を用途別に区分ける作業をしている。自身のパチンコ強化やナミさんの天候棒改造^{クリマ・タクト}などを思い描きホクホク顔だ。

ナミさんは気分転換と言いウェイバーで遊んでいる。風、海流も穏やかなので気を張る必要もなく、舵はチョップパーくんに任せている。ロビンさんは船室で読書中だ。皆自由に過ごしているが、海賊とはこれでいいのだろうかと疑問が湧く。

ともあれ、空島から現在にかけては順調である。頂いた黄金の使い道も今後の方針も決まっている。

次の島でその目的が果たせればいいのだが、こればかりは到着しない^と分らない。

その理由は、私たちが空島を経由しているからだ。『七つある航路』^{ログボース}のどこに居るのか皆目見当がつかないのだ。記録指針を頼りに進行している^とので迷子にはならないが…

まあ、結果的に言えばどの航路でもシャボンディ諸島へは到達出来るのだが、予備知識は重要である。

もし、次の島が無人島だと何の情報も得られないので、記録^{ログ}の為に無駄に時間を浪費する事があるかもしれない。

もし、大物懸賞首が支配する島だと知らずに勝手に上陸すれば戦闘は免れないだろう。

以前の私だったら勝手に情報収集へと出向いていただろうと思う。そしてまたナミさんにお説教されるのだ。

今の私は力を誇示して居場所や地位を確立させる必要は無い。…などと、気難しく考えなくても良い。

行き当たりばったりでも良いのだ。仲間が居るのだから私一人が右往左往する必要なんて無い。問題があれば皆で解決すれば良いのだから。

なので、次の島に着くまでは私が個人的にやることも無かったの
で、自ら鍛練を名乗り出た三人と今から実践形式の訓練を開始する。

青海に降りてからは暇を見付けてはゾロ、ルフィさん、サンジさんの三人に『六式』の中でも汎用性の高い「剃」「鉄塊」を指南していた。

ルフィさんは数回見ただけで「剃」を修得した。『見えた』そうだが、見様見真似で出来るほど簡単では無いはず…

「鉄塊」についてはゴム人間であるため打撃は効かないので要らねえと言われた。斬撃は頑張つて避けるそうさ。

サンジさんは数回助言しただけで完璧に「剃」を修得した。独自に「月歩」まで修得した技量には目を見張るものがある。

だが「鉄塊」に関しては苦労している様だ。
ゾロはコツを掴んでからの「鉄塊」習得は早かった。

しかし、剣士としての足捌きが身に付いている分「剃」は絶望的だったので断念した。

それでも常人を遥かに凌ぐ早さで修得したことには驚く。私が言うのも可笑しな話だが、『六式』とは物心ついた頃からそう…いった教育や訓練を受けた者がやっとの思いで六つ全てを修得出来る技術なのだ。

そう考えると、たった数日で一つでも修得したのならば充分だと言えるだろう。

因みに、実践形式とは言っても私が三人同時に相手にしながら要所で助言を添えてゆく程度のものだ。

船上は狭いのと、メリー号に損傷を加える訳にはいかなないので能力

の一つである。『アイソレーション 隔絶』を使用しているが、船上ではそれ位が限度だ。

私は木刀を使い、今回は『覇気』も解禁する。三人は無制限で私に挑み、一撃でも加えれば終了だ。しかし、サンジさんは自身の信念に基づいて私には攻撃する気は無い様で実質は一对二である。

訓練の序盤からルフィさんは新技を披露し私は肝を冷やしたが、早速『スリット 剃』を活用した素早い動きと悪魔の実の能力を効果的に発揮した新技の組み合わせは相性も良い。

ゾロに至ってはメリー号の破損を気にしないで良い環境を利用し、遠中距離の斬撃を上手く使いながら私の懐へと潜り込む。三刀流の変則的に斬り込む連撃と多様性に富む剣技、二刀流の多種多彩な剣技。どれをとっても他を追随させない程光るものがある。

それでも二人の猛進撃は私には届かないのだが、それは『覇気』のおかげであると言えるよう。

『覇気』を使わない状態ならば二人掛かりとは言え、均衡とまでは言えないくらいに押されていただろう。

「ルフィさんはゴムである事に慢心し過ぎ。」

私は木刀に『武装色の覇気』を纏わせ迫り来るルフィさんの拳を打ち払う。ルフィさんは覇気を纏った打撃で痛む拳を摩りながらバツクスステップで間合いを取る。

「サンジさんは攪乱とサポートに徹するのは良いですが、それだけだとあまり効果が無いです。」

『スリット 剃』『スリット 月歩』で私の視線と意識を乱しルフィさんとゾロの攻撃をサポートしてはいるが、私を攻撃する気が皆無なのと、『見聞色の覇気』で警戒していれば攪乱の意味は無い。

「ゾロは私に意識を集中し過ぎ。…ほら、こんな風に。」

ゾロへ正面から打ち込み、わざと罅迫り合いにして身体の位置を入れ替えることで、私目掛けて飛び込んで来るルフィさんと衝突させる。

それによって折り重なり倒れ込む二人を見やり訓練の終了を告げた。

『覇気使い』との戦闘は今後の課題だと理解してもらえれば良いので、今日は終わりにしましょう。」

「「おう……」」

私は「アイソレーション隔絶」を解除し座り込む三人に歩み寄りながら心の中で評価を確認する。

ルフィさん、サンジさんの「剃」は上々の仕上がりがだ。並大抵の相手なら姿を見失った時点で勝負は決するはずだ。だが、格上、特に覇気使いには通用しないだろう。やはり後の先を取れるように『見聞色の覇気』が必要となる。

ゾロは相手の懐に入り込むまでに負傷することが多いそうなので、もう少し「鉄塊」の練度を上げた方が良いかもしれない。『武装色の覇気』が使えれば弱点も補えるのだけど……

やはり私だけの麦わら一味強化は限度がある。基礎的な修行や『六式』ならば事足りるのだが、『覇気』を師事するとなれば私だけでは無理だ。

このまま航海を続けていけばシャボンディ諸島へは辿り着く。その時にレイさんに師事してもらえらるだろう。ただ、悠長に構えていらればの話だが……と、また一人で思考を深めている。

最早、これは癖になってしまっている様だ。

頭を左右に振り三人の様子を見ると、半目でジーツと私を見詰めていて居心地が悪い。

「……な、なんででしょう?」

「また何か企んでんじやねえか、と。」

「覇気つてのは反則だな、と。」

「なんでそんなに強えんだよ!?!」

三者三様の言葉に私は苦笑いを浮かべる。

「まず弁解するけど、もう一人であれこれ考えて勝手に行動するつもりはないよ?」

それに、覇気は早く修得出来た方が良いなあと考えてただけ。結局、個人の素質だから何とも言い難いけど、師事して貰える人の心当たりはあるの。その人の判断を仰ぎたいと思ってるからそれまで

待ってね。

あと、転生における恩恵が大きな有利性を持っているのは事実かな。だけど、追い抜かれたら抜き返すのは難しいんじゃないかと思う。だって、今が私の限界、若しくは上限に近いとするとこれ以上強くなれないってことでしょ？

スタートダッシュが上手くいって今は皆より強いのだろうけど、伸び代が小さいって考えると複雑かな。」

それぞれ思案する三人の表情は気色の良いものになっている。覇気の修得への期待も含め、これから更に力を付けていけるとポジティブに考えたのだろう。

その後、ナミさんから上陸準備の声がかかるまで自由時間になり、ゾロの昼寝に付き添い至福の時間を満喫した。

※ ※ ※

そこは特に何も無い草原だった。港も無ければ近辺に家やお店などの建物は無い。なぜか縦や横に長い不思議な動物たちはのんびり、ゆっくりとした動作でメリー号に寄り集まってくる。

空島限定であってほしかった『地母神』^{ヘカテ}効果は私の期待を裏切り、絶賛継続中のようだ。

ルフィさん、ウソツプさん、チョップパーくんはその不思議な形態の動物を追いどこかへ走って行った。それを見てナミさんはため息を漏らす、気が済めば戻るだろうと苦笑して椅子へ腰を降ろす。

私は見張り台へと登り、辺りを見回して安全の確認をする。上陸した島自体はそんなに大きくはないようだが、反対岸は隆起した小高い丘の隙間から僅かに覗く位しか見えない。

幾つか覗く反対岸の一つからテントらしきものやステージのようなものもが微かに見える。耳を澄ませば大砲のような音や歓声らしき騒音も聞こえてくる。

「お姉ちゃん！島の反対岸でお祭りみたいな事やってるみたい!!」

甲板で互いに顔を見合わせ肩を竦める四人。確かに、草原だけの無

人島でお祭りが開催されていると聞いても信じられないだろう。気持ちは理解出来るがその反応は傷付くからやめてほしい。

「…ん？あれは…」

島の中央部になにやら土煙と人影を見つけ目を凝らすと、ぼんやりと麦わら帽子のシルエツトを確認出来る。ウソツプさんとチョツパーくんの姿も確認。それからもう一人と：馬？だろうか。民家みたいな建物の前に居るのならばこの島の住民なのだろう。

「それと、ルフィさんたちが住民の方と接触してますがどうでしょう？」

「人が居たなら話が聞きたいわ。一旦向こうに合流しましょう！」

と、いう訳で私たちはルフィさんたちと合流したのだが、キリンみたいに首や脚の長い白馬が人を乗せ楽しそうに草原を駆け回っていた。

先んじて話をしていたウソツプさん言うには、この島はロングリングロングランドといい、元々はリング状の島だが普段は海によって十の島に別れているそうだ。

そして、年に一度大潮の数時間だけ本来の姿を取り戻し、その間に島から島へと移動する遊牧民が住まう島らしい。

トンジツトさんはその遊牧民の一人なのだが、十年前竹馬に登ったきり降りて来れずに村の移動に取り残され、馬のシェリーは行方不明のトンジツトさんを十年間待ち続けていたという。

シェリーはトンジツトさんに再び会えて余程嬉しいのだろう。私たちには目もくれず踊る様に軽やかに駆けている。

シェリーは家畜としてではなく、トンジツトさんの家族として共に過ごす一員なのだろう。私の『地母神』^{ヘカテー}効果は全く現れていない。

つまり、家畜やペットとして育てられた動物にはある程度の本能が残る為に効果があるという事だろうか…

フリーダー^{フリーダー}オームとホーリー^{ベツト}の関係には作用したので線引きをするならばこの辺りだろうと思に至る。

ということは、昔ガーブさんに放り込まれたジャンルで猛獣に何度も襲い掛かれたのは何だったのだろう。もしかすると、あれはじや

れて飛び付いていただけなのかもしれない。だとしたら可哀想な事をしたなあ。

…だって、恐怖の余り我を忘れて能力で切り刻んでしまったのだから。さらに、飛び散る肉片のグロさに恐怖トラウマを覚えたのは言うまでもない。

閑話休題

まあ、少しばかり昔を思い出し現実逃避するのも無理は無い。なぜならば、シエリーが駆け回る草原の奥に見えてはいけないものが目に入ったからだ。

こんな何も無い島にあの人が来る理由など無い。きつと木と見間違えたのだと言い聞かせる。

しかし現実は無情で、その人影は徐々にこちらへ近付いてくるのだ。先ほどの臆気な人影から少しづつ姿が明確に見えてくる。あんな特徴のあるシルエツトを私が見間違えるなどあり得ない。

「…皆！私の後ろに集まって!!」

急に立ち上がり緊迫感を放つ私に、皆がその視線の先へ目を凝らす。その中でロビンさんだけが迫り来る脅威に気付き息を荒げている。

「っ!?!…なぜ?…こんな場所に?!」

「分からない。…だけど、姉さんはあの人を知ってるのね。…立てる? 私から離れないでね。」

動揺を隠せない私とロビンさんを目の当たりにして皆は戦闘態勢を整える。ルフィさんとゾロ、サンジさんが私の前に入る。

「リイナ、ロビン。あいつ誰だ?」

「お前らがそこまで動揺するってこたあ相当な奴なんだろう?」

「レディをこんなに脅かすなんて許せねえな。」

三人の気持ちは素直に嬉しいのだが、今この三人が相對するのは危険だ。まだ覇気を扱えない状態で挑めば命がいくつあっても足りない。

しかし、注意喚起しようにも急激に水気を失った口内は上手く言葉を紡げない。そんな私の代わりにロビンさんが簡潔に相手の素性を明かす。

「…海軍本部 大将『青雩』」

その言葉に一瞬で動揺が広がる。こちらへ歩を進めているのは海軍の最高戦力である大将だ。無理も無いだろう。

既に互いの間合いにも入る距離だ。今ならまだ能力で転移すれば逃げられる。

しかし、この島に来てからまだ数刻も経っていないので記録は溜まっていない。メリー号に転移してもすぐには出航出来ない。

それならばメリー号ごと転移すれば追っては来れないだろう。その場合、何処へ転移すれば良い？

能力で次の島に行けないことも無いが、それでは私の能力で移動するだけのものになってしまう。それを『海賊』と呼べるのだろうか？だが、ここで捕らえられれば航海そのものが終える。

逃げるならばどう逃げるか、どこへ逃げるか。今の状態では明確な対処が思い浮かばない。そんな纏まらない思考を遮る様に海軍大将…クザンさんが口を開いた。

「…そう構えなさんな。俺あ散歩がてら様子を見に来ただけだ。」

両手を軽く挙げ、私たちに「落ち着け」と動作で表してくる。その表情も雰囲気も以前、海軍本部にて会話を交わした時と同じ様だった。

「…本当、ですか？」

クザンさんを知る人ならば、この人なら有り得る、と感じてしまう程にその言葉の信憑性は高い。それでも恐る恐る問い掛けるくらいの脅威を持った人だ。

「なんだ？少し見ない間にしおらしくなったじゃないの、リイナ。…それに、イイ女になったなニコ・ロビン。」

前に立つ臨戦態勢の三人には目もくれず私とロビンさんを見やり不敵に笑みを浮かべる。

「アラバスタ事後、行方を眩ましたニコ・ロビン。そして海軍を辞職したロロノア・リーナ元大佐。その二人が同じ海賊団に加入したって話で上層部は大慌てだ。…ああ、ちよつと失礼。歩き疲れた。」

そう言つて横になるクザンさん。対して私たちは未だに安心出来る答えが無いため警戒を解けないでいる。

「本当ならサカズキさんが来る予定だったんだが、ドリフト中將が上手く言い包めてくれたんだ。感謝しとけよ?」

「なるほど。…皆さん、この人は本当に散歩のついでに様子を見に来ただけらしいです。なので一旦落ち着きませふつ?!」

クザンさんの言葉に安堵の息を吐き、皆に警戒を緩めるよう口を開いたのだが、頭頂部に衝撃を受け私の発する言葉は中断されてしまった。私に背を向けていたルフィさんがいつの間にか振り返り、私の脳天へと手刀を落としたのだ。

「喋り方が前みたいに戻ってんぞ。おまえが落ち着けよ。」

…確かにクザンさんが突然現れたものだから動揺のあまり余裕を持てずにいた。再び一人で考え『逃げる』ことしか考えていなかった。散々、勝手に考えて行動はしないと云つておきながらあっさり反故にしようとは情けない。

「ごめんなさい。…ありがと、ルフィさん。」

おう、と笑顔を返すルフィさん。なんだかんだ言いつつもちゃんと船長なのだと改めて実感する。

大きく深呼吸をして皆を見渡してから眼前の海軍大將 クザンさんの紹介・説明に加え、先ほどの会話で出てきたサカズキさんの説明をする。その間、クザンさんは自前のアイマスクを装着し昼寝を始めたので放つて置いた。

※ ※ ※ ※ ※

あれは私がまだ海兵で尉官だった頃、グランドライオン偉大なる航路前半のとある島で総合賞金額四億超えの構成人数が500人にもなる大型海賊団の捕縛作戦があつた。

実は艦隊編成の規模としてはそれ程大きなものではなかったのだが、『海軍本部 大将』が率いる艦隊ということもあり、規模の割には大掛かりな作戦であったと言える。

その時、私はドリフト中将の命に従い大将 赤犬の部隊編成に組みれ同行した。

開戦当初こそ敵味方入り乱れる混戦模様となった。しかし、戦場には佐官以下の者しか出ていない。尉官以下の実力の伴わない海兵は一人、また一人と倒れ伏してゆく状況だった。

私の役割は戦闘ではなく、能力を使用し、負傷した海兵の撤退を援護する事。そして討ち取った海賊の捕縛、連行だったのだが、開戦から幾分経つても待機命令が解除されない。

それは作戦としては異常だった。倒れゆく人たちを遠巻きにただ見るだけ。そんなものを作戦と言えるのだろうか。

私は衝動を抑えきれず戦場へと向かおうと駆けだしたが、直ぐさま名も知らぬ上官に羽交い締めになれ取り抑えられた。

「まだ待機命令中だっ！」

怒りを内包した震える大声に、私を抑える腕の震えに、上官すらもこの作戦の異常さに隠せない程の憤りを感じているのだと気付いた。「間もなく君の出番になる。それまで、耐えてくれ！……すまない。」

上官の悲痛な訴えに、私は意味を理解出来ずにいた。そして一人、また一人と海兵が膝を折り、血を流してゆく。

今作戦は捕縛作戦だったはずだ。私はそう聞いていた。しかし、いざ開戦してみればそこは阿鼻叫喚の地獄へと変貌したのだ。

なぜ私はそれをただ眺めているだけなのだろう……これ夢ではないのだろうか。そんな思考が脳裏に過ぎる。

その数瞬後、世界政府の最高戦力が内の一人、サカズキさんの手によつて戦場は更なる地獄絵図へと変わる。

敵である海賊団と味方であるはずの海兵を、見境なく襲うサカズキさんの悪魔の実の能力による広範囲攻撃 “流星火山” が降り注いだのだ。

それが収束すると同時に上官からの救援命令が下された。その声

で我に返ると燃え盛る戦場を駆け回り、人を見つけては生死を問わずがむしやらに能力を駆使して回復を試みた。

後で気付いた事だが、その中に佐官クラスの強者は存在しなかった。サカズキさんの攻撃を察知して難を逃れたか、その攻撃を事前に知らされていたのだろう。

幸運なことに、敵である海賊も含めて辛うじて生存している者たちは多く、私の能力で回復出来た。

しかし、残念なことに既に事切れた人たちは私の能力であっても息を吹き返すことは叶わなかった。

救えるはずだった、死ぬ必要の無いはずだった海兵。

捕縛さえすれば、殺す必要まで無かったはずの海賊。

少なくはない人数が命を落とした。

その作戦で命を落とした者たちの殆どがたった一人の手に依るもの。

海賊如きに後れを取る弱者は不要だとして、あろう事か戦場で負傷した海兵を作戦中に粛清したのだ。

更に作戦終了後、私が能力で回復し捕縛したはずの海賊たちすらも、『絶対的正義』の名の下に全員その場でサカズキさん自ら手にかけた。

その結果、必要以上の被害を出し海賊団は壊滅、捕縛者はゼロ。海兵の殉職者は数十名にもなった。

あまりにも力に固執し、力を誇示する為だけの作戦だった。正義とは名ばかりの傲慢なこの件に関して私は大将　サカズキに直接抗議し、結果戦艦三隻を沈める戦闘を繰り広げた。

本来なら軍法会議無しで死罪に処する程の罪なのだが、作戦の真意を隠す為に表立って問題にはされなかった。真意については別の話なので省略する。

つまり何が言いたいのかというと、大将　サカズキは『絶対的正義』の為ならば自身が悪と判断した相手を敵味方関係無く、犠牲を問わずまとめて葬る程の『徹底的な正義』の行使者である。

今回、クザンさんではなくサカズキさんが訪れていたならば、有無

を言わさず襲い掛かって来ていただろう。サカズキさんにとって海賊Ⅱ悪なのだ。一片の容赦も無く、私たちと一緒に居たトンジツトさん諸共消し炭にする気で仕掛けていたはずだ。

対して、クザンさんは『ダラけきつた正義』をモットーとしているが、立場や状況に応じて判断を下せる芯の通った人だ。ドリフトさんと共謀してサカズキさんを抑えてくれたのなら『散歩のついで』だという言葉は信用に足ると判断出来る。

※ ※ ※ ※ ※

「だから、今のクザンさんは私たちを捕らえに来たんじゃ無くて本当に様子見に来たんだと思う。」

それに、ドリフト^転生^者さんが私たちの動きを把握しているなら、今逃げても意味が無いと思うの。

もし、敵対行動を起こしたらすぐに転移出来るようにしておくから。」

「…昔、私も彼に見逃して貰ったことがある。今回捕らえる気があるなら既にそうしているはずよ。それだけの力を持っているのだもの。だから、話をするくらいなら構わないと思うわ。」

ロビンさんがいつクザンさんと面識を持ったのかは分からない。しかし、オハラ的事件を知るはずのクザンさんがロビンの逃亡を見逃したということは何か考えがあつての事だろう。

「リイナとロビンがこう言ってるんだから問題は無いでしょ。」

それに、記録^{ログ}が溜まつてないからまだこの島を出発出来ないし、トンジツトさんの件も解決してないんでしょ？

ルフィ、決めるのは船長のあんたよ。」

私とロビンのさんの言葉を聞き、ナミさんは賛同という風に促しルフィさんに向き直ると、腕を組みウンウン唸りながら聞いていたウソップさんが当然の疑惑を口に出して訴えかける。

「なあ、そのサカズキってヤバイ奴の代わりにアイツが来た。だから大丈夫ってのは早計じゃないのか？

なんであれ、アイツが海軍の大將だったのは変わり無えんだしよ。それに、アイツを手引きしたドリフトってのはリイナの元上司で転生者チームのリーダーなんだから…結局、敵か？それとも味方なのか？」

ウソツプさんの言う事はもつともであるが、私には確信があった。ドリフトさんが、原作通りに物語を進めたいのであればここで麦わら一味を捕らえることはしない。そのためにクザンさんを寄越したのだと。

「おしー」

胡座をかいたルフィさんが両膝を叩き立ち上がってクザンさんの方へ進む。皆は船長の決断を気にしつつ一様に目線を送るだけだ。

「なあ、ロビンとリイナを連れてく気はないんだよな？」

「…ん？ああ、ねえよ。」

横になったままアイマスクをずらし問い掛けに答えるクザンさんの声は気が抜けていて演技とは思えない。

「わかった。用があんならさつさと済ませてくれ。」

それと、あのオツサンと馬を助けてやってくれよ。俺たちより海軍の方が良いだろ。」

ルフィさんはいつものようにニシシと笑い私たちに振り向く。釣られて私たちも息を吐き頬を緩めながらルフィさんの後ろへと集まる。

「…で、まあなんだ？俺が来たのはアレだ。上が五月蠅くてな。」

ロロノア・リイナとニコ・ロビン両名の確認と、船長 モンキー・D・ルフィの見極めってとこだ。」

「…もしかして、五老星直々ですか？」

海軍の大將が上と言えば、元帥 センゴクさん、総帥 コングさん、五老星くらいしか当てはまらない。

世界政府上層部に目を付けられたとなると少人数海賊団には辛いところがあるだろう。

「あの人たちはお前の心配ばかりよ。それで『ALIVE ONLY』なんて手配書出しちゃうんだから困ったもんだ。」

まあ、上つつうか上層部な。中将以上の役職から出る大半の懸念事項は、リイナとニコ・ロビンが組んで世界の転覆を企てないかって議題が多いな。ほぼ全員がお前の性格上それは無いと思っちゃいるが、絶対とは言えない。

あとは、船長が二人をどう扱うかってところに注目か。新米海賊団ルッキーの懸賞額としては異例だがまだまだ軽視されている。

そんで、少数だがこれだけの曲者が集まってる脅威に気付いてんのは俺を含めて数人程度だ。

初頭の手配に至る経緯、やらかした所業の数々、成長速度。

いずれ船長がああ男の息子だと知れば総戦力での抹殺指令が下るだろうよ。」

「…私もロビンさんも世界の転覆なんて考えて無いですよ。ルフィさんもそんな危険思想は持ってないですし。」

そもそも、なぜそんな大層な議論が出てるんですか?」

ほぼクザンさんと私だけの会話になってしまっているので、他の皆は会話の端々に出る不明な言葉に首を捻っている。それらも含めて後で説明しなければならぬだろう。

「…わかった。噛み砕いて説明していく。」

懸賞額ってのは『強さ』で決まるもんじゃないのは知ってんだろ。政府に及ぼす『危険度』でも表される。だからこそ、ニコ・ロビンは八歳という幼さで懸賞額が付いた。

リイナ、お前は悪魔の実の能力で何でも出すことが出来る。人でも武器でも、それこそとある兵器とかな。

ただし、お前一人ならって話で5億の懸賞額でとどまっている。周知の能力そのものだけじゃそれ程の脅威にはならねえからな。」

ロビンさんが手配された経緯はある程度の階位にある海兵ならば知っていて当然だろう。あのオハラの生き残りであり歴史ポーンゲリフの本文の解説が出来るという事だけで危険視されているからだ。

一方、私は悪魔の実の能力の扱い方において危険視されているという。海軍に公示していた表向きの能力であつても危険度は高いと判断されている。

「だが、ニコ・ロビンが加われば話が変わってくる。なんせ歴史の本文ポルネグリップの解説が出来るんだ。それだけで生きている事が罪だと言える。詳しくは言えねえが、リイナの能力とニコ・ロビンの知識を悪用すれば世界が滅ぶと言っても過言じゃねえ。」

つまり二人が揃えば、政府にとつて最上級の危険度つてことだ。お前らにその気が無くても危険度は変わらねえ。二人一緒に懸賞額が付けば10億でも足りねえくらいだ。」

私とロビンさんが手を組めば世界を滅ぼせるという見解なのは理解出来る。遠い昔に造られた古代兵器の事を言っているのだろう。だが、それを実行するかしないかの分別くらいは出来るのだから信用してほしいものだ。海賊相手に信用しろというのは可笑しな話だが：

「それで、重要なのが船長だ。二人をどう扱うか、制御出来るか、そんな度量・器があるのか。それを見定めなきゃいけねえ。」

元々サカズキさんが来る予定だったつったろ。リイナ以外を殲滅すりや脅威は消える。そっちの方が政府にとつては確実だし、下のモンとしても楽だし簡単だ。

じゃあ、なぜそうしなかつた？それはリイナを完全に敵に回す方が脅威だからさ。

上層部の一部だけが知っているリイナの本当の悪魔の実の能力。一瞬で世界を消し去る程の力を持つてる奴の反感は買いたくない。それが最終的な政府の総意だと思ってもらつてかまわない。」

例えば『家族』の命を奪われれば私は復讐心に駆られるだろう。それが海軍であろうと容赦はしないと断言出来る。あえて自らに矛先を向けられる様な軽率な行動は起こしたくないということだろう。

それと、確かに私は海賊になったというのに未だ海軍に対して敵対心は持っていない。さすがに中将・大将クラスが出向いてくれば先ほどの様に危機感を抱くが、率先して海軍相手に戦おうなどとは思わない。

彼らはそんな私の心情を変えたくないというのだ。今回のような僅かな干渉だけに留め、小さな恩を売りつつ互いに不利を被らない距

離を保ちたいということなのだと推察出来る。

「だからな、モンキー・D・ルフィ。お前がこの二人を一味にすることがどれだけの事か理解しなきゃならないんだ。その上で、それだけの覚悟と器がお前にあるのか確認する為にわざわざ来たんだ。」

上半身を起こしルフィさんを見据えるクザンさんの雰囲気は少し険しく変化し、正面に捉えるルフィさんも険しい視線を返す。二人の放つ殺気にも似た気がピリツと肌を刺す感覚を受ける。

私とロビンさんの様子を見に來ただけで、捕らえる気は無いと言った。そう、『二人を』とは言ったがルフィさんに関しては見極めると言っただけである。

ルフィさんの言葉次第でクザンさんは動くかもしれない。思わず私は刀に手を掛け身構えるがルフィさんの右腕に制された。

「…よくわからねえけど、お前らの都合なんて知るか。ロビンもリーナもウチの船員クルーだ。生きてることが罪だとか、能力が危険だとか勝手に決めんな。」

「今後、お前の決断一つで世界が消える。それは覚えとけよ？」

お前が海軍にとって不利益になる船長なら一味丸ごと消さなきゃならねえ。若しくはリーナ、ニコ・ロビン両名の捕縛。そのどちらかだ。

期待してるぜ、ガープさんの孫としてな。」

「じいちゃんは関係ねえだろ。」

ロビンもリーナも自分の夢の為に生きてんだ。俺は船長キャプテンとして船員仲間を信じる。それだけだ。

お前らもリーナの事知ってんなら信じてやれよ。」

ルフィさんの言葉に、少しクザンさんの険しい空気が収まるように感じる。ルフィさんの器に何かを見出したのだろうか。

「ふっ、ガープさんにそっくりだわ。奔放というか、つかみ所が無いと
いうか。嫌いじゃあない。」

まあ、今回は俺からの忠告って事で終いだ。これでクロコダイルの件、借りは返したぜ。」

意外な事にクロコダイルの事を借りだと感じていたらしい。皆も

私と同じような表情を浮かべて安堵の息を漏らす。

その後、トンジツトさんと呼びクザンさんに保護を頼もうとしたのだが、一人で来たから船は無いという。

昔から自転車に乗ってあっちこっちにフラフラと散歩に出掛けているが、まさか今回もそうだとは思っておらず溜め息を吐く。

「つまり、三つ先の島へ移動出来れば良いんだろ？ だったら、俺が道を作ってやるから移住の準備をしなさい。」

クザンさんの言葉に皆疑問を浮かべつつトンジツトさんと移住の準備を開始する。ロビンさんはクザンさんを警戒してか私と共に手伝った。

クザンさんの能力は自然系『ヒエヒエの実』の氷結人間。ロビンさんも知っていたようで驚きはしなかったが、他の皆はそれがどれだけの脅威なのか実感したようだ。

本来、引き潮の時に道が出来る海岸へと移動し、三つ先の島までの海を能力『氷河時代』で凍らせて道を作ったのだ。

何度も感謝を述べるトンジツトさんとシエリーを見送る。ルフィさんはなぜかクザンさんと打ち解けており、私としては複雑な心境にあった。

ともあれ、記録についてはあと数刻で溜まると教えてもらっているのでそれまでは少し待たなければならぬ。

待つのは良いのだが、出来れば早くクザンさんにはお引き取り頂きたい。しかし、その素振りを見せないで私とロビンさんは微妙に萎縮したままなのだ。

その時、一際大きな大砲の音が数発鳴り響き皆が辺りを見回して構える。それと同時に私はある事を思い出しそれを告げた。

「そういえばメリー号から見えたんだけど、島の反対岸でお祭りみたいなことしてたよ。」

ルフィさんを筆頭にウソップさんとチョッパー君が興奮の声を上げ、他の皆も思い出したようだ。

「なんだ、気付いてたのか？ ありや祭りじゃねえけどな。そこに行くから付いて来い。」

そう言つて歩き出すクザンさんの後を私たちは追いかける。元々そこに私たちを連れて行く用があつた風に言つていたのが気になる。

「祭りじゃないなら何ですか?」

「ああ、あれは祭りなんて生温いモンじゃねえ。」

歩きながら振り返り、片側の口の端を吊り上げて不敵に笑うクザンさん。その視線はルフイさんを見据えている。

「エゲつない、海賊のゲームさ。」

16・束の間

「お疲れさ〜ん。…で？どーだった？」

薄暗く湿った岩肌が露出した洞窟内に似付かわしくない陽気な声が響く。

一人掛け用のソファアームに座ったまま期待に満ちた眼差しを入り口へ向けて返事を待つ青年はロード。

その声に反応し小さく息を吐いて、肩を諫めながら首を左右に振りながら洞窟内へ入ってきたのはスーツ姿のシールだ。

「…先ずは、君の望むような展開にはならないだろう。と、先に言っておく。」

物静かで淡々とした返事にロードは口を尖らせて不服そうな表情を顕わにする。そんなロードを気にも留めず、シールは小さなテーブルを挟んだ対面のソファアームに腰を落とし、大きく息を吐くとリラックアした様に背もたれに身を任せ天井を仰ぎ見る。

少しばかりの空白の時間にロードは多少苛立ちをおぼえるが、急かすと小言が増えると理解しているので黙って待っている。少ししてから頭を起こしやつとシールは口を開いた。

「…彼女は我々と敵対関係になることを厭わないと宣言してみせた。だが、リーダーが現状維持を命じている以上、先日のような行動は慎むべきだな。君の独断先行は我々にとって不利益しか生まないのは火を見るより明らか。それすらも理解出来ない程阿呆ではあるまい。」

シールの抑揚が少ない静かな物言いに不満を募らせるロードだが、それは言葉を発している自身すらも不満を抱いている表れだろう、と捉える。

それから幾つかの会話を交わし、空島でのコロノア・リイナとの邂逅やそれに関するリーダーへの報告、指示の詳細などを十分に終え、ロードは以前から気になっていた疑問を投げ掛ける。

「結局さあ、リーダーの言う『計画』って何なのかねえ？」

「私も聞き及んではないが、勝手な憶測を君に語ると碌な事ならんからな。…ただ、原作におけるシャボンディ諸島での麦わら一味再集結が契機になる事は確かな様だ。」

シールにとっては、リーダーとの会話の中でポツリポツリと浮かび上がる『計画』の断片からの憶測ではそうなっている。

しかし、ひた隠しにしているはずの『計画』をつい、うっかりと会話の端々に語るなんて事をあの慎重な男がする筈が無い。

敢えて断片的に伝えることで自分たちの不満を抑える材料にでもしているのだろうか、とシールは考えて心に留めている。

「…んだよ。まだ大分先じゃん。俺ってばもう少し体動かさないとメタボっちゃうんじゃない？」

ケタケタと笑うロードとは対照的に、シールは沈痛な面持ちで思考している。何の反応も見せないシールに苛立ちを隠さず眉間を狭める。

「…おっさんさあ、若者が場あ繋ごうと自虐ってんにシカトは無いつしよ?」

「君のは自虐ではなく皮肉と言うのだ。それに言うべき相手は私では無いだろう。そんな八つ当たりはどう反応を示せと言うのだ?」

わざとらしく溜め息を洩らし正面から見据えるシールに、舌打ちを一つして目を逸らしてしまったロード。シン…と静まる場に気まづさが漂う。

不機嫌さを隠しめせず態度に表すロードを一瞥し、内心で苦言を吐き何度目かの溜め息を洩らしてからシールは立ち上がる。

ソファアールから腰を上げ、無言で規則的に靴音を数歩鳴らして立ち止まると、わざとらしく小さな咳払いをしてロードに聞こえるよう白々しく呟く。

「…これは独り言だがな、転生者という仲間ではあるが『計画』の詳細が分からない以上、行動可能な範囲が明確では無い。だから、私は彼女らに直接関わらない様に少し散歩し、現地の方々と世間話を楽しんでこよう。その程度ならばドリフトも咎めんだろうしな。」

再び靴音の反響が鳴り出す頃には、先ほどの不機嫌さを霧散させた

ロードは意地の悪い笑みを浮かべていた。

「ああ…俺も独り言だけだよお、ちつと遊びに行くくらいなら許されるよなあ。休日にフラツと遠出する感じでさあ。あ、今度フライトとデートしてこようかね。そこで誰かとばったり会っても『不幸な事故』ってことで仕方ねえよなあ…」

既にその洞窟には一人の気配しか残っておらず、それがシールの耳に届いたのかは定かではないが所詮は独り言。

一拍ほどの静寂の後、くつくつと両頬を吊り上げ笑うロードも立ち上がった。

※ ※ ※

私たちが上陸したロングリングランドという島に現れた海軍本部 大将 クザンさんを先頭に、麦わら海賊団一行は移動中である。

移動しながらの会話の中で、停泊したメリー号から微かに覗き見えた反対岸のテントやステージなどを『お祭り』と言い表したのだが、そうではなく海賊のゲームだとクザンさんは訂正して言葉を続ける。

「話を少し戻すが、結局政府としての危惧はロロノア・リィナとニコ・ロビンの両名が同じ一味に在籍してることだ。」

クザンさんはそこで一度言葉を区切り、更に歩を進めてゆく。数十歩ほど歩いたところで欠伸をし、頭を掻きながら首を傾げてこちらへ向き直る。

「だからな、可能ならば二人の内どちらかが別の一味に行けばいい。そういう妥協案もあったんだ。」

…それがあれだ。」

そういつて、『あれ』と指を差す方向へ目を向ける。

遠目から見てもメリー号の数十倍はあろう大きな海賊船。その船の掲げる海賊旗シヨリーロツヤにはおぼろげではあるが『FOXY』という文字が確認出来た。そして、その奥には帆の外された船がもう一隻。

「…フォクシー？記憶には無いですけど、大物ですか？」

記憶を掘り起こし数多くの手配書を思い出そうとするが『フォクシー』なる海賊は浮かんでこない。

「いんや、小物だ。懸賞金は俺も憶えてねえ。だが、とあるゲームばかりやってるもんだから船員だけは多い特殊な海賊団だ。」

…で、取り敢えず麦わらにはそいつらとゲームをやってもらうつもりだ。」

再び歩き出すクザンさんの後を追いながら会話を続け、告げられた言葉に理解が出来た者は私とロビンさん、ウソツプさん、サンジさんだけだった。

なぜそう判断したかというと、私以外の三人が明らかに焦りや困惑を孕む雰囲気変わったからだ。

「ルフィー！そのゲームは受けちゃダメだ!!」

「なんだ、ウソツプ？おめえなんか知ってんのか？」

「逆に聞きたいわ…あなたそのゲームを知らないの？」

「ああ、知らねえ。」

「おい、ルフィー。『デービーバックファイト』って聞いた事ねえか？」

「…うん、知らねえ。」

普段の緩んだ雰囲気よりも余計にだらけた調子で鼻をほじりつつ答えるルフィーさん。

私も含め、四人で同時に頭を押さえ大きな溜め息を吐き出す。常識とまでは言わないが、海賊ならば知っていてほしい事の一つだからだ。

ルフィーさんと同じように知らないであろう首を傾げたままのゾロとナミさん、チョッパーくんにも四人で簡単に説明をする。

このゲームには幾つかの形式ルールが存在するが、要は『仲間の取り合い』なのだ。

ゲームに勝てば相手方の船員を奪える。負ければ味方の船員を失う。単純にゲームの勝敗で船員クルーが増減するのが『デービーバックファイト』だ。

勝てば良いんだろ、とルフィーさんは気軽に笑っている。が、そうではないのがこのゲームの恐ろしいところなのだ。

例えば、コインの表裏を当てる勝負があるとすると、これは単純に1／2の確率で勝てる。そう高をくくって挑めば確実に負けるように出来ている。

これは海賊による海賊のための海賊ゲームなのだから単純に『運任せ』なゲームの訳が無い。そう、海賊のゲームに妨害は付き物なのだ。妨害にもイカサマや不意打ち、悪魔の实の能力を使用したものなど様々な妨害があるが、敵の船員が力尽くで妨害してくるパターンが多く、初見は大概それで負けてしまう。

そして、負ければ仲間が奪われる。仲間を奪い返そうともう一度勝負する。再び負ける。もう一度勝負する。…と、いう具合で二度、三度と負け続ければ目も当てられない惨状になってしまうのだ。

クザンさんの言った『エゲつない海賊のゲーム』という意味を理解していないルフィさんには任せるには不安が募る、と頭を痛める。

「幾つかの細かい形式はあるけど、『三本勝負』が基本。中には『船長同士の決闘』『総当たり戦』なんてのもあるから勝負内容によつてはこつちが有利になるかもしれないけど…」

クザンさんがそんな簡単にやらせてくれるはずがない。単純な戦闘ならば、少数とはいえこちらに勝機がある。ルフィさん、ゾロ、サングジさんの三人だけで圧倒出来るだろう。

だが、競技になると話は変わってくる。勝敗を決める要因に「規則」と「制限」が関わってくるのだから、ただ相手を倒せば良いという訳ではなくなる。

そして、もう一つの根拠として挙げるならば、フォクシーの船の横にある帆の外された船だ。

あれは今しがた『負けた』海賊団なのだろう。必要な船員を粗方奪われ、最後に海賊旗を奪われた元海賊団の船だと推察出来る。

それはつまり、フォクシー海賊団は『デービーバックファイト』をやり慣れているのだと。

ゲームばかりやっている小物だとは言え、常勝出来る程にどんな競技だろうと勝利出来る手慣れた船員を必要な分だけ集めているとも推察出来るのだ。

加えて、親切にも政府側の意向を提示してまでゲームを受けさせようとするクザンさんの意図を考察すると、なんとなくではあるが憶測は立つ。

ルフィさんを中心にああでも無いこうでも無いと会話を続ける皆を尻目に、私は先を行くクザンさんの横に並び歩く。

「…説明は済んだか？」

「ええ、どう説明しようとして結局ルフィさんは勝負を受けますよ。それに、クザンさんはそうけしかけるでしょ？まあ、ゲームをやる必要性だつてなんとなく分かりましたから。」

ワザとらしくクザンさんへと微笑みを向けると、フーツと息を吐き両手を肩の高さまで挙げヒラヒラと揺らす。

「まあ、聴いつてか、小賢しいつていうのかね…俺あ腹の探り合いは得意じゃねえんだ。」

「…いえ、ロビンさんの境遇を考えるとそうなのかなつて。」

オハラ以降の事はよく知りませんが、昔がどうで在っても私は今のロビンさんが好きなんですよね。

クザンさんもイイ女になったなつて言つてたので分かつてはいるんでしようし。

それにドリフトさんも一枚噛んでるなら悪い方向には向かないと思います。」

ふと、クザンさんは訝しげに目を細め首を傾げる素振りを見せるが、すぐにもとの調子で返事を返してくる。

「いや、ニコ・ロビンに対しては美人に育つたなつて位の意味しかねえよ。以前会つたのはオハラだったからまだガキだったしなあ。」

それにドリフト中將はなあ…あの人は情報網が半端ねえ。実力は確かだし、口でも勝てんし、味方にしたら負け無しだ。この件もあの人からの進言だし問題ないんだろうよ。」

ドリフトさんの事は共通の認識なので語るまでも無い。それとは別に、私はクザンさん本人からの言葉に驚いている。

オハラでロビンさんに会つたという事は、つまりバスターコールの最中に会つて、尚且つ逃走の手助けをしたという事なのだから…

その頃には能力者であつただろうことはロビンさんの様子から伺い知れた事であるし、バスターコールに召集された事と、そんな中勝手に一人で動ける程の階級ならば当時は中将だったのだろう。

そんな人が命令違反をしてまでたった一人の少女を人知れず見逃していたなどと驚いて当然だ。

クザンさんとロビンさんの間で確実に何かがあつたはず。ロビンさんは身に覚えが無いようだった事から、クザンさんにとっての何か。つまり：

「当時何があつたかは聞きませんが、ロビンさんに関しては何もする気は無かつたんですね。だから「そいつは違う。」

私の発言を被せ気味に否定すると少しだけ困つた様に表情を歪め、頭をボリボリと掻く。

「政府や海軍つて立場上、表立つてお前達を見逃す訳にはいかねえんだ。分かるだろ？」

昔の事は昔の事だ。…あの時は俺にも迷いがあつた。悩みがあつた。その葛藤の合間でニコ・ロビンに手を貸しただけだ。特別視してる訳じゃねえ。若気の至りつてやつだ。

それに、麦わら次第でお前だけでも氷漬けにして連れて帰るプランも用意してあつたんだ。俺ならお前の能力の弱点を突けるからな。」

だつたら何故？…私がそう言葉にする前にクザンさんは目で制す。その鋭く細めた双眼は敵意ではなく、どこか寂しさを含んでいる。

「…お前は自己評価が低過ぎだ。誰も言葉にはしなかつたが、ロロナ・リーナは異名の通りアイドル愛される者だつたんだ。

個人的な感情つて部分で、お前が心を開いた一味を、お前に信頼される『麦わら一味』をもう少し見届けたくなつた。

俺にそう判断させたのは他でもねえ『お前』だ。」

そんな事を言われて私は驚愕を隠せる訳も無く、無意識に足を止めて少しだけ熱のこもる息を漏らした。

そんな私を気にせず歩を進めるクザンさんの背中を見詰めながら、未だにやいやいと会話を交わしながら追いついた皆に歩幅を合わせて歩き出す。

「…何か良い事でもあったか？」

意地の悪い微笑みを私に向けるゾロへ小さく頷き、少し緩んだ頬を引き締める。

安心とも嬉しいとも取れる感情が、少しだけ胸に残る凝りの一部を溶かしていたのは事実だ。

しかし、クザンさん個人の言葉である以上、手放して喜ぶ訳にはいかないだろうと気持ちを切り替える。

それに、微妙に噛み合わない会話もあった事から、ゲームを受ける真意は私の邪推である可能性が高いと改める。

それでもクザンさんがロビンさんを気にしているのは確かな事実だとも見て取れた。

結局、考えた所で答えなど出ないので、その真偽を思考する意識を一旦追い出し、僅かに軽くなった足取りで皆に並びクザンさんの後を追った。

17・デービーバックファイト

『さあ！キバガエル海賊団とのゲームが終了したばかりだが本日二度目のゲームだあ!!ヤロー共、準備は良いかあ!!』

けたたましく鳴り響く大砲やスピーカーから流れるアナウンス、それに沸き立つフォクシー海賊団の面々。一部の人員を屋台や売り子に割いているにも関わらず相当な数だ。

それは端から見ればお祭り。しかし、これは海賊同士の“仲間”と“誇り”を賭けた正真正銘の『勝負』なのだ。

だが、主催者側として盛り上がりを見せるフォクシー海賊団の船員達と、マイペースに屋台の食べ物を頬張り、お酒を飲み始める麦わら海賊団。

私とロビンさん、クザンさんはステージ上に用意されたソファアームに座り、提供された焼きそばやフランクフルトなどの軽食を頂いている。

両海賊団共に飲み食いしつつ楽しそうに活気づくそれらを眺めて考える事は同じ事だろう。

(思っていたのと違う…)

勝負というものは、もつと殺伐としていて緊張や殺気の漂う息の詰まる雰囲気醸し出すモノだと思っただが…

『さあ、これからフォクシー海賊団が誇る、我らのアイドル　ポルチェちゃんから誓いの宣言が始まるよー!』

司会進行を務める宴会隊長　イトミミズという人の何とも間の抜けたアナウンスが響き、喧騒が成りを潜めしんと静まる。

「さーて、野郎共！いやん、良く聴いてね!!

“敗戦における三ヶ条”を宣誓する前に、今回の『特別ルール』を説明するわよ!!

まず一つ、この件は海軍本部　大将　青雩の観察の元行われる！だけども、ゲームには関与はしない確約を得てるからいつも通り存分に力を発揮して頂戴！」

ステージ上に居座るクザンさんは歓声に応える様に軽く右手を挙げて振っている。

「そしてもう一つの特別ルールは、スリーコインゲームとは別の特別賞品としてこの二人が贈呈されてるわよう!!」

僅か八歳にして懸賞金7900万ベリーが掛けられたミステリアスな雰囲気のお姉さま! “考古学者”ニコ・ロビン!!」

引き攣った苦笑いで軽く手を挙げて歓声に込んでいるが、その背後には『不愉快』を具現化した様なオーラが漂っている。

「更にもう一人! 17歳にして海軍本部 大佐にまで上り詰めた超実力派海兵! 世界政府さえ恐れる能力ちからを持ち、退役後に兄を追って海賊へ転身し、5億ベリーが掛けられる程の超大物! “偶像”アイドルリイナこと、ロロノア・リイナ!!!」

私も片手を挙げ笑顔を魅せようと試みるが、頬がひくついているのが自覚出来る。

「オーソドックスルールの変更は無いから一勝毎に相手側から一人船員を奪っていき、先ず二勝した方が自動的にニコ・ロビンの獲得が出来るわよ!」

三戦全勝すればロロノア・リイナも獲得!!

つまり、全勝したらスリーコインゲームで三人、特別賞品で二人! 合計五人の獲得よう!!」

『うおおおおおう!!!』

フォクシー海賊団の面々が喜色満面といった風に雄叫びを挙げているのだが、その声色に違和感を受ける。

まだゲームは始まってすらいなのにも関わらず、『ゲームに対する奮起』の声よりも『既に全勝した結果』を喜ぶ者達が多く存在しているのだ。

やっぱり“美人の航海士”が良い。

それと“マスコットの船医”だろう。

あと“一人”か。

まあ、これ以上“男”は要らねえけどな。

けど、“剣士”はあの海賊狩りだぞ。

あの「船長」の懸賞額も大したもんだ。

似た会話を交わす者達の輪がいくつもあり、そのどれもがナミさんとチョップパーくん、あと一人を誰にするのかという話題で勝手に盛り上がっている。

サンジさんとウソップさんが泣きそうになる盛り上がり方はやめてあげて…

※ ※ ※

その後、ルフィさんとフォクシーは「敗戦における三ヶ条」の宣誓を交わし、三枚のコインを海に投げ入れて開戦となった。

一度、それぞれの陣地に分かれて作戦会議となるのだが、私とロビンさんは『賞品』なのでステージ上から出る事が許されていない。

それもこれも全てクザンさんのせいだと言いたいが、フォクシーへゲームを持ち掛ける場に行きなかつた私の責任だ。

クザンさんがフォクシーに提示した要求は大まかに三つ。

一つ目は、フォクシー海賊団と麦わら海賊団でデービーバックファイトを行うこと。

端的に言えば、強制的に麦わら海賊団とゲームしろということ。

二つ目は、今ゲームにおいては世界政府公認で大将 青雉に一任されている事の承諾。

つまり、クザンさんの意見を取り入れた『特別ルール』を設けろということ。

三つ目は、『賞品』であるロロノア・リィナ、ニコ・ロビン両名と共にステージ上から観戦すること。

これは、妨害・逃亡阻止、監視の名目でクザンさんの目と能力の届く位置に私とロビンさんを留まらせる為だろう。

フォクシーは特に考える事すらせずに二つ返事で了承したそうだが、あれは自分達の勝利を疑っていない証拠なのだろう。

私とロビンさんは賞品として献上された事に異議を唱えたが、それを見越して敢えて事後報告という形を取ったクザンさんに軍配が上

がった。

兎も角、ステージ上から動けない私とロビンさんを除く麦わら海賊団は六人。三つの勝負を六人で割り当てなければいけない。

オーソドックスルールによる『3コインゲーム』の誓約は基本的に三つ。

“出場者は三ゲームで七人以下”

“一人につき出場は一回限り”

“一度決めた出場者の変更は不可”である。

そしてゲームは三つ。

・ 出場者三名にてドーナツレース。

・ 出場者三名にてグロツキーリング。

・ 出場者一名にてコンバット。

数の多いフォクシー海賊団とは違い、麦わら海賊団は六人しか居ない。

コンバットは一名なので良いとして、ドーナツレースかグロツキーリングはどちらかが二名の出場となってしまう。

ルール上、二名の出場でも問題は無いのだが数の優位性が失われてしまう。

私とロビンさんはステージから出てはいけないので作戦立案と人員配置はナミさんに任せるしかない。

あの六人の中での確に状況を把握して指示出来るのがナミさんしかないのは今後の課題だと懸念し、少し頭が痛むのだった。

※ ※ ※ ※

初戦であるドーナツレースは空き樽を加工して小型の舟を作って使用するようで、フォクシー海賊団から各チームに三つずつ配布された。

麦わらチームの選出はドーナツレースにナミ、ウソップ、チョップの三名。

不在である船大工の代わりはウソップが務めて、四苦八苦しな

レース用の小舟を作り上げた。

レース開始と共にフォクシー側からの妨害に遭いつつも、ウソツプが空島で譲り受けた大量の噴風ジェットダイアルを駆使して機動しチョツパーの『重量強化』ヘビーポイントにてオールで力強く舵を切り潜り抜けた。

ナミは華麗に航海術を披露しロングサンゴ礁の『海流の迷路』を容易く突破する。

ロングサンゴ礁を抜けたその先、ロング渦リングではチョツパーの『頭脳強化』ブレインポイントによる診断で渦の弱い箇所を読み、助言を受けたナミが渦流を巧みに航海し、ウソツプが再び噴風ジェットダイアルを総動員し何とか切り抜ける。

三人で上手く連携し、それぞれの持ち味を存分に発揮することでフォクシーチームとの差を大きく広げ二歩も三歩もリードしていた。

一方、フォクシーチームはスタート直後の味方の支援も奮わず大きく距離を離されつつも、ポルチェ率いるカジキの魚人カポーティとホシザメモンダの合体泳法『魚々人泳法』ツーフイッシュエンジンにてロングサンゴ礁の『海流の迷路』とロング渦を難なく突破する。

それでも差は縮まる事無く麦わらチーム優勢でゲームは進行する。

フォクシーの妨害『ウソ指示大作戦』や『ウソゴール大作戦』もナミは容易く看破し本物のゴールも目前だ。

フォクシーチームも魚々人泳法ツーフイッシュエンジンにて追いかけるが開きすぎた距離を追い抜くのは最早不可能である。

デービーバックファイト一回戦のドーナツレースは麦わらチームの勝利であると麦わら海賊団の面々は確信する。

：しかし、勝利したのはフォクシーチームだった。フォクシーの能力『ノロマ光子』による妨害を受けゴール直前でフォクシーチームが麦わらチームを追い抜き先にゴールしたのだった。

ゴールの直前まで圧倒的な差をつけての勝利を確信していただけに、敗北した事実が大きな落胆を呼び込む結果になってしまう。

なぜなら、勝利したフォクシーはルールに則り麦わら海賊団から一名指名し奪い取る事が出来るからだ。

先立って指名されたのは『船医』トニートニー・チョツパーだっ

た。いやだ、と泣き叫ぶチョッパをゾロが一喝し場を治め、敵味方共に感嘆の声を上げる。

既に一敗し敗北が許されない状況での第二戦目 グロツキーリングではゾロ・サンジが麦わらチームとして選出。

フォクシーチームはハンバーグ・ピクルス・ビッグパンの『グロツキーモンスターズ』と呼ばれるグロツキーリングにて無敗を誇る三者の登場によりいつそうの盛り上がりを見せる。

そして、運命の第二戦となるホイッスルが鳴る。

第二ゲーム開始直後、サンジが先手必勝と『ウオータン刺』にて魚巨人ビッグパンへと襲い掛かるが当のビッグパンは反応出来ずに顎をがち挙げ、る過激な一撃を喰らい膝を着く。

そのまま地に伏す様に上体が沈みかけるがすかさずゾロの無刀流『龍巻き』にてその倒れ落ち来る上体を跳ね返した。

ビッグパンの頭頂部に付けた球印がそのままゴールリングへと突き刺さり、呆然とコートを眺めたまま動けないフォクシー海賊団を尻目に第二回戦グロツキーリングは静かに幕を閉じた。

※ ※ ※ ※

「しかし、こりゃあ…ガキのお遊びだな。」

新世界という億超えの賞金首が蔓延る海ですら畏怖される海軍大將 クザンからすれば眼前の騒動は正に『兇戯』として映るだろう。

正直に当人の心境を語るならば、眼前の雑魚共をまとめて氷漬けにし本部に連行する事が本来の職務であり、そう出来る実力を有していながら静観に務める事は退屈でならないといった感じだ。

サンジの『刺』、ゾロの技量を見遣り感嘆の息を漏らすながらも自分には到底敵わない程に実力の差があることは看破出来た。それでもあと五年…いや、三年程新世界で揉まれたならばいい勝負になりそうだと心に小さな火を灯す。

クザンの目的の一つである『麦わら海賊団の見極め』に上方修正を加えた。

それはさて置き、現在の状況：元々の発端は五老星がロロノア・リーナを猫可愛がりした事であることにクザンは影で幾度となく溜め息を漏らしてきた。

本人達は上手く隠せていると思っっているようだが、世界政府の最高権力者である5人の老人たちが己の立場を忘れ、一人の若い女海兵に入れ込んでいるというのは上層部の面々にはバレている。

そんな五老星が内密に大将三人へと指令を出したのだ。当然、指令内容は『ロロノア・リーナの身柄確保』だった。

先陣を買って出たのは「赤犬」サカズキ。当人は厳つい顔付きでいかにもイラつきを顕わにしているが内心はお気に入りであるリーナの身柄確保任務に小躍りしていたのは誰にも悟らせなかった。

その裏でドリフト中将が動き五老星を言葉巧みに丸め込み任務内容を『麦わら海賊団の調査・見極め』及び『ロロノア・リーナの安全確認』へと変更。調査の名目上、一人での動向に長けるクザンに任せられることになった。

細かい内容はリーナに説明した通り、ドリフト中将の策略通りシナリオに麦わら一味と接触し、見極め、リーナの身柄を任せようと判断し今に至る訳だ。

思考の海を漂いながらもその眼はゲームの進行を見守っていたのだが、当分は座ったまままだという状況に少しだけ気を緩めると待つてましたと言わんばかりに眠気を催してしまい、ふと大きな欠伸が出てしまう。

「ふああ〜あ…」

グロッキーリングにて圧勝した麦わら一味にチョップパーが戻り、安堵の表情で仲間を見詰めるリーナとロビンを一瞥し再び一息漏らす。

第三回戦の始まりまでは暫し間が空くようだ。ならば、それまで少しばかり永い瞬きをしていても問題無いだろう。そんな軽い気持ちで重さを増してくる目蓋を閉じる。

それから数秒か、はたまた数分か：風斬り音が耳の届いた直後、ドサリとナニかの倒れる音で異変を感知した。

※ ※ ※

「ニコ・ロビン！俺が止血するからお前は能力で直接心臓マッサージしろ!!」

青雉の声で我に返り私はリイナさんの容態を確認する。

何が起こったのか理解するのに数瞬を要してしまった。しかし、このままでは確実にリイナさんが死んでしまうことは明らかだった。

何かに穿たれた胸からは止め処なく血が流れ出てリイナさんの衣服を紅く染め上げていく。

青雉は躊躇せずリイナさんの衣服を破り胸元を開くと同時に傷口に手を添えて能力を使い1cm程の傷口を氷で穴を塞いだ。

背中も同様に服を破り直に手を添えて能力を行使する。これで応急的に心臓に開いた穴も塞ぐことが出来たらしい。

次に私がリイナさんの胸元に手を添えて能力を使い、心臓を包むように左右の手を咲かせ心臓マッサージを実行する。

体内に対して能力を使った事など無かったが問題なく発現し小さく安心する。

青雉は私の能力が有効に働いた事を確認しすぐに人工呼吸に取り掛かる。程なくリイナさんの身体がビクンと痙攣し、咳き込んだ後自発呼吸を再開したことで張り詰めた緊張が解ける。短く安堵の息を吐き額の汗を拭った。

「…よし、息は吹き返した。あとはリイナが目覚めてから自分の能力で治療すりゃいいだろ。」

「助かったわ、青雉。ありがとう。…でも、一体誰が、何処から?!」
「島内の連中じゃねえのは確かだ。海上…には何も確認出来ねえな。」

青雉と共にステージ上から海上を見渡すが見える限りでは海に船などは無い。

フォクシー一味の誰かがこちらに銃口を向けたのなら、リイナさんならば覇気で察知出来るはず。もしかすると青雉も察知するだろう。

つまり、リイナさんの覇気の範囲外からの銃撃で、尚且つ肉眼では見えない長距離からの狙撃である可能性が高いという事。…しかし、

普通に考えればいくら狙撃手の腕が良くても銃の性能的に不可能だろう。

「詳しくは分からねえが何らかの能力者って線が濃厚だろうな。」
「…ええ。」

現在デービーバックファイト第三回戦が開始された直後なので誰もステージに目を向けていないのが幸いした。観衆の眼前で襲撃があれば混乱を招くので負傷者の治療や保護、現場や犯人の検証などが難しくなる。まだ皆はリイナさんの襲撃を知らないので大事にはなっていない。

ついでに、青雩の能力で応急処置が間に合ったことは僥倖だった。私だけではきつとりイナさんは助からなかった。

もし、再び襲撃があつても警戒した状態である青雩がいるなら防げるだろう。そう思うとこの男が傍に居てくれることは大変心強いと思う。

まだ完全に安心出来る状態では無いけれど、リイナさんの目が覚めれば能力で傷や衣服も元に戻して自身の防御に専念してもらえ。それが一番安全で安心だと言える。

私がリイナさんを守る、と言える程の力が無い事に大きな悔しさを感じながら未だ目を覚まさない妹分の髪を優しく撫でる。

18・名は能力を表す

偉大なる航路前半の海にジャヤという島がある。

その島の港町 モックタウン。

そこは多くの海賊や荒くれ者が集う為

、日夜争いの絶えない平和とはほど遠い町…だった。

今や閑散とした大通りや、静寂を占める様々な店内はかつてのモックタウンとは思えない程の様変わりを果たしていた。

ある者はコソコソと物陰に隠れながら目的地へ、ある者はキョロキョロと周囲を警戒しながら裏通りを歩み、殆どの者は極力外出しないという始末。

ほんの数日前までの怒声や悲鳴、破壊音などの鳴り止まぬ喧騒に塗れた無法地帯に何が起こったのか…

事の発端は麦わら一味…なのだが、全ての元凶だと断定するには酷な話である。

麦わら海賊団船長 モンキー・D・ルフィ、海賊狩り ロロノア・ゾロ、偶像 リイナの三名による突発的な蹂躪にて『ハイエナのベラミー』『処刑人 ルシオ』他、名うての海賊団が敗れて数日、町は荒れに荒れた。

モックタウンにおける筆頭支配者だったベラミー海賊団、次いで実力のあるルシオ海賊団、その他有力な海賊団があつさりと敗北し傷を負っていたのだ。

今まで強者の影に怯え隠れ町の端で細々と生計を立てていた弱小海賊団達がここぞとばかりに決起したのは言うまでも無い。

それでもベラミー、ルシオなどは動ける船員を使い、モックタウンを支配しようと襲い来る海賊団を撃破していった。

モックタウンの支配者として、強者としての意地と誇りを掲げて争乱を収め、確固たる格を見せ付けたのも束の間…王下七武海の一人ドフラミンゴが現れた。

ドフラミンゴに対し、実力差も顧みず数の有利を唱い打って出たル

シオ海賊団やその他有象無象の海賊団は奮闘空しく失意のまま血の華を咲かせ散ったのは当然の結果なのだろう。

残されたドフラミンゴの傘下であるベラミー海賊団は何をしていたのか。

答えるならば「何も出来なかった」という一言で済む。

ドフラミンゴの悪魔の実による能力で船長であるベラミーも含め船員らも全員、指先一つ動かさずに立ち尽くすのみだったのだ。

ドフラミンゴによる虐殺とも言える所業を目の当たりにし、ベラミー海賊団の面々はただただ恐怖に支配された。

降りかかる火の粉を容易く払い終えたドフラミンゴは動けないベラミー一味を『麦わら一味に敗北した』という表向きな理由で粛清し、モックタウンの支配者だったベラミー海賊団は事実上の消滅と相成った。

そんな経緯でドフラミンゴが拠点へ帰した後、勢力的にも精神的にも疲弊した中小海賊団の生き残りは再起する元氣も無く細々と生活を続けるだけとなり、モックタウンは寂れた街へと変貌したのだ。

※ ※ ※ ※ ※

そんなモックタウンのとある酒場から出てきた青年は我慢出来ないと言った風にニヤニヤと厭らしい笑みを浮かべている。

人の居ない大通りのカフェテラスで待ち合わせていた女性と合流しても表情は変わらない。むしろ、より喜色の濃い笑みへと深みが増した。

「あら？その顔は予想以上に上手くいったって感じね？」

女性―転生者 フライトは青年の顔色を見て似た種類の笑みを浮かべで問う。

「ああ、バツチリだぜ！俺らの能力で強化した弾も渡してきた。フヒヒツ：しっかし、ラフィットの面あサイコーだったぜ？原作で胡散臭い余裕面してんのが嘘みてえに顔真っ赤にして怒り狂ってやがん

のっ!!」

青年―転生者　ロードは酒場内での事柄を思い出し、堪えきれないと腹を抱えて笑だす。そんなロードを尻目にフライトは溜め息を一つ。

「…あんたも大概、良い性格してるわねえ。わざわざこんなトコまできたんだし、ちよつとは楽しんでるでしょーけど。…で？これで用も済んだし帰る？」

フライトの溜め息は呆れ半分、もう半分は己も似た様なモノだという自覚から来る自虐だ。

「いやいや、フライトさん？俺らは名目上デートでここに来てんだぜえ？たまたま酒場で会った黒ひげ一味と少くし会話しただけ。このまま帰る訳にはいかないでしょおー。それに…」

大仰に両腕を広げ身振り手振りでモックタウンを訪れた理由を事細かに語りだすロード。

フライトはもう一つ溜め息を吐き、テラスのテーブルに突っ伏せて聞き流す。

ロードとフライトの二名がモックタウンに来た理由を纏めると、黒ひげ一味にコロノア・リイナの排除を仄めかす為だ。

自分たちで直接手を掛けてしまえば楽なのだが、それではロードドリップに対して言い訳が立たない。

以前、ロードがアラバスタでリイナに手を出し嚴重注意を受けている。次、勝手に動けば注意では済まないだろう。

フライトとしてはロードがどうなろうと知った事では無いのだが、自らが片棒を担いだ事実は隠蔽したいのだ。何せリーダーを怒らせると結果が恐ろしいと本能で理解しているのだから。

なので、自分たちは直接手を掛けずに『原作の誰か』をリイナの排除に向かわせる画策をしていた。

それが未だモックタウンに在留している黒ひげ一味だったただけの話である。

単純な理由としては、リイナを殺す動機だ。

リイナがティーチを殺した犯人だと教えるだけで『船長の敵を討かたき

つ』という大義名分が発生し容易く動いてくれるだろう。

その為にはリイナが犯人であるという証拠を黒ひげ一味へ提示しなければならぬが、ロードの能力があれば簡単だ。

悪魔の実『メモメモの実』の能力。

人物や場所の記憶・記録を読み取れる能力である。

その効果は情報としてだけの物質感応能力のみならず、熱量や運動量、慣性などすら任意で再現、補充する事を可能とする。

酒場での過去の出来事、今回は黒ひげと麦わら一味の邂逅、そしてその結末を自身の能力で「読み込み」、尚且つ黒ひげ一味にも記憶・記録を付与する事で証拠を「視せた」のである。

消息不明になっていた船長。文字通り「消滅」させられていたという事実には激昂する黒ひげ一味を見てロードは内心歓喜した。

後は、ロードとフライト二名の能力で強化した一発の銃弾を渡し、その強化内容を伝え、標的の居場所を教えれば黒ひげ一味は勝手に動いてくれる。

※ ※ ※ ※

そして、酒場を出たロードはフライトと合流したという訳だ。

この一件、ロロノア・リイナの排除に直接関わる訳ではないのでセーフなのか…いや、アウトだろう。

フライトはそう理解しつつもリーダーへの『言い訳』の為、ロードとデートでモックタウンに訪れた演出をしなければならない。

たまたま訪れたモックタウンで、ロードはたまたま黒ひげ一味と出会い二、三会話をしただけ。自分たちはその後もデートを楽しみました…と。

黒ひげ一味は自発的にリイナへの報復へ向かったのであり、自分たちは関係無い…と。

苦しい言い訳ではあるが、『黒ひげ一味と会った』という真実は詳らかにし、関与は否定すれば言い訳としてギリギリ成り立つ。

最悪、ロードの独断専行だという事にすれば良いとまで考えてい

る。だからロード一人で黒ひげ一味の元へ向かわせたのだから。

「はいはい、じゃあどつかでショッピンングでもしましよーか。勿論、『デート』なんだからアンタが買ってくれんのよね？」

一部だけ言葉を強調し、高い品物を強請ろうと企み含み笑いをロードへと向けるフライト。

「あ？まあ、今は気分が良いし構わねえよ。ちよつとお高いダイナーの後で『デザートはわ・た・し』なんてのも可！」

「…いつぺん死ね。」

フライトは半眼でロードを睨みつつ自身の悪魔の実『ソウソウの実』の能力を使い、予備動作無しにロードを上空十メートル程まで急上昇させ、瞬時に急降下させる。その際、錐揉み回転を加えることも忘れない。

木材で組まれた大通りの通路を容易く粉碎しロードを埋没させてしまった。

しかし、ロードは何事も無かったかのように身を起こし、自身の足で歩きテラスの席へ戻ってくる。

「ったく。冗談の通じねえ奴だな。オメエの『操作する能力』と俺の『再現する能力』は反発すれば相性が悪い。でも、協力すりゃあ相性抜群…だろ？きつと夜の相性も抜群なんだけどなあ！」

「…デート中に下ネタとか言うサイテー男なんてこつちから願ひ下げなんですけどー！」

「…ん？ちゃんとデートっつー認識はあるんだな。これが俗に言うツンデレってやつかつー！」

自分の失言を指摘され顔を赤くするフライトだが無駄に言葉を重ねて失言を増やす訳にはいかないと、口を噤みつつ気を落ち着かせ。その間もロードはヘラヘラと嬉しそうに嫌らしい笑顔でフライトを見ている。

今回は引き下がるがいつか目に物見せてやる、と眼で訴えつつフライトは能力で宙へ舞い上がり、ロードを操作して自分と同じ様に宙へ浮かせる。

「やつさと買い物して帰るわよー！」

「…はいよ。」

その日、モックタウンの上空を超スピードで飛行するUMAが現れたという噂が広がっていたとかいないとか…

19・少年の名は…

ふと、突風が吹き荒れ旗やテントはバタバタとたなびき、土埃が舞い上がりパチパチと肌を殴りつける不快な音がする。

サアサアと草木は揺れ、少し離れた場所から聞こえる爆発音や歓声と混じり少しばかり耳障りに感じる。

混濁した意識の中、聞こえてくる音だけでも外界の様子は手に取る様に理解出来る。少しの時間耳を澄まして辺りの状態を一つ一つ認識しつつ、私は横になっているのだと体の感覚で察する。

私はどのような経緯で横たわっているのかを考えているが明瞭な理由は思い浮かばない。

聴覚に意識を向け、状況の把握に努めていると先程よりも意識はハッキリとしてきた。この調子だとそろそろ身体を動かす事は出来そうだと思ひ至る。

しかし、どんなに意識しても目蓋は貼り付いたみたいが開かない。いくら集中しても指先一つ動かさずにいる。

これは困った。

そう思つて、無意識で溜め息を吐く…溜め息を…息を、していない?!

更に意識を集中し自身の身体の変化を入念に感知する様に試みるが何やら胸の辺りに痛みを感じる気がする。

気がする…程度にしか感じられない。

肉体的な感覚は胸の辺りの痛覚以外に感知する事が出来ない。

意識が身体を動かす方へ集中し過ぎたせいか、先程耳障りだとさえ感じた草木のさざめきすら聞こえなくなっている。

あ、これつてもしかして…

以前、一度だけ似た経験した事を思い出す。あれは確か、ロードに殺されかけた時。死を覚悟して繋ぎ止めていた意識を手放した時とそっくりだ。

ああ、私は死ぬのか…

せつかく私自身の生きる意味を見付けたばかりなのに。ゾロとガンジお爺ちゃんだけが拠り所だった私に新しく出来た居場所。

強引に姉なんて呼ばせようとするナミさんとロビンさん。気恥ずかしくて素直になれなかったが、甘えられる存在とは大きくて幸せな事だと今更実感している。

サンジさんとウソップさんも少しの女好きと臆病風に目をつぶれば、頼りになるお兄さんだしもう少し甘えてみても良かったかもしれない。

ルフィさんとチョッパーくんは何だか弟みたいな可愛気があるけど、目標をしっかりと持った芯のある、いざという時は頼れる男の子だし。

半裸の人は…いきなりプロポーズとかしちゃう変な人だけど、一途に愛される女としての幸せってモノも良いのかもしれないのかなあ…なんて。

海軍の人達も勝手に壁を作ってた私を認めてくれてたみたいだし、もつと別のやり方が在ったかもしれない。これは少し後悔してる。

他にも…って、以外と意識がハッキリしてるなあ。何時まで経っても薄れる気配を感じない。

あれ？私が勝手に死んじゃうって勘違いしてただけ？うわあ、恥ずかしい！

…

…

…

…

…

…

いや、おかしいでしょ?!

どんなに意識しても身体の反応を感じない。意識は覚醒してちやんと思考しているのに、身体の状態を認識出来ないし反応も示さない。

ホント、どうなってるのよコレ…

『まったく…先程から五月蠅いのう。静かに待っておれ。』

ふと、声が聞こえた。その声は何処かで聴いた事のあるような声質だった。

誰!?今、私はどうなってるの?何故こうなってるの?

そんな私の問い掛けにその誰かは応えてくれず暫しの沈黙が続く。私という意識に語り掛ける誰か。前にも何処かでこんな事があった気もするが良く思い出せない。

何なのよ…誰なの?どうなってるの?私はどうなるのよ…

応えてくれる声は既に無く、目蓋を閉じたままの暗い意識は変わらず時を刻んでいく。

※ ※ ※ ※

ロビンはリイナが息を吹き返した後すぐにリイナをステージから降ろし、リイナの頭を守る様に抱きしめている。少しでも身を低くし妹分を守ろうと考えたのだろう。

クザンはその傍らに立ち二人を氷のドームで囲み守る。襲撃のあったであろう方向を向き最大限の警戒をしつつもクザンは焦りと動揺を隠せずにいた。

本来ならば生け捕りにしなければならぬ対象が何処からか、誰かから襲撃を受けたのだ。

加えて、不可視不感知で強大な殺傷力のある攻撃が次にいつ放たれるかも分からない。例え海軍大将であっても焦りもするだろう。

そしてもう一つ。海軍本部から発行された手配書には『ALIVE ONLY』と表記されている。それは“生きたまま捕縛せよ”という意味合いの裏に“通常では殺すのは不可能”だという言葉が隠されている。無論、ロロノア・リイナに限った話なのだが。

何せ数瞬の間さえあれば即死の負傷ですら一瞬で無かった事に出る能力を持った者をどうやって殺せると言うのだろう。だからこそ『ALIVE ONLY』でもあるのだ。

だというのに、当のロロノア・リイナは死にかけている。その事實はクザンの思考に警鐘を打ち鳴らす。それが意味するのは「継続的な能力の無効化」の可能性。

攻撃を受けた場合、受けた側は能力を発現出来なくなるというモノである可能性だ。

ロビンには能力者による攻撃の可能性を示唆したが、己の知る限りではその様な能力は存在しない。

そして、能力者を無力化、若しくは能力の一部を無効化させるには三つ。

一つは能力者を海に落とす事、海水に浸ける事。悪魔の実の能力者は悪魔の実の呪いによって海水に浸かると殆ど動けなくなってしまう。俗にカナヅチになるというものだ。

もう一つは海楼石を能力者に触れさせる事。海楼石の手錠やスモーカーの使う十手などの事だ。海水に浸かるのと同じ効果をもたらす事が出来る。

最後に武装色の覇気を纏い対処する事。これは悪魔の実の能力に対してと言えるが、更に付け加えると自然系ロギアの能力者に対して最も有効な戦闘方法である。それでも、有効なだけで無効化は出来ない。

ロロノア・リイナの『境界を操る能力』は研究途中であり詳細は未だ不明だが、分類では自然系ロギアだとクザンは聞いていた。いくら悪魔の実最強である自然系ロギアと言えど海水や海楼石では能力は無効化されてしまう。

つまり、リイナの能力が無効化されてしまったという事は、同じく自然系ロギアであるクザンも先程の襲撃を受けた場合、リイナの二の舞になる可能性があるという事だ。そう考えたからこそその焦りと動揺だ。

しかし、不審な点もある。

リイナへ何らかの方法で「継続的な能力の無効化」を行い、襲撃に成功し致命傷を負わせた。そして、リイナは「継続的な能力の無効化」のせいで能力に依る自発的な回復が出来なかったと仮定する。

だが、その後クザンとロビンによる応急処置では『リイナに対して』通常通り能力は有効に作用したのだ。

仮に「攻撃を受けた者のみの能力が無効化されてしまう」のならば海楼石と同じ様な効果だと納得出来るのだが、リイナの胸の傷跡は貫通痕だった事と傷口を凍結、直接心臓マツサージの際にクザンはリイナを調べていたが他の傷や体内に不審な異物は確認出来なかった。

なので、『海楼石、若しくは似た効果のある物質をリイナの体内に埋め込み能力を無効化した』可能性は低いと考えるのが妥当だと言える。

ならば、何故リイナは襲撃後に能力で回復しなかったのか、または出来なかったのか。そこが謎のままなので断定が出来ないのだが…

「能力を封じて尚且つ致死性の負傷を与える攻撃。こいつぁ厄介だ…」
先ず、リイナを狙う当たり奴さんはリイナに恨みのある奴だろう。コイツは海軍時代働き者だったからな。

リイナの油断する瞬間や周りに人が少なくなる瞬間を狙ってたんだろうな。デービーバックファイト中の騒音に乗じれば何かしらの音も掻き消される。

えらく辛抱強い入念な計画的犯行じゃないの。」

焦りと動揺、過剰な警戒心でクザンは冷静な思考が出来なくなっていた為、少し見当違いな推論へと辿り着いていた。

※ ※ ※

リイナの胸に風穴を開けた攻撃。それは単純に射撃によるものだという事実をクザンもロビンも、もし意識があるリイナに至っても思い描かないだろう。

事実、クザンとロビンは「海上に船等は無い」と確認している。

極端な例だが、快晴時に大人が水平線を眺めるとする。その場合の視認距離は約4、5キロメートル程。

それ以上遠い距離になると『水平線の向こう側』になる為視認出来なくなる。

そして、通常狙撃をするならば裸眼では300メートル程が限界。

スコープを使用しても精々2キロメートル程が限界であることを考えれば常識的に有り得ないのだ。

なので、クザンとロビンは海上からの長距離狙撃の可能性は無いと思っ込んだ。

しかし、ヴァン・オーガーはそれよりも遥かに遠い距離からの狙撃を可能とする技量を持ち合わせている。

更にフライトの能力『物体を操る能力』により、銃弾には重力に囚われない効果が発動している。

加えてロードの能力によって、火薬により打ち出された銃弾は銃弾の質量×銃弾の速度を距離と共に損なわれないように常に運動エネルギーを充填する。

故に、超・長距離から打ち出された銃弾は無重力状態で常に加速し目標へと着弾するのだ。

音速を超えた超音速、それを超えた亜光速の銃弾が不可視の攻撃の正体である。

最も、リイナの見聞色の覇気範囲外から狙撃を可能とするヴァン・オーガーであるからこそ成功したのだ。

フライトの能力は生物、物質を問わず操作出来る念動力サイコキネシスの様な能力なのだが、操る対象がはつきり見えていないと自在には操作出来ないという欠点がある。

自身の目視範囲外のモノを操作しようにも単調な操作、つまり浮遊させたり多少の移動をさせたりが限度なのだ。

自身が何かを操作して直接攻撃する場合、相手からもフライトが見えている可能性があるので察知されてしまうのは言うまでも無い。さすれば、フライトの攻撃は回避・阻害され、返り討ちに遭うのは目に見えている。それを理解しているからこそフライト自身も攻撃役はせず補助役に収まっているのだ。

なので今回の件も補助として、銃弾に単調な操作である浮遊する操作を永続的に発動させただけに過ぎない。

つまり、今回の狙撃を可能にするには当事者達しか知り得ない情報があり、クザン達が狙撃の可能性を年頭から外したのは致し方ないと

いう事だ。

※ ※ ※

「…もうよい。離すのだ。」

抱え込んだリイナからの声に反応し即座にロビンは上体を起こしてリイナの顔を覗き込む。

「良かった！意識が戻ったのね!!」

リイナが意識を取り戻したことに安堵し顔が綻びかけるが、未だ切迫した状況であることに変わりはないと気を引き締めつつ言葉を続ける。

「傷が酷くて、辛うじて塞ぐ事しかし出来ていないの…」

と、そこで言葉を遮る様にリイナは掌をロビンに向けて挙げる。

聡明なリイナの事だ。瞬時に状況を把握したのだろう。

ロビンはそう思いリイナの上半身を抱えて起こす。その時には既に胸の傷は無かった様に消え、血色の良い肌が見えた。失った血液すら復元したのだろうと、感嘆と驚愕の息を吐いた。

自身の血に塗れ応急処置の際に破り脱がせた衣服も消え去り、白と水色を基調としたフリルの付いたサマードレスへと変わっている。

「…クザン。何時までそうしておる気だ？無駄な事は辞めよ。」

首だけ向けてリイナの様子を伺っていたクザンは底冷えする様な冷たさを含む声質に硬直してしまう。

「…っ?!リイナさん?」

同じ様にロビンも困惑を隠せないままリイナを見詰めて固まる。

「…まあ、細かい事は言うまい。妾を襲撃した者は既に退所しておる。楽にせい。」

事も無げに言い放つリイナに対してクザンは本能的に距離を取り、殺気と敵意を放ちながら問う。

「…てめえ、誰だ?」

クザンの殺気に当てられ困惑と戦慄を緬い交ぜにした表情のまま震えるロビンを意に介する事無く、リイナの姿をした者は静かに立ち

上がり告げる。

「ドリフトの相棒だと言えば伝わるか？」

それだけ答えると呆れを含む表情で息を小さく漏らし、何かを追い払う様に右手を下から上に軽く振るう。すると、ロビンの腕にズシリとした重み加わる。

気付くと少年の上体を支える格好で抱いていた。何処から現れたのか分からない見覚えの無い少年だが、衣服は以前リイナが着用していたモノだとロビンは気付く。

「ソレはくれてやる。妾には必要無いモノだからな。…クザン、お主の同行を認める。」

クザンは訝しげに方眉を上げリイナの姿をした者の言葉の真意を読み取るうとして、殺気は放ち続けている。

未だ事態に思考が追いつかないロビンは狼狽しつつも、腕の中に突然現れた少年とリイナの姿をした者、クザンへ目線をキョロキョロと移しつつ口を開くが言葉が出てこない。

「さて、妾は暇いしまにさせてもらおう。判らぬ事はソレに聞くがよい。ではな。」

リイナの姿をした者はロビンを一瞥し、言うや否や、殺気を放っていたクザンと共に忽然と姿が消えてしまう。それはまるでリイナが能力を使い転移する時の様に忽然と。

取り残されたロビンはただ呆然と既に誰も居ない場所を眺め、ふと我に返り腕の中で眠る少年へと視線を落とす。

リイナの衣服を身に着けた意識の無い少年。髪色は黒くルフィよりも少し長い。顔立ちは青年と呼ぶには幼く、中性的だが男の子だと認識は出来る。年の程は十四、五才位だろうか。

「……一体、何なの？」

その場を静寂が包む中、少し離れた海岸から断続的に聞こえていた爆発音が止み一際大きな歓声上がる。

恐らく、デービーバックファイト三回戦の決着が着いたのだろう。

それを感じ取ったのかビクンと身体を震わせて少年は身動きし、ロビンはそれを固唾をのみ見守る。

んう…と苦しそうな吐息を漏らした少年はゆっくりと瞼を開き、眩しそうに眼を細め眉を寄せ唇を数度開閉する。

少年は何やら言葉を発しているのだろうが声が掠れ、ロビンは上手く聞き取る事が出来ない。

そもそも、突然現れた少年が誰なのか判らないままなのだ。

「…ごめんなさい。あなたが何を言っているのか判らないわ。それにあなたが誰なのか私は知らないの。まず、落ち着いてからあなたが誰なのか教えてもらえる？」

少年は先程よりも眼をすぼめロビンの言葉を必死に理解しようと考えているようだ。それから目を閉じ二度、三度と大きく深呼吸してから意を決して再び口を開いた。

「私…は、リイナ、だよ。…姉さん。」

20・前途多難

意識だけはハッキリしているというのに身体が全く反応せず動くうとしても出来ない。地中へ生き埋めにさられたらこんな感覚なのだろうと、意味不明な事を感じつつ少しばかり落ち着きを取り戻していた。

そんな折、自身の身体が溶けてゆく様な、消えてゆく様な何とも言え無い感覚に襲われた。

先程の声、意識と離別した身体や今この身を襲う不可思議な感覚。今度は何が起こるといえるのか。身体は動かないものの警戒だけは怠らない様に外へ向ける感覚を研ぎ澄ます。

と、同時に先程の状況とは一変して一陣の風が頬を撫でる。背には誰かの温もりを、自身から見て下方から聞き覚えのある声が二つと威圧感。

一体、これはどんな状況だ？

深まる私の困惑を無視して二つの声の主は気配を消した。私の背にある温もりだけは依然として残ったまま。

数秒か、はたまた数分も過ぎ去ってしまったかもしれないが静寂が占める中、何やら爆発音らしき音が聞こえ、微かに大気が揺れる。ソレが合図だったかの如く急に意識と身体が繋ぎ合い反射的に身動ぐ。やつと、やつとだ。僅かにだが身体が動いた。待ち焦がれた瞬間が訪れたのだと目蓋を開こうとして思わず呆れてしまう。

どこに『目蓋を開こう』と考えてから目蓋を開く人間が居るといふのだ、と。

本来ならば意識せずとも脳が起動したなら反射的に目蓋は開くのだから。

それだけ現状が異様なのだと今更認識する。なので、この後私に投げ掛けられる言葉の異様さに素早く気付けたと言えるだろう。

目蓋を聞くと空の眩しさに思わず目を細めてしまったが、視界の中でぼやけて見えた顔は互いに知っている人物だ。私を妹として可愛

がり、姉さんと呼べば嬉しそうに微笑み私を見てくれるロビンさん。そのロビンさんの口から、ほとほと困惑し疲弊した声で『あなたは誰?』と発せられた言葉の意味を迅速に咀嚼し理解し即答する事が勿論出来……なかった。

私は瞬間的に思考を深めて言葉の意味を探るもロビンさんが私を認識していないという異様さに思わず素直な言葉で返していた。

私はリイナだよ、と。

私の返答に困惑し硬直するロビンさんを不思議に思いつつ、視線を自身の身体へと移し更なる異様さを目の当たりにする事となる。

若干、そう若干ではあるがナミさんやロビンさんには劣るもの大きさや形、張り柔らかさはソコソコのモノだと自負している女性の象徴たる膨らみが萎んでいる…

なんとということだろう。これではまな板ではないか…サンジさん、野外調理する時は是非私をお使い下さい。

等と呑気に現実逃避している場合では無い。

私には心強い悪魔の実際の能力がある。萎んだ胸も能力で思うがままに調整可能だ。序でに、まるで生まれたての小鹿の様に力の入らない身体の変調も治そう。

思い至ったのならばその時点で即座に発動し終えている。私の能力は考えた時には既に実行し終えている便利な能力なのだ。

そう、その筈なのだが…全く変化が起きていない。今度はちゃんと想像し思い描く通りに能力を発動させる。だが、何も起きない。

これには流石の私も困惑し硬直してしまう。何故? どうして? という疑問ばかりが脳裏を埋め尽くす。

その間にロビンさんは我に返ったとばかりにハツと息を吐き出し、横抱きにしていた私の上半身を起こし挙げて背を支える。その動作に私も我に返り互いに顔を見合わせてしまう。

「あの、私が見る限りあなたは男の子だしリイナさんには見えないのだけど…冗談でそんなことを言っているのなら怒るわよ?」

先に口を開いたのはロビンさんだったが、またもやその言葉の意味が理解出来ずに動揺する事しか出来ない。

目線を自身の身体、手足へと泳がせつつ辛うじて微力ながら何とか手を動かして自身の身体を弄った。

「…え。……何、これ？ウソ、えっ？……あつ！」

付いてる。股の間に付いている。ここ数年忘れていた棒の感覚が今はある。

そうだ。ロロノア・リイナとして、女性として生きた二年間ですっかり喪失していた思考。

元々、俺は男だったじゃないか…

そう意識すれば後は早かった。順応した、と言うよりは元に戻ったと言う方が正しいのだろう。

今まで身体が女性だったから意識までも女性に引つ張られていたのだ。今は身体が男に戻ったのだから意識は男へ引つ張られる。

しかし、これはどういう事だ？何故、今更男に戻った？

そこで一つ思い出す。自分の意識の中で話し掛けてきた『声』。一度状況が変化した際に聞き覚えのあった二つの声。その片方の声。あれは…

女性だった時の、ロロノア・リイナが女性の身体だった時の音声だ。それらに気付いた瞬間から一つ一つのパズルのピースが組み合う様に、断片的な記憶の一つ一つが繋がっていく。

転生、俺、ロロノア・リイナ。…そして、あの女と憑依。

「…ロビンさん。俺の話聞いて貰って良いですか？それから、ロビンさんが見た事を教えて下さい。」

先程から何も言わず、ただ俺の行動を見詰めていたロビンさんは俺の言葉に小さく頷く。

「聞かせてもらうわ。勿論、私からも話す。様子がおかしかったリイナさんから、詳細はあなたに話を聞く様にと言付かったもの。」

あの女、見た目はロロノア・リイナであるあの女がそんなことを言ったのか、との驚きで俺は目を見開くが直ぐに頭の中を整理して俺の話始める。

※ ※ ※

特設ステージ前に取り残されたままの俺とロビンさんは会話の内容に頭痛を催しながら、それでも話を進めていく。すると、デービーバックファイトの三戦全てが終了した麦わら一味の六名がこちらへ向かって来ているのが見える。

遠目に見ても和やかで晴れた顔つきをした皆の足取りは軽く、結果は良好であると理解出来た。

だが、こちらの様相に気付いたルフィさんたちは一度足を止め、皆で顔を見合わせてから走り寄って来る。

「…誰だ、お前？リイナと青雉はどこ行っただんだ？」

俺は未だに上手く身体に力が入らない為、ロビンさんに身体を預ける様に座り込んでいるのだが、サンジさんから『羨ましい、代われ』と怒声を浴びる。

サンジさんだけで無く、仲間たちは様々な声をあげているが一つ一つに反応を示す余裕が無いのでルフィさんだけを見て応える。

「…始めから説明しますから、少し待って貰えますか？まだ身体が思うように動かなくて…」

肩を竦めて如何ともし難い状況を示すと、ルフィさんは腕を組み顔を傾けるお馴染みの仕草をとる。

それから俺は目を伏せて幾度目かの能力を行使する。勿論、体調を回復する為の能力をだ。本来ならば思い描く通りに快調するはずなのにその兆候は全く無い。

…やはり、能力が無くなっている？

今まで使っていた能力は『境界を操る能力』だった。その応用で『境界を操り万物と同化』することで移動、戦闘、治癒を可能としてきた。しかし、それが使えない。

どんな怪我や体調不良でも能力にて部分的に大気と同化し、健康な状態をイメージしながら自身の身体を再構成するとその通りに復元することが出来た。今はそれが出来ない。

以前と今。違うのは何か。

…と、思考の海に潜りかけるがルフィさんから少し離れた場所で騒動しているゾロとサンジさんの叫声を耳が捉えたので再び目を開けてロビンさんへ視線を移す。

「ロビンさん、俺が目覚ます前の事をみんなに説明して貰って良いですか?…あと、ゾロとサンジさんは仕方ないので『ハナハナの能力』で黙らせて下さい。」

ロビンさんはゾロとサンジさんの扱いに少しだけ頬を引き攣らせつつ頷き、能力で二人の身体に無数の手を咲かせて口を塞ぎ、四肢を羽交い締めにして黙らせた。

「みんな、よく聞いて。まず、デービーバックファイト中にリイナさんに起こった事を説明するわ。」

ロビンさんの緊迫感を孕む雰囲気と言動に、ナミさんとウソップさんはただならぬ事態が発生していると理解し静かに頷く。ルフィさんとチョッパーくんは良く判って無さそうだが真剣な表情で説明を待っている。

ゾロとサンジさんは…無理矢理抑え付けられて尚、暴れているので鼻息が荒い。恐らく少女版リイナに危機が迫っていると落ちて落ち着かないのだろう。

ロビンさんは皆を見渡して大きく頷き、一度大きく息を吸い込んで言葉を紡ぐ。

「先ず、デービーバックファイトの三回戦が始まるまでは何も無かった。私はリイナさんとステージ上のソファアに座って話をしていたわ。」

説明が始まり、皆は静かにロビンさんの話に耳を傾ける。しかし、俺…リイナが何者かの襲撃を受け倒れた経緯を説いたところでゾロが一際激しく暴れ出す。

「っ?!…っぶあ!!リイナは!!リイナは無事なのか?!!!」
ロビンさんの説明が途中なのにも関わらず、ゾロは口を塞ぐ拘束を無理矢理解いて焦燥のまま問い質す。

そんな心配して貰えるなんて妹冥利に尽きるなあ…今は男だけだ。

「リイナさんは無事よ。だから落ち着いて聞いてちょうだい。」

：穿たれた胸の傷は心臓を貫通していたのだけれど、すぐに青雩が気転を利かせて能力で応急処置を施したから心肺機能は何とか正常に動いたわ。後は、意識が戻ったらリイナさんの能力で自分の傷を元に戻せれば大丈夫なはずだった…」

そこまでの説明を済ませて、ロビンさんが視線を落とし俺を見詰める。その意味を汲み、俺は頷く。

「…その後、リイナさんの意識は戻ったの。戻ってすぐに能力で傷を元に戻したのだけど…それは別人だった。」

姿や能力そのものはリイナさんなのだけど、雰囲気や話し方が別人だったのよ。

青雩は直ぐそれに気付いて「お前は誰だ」と尋ねた。リイナさんの姿をした誰か。今は謎の人物と言っておくわね。

青雩の問いに謎の人物は「ドリフトの相棒」だと答えたわ。十中八九、転生者集団のリーダー。そして、海軍本部中将であるドリフトの事でしょうけど…

私はその時状況が飲み込めなくて、困惑のまま動けなかった。

それから、謎の人物が手を振るうと「この子」が気を失った状態で私の腕の中に突然現れたの。謎の人物は『後は「この子」に聞け』と言いついて青雩と共に何処かへ転移して居なくなつたわ。

実を言うと、私自身何が起こつたのか理解出来ない事の方が多いの…ごめんなさい。」

眉間に皺を寄せ苦しそうに歯噛みするロビンさんに皆の視線が集まる。皆一様に困惑を隠せない表情で言葉を出そうと口を動かしている。

「…では、次に補足、という形で続けますね。」

俺が口を開くと皆こちらへと視線を向ける。これから説明をする身としては一人一人の視線が痛い。

「先ず、ロロノア・リイナの事ですが…俺の説明が終わるまで良く聞いて下さい。」

いいですか？説明途中での質問は受け付け兼ねます。出来れば両

手で口を塞ぎ、覚悟を決めて聞いて頂きたいです。

よろしいですか？」

早く続ける、と言わんばかりのキツイ視線を放ちつつ皆一様に肯くのを確認し、大きく息を一つ吐き口を開く。

「では、先ず一つ目。俺がロロノア・リイナです。」

簡潔に告げたのだが簡潔過ぎて伝わらなかったようで、皆は俯き拳を強く握り締めフルフルと小さく震えている。

あ、これ総ツツコミ受けるパターンのだ…

「二二二舐めてんのかテメエはあ?!」「二二二」

「いや、だから覚悟を決めてか、聞いてって言ったじゃないですか。」

こうなる予測はしていたから事前に忠告したはずなのだが、回避は出来なかつたようだ。うん、分かつた。

「…言いたい事はあるでしょうが後にして下さい。」

続けて二つ目。本来、この世界に転生するべきだったのは俺です。これの詳しい内容も後程。

最後に三つ目。皆さんの知るロロノア・リイナの姿をした謎の女性は現在『敵』です。」

そこまで言ってそれぞれの顔を見渡す。やはり、俺の言葉を理解出来ないようで皆一様に首を傾げてうんうんと唸っている。

「皆が混乱するのも仕方ないわ。私も良く理解出来てないんですもの。」

ロビンさんは左手を額に添えて俯き小さく呟く。皆が合流するまでの僅かな時間に幾つか説明をしていたのだが、内容は現実味の無いもので常識からは外れているのだから無理もない。

「…話を続けてくれ。」

一拍置いてゾロが静かに言った。じつ、と俺を見詰める瞳には決意の色が宿っている。

真偽は兎も角、話を聞かなければ判断の仕様も無いのだ。だからこそ、全ては話を聞いてから自身で考え決断すると言う決意。

ゾロのそれに呼応してか困惑から浮き足立っていた皆も真剣な表情で俺の言葉を待つ。

俺も先程までの、若干真剣味の足りない音質を払拭する為に一度咳払いをして精神的に居住まいを正す。

：が、先程からどうにも落ち着かない気持ちを先ず解消したいと思いついてゾロへと視線を移す。

「説明を続ける前に一つだけ。」

ゾロはリイナとの出会いを覚えていると思いますが、夜の森を彷徨い酒場に訪れた時は『俺』だったんですよ。意識としては前世の記憶が欠落した状態の俺だった訳です。身体が女になっているなんて気付いてもしなかった。それに気付いたのは風呂に入った時でした。それで…」

そこでふと気付き言葉を止める。それからワザとらしく大きく息を吐き出して目を瞑った。

違うと思っただからだ。

目を開らしてから改めてゾロを見詰める。それ後は自然と口が動いていた。ゾロに、ロロノア・リイナのような丁寧な話し方ではなく『俺』の言葉で伝えたいと思っただから。

「ガンジお爺ちゃんと話した後、一人になって意識が遠退いて…夢を見た。多分、前世の俺が死んだ後に神様ってヤツと話した時の夢。夢と言うより記憶なんだろうけど、あまり内容は覚えてないから夢ってことで良い。その夢から覚めてゾロが名前を呼んでくれた…」

ロロノア・リイナとしての意識で生きた二年。そのまま今の俺に残留した記憶。どこか他人事で、でも間違はなく俺自身のモノ。

「シールって転生者が言ってた事だけど、俺以外の転生者って皆この世界の母親から生まれてるんだって。前世の記憶が残ってて新たな人生って違和感はあるだろうけど、『名前』を呼ばれて初めて『生まれ』事を実感するんだと思う。それは転生者でもそうじゃなくても同じはずだ。」

ロロノア・リイナであり、ロロノア・リイナではない俺の最初の我が俣。

「最初の出会いで姿形が女の子だったから仕方ないのかもしれない。あの時ゾロが意識してその名前を呼んだ訳じゃないのは分かっている。」

だけど、俺はあの時『リイナ』って名付けてもらってこの世界に生まれたんだ。だからさ、俺を呼んでくれよ。ちゃんとゾロの家族として俺の名前を呼んでくれよ。」

見た目も全然違うし、性別も女じゃない。それでも、ゾロに名前を貰って生きた二年程の記憶は残っている。

ロロノア・リイナとしてゾロへ向ける親愛も尊敬も憧憬も愛情も俺の中にそのまま残っている。

「姿形が変わっていてもあの夜に出会って家族になったのは俺なんだ。見た目だけのあの女じゃない。ロロノア・リイナは俺なんだ。」

ゾロは今俺を『視て』いない。ロビンさんの能力による拘束に抗っているのは『ここには居ないロロノア・リイナ』への想いからだ。ここには居ない姿形だけのあの女の安否を心配するその姿が俺の心を締め付ける。それが何とも悔しい。

話し終えても見詰め合ったまましていると、ゾロが先に視線を外し小さく溜め息を漏らしロビンさんへ拘束を解く様に求めた。

ロビンさんはどうしたものと戸惑って俺を見てくるので能力の解除を促す為に首を縦に振る。

拘束を解かれたゾロは胡坐をかいてから頭をワシヤワシヤと撫で回し大きく息を吸い込んだ。

「つばつつかじやねえのかオメエは！居なくなった妹の心配してんのに見ず知らずの小僧が『俺がロロノア・リイナです』なんて言ってるのを信じられるかボケツ!!」

開口一番に怒鳴り声で信じられるかボケと言われてしまえば、いっそ清々しい思いで呆気にとられてしまう。

まあ、これがゾロだよな。なんて、自然と笑みがこぼれるのも仕方ないのかもしれない。

信じてもらえないのは辛いだがそれはそれとして、ちゃんと説明を続ければゾロも認めてくれる可能性がある。そう考えているとゾロは立ち上がって言葉を続けた。

「でもよ、お前がリイナだったのは伝わった。ありやあ、リイナ以外の何物でも無い。妹が弟になったってのは…ちと複雑だが、無事で良

かった。」

言いながら俺の傍まで来ると腰を落として俺と目線の高さを合わせる。その顔は意地悪く口角を上げ、そしてのそつと右手伸ばして俺の頭を乱暴に撫でた。

「な、リイナ。」

その言葉で俺は鼻の奥がツンと痛くなった。耐えられる訳が無い。瞬間、視界がぼやけてしまう。ただ、名を呼ばれただけ。それでも、やっと俺を視てくれたのだ。嬉しいものは嬉しい。

ゾロの心境としては理解は出来ないが納得は出来たという感じだろう。あとは続きの説明で理解させてしまえばいいのだ。それで俺は再びゾロの家族として生きる事が出来る。男弟だとか女妹だとかの区分は関係無く、家族として。

「まあ、あんなゾロへの執着はリイナ以外に有り得ないし。もはや執念って言うより怨念って感じよね?」

「だな。確かに!」

なんてナミさんとウソツプさんが茶化すもんだから皆が笑っている。だけど、それはとても心地良いと感じる。

「怨念って…酷くない?」

なんて恨み言を言いはするが自身の顔が緩んでいる自覚はある。続きの説明に移ろうと思うのだが、そんなものがどうでも良くなる程俺の心は晴れた。

※ ※ ※

あれから数日。今俺たちは船上にて思い思いの時間を過ごしている。

あの日、一頻り皆から弄られて笑い合った事で緊迫感や警戒感も薄れた為かその後の話は思いの外すんなり受け入れられた。

俺の推測も含めた内容ではあったが一通り説明が終わると各々が何かしら口を開きかけて疑問を飲み込んだ様だった。

ルフィさんだけは素直に「つまり、もう肉は出せないのか?」と欲

に忠実な問いを発してナミさんにどつかれていたが。

俺としても有難い事ではあった。状況の把握が不完全な状態で疑問を投げ掛けられても答えに窮するからだ。もう少し色々深く掘り下げて考える時間が貰えたのは正直助かる。

皆が黙した意味は俺への配慮だと裏付けるかのように不必要に俺には話し掛けてこない。決してハブられている訳では無い。そう思いたい。

思いたいが、ジャヤと空島に続き短期間でこうも問題ばかり起こす輩を快く思わないのは当然だろう。

一番年下のクセにタメ口きいたり生意気な事も言った気がする。能力も失い男になった俺に価値があるのだろうか。

皆から嫌われたかもしれない。鬱だ：死のう。

若干、現実逃避気味になっているのには理由がある。今朝購入したニュース・クールの一面記事を読み、悩ましい出来事が起こっている事で余計に頭を痛めているからだ。考える事を止めたがる脳に休息を与える為、仕方なく俺は横になるのだった。

《ロロノア・リィナ大佐 海軍復帰!》

《涙の会見 その訳とは?》

21・茶番

ロングリンググロングランドにてフォクシー等との諍いは終結した。次の島への記録指針ログポースも溜まり、この島へ留まる理由など麦わら一味には最早無い。

言わずもがな青雉は謎の女と共に何処かへ消え去っているの探す必要も待つ必要も無い。そもそも、仲間では無いのだから。

デービーバックファイトではルフィが勝利したことで船員クルーの誰も失わずに済んだ。

青雉監修の特別ルールも二勝一敗でロビンは麦わら一味に残留、三勝が獲得条件だったリイナに関しては…青雉預かりになるはずだったが当人不在の為、結局特別ルール自体が無効と相成った。

色々と込み入った事件も起こったが直ぐさまの解決の糸口が見出せない事もあり現段階では保留という他無いだろう。

く一部、見過ごしてしまった事や語るべきであった話もあるが、有耶無耶になったまま誰も気付いていない。それは後に『後悔』へと繋がるのだが、その時になるまで誰にも分からないく

そういう事柄からさっさと次の島を目指そうと言う船長の言葉に皆が頷いたのは至極当然である。

そして、ゴーイング・メリー号に乗り込み出航準備を整える一同。皆が皆、慌ただしく右へ左へ駆け回る中、男性へと身形みなりの変化したリイナの姿は無かった。

粗方説明も終わり先の理由から船へと移動をしようとする麦わら一味が目当たりにしたのは、よもや立つことすらままならないリイナの姿。

曰く、今の身体は見た目こそ青年手前まで成長しているが、その実、生まれたての赤子の様なもので単純に筋力が無いので立つ事すら出来ないのだそうだ。

仕方ないと兄であるゾロが肩に担ぎ上げて船まで運ぶ様は正に『荷物』であり、『妹』だった頃にはやらないだろう扱いに皆頬を引き攣

らせた。

そんな珍事もあったが今は船室のベッドへと寝かせている。今後は徐々に筋力を付けてゆくトレーニング、所謂リハビリテーションを進めていくとリイナ自身が語っていたので大丈夫なのだろう。

出航準備を終え、ナミの指示の元に帆を張り海原を船が走り出す。気候や風向きも安定し、平穏な航海へと移り変わったところでナミが誰に問わずと口を開く。

「ねえ、どうだった？」

主語も無い、特定の誰かに向けた言葉でも無い疑問に皆口を閉ざしたままだ。ナミはその沈黙の意図を読み取りすかさず訂正の異を唱える。

「あ、リイナの事が信じられないとか説明に納得出来ないって意味じゃ無いの。ただ、私は常識外過ぎて理解するのに疲れただけ。そりゃあ、信じられない話ではあったけど、"リイナ" だったら何があっても仕方ないって納得しちゃったわ。そういう意味で：皆はどう？」

そう言つて肩を諫めるナミに同調したのはウソツプだった。共に常識人を自負している身としては似た感想を抱いても仕方ない。

「まあ、確かに常識的に考えてみたらあり得ねえ事だけどよお。"リイナ" がつてんなら自然と納得しちまえるんだよな。説明は憶測込みだとしても十分納得は出来たし。分からねえ事は分からねえと割り切つて、分かる部分を繋ぎ合わせたって話だったけど説得力はあつたからな。ああ：それと、疲れたつてのに激しく同意だな。」

ウソツプが首と肩を落とし疲労を表す仕草をとる頃には、自然と皆が歩み寄り輪になつて腰を降ろしている。

リイナに対して口を閉ざし疑問を出さなかった一同ではあつたが、誰が言うまでもなくこうして話合いの場が出来上がるという事はやはり消化不良だったのだろう。

そんな中で微笑みを浮かべ、ウフフと声を漏らすロビンが口を開く。

「私はとても興味深いと思つたわ。考古学者として今まで多くの古文

書や文献を調べていたけれど『魂』という単語って実は少なくないの。多少、意味合いに差異はあるけど。

リイナさんは、本来ならば何処かの赤ん坊へと転生…つまり、母体内の胎児に魂が宿るはずだったと言ってたわ。それがどういう理由かは不明だけど、謎の女性へと魂が入り込んでしまったと。

身体が『器』となつて魂が注がれる。…これって今では滅びた文明や都市で幾つも発見されている古文書や文献に度々記載されている『生命の概念』に符合するわ。

それらの記述の中には“死者”の身体を器とした黄泉還りや魔術的な呪詛が主でしかない少数のものも在るけれど…コレ等は関係の無い話だから省くわね。

関連高い話としては、“巫女”や“神官”と呼ばれる聖者を依り代として信仰神を降ろし『神託』を得る儀式等よ。でも、これは一時的なものに過ぎないけれど、生きた人間に魂が入り込む点では同じだと思ふの。

結局何が言いたいかというと、一つの器に二つの魂が共に存在出来るという根拠にも繋がるのだから、リイナさんの推測は間違つてはいない可能性が高いという事。

それから、リイナさんが重傷を負った時に深層意識下…意識はあるのに身体が動かない状態、つまり身体と意識の繋がりが途切れるかけている状態で謎の女性の声を聴いた事と、その状況で謎の女性が意図的に魂の入れ替わりを成した事も非常に興味深いわ。

それはつまり、謎の女性は常に深層意識下でリイナさんを視ていたという事で、リイナさんの記憶を共有出来ていた。だから青雉の事も知っていたという事。

だけど、リイナさんは謎の女性の魂を認識していなかった、出来ていなかった。

それは後から割り込んでしまった魂だからだと仮定すれば説明がつくわ。故に最初から魂が注がれていた謎の女性からはリイナさんを認識出来ていたのでしょね。

だったら謎の女性はいつでも身体を奪い返す事は出来たのかしら

？リイナさんが重傷を負い、身体と意識の繋がりが弱い状況だったからこそ好機と見て奪い返したと考えた方が妥当よね。それに…だったら…あるいは…」

そういう性格か、それとも性質なのか途中から自身の考察を垂れ流しながら黙々と熟考を続けるロビンに引き気味の一同。それぞれが普段見る事のないロビンの姿に頬を引き攣らせ、内容に理解が及ばず首を傾げ、話が長いと睡魔に身を任せ船を漕ぎ、空腹の音を腹から奏でる。

「…まあ、俺としてはリイナちゃんに任せてた食材の保管・保存が無くなったのは痛いな。つか、生鮮食料品の殆どはリイナちゃんに預けてたから船の冷蔵庫は保存食ばつかだ。早いとこどっかで買出ししないと死活問題だな。しくったぜ。

んでもって、リイナちゃんが野郎になっちゃったのは残念でならねえ。船員が野郎ばかりだと『華』がなあ…」

あ、ナミスわんとロビンちゅわんはこの船で咲く大輪の向日葵と一輪の薔薇！俺はそれだけでも満足だよお〜♪」

と、サンジはサンジで己の芯はブレない。料理人として船員の命を預かっている自負に揺るぎは無い。

料理の質を、味を、栄養バランスを落とさぬ為に常に新鮮な野菜や肉、魚と果物を調理したいというのは当然の事である。その為、リイナに協力してもらい能力で日持ちの効かない生鮮食材は『境界線を隔てた世界で保管』して貰っていたのだ。

日持ちのする保存食や、冷蔵庫保管で十分日持ちする食材等は一定数以上キッチンに常備してあるので数日食い繋ぐくらいは出来るだろう。しかし、そうになるとやはり質も味も落ちてしまう。

ましてや、量を保保出来ぬとなれば大食いのバカが盗み食いして食材が直ぐに絶えてしまうだろうと危惧する。

女性関連では可笑しな言動を度々見せるが有能な一流料理人である事を差し引けば無くてはならない人物であると言えるだろう。…そう、料理人としては一流なのだ。

「あのさ、リイナが『能力は元々謎の女の能力だ』って言ってただろ

？それって良く分かんないんだけど：『転生者』はそれぞれ反則級の悪魔の実際の能力者だって前言ったのに、リイナが今まで使ってた『世界と同化する能力』はリイナの能力じゃ無いってどういう事なんだろう？」

チヨツパーは短い腕を組みながら左右に頭を傾けながら、リイナの説明では理解出来なかった部分を素直に問う。

「あ、確かにそうよね。アノ能力は謎の女が元々能力者だったから憑依していた自分にも扱えた、って言ってたわね。初めて能力を使って見えない刀を出したのも無意識だったって話は、能力の扱い方を、身体が覚えていた”ってことで理屈は通るわ。

だったら、今のリイナ：本来の転生者に備わるはずだった能力は別にあつて、今までの『世界と同化する能力』はやっぱ謎の女の能力になるってことね。

それじゃあ、なぜ転生者でも無い謎の女が転生者並の能力者だったのかも気になるわね：って、『ドリフトの相棒』だって言ってたんなら転生者だったのかもしれないって事じゃない。

：うーん、結局分かんない事だらけね。だから、リイナも現状で分かっている事だけを『推測』で説明するしかない訳か。」

未だに自身の考察を垂れ流すロビンを除き、一味の頭脳であるナミであつても情報が少ないと理解し、リイナが『自身の推測を元に組み上げた』と何度も断りを入れてから説明をした事に納得する。

それでも、己の記憶や要人の何気ない言葉を拾い集めて一つに纏め、真相に近づく為の道筋を導き出すリイナを改めて未恐ろしく感じている。

それでも、結局は『重要』な事柄は不明なまままだという事実以上に悩んでも致し方ない、と諦念を憶える数名。

いつの間に我に返ったのかロビンは思考の垂れ流しを辞めて次の発言を待つ姿勢を取っていた。だが、誰も口を開かない為、シンと静まり返る船上に海の波音だけが木霊する。

しかし、その静寂が醸し出す雰囲気に対して些か場違いな言葉が飛び出す。

「なあ、よく分かんねえけど、その謎の女って敵じゃ無えと思うぞ?」
難しい事は分からない、とロビンが長々と語り始めたあたりから興味無さ気になっていたルフィは鼻をほじりながらあつけらかんと呟いた。

「はあ?!…何言ってるんだルフィ? リイナだって、あの女は敵だ」って言ってたじゃねえか。それに「いや、ルフィの言う通りだと俺は思う。」

ルフィの言葉にウソップが慌てて質そうとするが、ゾロは至って真面目に賛同の意を挙げて続ける。

「多分、ルフィが言いたいのはその女が“男のリーナ”を生かした理由だ。」

元々の身体の持ち主、謎の女は身体器を無事奪い返した。ならば、謎の女は目的を達成したはずだ。

なれど、自身の身体器に存在するもう一つの魂リイナの為にわざわざ新たな身体を用意し、そちらに注移いで生存させたのだ。

あの能力であれば容易い事なのかもしれないが、わざわざそんな事する必要は無いだろう。

謎の女からすればそんな義理は無いはずなのだ。自分がそうされた様に、自分の身体器にリーナを閉じ込めてやれば仕返しにも成るだろうにそうはしなかった。

その理由を考えれば『敵では無い』と理由付けられるはずだ、と静かに語った。

「そっか…わざわざ『ドリフトの相棒だ』なんてこっちに敵意を表したのなら、自分の相棒と敵対関係にあるリーナ転生者は閉じ込めておいた方が有利なはずなのにそうはしなかった。何か理由があるにしろ、本来の転生まれ変わり生を手助けしてくれたって事よね。」

「そう考えれば確かに『敵では無い』のでしょね。まあ、味方とも言えないけれど…」

「…ルフィってたまに、ホント極稀に核心突く事言うわよね。」

ほとほと呆れた様にナミは額に手を当てたまま天を仰ぎ息を吐き出す。

「それでも、結局その女が何者か分からねえってのは変わりねえ。つか、姿は同じでも中身がリイナじゃ無いってんなら興味も無えが：キツチリ礼はしねえとな。」

獰猛な笑みを浮かべて腰の刀を爪弾くゾロに常識人は不安気に苦笑交じりの息を飲み込んだ。

(コイツ：リイナ妹の事好き過ぎだろ：)

※ ※ ※

『転生者』として『ONE PIECE』の世界に再び生を受けた者には『特典』として強力無比と言える様な『悪魔の実の能力』を授けられる。

そして、その強大な能力ちからを扱う為の強靱な肉体と強固な精神力。それら総てを如何なく発揮する為の才能センスも然り。

当然『特典』に付随した『心・体精神力 肉体』に併せて、六式や覇気等といった『技技術』の会得も成せる様にそれぞれの神に調整されているはずだ。

元々の『特典』は『悪魔の実の能力』なのだが、オマケとして『心・体』まで付いてくるという仕様。正にチート。

それぞれの世界の神の嗜好や裁量にも依るのだろうが『かみがかんがえたさいきょうのてんせいしゃ』とでも言えば良いのだろうか：

まあ、つまり『転生者』とは多少の違いはあっても『完成を約束された者』であると言えるだろう。

新たに男の身体と成った俺はロードやシールとの会話で得た言葉を繋ぎ併せてそう結論付けた。

「つて事で、まずは身体を鍛えないとな…」

シールの言葉に『我々はこの世界の母親から生まれた』というものがあつた。

それは転生者と言えども生まれたばかりは赤ん坊だった事を意味する。当たり前前の事象ではあるが大事な事だ。

転生者は『悪魔の実の能力』を得て生まれて来るだけであり、年を重ね身体が成長していくものであると裏付ける話なのだから。

『心・技・体』の“体”の部分には端的に言えば“成長した身体”なのだから母親から生まれた瞬間から“成長した身体”だったなら…それはホラーだ。

腹を痛めて生んだ子が生まれた時には見た目が成熟していたなんて母親はショック死してしまうだろう。

…てか、母体が保たないな。お産の時点でスプラッターだよ。下手したら母親のお腹が大きくなり過ぎて産まれる前にスプラッターだ。

閑話休題

身体が女だった時の年齢は17才だったはずなのだが、男に成った今の身体は筋肉量が極めて少なくもつと幼く見えるらしい。

とは言っても女であった時も記憶が無いので見た目年齢で17才だと自称していただけだが…

ともあれ、まずはリハビリを始めて歩ける様にしてから身体を鍛える。そうすれば『転生者』としての肉体はそれらしく最適化されていくはずだ。

精神的なものは未熟ながらも『ロロノア・リイナ』として成長し『俺』として育まれているし、技術的な面は『ロロノア・リイナ』として生きた二年間を元に再度この身体に叩き込めば良い。

あの女と分離されてしまったので“世界と同化する能力”は使えなくなったが、俺にも何かしらの『特典』はあるはずなのでコレも探らなければならぬが…まずは身体だ。自由に動けなければ何も出来ない。

※ ※ ※

あれから二週間、以前と変わらない程度に“六式”と“覇気”を苦も無く扱える様になった俺は『転生者』としての恩恵を多大に実感していた。

リハビリを始めた初日は四つん這いで移動練習。つまりは赤ん坊の“ハイハイ”の練習だったが、あまりの筋力の無さに途中から芋虫の如く這い擦るリハビリになった。

その翌日には全身を襲う強烈な筋肉痛に泣き喚きつつも立ち上がり、更に補助有りでの歩行を可能としたことに俺も含めた一味全員で驚愕する事となる。

普通では有り得ないリハビリの速度に自分自身が信じられない程であったが、転生者としての『恩恵』だと割り切りリハビリを重ねた。数日で歩・走を難無く出来る程になったので次は肉体の性能向上へとトレーニングを切り替えて押し進めた。

毎日苛烈な筋肉痛に悩まされながらも、それは筋肉量が増えている証だと思えば楽しくて仕方なかった。

途中、それをゾロへ語ると顔を引き攣らせたが甲板で俺がやっているトレーニングを隠れてやり始めたのを見かけて精神的により一層楽しく感じる様になった。

因みに、一日の大半は一人で黙々とトレーニングをしているか座禅を組んでいるので基本的に誰も寄って来ない。

単に誰も近寄らないだけなのか、集中していて近付いた事に気付いていないだけなのかは定かではない。

今回のロロノア・リーナに起こった事は分からない事が多く、一味の皆が納得する程の説明が出来た自信は無い。

なので、少し距離を取られていたとしても仕方ないと思っている。とある部分で俺にも皆と顔を合わせ辛いという面が有るので、冷静に考える時間や気持ちを落ち着かせる為の時間と割り切って一人の時間を意味有るものにするべく身体を動かしつつ頭も働かせているのだ。

とは言っても二週間という時間を費やしてしまったので考える事がほぼ無い状況だった。

：だったのだが、定期的に発行されるニュース・クー販売の為に空を飛ぶカモメが視界の端に入ったので、すぐさま呼び止め一部購入したのが発端となり俺は深く考える事を放棄するハメになる。

《ロロノア・リーナ大佐 海軍復帰!》

《涙の会見 その訳とは?》

そんな見出しと会見時の写真が一面を飾る記事。瞬間的に意識が

飛びそうになったがなんとか読み進めていく。

先ず目に付くのが、ロロノア・リイナが流れる涙をハンカチで拭う場面の写真。自分では無いと理解はしているが、自分と同じ顔をした人間が写っている違和感に眩暈がする。いや、今は男に成っているのと同じ顔と言うのは可笑しいが仕方ない。

たしぎさんも似た顔だけど“この人はたしぎさんだ”と認識していたから向かい合っているのも違和感は無かった。これは世の双子にも同じ様に言える事だと思う。

しかし、これはそういう問題では無く“ロロノア・リイナ本人”として新聞に載っているからこそその違和感だ。

さて、それは置いといて…記事の方を読んでみよう。

『ロロノア・リイナ大佐には兄が居る。兄と言っても本当の兄ではなく共に育った義理の兄である。その兄、ロロノア・ゾロは『麦わら海賊団』の一味として手配書が出回っている事は周知されている事実である。』

今回の退役・復帰騒動にはその兄が大きく関わっていたと涙ながらに語るロロノア・リイナ大佐に我ら記者団も感涙を禁じ得なかった。それは遡ること数ヶ月前。彼女は海軍本部の諜報部よりある報告を受けてた。それは『白ひげ海賊団』に関する報告だった。

誰もが知る世界最強の男が続べる白ひげ海賊団。その白ひげ海賊団から一人の男が仲間を殺害し離叛したという、ただそれだけの事。しかし、そのまた数ヶ月後、離叛した男の続報に彼女は頭を抱える事となる。

白ひげ海賊団を離叛した男の名は『マーシャル・D・ティーチ』。ティーチは自ら『黒ひげ海賊団』を結成し、王家七武海へと成り上がる画策をしているという内容だった。当時、王家七武海であったサー・クロコダイルはアラバスタ王国にて国家転覆を企てた罪状で捕縛されているが、続報を受けたのはクロコダイル捕縛から然程間も無かったという。

つまり、ティーチはクロコダイルが抜けて空いた七武海の一席に直ぐさま狙いを付けたのだ。本来ならば多くの中小海賊団への抑止力

とする為に海軍本部より選抜・打診される七武海の座を自ら売り込もうと画策した。その功績の為に新進気鋭の海賊団として名が売れ始めた『麦わら海賊団』の船長『モンキー・D・ルフィ』と副船長『ロノア・ゾロ』の首を手土産にするつもりで目をつけたのである。

『モンキー・D・ルフィ』とは、東の海イースト・ブルーにおいて初頭手配が懸賞金3000万ベリーという異例の賞金首であり、東の海イースト・ブルーの覇者『クリーク海賊団』や魚人だけで構成された強大にして凶悪と名高い鮫魚人アールン率いる『魚人海賊団』を壊滅させている。なお、現在の懸賞金は1億ベリーであり、正に大型新人と言える。

『ロノア・ゾロ』とは、先にも紹介したがロノア・リイナ大佐の義理の兄である。現在の懸賞金は6000万ベリー。東の海イースト・ブルーでは『海賊狩り』として元々有名であったり、賞金稼ぎ集団百人を返り討ちにし、殺し屋として名を馳せた『殺し屋ダズ』を討ち倒した等の経歴がある。

そんな賞金首の二名を手土産にするならば王家七武海入りも現実であろうと我々であつても理解は容易い。

当時ティーチはジャヤモックタウンに居留しており、尚且つ麦わら海賊団の進路は同じくジャヤモックタウン。これにはティーチも、自身に追い風が吹いていると捉えて当然だったろう。

だが、ロノア・リイナ大佐はその報告を見過ごす訳にはいかなかった。

彼女は報告を受けて直ぐに上官へと退役を申し出た。彼女は既に佐官に就いており、自分勝手に単独で出向する事も表立って海賊である兄を助ける事も出来無いからだ。それは海軍本部大佐としてでは無く、家族として、兄妹として譲れない確固たる想いからだった。

しかし、その申し出が通る事はなかった。そも彼女は実力、名声共に海軍には無くてはならない存在とまで成っており、自身の都合ひいては海賊を救う為に海軍本部大佐の退役を簡単に認めるなど出来るはずもないだろう。

しかし、彼女は涙ながらに上官へ訴えたそうだ。

「家族を守る為に海兵へとなったにも関わらず、海兵だからこそ家族

を守れないならば海軍を辞してでも兄の元へ赴く」と。

彼女の語る『家族』には兄と別にもう一人、血の繋がりにこそ無いが彼女を育てた義理の父親がおり今も医師を勤しんでいる。ロロノア・ゾロとロロノア・リイナへ実子の様に愛情を注いでおり、その絆は実の親子以上と言つても過言ではないようである。

そんな養父が住まうのは東の海イースト・ブルーの大きくは無い島。その近辺は小さな、それこそ無名な海賊や山賊が多く日々の生活を脅かされるなど日常茶飯事なのだ。

彼女はその島を、養父を守る為海兵を志したのだと言う。海兵となるやいなや見る見るうちに頭角を現した彼女は養父の住む島へ海軍の駐在所設立を申請し、上層部も彼女の実績を評価し設立を認めた。これにより、彼女は間接的にだが養父の住む島を守る事を成した。それから彼女は海兵として業務に尽力し、弱冠17才にして海軍本部大佐まで登り詰めたのだ。その名は威光となつて養父の住む島だけでは無く、近隣諸島の安全へと今も繋がっている。

彼女の海兵としての根幹に基づくものは『大切な家族を守りたい』という気持ちであるとよく分かる一件である。

そんな彼女の強い想いをよく知る上官とは、かの『海軍の英雄』ガープ中將である。一目でロロノア・リイナの才を見出し自ら出向き声をかけて自身の部隊へと招いた人物でもある。海軍内での彼女の師でもあり、第二の父親と言える程彼女から信頼を寄せられている。

ガープ中將は彼女の熱意に心を打たれ彼女の背を押した。責任は自分が持つ、兄を救えと。自身への叱責よりも彼女の辛苦に歪む顔を見る方が余程辛いと。

上官としては無く、もう一人の父親としての言葉に彼女は温かな涙を流し感謝したという。

一連の解決を迎えたら必ず海軍へと戻ると固く約束を交わし、誰にも気付かれぬ様に単身で出向。無事麦わら海賊団と合流し事態の説明の後にジャヤモックタウンへ向かったそうだ。

彼女が麦わら海賊団の一味と取り決めた作戦は『黒ひげ海賊団全員の捕縛』。捕縛し海軍へ黒ひげ一味の身柄を引き渡す事で今件の麦わ

ら海賊団の危機を無くし、更に海軍の功績として帰依する事で少しでもガープ中将の責任を軽くしたいという彼女の申し出だ。

何より白ひげ海賊団が離叛したティーチに対する肅清行動へ出ないとも限らない。万が一それに一般市民が巻き込まれようものならば大惨事へとなるだろう。そう懸念した結果、捕縛し海軍へと引き渡した方が良いと結論付けた。

その後、彼女と麦わら一味の共闘にて無事黒ひげ海賊団全員の捕縛に成功。彼女は麦わら海賊団と別れて海軍への引き渡しを済ませた。

そして、海軍本部 大将 クザンに迎えられ共に帰還するに至る。その間に発行された彼女の手配書だが、5億ベリーという超高額懸賞金と共に「ALIVE ONLY」の一文が添えてある。これは、海軍の立場上「規律違反」は罰しなければならぬという苦渋の決断の表れであると同時に、高額懸賞金を懸ける事で彼女を畏怖の対象とすれば要らぬ襲撃を避けられるからだと考えての事だろう。また、件の一文は彼女を死なせぬ為の、生きたまま帰還させる為の措置^{気遣い}だったと我々記者団は感じ取っている。

それ程彼女の家族への愛情・絆は大きく熱く、上官であるガープ中将も彼女の熱き想いに応えた。ガープ中将は師として第二の父として彼女を支持し、叱責をもとめせず上層部の説得に奔走した。そんな『海軍の英雄』の姿に、上層部が海軍という立場を保ちつつも彼女の助けになる行動を影ながら起こした事は必然だったと言えるだろう。

彼女が家族を愛するように、立場や役職に関係なく多くの海兵もまた彼女を愛しているのだ。

やはり彼女はその異名通りアイドル^{愛される者}なのだ^{と確かに感じる会見}と
なった。』

……なんだ、この記事。ツツコミ所満載なんだが。

あ、ダメだ…頭痛くなってきた。もう無理。………寝よう。

22・茶番の裏側

海軍本部 中将執務室

その部屋の主は淹れたての紅茶を少女へと差し出し、それを受け取った少女は先ず紅茶の香りを愉しむ。

「…お主が淹れる茶を飲むのも久方振りよのう。」

少女は優雅に紅茶のカップに口を付けつつ感慨深気に呟く。その言葉を受けてドリフトは少しだけ肩を諫める。

「僕としてはそうでも無いけどね。度々リイナくんには淹れていたのだから。」

互いに面して座る革張りのソファーは高級なものであり、素材からして安物のそれとは違う。小さな所作での軋みや擦れの不快な音は一切鳴らない。

故に静かな室内での少女の小さな呟き。それこそ独り言の様な言葉をも聞き取り、ドリフトは少しだけ茶化しているのだ。

カップをソーサーに乗せると小さくカチャリと音が鳴る。ドリフトも少女も互いに見合う訳でも無く、少しだけ穏やかな表情で窓の外へと視線を送り、それから暫しの静寂が流れる。

「…ああ、すまねえがドリフトさんよお。俺あちつとも状況が把握出来ねえんだが。大体、その女は何者だ？みなり身形はリイナだがそいつ俺の知ってるリイナじゃねえ。俺にも分かる様に説明しちやあくれませんかねえ？」

静寂に耐えかねたクザンが口を開く。その行動は正解で、何も発さずにいたならそのまま「居ない者」として扱われていただろう。

一瞬、ドリフトは目線を壁際で立ったまま腕組みをしているクザンへ向けると、顎に手を当て何やら考える素振りを見せる。対して少女はクザンを見もせず口角を僅かに上げた。

「何、簡単な事であろう？妾はお主等の言うところのロロノア・リイナ本人である。正しくは“二年より前の記憶”が戻った状態だがな。故にコレが本来の妾じゃ。」

身形は兎も角、以前の様な年相応の言動もとれんこともないが…お主、よもや生娘が好みと言うのではあるまいな？」

リイナ本人であると語った少女は悪戯を計画した子供の様な厭らしい微笑みをやつとクザンへと向け、ドリフトは小さく溜め息を漏らした。

「んな訳あるか！俺あ、イケイケのボインちゃんが…って、何言わせやがる!!」

少女からの『お前少女趣味なのか?』というからかいへ反射的に反論しようとして思い直すも少し遅かったようで、少女は悪戯が成功した子供の様にコロコロと声を上げ笑っている。

その様子にからかわれたクザンも見えていただけのドリフトも思わず肩を落とした。

「…実は彼女とは知古でね。二年前、無理を通してリイナくんを保護したのはその為さ。とは言っても、それは本当に偶然だったがね。

それと、彼女の言動を見聞きしていれば分かると思うが、本来なら高貴な立場だったのだがね。実はあまり公には出来ない出自であり、とても特殊な娘なのさ。だから、僕はこの娘の正体を語れなかったと思ってくれ。」

クザンは『公に出来ない出自の特殊な娘』という言葉におおよその見当がついたのか片眉をピクリと上げ少女へ視線を送り、またドリフトへと視線を戻した。

クザンの脳裏に過ぎったのは『貴族』という言葉。それも、『公に出来ない』という事はそれなりに階級の高い貴族。若しくは、何らかの理由で今は現存しない貴族かだろうと当たりをつける。

「…そうだな、クザンくん。君ならば真実を知って尚、正しく在れるかもな。聞くかい？」

一頻り笑って落ち着いた少女は我関せず、と再びカップに口を付け窓外を眺め始める。

普段通りの穏和な雰囲気は崩さず、然れどその瞳の奥に宿す冷やかな緊迫感を放つドリフトを見遣りクザンは喉の鳴らす。

「まあ、聞くだけ聞こうじゃあないですか。」

意にせず乾く口内を何とか湿らせ短く了承の言葉を発し、クザンは壁へと寄り掛かる。知らず内に圧されて背を詰められていると本人も気付かないまま。

ドリフトはふむ、と僅かな笑みを浮かべて自身の座っているソファから立ち上がり少女の隣へと腰を掛けると対面へと右手を掲げてクザンを促し、卓上に幾つか用意してあったティーカップの一つに紅茶を注ぎクザンが座るべき場所へと配置する。

その意を汲みクザンは静かにソファへと座り一口だけカップを傾ける。

『ヘクアト・L・メレファイア』それがこの子の本当の名だ。だが、今は『ロロノア・リイナ』として周知されているからそのままリイナと呼ぶよ。」

メレファイアという名の少女は不干渉を貫く様でドリフトの視線と言葉に反応せず、そのまま窓の外へと視線を巡らせている。といったもただ眺めている訳ではないのだがそれに気付く事は不可能だろう。

それと、正体不明の少女であるリイナの本当の名を明かされ、自身の知り及ぶ貴族、元貴族等にヘクアトなる者は存在しないのでクザンは内心で困惑する。ドリフトの言う『真実』が何であれ、リイナの本名を知らされても心当たりがないクザンとしては反応し辛い。しかし、ドリフトが意味も無くそんなことを語る訳が無いと知っているクザンは少女の名を記憶に刻み込む。

「…うん、異論は無いみたいだから続けるとしよう。名前というのは大事なものだからね。呼ぶ事は無くてもリイナさんの真名は覚えていてほしい。」

ではクザンくん、この世界に存在するという『古代兵器』についてどこまで知っているかな？」

マイペースを貫くドリフトへ少しの呆れと困惑それも束の間、世界政府・海軍本部でも秘匿事項である『古代兵器』についてあっさり言及しようとするドリフトに目を見開き慌てて立ち上がると周囲を警戒する。

「大丈夫、この部屋の中で話す事は漏れはしないよ。盗聴の類も無い。」

勿論、周囲に人も居ないから安心してくれていい。」

クザンはそう言われソファーへ腰を落とす。如何に中将執務室に居るとはいえ海軍内部統制の為にある程度の諜報活動は存在する。それでも、それに気付ける者は極僅かなのだが、勿論クザンは内情を知る立場なのでそういった話は注意・警戒して当然なのだ。

しかし、ドリフトはそれらを意に介さずにいる。つまりはそれらの排除は既に済んでいるという事だとクザンは思い至る。

同時に、背が冷やややかな何かで覆われる感覚に襲われる。ドリフトは常々そういった会話をここで誰かと交わし慣れているのではないかと。

憶測：いや、この場合は邪推と言うべきか。クザンにとっては慎重に物事を捉える為の行為なのだが、時としてこうした過ぎる思考をしてしまう。

「……古代兵器、ですか。知ってるのは名前と危険性くらいですかねえ。実物なんて見たこと無いですし、正直……御伽噺だっと思ってますよ。」

ただ、五老星がその危険性を問題視しているのも事実。だからこそ、確実に存在するんだという確証になるんでしょうがねえ。」

敢えて詳しくは語らない。知り及ぶ名や形態はほかし、よく分からないと誤魔化す。クザンはそうする事で会話を引き伸ばしドリフトの真意を探ろうと考えた。

しかし……

「クザンくん、君は優秀だ。だからこそ、言おう。今のは説明の前フリであつてそれ以上の意味は無い。だから、深読みするだけ無駄だよ。疑う事は容易いが、疑い過ぎは真実を否定することに繋がる。加えて、信じる事も容易いが、信じ過ぎるのは盲目となる。」

先ずは聞き終えてから取捨選択するべきじゃないかな？僕はまだ話始めたばかりなのだから。」

普段のそれとは違う鋭い目線を這わせるドリフトにクザンは心の臓を鷲掴みされる錯覚を催す。勿論ただの比喩であるが、本人にとつては殺生与奪の権利を握られていると自覚するには十分なモノだっ

た。

まあいい、と小さく息を吐くドリフトに対しクザンは額に流れる汗を拭うことすら出来ないまま説明が開始された。

※ ※ ※ ※

「…リイナが『ポセイドン』と対になる古代兵器とか…冗談みてえな話ですね。他の話も到底信じられるような話じゃねえ…」

ドリフトの説明が半ばになる頃からクザンは両手で頭を抱えていた。それは何も知らぬ者が聞けば一笑するような与太話だっただろう。しかし、その話が真実であったならば世界が本当の意味でひっくり返る。なのでクザンの反応は当然なのだろう。

「安心し給え。五老星ですら継ぎ接ぎでしか知り得ぬ真実だからね。知っていると言言しない限り危険は無いよ。最も、語ったところで信じて貰えるかは別の話だがね。」

白い歯を見せ笑うドリフトを視界の端に捉えつつ恨めしく歯軋りをするクザンをリイナは鼻で笑う。

「知りたくなかったと喚いても時既に遅しだのう、クザン。して、ドリフトよ。此奴に話してどうするのだ?」

「彼には協力者になってもらおう…とね。」

そう遠くない未来、然るべき時に然るべき事が起きる。本来ならばクザンくんはそこで退場する事になる。それも踏まえて『計画』を立てていたんだが…いやはや、リイナくんが記憶を取り戻したおかげで総崩れだ。

おっと、君を責めている訳ではないからそう睨まないでくれ。」

睨む、と言うよりも呆れた様に半目で見詰めるリイナをドリフトは朗らかに嗜める。ドリフトなりに場の雰囲気を変えようと試みているのだろうかクザンの様子は変わらない。

「…ふん、もうよい。お主が理由も無く多くを語る訳も無い。遅かれ早かれ此奴は巻き込まれとったのだろう。」

して話は変わるが、妾の今後の予定じゃ。ロロノア・リイナは軍を

去った事になっておる。妾がここに居っては都合も悪かろう。今更世界を回る程の興も乗らんしのう。そこでだ、お主等のアジトにでも世話になろうと思っておるが、活きの良い小僧にはお主から話を付けて貰わねばならんだろう？」

メレファイアがドリフトを訪ねた用件。つまるところの本題がこれである。「リイナ」ならばガンジという義父の下へ帰ることも可能ではあるが、本来の記憶の戻った少女　メレファイアにとっては知古であるドリフトしか寄る辺が無い、とクザンにも理解出来るように説明する。

クザンはメレファイアの言葉に一応の納得はしたようだが、ドリフトの口から出た『協力者』『遠くない未来』『計画』そして、『ドリフト等のアジト』等の単語に更なる頭痛を催している。真実についての説明だけでも悩ましい事柄であるのに、更に不穏な単語のオンパレードである。秘かにここへの同行を強制したメレファイアを怨むクザンだった。

一方、メレファイアの要望を聞き左手で顎を撫でつけながらドリフトは思考を巡らせる。そして、少しの時間で纏め上げた考えを口に出した。

「わかった。彼にはキチンと話を付けよう。まだ彼を失う訳にはいかないからね。

…と、その前に確認したい。密偵から随時報告を受けてはいるんだが、モックタウンで『黒ひげ』と接触したのだろうか？ 奴は死んだのかい？」

「ん？…ああ、奴か。ロロノア・リイナが奴の危険性を鑑みて、能力で元素に分解しておったな。

その報復であろう。奴の取り巻き共がリイナを襲撃しおった。おかげで妾が出てこれたのだから。その礼に命だけは取らんでやったが…何か問題でもあるか？」

あくまで自身でなくリイナがやったと強調しつつ、己の身に起こった出来事をサラッと簡潔に告げる。殊更に『大したことでは無い』という口調にクザンは大きく溜め息を漏らし、かの襲撃にはそういった

真相があつたのかと理解する。

「そうか。特に問題は無いよ。では、『黒ひげ』の『復元』は出来るかい？ああ、なんなら死体でも構わないよ。」

ドリフトは黒ひげ一味の末路に対し素っ気無い反応を返し、『黒ひげ』、或いは『黒ひげ』だったモノだけでも必要だと暗に告げる。

その問いに何をするつもりかとメレフィアは訝しむ。が、不可能ではないと答えると同時にリイナが度々使用していた『アイソレーション 隔絶』を発動させ静かにソファから立ち上がると扉前の拓けたスペースへと足を運ぶ。

両手のひらを下に向けて肩の高さまで上げるとどこからともなく塵の様な、埃の様な粒子がメレフィアへと集まり始める。

「『黒ひげ』の分解された元素を収束させ復元すれば良いのだろうか？」

メレフィアの周囲を舞う粒子が手のひらの下方にて寄り集まり一つの塊を形成しだす。見る見るうちにそれは辛うじて人の形に見える塊へと成る。

「…ほれ、これで終いじゃ。誠に万能な能力だのう。妾の同化するだけの能力より便利じゃ。」

そうごちるメレフィアの足元に横たわる塊は太い身体に不釣り合いな短い手足の生えた人の形をしている。汚い不揃いなひげと手入れをしていない黒髪を伸ばしたモサモサの頭に、これまた薄汚れたバシダナをした中年男性だ。

知る者が見れば紛うこと無く『黒ひげ』マーシャル・D・ティーチだと分かるだろう。ついでに、胸部が上下していのを見る限りちゃんと生存しているようだった。

クザンは境界を隔てた異世界にて人間の『復元』という神の如き業を目の当たりにして目を剥いている。それを見たメレフィアは改めて自身の能力が埒外な進化を遂げたと口に出し認識する。ドリフトは小さく頷き微笑んで口を開く。

「では、『黒ひげ』が復元出来た所で今後の予定を決めるとしようか。君には悪いがアジトへの案内はまだ出来そうにないね。」

クザンの茫然とした状態を無視し、メレファイアは能力を解除して元の世界へと戻ると再び優雅な佇まいでソファアールへと腰を降ろした。

「構わぬさ。どうせお主のことだし。何かしらの手で上手くやるのだろうな。ついでに此奴等も使い道があるう？」

そう言うのと右手をスツと胸の前に上げ指をパチンツと鳴らす。と、同時に横たわる「黒ひげ」の周囲に四人の人物が気を失った状態で倒れたまま現れる。

「その汚物の取り巻きじゃ。後はお主の好きにせい。」

「ああ、助かるよ。」

理解の追いつかないクザンを余所にドリフトは小気味良いテンポを刻む様に事細かに今後の予定を語り始める。その口調は淀み無く、用意された台本を読み上げる様に軽快だった。

クザンはそれに対しドリフトへの畏怖を更に深めた。メレファイアへ「黒ひげ」の復元を問う直前のほんの僅かな時間、確かにドリフトは考える素振りを見せた。

それはフリだったのかもしれないが、それでも脚本を書き上げるには時間が早過ぎる。本当にあの僅かな時間でこれだけの脚本を準備したのであれば相当なものだ。

だからこそクザンは考える。ドリフトは自身を『協力者』に据えると言っていた。恐らく逃れられないだろう。ならば、今は従うしかない。

※ ※ ※ ※ ※

その後、ドリフトが提案した通りにメレファイアはロロノア・リイナとして海軍へ復帰する事を取り決めた。

筋書きとしては、とある理由で「黒ひげ」に標的にされた兄　ロロノア・ゾロの危機を察知し、海軍本部を飛び出したロロノア・リイナは無事「黒ひげ」を捕縛し帰還するというもの。

ただし、手配書の発行は誤魔化しが効かない事態だったので、大々的に記者会見を開きロロノア・リイナの家族愛と海兵たちとの絆を前

面に推す事で民衆の涙と同情を誘い美談に仕上げる、というドリフトの手腕とそういつた演出を嬉々として楽しみ演じようとするメレフィアにクザンは終始引き気味だった。

会見にて実名で好感度^{スケー}上げ^ブの材料^{ゴート}にされた中將　ガープはドリフトの事前説明に納得がいかない様子で憤慨していたが、民衆の海軍への不信を解消する為だと言われ仕方なく飲み込む事にした。

流石に永く軍に属し、英雄と称えられる老将である。清濁併せ呑む事を許容する器を持ち得ていた。

しかし、レイナの一応の上司だったガープは彼女が軍に復帰する事に対して大きな疑問を感じていた。加えて、レイナの雰囲気以前との違いを覚えたガープはドリフト、レイナ兩名に僅かな不信感を持ち始める事になる切欠となる。

余談だが、五老星はレイナが無事に戻った事で満足しつつ、会見は海軍の好感が上がる内容の筋書きだったのでそのままドリフトに任じた。その後、総師　コングの胃薬の服用が増えたのは言うまでもない。

23・いざウオーターセブンへ

今、俺の目の前には大きなカエルが居る。

このカエルは先ほど『海列車』なる物と接触したのだが、それ程負傷はしていないらしく悔しそうに妬ましそうに遙か先へと蒸気を霞ませた『海列車』へと吼えて続けた。

一頻り吼えた後、カエルはその大きな口を歪めて見えなくなつた『海列車』を睨み付けていた。何だかそのカエルの姿が他人の様に見えなくて、自分を見ている様な錯覚を覚え、無意識に言葉が零れた。

「…お前も、アレに“持つて行かれた”のか？」

ふと、自分の口から出た言葉を脳内で反芻するがよく分からない。俺には前世の記憶は殆ど無いと言って良い程に何も覚えていない。だから、俺には何を“持つて行かれた”のか覚えてなどいない。

だけど、何故だか俺にはそう感じられていた。きつと、前世の俺は何か大切なモノを持つて行かれたんだろう。『海列車』に似た何かに。そして、彼と同じ様に怨みや怒りを込めて睨み吼えたんだろう。

彼は俺の言葉に気付いてか、身体ごとこちらへ向くとギョロリとした眼を細くさせる。それから、顔を近づけると器用に舌をビヨンと伸ばして俺の顔を舐めた。俺はどんな顔をしていたのか分からないが、きつと慰めてくれたのだろうと察する事が出来た。

「…ありがとな。」

彼の鼻先に軽く右手を伸ばして触れると、フンスと鼻息で返事を返す彼に自然と頬が緩んだ。

※ ※ ※

カエルとの妙な親近感に頬を緩めつつ、泳ぎ離れてゆくカエルを見送り俺も泳いで船へと戻る。

六式“剃”の応用“月歩”を用いて海面から飛び出してから宙を駆けゴーイングメリー号の甲板へと着地を済ませる。

あ、そういえばルフィさんはあのカエルを食べる為に追いかけていた事を忘れていた。そのまま見送っちゃったけど怒ってないよな？ 食べ物への恨みは酷いと聞くし謝るか。

そう思い皆の方へ振り向くと同時に般若なナミさんの拳が眼前へと迫っていた。これくらいならば避けるのは容易い。…容易いが、このパターンは避けた後が怖いパターンだと直感が働き甘んじて受けるでしょう。

「あんたはっ！もう!!ああ〜！あんたはもうっ!!」

女性とは思えない鋭い一発を頬に入れ、甲板で激しく地団駄を踏むナミさんとその後ろで呆れ返る皆を見て…

「そんなにカエルの丸焼きを食べたかったですか？すみません、今度別の奴狩ってくるんで許して下さい。」

と、一応謝っておく。下げた頭を上げるとゾロが額に手を当てた格好のまま俺の前まで出てくると微妙な角度で天を仰ぎ口を開いた。

「ったく。カエルの丸焼きはどうでもいいんだよ…お前、普通に泳いでたが能力者はカナヅチになるんじゃないのか？」

「…?…!!?!…!!?!」

「やっと気付いたのかよ。」

おう、マジか…そうだよ。何で俺泳いでんだよ。何気無く普通に泳いでたよ。って事は、俺ってば能力者じゃないんだ。え…何で？

壊れかけのゼンマイ人形の如く、わたわたと身体を右に左に小刻みに捻りつつ両手を上下左右に揺らし動揺する俺はとても滑稽だったそうさ。

※ ※ ※ ※

ナミさんは一目見てわかる程に拗ねているようで甲板のデッキチェアに腰掛け黒いオーラを発しながら呪詛を垂れ流している。

突然だがここで情報を整理してみよう。

サンジさんが作ったじゃがいものパイユを皆でつまみながらのんびり穏やかな航海中。暇を持て余して釣りをしていたルフィさんと

ウソップさん、チョッパーくん。何故かクロールで泳ぐ大きなカエルをルフイさんが発見し、捕食しようとする追跡の号令を出して俺たちはそれに従った。というより、俺は珍しいモノ見たさに自発的に追い掛けた訳だが：

そして、追っているカエルの向かう先に灯台を発見したナミさん。なんやかんやと問答しつつ無駄な団結力でカエルを追う俺たち。

その時、突如カンカンと鳴り響く変な音。皆そこで警戒を高めた。灯台の近くまで泳ぎ進めたカエルはスピードを落としたと思っただら海上に立ったのだ。と、同時にゴーイングメリー号が何かに乗り上げ座礁した。

俺たちは訳も分からず驚愕するも、海上に立つカエルが見据える先に轟音を響かせて迫り来る何かに気付く。

そこで俺の脳裏に過ぎったのは海兵時に何度か乗った事のある海を走る船『海列車』だ。愚かしい事に今の今までその存在を失念していた事に気付く。

カエルが立ち、ゴーイングメリー号が乗り上げているモノはその線路であると思いつたのも同時だった。

——このままじゃマズい！

頭の中で警鐘が鳴り響く。咄嗟に俺は船から飛び出し“月歩”で宙を蹴りつつゴーイングメリー号の船首下へと潜り込む、更に力を込めて“月歩”で海面を蹴りながら両手で船を突き上げた。

船体が後方へ傾き、乗り上げていた船底は線路から離れる。ナミさんの判断で咄嗟に後進しようとする皆が動いた甲斐もあつてか何とか座礁から復帰し安全圏までは離れられた。

『火事場の馬鹿力』とは良く言ったものだ。たかだか“月歩”の推進力で船を押すなんて普通は出来ないだろう。転生特典である肉体つてのも一つの要因だと思いがそれをまたやろうとは思わない。

ゴーイングメリー号の避難が済んだところで『海列車』は既に目と鼻の先にまで接近しているのが分かる。数秒前とは違い駆動音と汽笛、それから猛スピードで進む機体の振動を数十メートル程度の距離に肌で感じたからだ。

船は被害の出ない場所までは離れた。これで一安心だ。だから俺は、『海列車』を迎え撃とうと身構え、咆哮を上げるカエルへと再び「月歩」を駆使して接近した。

しかし、残念ながらコンマ数秒間に合わなかった。

それでも俺はカエルの横腹へ勢いを付けたまま飛び込み、正面衝突だけは回避したのだが『海列車』の先端部にカエルが接触し、横合いから掴み掛かっていた俺諸共跳ね飛ばされた。

そして、海面へ叩きつけられた俺は以外と元気そうに吠えるカエルと親睦を深めて帰還した。

以上、回想終わり。

※ ※ ※

…まあ、なんだ。つまり、ナミさんは俺がカエル諸共『海列車』に接触し跳ね飛ばされた事と、俺は能力者だから海に入った事で溺れてしまうのを心配していてくれてたんだ。

それなのにケロツと帰還し、あまつさえ「そんなにカエル肉食べたかったの？この食いしん坊め！」と言ってしまったので拗ねってしまったのだ。

考えるより先に体が動いてしまったとはいえ今回は…いや、今回も俺が悪いのは違くない。

それに、ナミさんは純粹に俺の心配をしてくれたんだ。それが嬉しくないはずがない。

ナミさんは以前『もう家族みたいなもの』だと言ってくれた。

ガンジお爺ちゃんも『血の繋がりなんて関係無い』と言ってくれた。確かにその通りだと思う。当時は女のロロノア・リイナとしてだけど、ナミさんもロビンさんも妹として接してくれてはいた。

でも、男になった俺を同じ様に接するのは無理だろうと俺自身が壁を作ってしまったていたし半ば諦めてた。だけど、それは杞憂だったと気付かされた。

ナミさんは…いや、他の皆もだが以前と変わらず俺を心配してくれ

た。男だとか女だとかでは無く『ロロノア・リイナ個人』としてだ。性別の転換程度で皆と壁を作ってしまったっていた自分を恥ずかしく思う。

※ ※ ※ ※ ※

その後、ナミさんへは謝り倒し何とか機嫌を直して貰った。途中、意を決して『お姉ちゃん』呼びを復活させたのだが、それを切欠にナミさんの気色が良くなってゆくを感じ、チョロいと思ってしまった俺は悪くない。

勿論、ロビンさんの呼び方も『姉さん』へ戻した。女体時には気軽に呼べていたのだが、男となった今では何とも言い難い恥ずかしさに蝕まれている。

ゾロの呼び方は以前とは変えて『兄貴』若しくは『兄さん』にしようかと考えたが背中がむず痒くなってしまったので保留にした。

と、まあ俺が一人で身悶えている間に『海列車』の線路沿いにそびえる灯台、もといシフトステーション 駅 から飛び出してきた人たちと会話を進めるルフィさんたち。

こちらは海賊旗を掲げた船に乗っているのだ。襲撃や略奪の疑いを懸けられても何ら不思議ではない。

一応、そういった目的では無いと弁明し『海列車』や『駅ステーション』、先程のカエル『ヨコズナ』や記録指針ログポースの示す次の島『ウォーターセブン』についての説明を受けている。

シフトステーション 駅の駅長 ココロさん、ココロさんの孫 チムニー、チムニーのペット？であるゴンベはサンジさんお手製のじゃがいものパイユをパリパリと頬張りながら気さくに色々とレクチャーしてくれている。

俺は海兵時代に何度か政府関係者の護衛任務で『海列車』に乗っているのので特に耳を傾げるでも無くぼーっとしていた。

船長ルフィさんが次の島 ウォーターセブンでゴーイングメリー号の修理と新たに船大工を仲間にする、と宣言し出航準備へ取り掛かる。

ココロさんから餞別を貰い受け、皆意気揚々とウオーターセブンへ向けて出発する。船上ではどんな船大工を仲間にするかで話が盛り上がったたり、ゴーイングメリー号を修理に出す算段を付けながら、これまで航海で苦楽を共にしたメリー号の一つ一つのブリキの継ぎ接ぎや各修理箇所を見て感慨深く語ったりと話題は尽きない。

俺もその輪に入っていれる事に喜びと誇りを抱きつつウオーターセブンへと想いを馳せた。

あれ？そういえばウオーターセブンって言えば何かあったような……何だったっけ？と一抹の不安も覚えつつ遠方に見える島影に胸を高鳴らせた。

24・上陸　そして来客

さて、そろそろウォーターセブンに着く。遠目から見ても島中央にそびえる巨大な噴水は近くで見ると余計に目を引く。壮观だ。

島そのものが要塞のように強固な石造りであつらえており、その内側には幾つもの大型クレーンが稼動している。そして、至る所に煙を吐き出す煙突が見えることから造船とそれに関わる産業がこの島、ひいてはこの街の主目的とした成り立ちであるのは明白だろう。

一味の皆はその「産業都市」を目の当たりにして瞳を輝かせながら感嘆の息を吐いている。俺はココを初めて訪れる訳ではないが、『海列車』で訪れた以前とはまったく違う情景に心を躍らせている。

表の居住区の方へそのまま船を進めて行くと、ステーション「ブルー駅」の案内標識が見えた。『海列車』で来たならここで降りるが今は船なのでここに用は無い。

というか、船で来た場合はどこに着ければ良いんだろうか？本来ならば何処かに修理の為の停泊港があると思うんだが…とキヨロキヨロしているとき小舟で釣りをしているオッサンから「裏町へ回れ」と注意を受ける。それぞれ感謝の意を伝え指し示された裏町の方へと進路を取る。

ゆつくりと周遊するつもりで裏町側まで進むと、こちらが海賊船だと気付いた海辺のカフェ店員から「船はこの先の岬に泊めると良い」との助言を貰い、再び感謝の言葉を述べつつそちらへ回る。

この島の住民は基本的に海賊を恐怖の対象として見ない。それは、この島自体が『造船所』として成り立っているからに他ならないからだ。

この島を束ねる「ガレーラカンパニー」が『世界政府御用達』の造船会社という肩書きが有るから、というのも一因するが世界政府の権力を傘にしているからという訳ではない。

彼らは船大工。一人一人が職人としての腕に誇りを持って職務をまっとうしているに過ぎない。

相手が世界政府の要人だろうが、大海賊の船長だとしても彼らに

とっては『客』なのだ。それこそ五老星や四皇が来ようと、立場や肩書きなど不要とし船の新造・修理の依頼があるのならばそれを受けるだろう。

なればこそ、島の住人にとっては海賊であろうが歓迎すべき客ではないのだ。

だから、俺たち海賊を見ても恐れず逆に歓迎する。まあ、こちらとしてはその方が助かる。

※ ※ ※

教えてもらった岬は居住区側から見て真裏にあり、周りには建物の無い岩場で荒地になっている。周囲に他の船、特に海賊船が居ない事を確認してゴーイングメリー号を停泊準備へと移る。

ここなら見通しも良いから海から接近する船も陸から接近する者も発見しやすい。

と、安心して停泊させる作業を行っている際にゾロが帆を畳んだのだが、帆のロープを引いた拍子にマストが折れるハプニングに皆同じく肝を冷やした。

既にここまでガタがきているなんて思ってもいなかった。これは早急に修理が必要だと皆で認識を改め、上陸後の行動予定をナミさん主導で決めてもらう。

まず、この島での目的は船の修理だということを一番に説明し、その為の手順をナミさんが一つつつ確認してゆく。

先ずは、シフト ステーション 駅 で出会ったココロさんに紹介状を貰っているので「アイスバーグ」という人物を訪ねるそうだ。その人を頼り船の修理を手配する算段らしい。

それに伴いもう一つ。空島で貢物として捧げられた金銀財宝の換金だ。船の修理が如何ほどの金額になるかは判らないが万全に修理を頼むのならば多いに越したことはない。

マストの件もあつたので、多めに換金しゴーイングメリー号の修理費の足しにする事に反対意見など出るはずも無かった。

ルフィさん、ウソップさん、サンジさん、ナミさんの四人で換金所へ行くそうだ。勿論、男三人は大量の宝物運びと護衛を兼ねている。換金が済み、無事に修理依頼が終わればサンジさん主導で食料品の買い出しに移行するらしい。大量に買い込むだろうからルフィさんとウソップさんは荷物持ち要員だ。

チョップパーくんは医療品の補充や医学書の購入がしたいそうで、ロビンさんはそれに付き合うらしい。

能力があつた頃のリーナ^俺が居た時には使用頻度の少なかつた医療品も、改めて検分すると随分消費していたらしい。今後を考えるならばそれなりに買い溜めておかなくてはならないのだろう。

あと、俺とゾロは船の警護つてことで留守番だ。ナミさん曰く、ゾロは一人だと昼寝するだろうからと俺がお目付役を任された。

船の停泊場所は見通しが良いので俺が周辺の警戒さえしていればゾロは昼寝でも鍛錬でも好きにしてて良いだろうと快く了承した。

※ ※ ※

ザザー…ン、ザパー…ンと岬に打ち付けられた波が潮騒を奏でる中で俺とゾロは互いに木刀を持ち向かい合っている。

何気に決闘のワンシーンみたいだなあ、と臆気な記憶の欠片を脳裏に浮かべ微笑む。

せっかく二人での留守番なんだから船上では出来ない稽古をやるう、と言うゾロに快く賛同し岬に降りての剣の打ち合いだ。

男の身体になって初めての大地。木板張りの船上とは違って、踏み込んだ時の弾力はほぼ無い。その分脚力は直接作用する。

思い切り踏み込んだ時に伝わる衝撃で甲板を踏み抜く心配も無い。なので、この身体になってから初めて全力を出せるかも、と言うのは俺にとっても嬉しい事だ。

「…準備は良いか？」

「勿論。」

ゾロは片手で木刀を構え、俺は木刀を両手で握り構える。先ずは全

力の半分くらいで脚を踏み出してゾロへ接近する。

初手は上段からの振り下ろし。カンツと木刀のぶつかる快音が鳴り防がれた事を示す。

弾かれた木刀の剣先は左側へと流された。瞬時に木刀から右手を離して体を左へ回転させ、遠心力を用いて横風ぎの一閃へと切り替える。

しかし、ゾロは回転中に一瞬目を離した俺の隙を突いて更に肉薄していた。遠心力の付いた木刀を下から掬い上げ軌道を逸らし、同時に俺の右足を払って体勢を崩す。

ゾロは掬い上げた木刀を切り返し、袈裟斬りで俺の空いた胴へと木刀を打ち込んでくる。

俺は崩された体勢の中、辛うじて地に着いていた左足で後方へ跳び間一髪で難を逃れる事に成功した。

一旦、間合いを取り一息吐く。実際に相対したのはほんの数瞬。凡人には何が起こったのか見えて無いだらう

今のは危なかった。まだ全力は出していないが一本取られかけた。普通の剣士ならあの横風ぎの一閃は一步引いて避けるか、木刀で防ぐかだろう。ゾロの力量を見誤っていた。そもそも、ゾロを『普通の剣士』と考えた俺が悪い。

「次、七割で行くね。」

「…なんなら全力で来いよ。」

ゾロの獰猛な笑みに応えるように俺も頬を引き上げる。傍から見ると互いに極悪人の顔なんだろうな、なんて思いつつ右脚で大地を踏み抜いた。

※ ※ ※ ※ ※

「だっー！チクショーツ!!」

地面に汗だけで大の字になっているゾロが叫んでいる。あれから何度打ち合っただろう。全力の八割くらいまではほぼ互角の千日手状態での打ち合いだった。

互いに一手読み違えたら負けって状態で勝ったり負けたりを繰り返しながら、全力の八割五分を出し始めてからは俺に軍配が上がり続けた。

因みに、「六式」も「覇気」も使わずにだ。ゾロは「鉄塊」しか覚えてないからね。俺も自力だけでどれだけやれるか試したかったし。

その結果、ゾロは悔しくて叫んでるんだけど。

凄く意地の悪い言い方になるけど、『普通の人間』と『転生者^俺』の差つてやつだと思う。更に『悪魔の実の能力者』つてなるとそれはチートだ。

そんなのが俺の他に六人も居るといふ。いや、あの女も含めたら七人か：俺を入れたら八人。シールと話した時点での状況だったからもしかしたらまだ増えてる可能性もあるのか？

そんな事を考え出したら切りが無い、と頭を左右に振って思考を切り替えると街の方からこちらへ向かってくる人影が遠目に確認出来た。

ナミさんたちが戻って来たのかとも思ったが雰囲気が違う。自身の感を信じ「見聞色の覇気」を展開すると、感知したのはやはり見知らぬ男達のような。

武器を持った奴らが七人。こちらを伺いながら足音をたてないようにゆっくりと忍んでいる。

「いや、忍べてないから。バツチリ見えてるし。」

純粹に呆れてしまった俺は小声で突っ込む。それに気付いたゾロは首だけを動かして俺の視線を追う。

「…なんだあいつら？」

「多分、強盗かな。俺がやって良い？」

「……任せた。俺あ、疲れたから寝る。」

寝る、と言い終えると地面に大の字のまま寝息をたて始めるゾロを尻目に、ふう…と一息吐く。因みに、これは汗だくのまま横たわるゾロに対してのため息だ。

俺は全力を出していない。ましてや、「六式」と「覇気」を使わず

に薄らと汗をかく程度にしか動いて居ない。それがゾロにとっては悔しいんだろう事は分かる。

ゾロの事だから先程の打ち合いを忘れない内に、夢の中でも俺と剣を合わせて睡眠学習的な修行をしてるんだろうな、と修行バカっぷりに対してのため息だ。

「…んじゃ、さっさとやっちゃいますか。」

こつちにコソコソと歩み寄る強盗馬鹿共の相手をしてやるとしよう。

※ ※ ※

「で、遺言はそれで良い?」

俺は先程の強盗七人組に「剃」で近付き、「霸王色の覇気」で気絶させてから縄で簀巻きにしてゴーイングメリー号の手摺りに括り、縁から外側に吊してある。

俺は地面から吊された強盗共を見上げる形になっている。そして、目を覚ました命知らずの強盗共に対話を試みたところだ。

こいつらは口々に罵詈雑言を吐くか、意味不明な事を叫ぶか、かなり上から目線の言葉しか出さないから少しイラツとする。

終いには「俺達はあのフランキー一家だぞ!俺達に手を出せばアニキが黙ってねえぞ!!」と他力本願な事を言い出すし。困った馬鹿共だ。

とりあえずコイツらの言う事をまとめると、賞金首のゾロとルフィさん、ロビンさん目当てって事。俺とゾロを倒した後、船内で待ち伏せつつ戻って来た一味全員を一網打尽してボロ儲けって寸法らしい。自称・賞金稼ぎ兼解体屋だと言っているのがゴーイングメリー号も解体して使える部分は売り払う予定だったのでゴーイングメリー号も

俺が留守を守っている状況で、大切な家族仲間と大事な船がそんな末路を辿るなんて許容される訳が無いだろう。

「ねえ、オマエらさ。俺たちを殺るつもりで来たんだよね?だったら、殺られる覚悟も決めてるはずだよな?なのにグダグダとつまんない事ばかり。」

……でさ、その虚勢が遺言で良いのかって聞いているの。わかる？

オマエラがどのフランキー一家か知ったこつちや無いんだよ。そのアニキって奴が何者かなんて関係ないの。降り掛かる火の粉は払う。火の粉が大きいか小さいかなんて関係ないでしょ？

大体、賞金稼ぎを自称してるんだから返り討ちに遭ったら自分たちの実力不足って事を理解しないと。

それを上の奴にチクって報復させるぞって脅し文句立ててさ。恥ずかしく無いの？オマエラの言動が一家の品格を下げてるって分からない？

『わざわざ下つ端の尻拭いをする情けないアニキが居る一家ですう。』って自分たちで吹聴してるのと一緒だよ。『俺たちアニキの足手まといなんです。アニキが居ないと何も出来ない下つ端なんです。』って大声張ってる様なもんだよ？それで良いの？

『俺たちは一家の名に恥じない漢に成るぞ！』って気概は無いの？『アニキに錦の旗持たせてやりてえ!!』って大望も無いの？一家の名は掲げるモノであつて威光を振りかざす為のモノじゃ無いよ？

俺はオマエラの事もそのアニキの事も良く知ってる訳じゃない。オマエラ一家がこれまで何を成して、これから何を成そうとするのかも知らない。だけど、何も考えず居る事だけは辞めなきや。責任も覚悟もアニキに押し付けるだけじゃホントに役立たずの足手まといで終わるだけだよ？

……それを踏まえてもう一度聞くけど、虚勢が遺言でホントに良いの？」

ほんの少しだが言いたいは言った。これでさつきみたいに吠え出すなら一厘の慈悲も無く瞬時に物理的に息の根を止めてやるつもりだ。

……いや待てよ。それは逆に慈悲に満ちている気がする。ここは生まれてきた事を後悔する程に甦る方が良いのかもしれない。

何せコイツらはゾロの命を狙ったんだ。それくらいな方が『慈悲は無い』と大手を振れるはずだ。

25・査定と八つ当たり

少し曇り始めて青さの少ない空、土埃を巻き上げるそれなりに強い風、俺の眼前で無様に鼻水を垂らしながら泣く強盗七人組。

なんだこれ。偉そうに説教染みた高説を垂れてしまったが想定以上に効果があったのか、それとも予想以上に彼等の精神が豆腐メンタルだったのか。はたまた、俺みたいなガキに説教されての悔し泣きなのか…
「もういいや。…オマエラもう帰れ。二度目は無いからな？」

両腕を縛られ吊されているので涙も鼻水も拭えないだろうし、正直見えていて鬱陶しい。

稽古で使用していた木刀を振るい縛っていた縄を切る。強盗共はそのまま地面に落ちるが50センチ程の落差しかないので両脚でちゃんと着地した。

「ほれ、オマエラにも帰る場所があるんでしょ？次からはちゃんと自分達の目的と実力に合った賞金首を狙えよ？『命は大切に』ってやつだ。」

強盗共は涙と鼻水を何処から取り出したか分からないハンカチで拭きつつトボトボと帰っていく。

すまねえ。ありがとよ。などと口々に去って行ったがもう遭うことも無いだろう。

俺の言葉をどう受け取ったかは知らないが、今後はもう少し慎重に行動出来るようになってほしいものだ。

因みに俺が最後に言った事は賞金首が如何にして懸賞金が掛けられたのか、懸賞金額の大小は人柄に依るものか、武力・知力・情報なのか、はたまた構成人数なのかと様々な要因を考えて標的を決めろつて事。

賞金首ってのは、世界にとって、海軍にとって若しくは、人々にとって『脅威』になると判断された者の事だ。麦わら海賊団ウチではゾロ、ルフィさん、ロビンさんの三人。因みに、俺は男になっているのでリイナの懸賞金はノーカウント。

まず、ゾロとルフィさんは海軍にとつての『脅威』と判断されている賞金首。

クザンさん曰く、現状で麦わら海賊団は様子見とされてるらしいが、『海軍側に直接的な被害は無いが何をやらかすか分からないから要注意』って意味合いのものだ。

これは、『海軍』^{イコール} 『正義』と『海賊』^{イコール} 『悪』という海軍側からの一方的な偏見も含まれている。王家七武海っていう例外も存在する訳だが割愛。

次いで、ロビンさんは世界にとつての『脅威』と判断されている。

これは本人にとつても不本意になるのだろうが、ロビンさんが持つ知識に対するモノだ。

^{ポーネグリップ}歴史の本文を解読出来る。たったそれだけの事。それだけの事なのに『脅威』だと判断されている。

その歴史の本文の存在がどれ程のモノなのかよく知らないが、『史実から隠された歴史』や内容の一部にある『古代兵器』が危険な事は聞いたことがある。まあ、女リイナ自身が『古代兵器』だったことは半信半疑だが…

話が逸れたが、賞金首には種類があるって事を説明したかった訳だ。

そして、ゾロとルフィさん、ロビンさんとは別の種類にあたる賞金首。それは、人々に害を成す海賊や山賊、強盗・殺人犯などの事。

無作為に略奪行為を起こしたり、私利私欲の為に人を襲ったり、快楽の為に暴虐の限りを尽くす無法者。

殆どの賞金首はこれに該当する。ソイツらはその野蛮な行動故に賞金首になっている。そんな奴らは生きる価値なんて無い。他人に害を及ぼすしか出来ない奴らはそこらの虫にも劣る屑だ。

なので、賞金稼ぎたちは率先してソイツらを狙ってくれ。一般人から嫌われている奴らを狩った方が好感度も上がり仕事としてのやり甲斐も出るだろうし、海軍的にも助かる。海賊狩りやってた時のゾロみたいに。

勿論、自分たちの実力に合った賞金首を狙え。命あつての物種だか

らね。って事。

言ってる事が少し幼稚な気もするけど、ウチのゾロとルフィさん、ロビンさんは海軍と世界政府側が勝手に危険視してるだけで危険人物では無い。：多分、違ふと思う。思いたい。

実際、極悪非道な“ドン・クリーク”や“魚人アールン”、“サー・クロコダイル”の打倒を果たして、結果として海軍の手助けしてるんだから『正義的な、若しくは義勇的な海賊団』だと思いが、結局は『海賊』ってカテゴリーだからね。

※ ※ ※

ふと、船上に物音がしたもんだから目が覚めた。昼寝をしていたとはいえ、俺の警戒区域に易々と侵入してくるなんて只者では無いだろう。

寝転ぶ際に邪魔だから腰から外した刀をさつと手に取り侵入者に視線を向ける。：長い鼻。なんだ、ウソツプさんか。

…………いや、違ふわ。

コイツは確かガレーラカンパニーの一番ドック大工職職長『カク』。その実、本当の正体はガレーラカンパニーへ潜伏任務中の『CP9』の一人だ。

なぜ俺がそんなことを知っているのかというと、海軍少佐だった頃にCP9の長官と会った事があり、その後政府要人の護衛でガレーラカンパニーに訪れた際、聞き及んだ彼ら四人の内三人の特徴からそれぞれを認知した過去があるからだ。一人だけ見当たらなかったから知らないけど。

ああ、思い出したらイライラしてきた。あの『スパムハム』だかいふ奴のねつとりしたイヤらしい目が気持ち悪かった記憶が蘇る。

まだ15、6歳程度の少女を性的な目で睨め付け回す変態長官は、ウォーターセブンに潜伏しているというCP9の情報をペラペラと自慢気にリイナへと語っていた。勿論、潜伏している目的についてもだ。

『世界政府直下暗躍諜報機関の司令長官として着任している俺カッコイイ』『世界最高峰の諜報・殺し集団を顎で使う俺スゲエ』と自己主張の激しい勘違い変態野郎だったが、顔に巻いた皮バンドだけはほんの少しカッコイイと思っただのは内緒だ。

その時リイナはドリフトさんの部下として、付き人のような立場：ただ後学のためにオマケとして同行していたにもかかわらず、ドリフトさんそっちのけで俺に絡みまくる変態には終始苦笑いしか浮かばなかった。

まあ俺も男としてだったら好みの女性に自分をアピールしたい気持ちは判らんでもない。

が、しかしだ。機密情報を垂れ流すのはどうかと思う。別れ際にそのことでドリフトさんが苦言を呈すもまるで聞いちゃいなかった様子だし今頃はどこかに左遷させられているかもしれないな。

でも、コイツが未だに大工として働いているってことはコイツラの任務はまだ継続中ってことだろうし……まさか水が合ったからって転職したなんてことはないだろう。

とりあえず初対面のていでカクに問いたです。勿論、「あなたは誰で何をしに来たのか」って内容をだ。

大方予想通りの返答に俺は表面上だけ警戒を解き、俺たちの話声中ノソノソと起きたゾロへ説明する。

「ルフィさんたちが予定通りに修理依頼を出せたみたいだから、船の状態を見に大工が来たみたい。」

おう、そうか。とだけ返事をして再び横になるゾロを尻目にカクの気配を追うとマストや甲板、側板を視診触診で見て回っている。

たまに「あれま」「こりあ……」と芳しく無い声を出すのでメリー号はあまり良い状態で無いことが伝わってくる。

若干メリー号を心配しはするが、クラブウォーターマンの宿るメリー号なのだからとそこまでの危機感には無かったし、世界一の造船会社の手には掛ければメリー号は完全に修理出来ると過信していた俺だった。

※ ※ ※

船底を確認する為に海に潜った後、カクが発した言葉に俺とゾロは呆然となった。

「この船はもう無理じゃ。ここまで来れたのが奇跡じやの。」

ふと、脳裏に浮かぶ皆の顔。

メリー号の船首がお気に入りで座ったり寝転んだりぶら下がったり涎を垂らして昼寝をするルフィさん。

自身の蹄で甲板を傷めないように、扉や柱に角をぶつけないように気を付けて、それでもぶつけてしまったり傷めてしまった時は申し訳なさそうにメリー号に謝るチョップパーくん。

突発的な嵐や海王類への遭遇を極力避けつつメリー号への負担を減らそうと航海術を駆使用するナミさん。

隅々まで綺麗に大事に使われるキッチンや居住スペースもそうだが、甲板やマストなど他にも気掛けて清掃をしていたサンジさん。

稽古や筋トレ等でも甲板や手摺りなんかを壊さないよう傷めたないように気を付け、重量物はゆっくり優しく下ろすように心掛けていたゾロ。

手の届かない場所や気付き難い場所の清掃と補修を皆に感付かれないよう能力を用いてこつそりとやってくれていたロビンさん。

そして、故郷の大切な友人からメリー号譲り受け、素人ながらも見様見真似で壊れた箇所を修理し、いつまでもメリー号での航海は続くと思っていてやまないウソップさん。

これまでの長い旅路に苦勞をかけたメリー号をウォーターセブンにて完璧な修理を施してやれると。これからも続く果ての見えない旅路にも必ずメリー号が共にあると疑われないウソップさんの曇りの無い、そして誇らしげな笑顔。

俺は特にウソップさんのメリー号への愛情を思い出し……後悔した。

『二つ二つの修理箇所がこれまでの航海の思い出』だと船体に頬擦りするウソップさんを見て『元の新品状態へ戻すのは野暮だ』と能力に

よる復元を提案しかけて、その言葉を飲み込んだ事を。

あの時それでも、と航海の安全を考慮して等と説得するべきだった。航行不能な損壊が起きたら能力を使えばいいやと安易に思考を放棄すべきじゃなかった。

空島での原作知識をシールから与えられ、メリー号にはクラバウターマンが宿っていると知り『それならば安泰だ。大丈夫だろう』と、確実性の無い根拠で楽観視してしまった愚行を。

とはいえ、覆水は盆に返らないし後悔は先に立たない。分かっている。分かっている。分かってはいても自身の選択をもう一度やり直せるならと考えてしまう。

「メリー号は……この船はもう修理出来ねえのか？」

カクへと静かに問い掛けるゾロの声に俯いていた顔を上げて俺もカクの返答を待つ。

「……ふう。お前さんらのような客は稀におる。して、こう告げるのは少し心苦しいが『無理じゃ』としか言えん。」

心苦しいと口には出したが、その言葉は淡々としていて無機質だった。無理だと語るこの男は表情を変えることもなかった。

それが気に食わなくて、ただの八つ当たりだと分かっていたが言葉は止められなかった。

「お前じゃ話にならねえ。本職アイスバレーク呼んでこい。」

「……何を言う？ わしは一番ドックの大工職職長じゃぞ。」

殆ど表情を変える事の無かったカクは片眉をピクリと一瞬だけ上げたが、元の無表情へと戻し僅かに俺への警戒を強めたのが感じられた。

『これ以上はいけない』と本能が警鐘を鳴らす。当たり前だ。俺だけならまだしも、このままだと一味全員を危機に晒す事が確定してしまう。

だが、激流の逆巻く感情が理性を押し退けて俺の口から飛び出る。

「……潜伏任務掛け持ちしてる奴の査定じゃ信じられねえツつってんだよ!!」

瞬間、言葉の意味を捉えたカクは明確な殺意を俺へと向けて見据える。同時に臨戦態勢へと切り替えているあたり流石はCP9の一人

だと感心してしまう。

しかし、カクは俺に飛び掛かってくる事はなかった。

何故なら俺もゾロもカクも視界に映る世界が色褪せると同時に、あの言霊が脳裏に響いたからだ。

『妾の許可無く動くでない』

26・気易さと秘密の願い

『悪魔の実』という物に同一の能力は存在しない。上・下位互換の能力は存在するが、それは同一のものとは言えない。

なので自身が使用してきた『悪魔の実』の能力は客観的に体験出来るものではない。

だからこそ、俺は場違いにも感動していた。

世界の境界線から隔離された色褪せた世界と、強制的に同化・同調され『言霊』の通りに身動き一つ取れない身体。『動くな』との言葉通り、全く身体は動かない。まあ話す事は出来るが。

話せるって事は『口は動いてるんだよな』って矛盾にも気付いてどこがおかしくもなる。

先程までカクに対して湧き上がっていた怒りは成りを潜め、自身の能力を受けて楽しさが込み上げてきていた。

逆にさっきまで俺へ殺意を向けていたはずのカクは現状に困惑しつつ動かない身体に苛立ちを募らせているようだ。

ゾロは二度目の隔離世界だからか、突然の襲来者が誰だか気付き、あの女の次の行動を待ち受けている。

「…お前、案外落ち着いてんだな。」

「ん？まあ、自分が散々使ってきた能力だからね。それに…」

元々横に居たゾロは目線だけを俺へと向けて少し呆れたような声色で話し掛けてくる。俺は素っ気なく返事をしつつ身体全体を『武装色の覇気』で覆う。

「俺は動こうと思えば動けるし。」

なんて事無い、と一歩二歩と足を進めてゾロの前に立つと訝しげに眉を顰めるゾロに種を明かす。

「単純に『武装色の覇気』を纏って能力の影響を受けないようにしてるだけだよ。」

この能力は能力者本人が大気中に同化し、取り込まれた相対者の素肌を通じ『同化・同調』し自由を奪うというもの。

なので『武装色の覇氣』で全身を覆い、能力者の『同化・同調』を遮れば良いだけの話だ。

『覇氣』の存在を知った後、アラバスタでロードがこの能力を打破出来た理由を理解した。なので、それと同じことをやっただけだ。

「ふむ、感心感心。『学習』はしておるようだのう。」

元からその場に居たように俺の背後からその声が聞こえた瞬間、腰に下げていた刀を振り向き様に抜刀し一閃する。

覇氣を纏わせていない刃だが確かにその胴を横に切り裂いた。：視認した限りでは、だ。

刀を持つ右手に伝わった感触は視認したものとは違った。視覚と触覚の齟齬に一瞬脳が麻痺する。

刀はその女の胴をすり抜けた。若しくは、空を切った感覚と言う表現が正しいのだろうか。横凧ぎの一閃は何の抵抗も無く振り抜かれたのだから。

『同化する能力』とは本来、こういう使い方をするのだ。お主の『同化』は大味過ぎる。」

見下すでも無く、嘲るでも無い微笑みを俺に向けて、ロロノア・リィナと同じ顔をした女は優雅にただそこに佇んでいた。

※ ※ ※ ※

「マジウケるー！」

そう言つて淡い水色のドレスが汚れる事も考えずに笑い転げる女を直視出来ずに、俺は天を仰ぎ右手を額に当てて思わず呟いた。

「……………どうしてこうなった。」

先程までの緊迫感ある空気をぶち壊した女の登場からを思い返して深い…本当に深い溜め息を吐く。

俺の振り向き様の一閃を能力で無効化した直後、女はゾロとカクの記憶を一部改竄し現実世界へ戻した。

記憶の一部を能力によって切り離し、消失させているらしいので改竄と言うのは違いかも知れないが、名目上は改竄で良いだろう。

これでカクはメリー号の査定結果を伝えた時点まで、ゾロはメリー号の査定結果を聞いた時点までの状態に記憶が戻っているらしい。ついでに、俺は査定場には居合わせなかったように記憶の改竄を行ったそうだ。

そして、隔離世界に俺と女の二人だけになった事で俺は焦りを感じていた。この女は俺だけを隔離世界に残して何をする気なのかという焦燥感だ。

この隔離世界へ俺を閉じ込める気なのか、それとも命を奪う気か。戦闘になるのならまだ良い。互いに覇気は使えるだろうが、悪魔の実の能力が無い俺はかなり分が悪い。勝てるかは分からないがただで負けてやる気は無い。最悪、刺し違えてでも全力で殺しに掛かるつもりでいる。

だが、隔離世界に俺だけを閉じ込めると言うのなら話は別だ。この世界に閉じ込められると自力で脱出出来る確信は無い。『悪魔の実』の能力なのだから『武装色の覇気』で打破出来る可能性はあるが、出たとこ勝負は避けたい。

最悪を想定するのなら、隔離世界に閉じ込められて脱出出来ずに餓死してところだろうか。

どうする、何か手は無いかと思案しつつ女の動向に注意して警戒を深める。そんな時だった。

「…掛け持ちしてる奴の査定じゃ信じられねえツつってんだよ!!」

なぜかキリツとした表情で俺を見ながら言い放った。

俺がカクに向けて言った言葉だが、なぜそれを突然言い放ったのかわからない俺は呆然とするしかない。

「キミ、私だった時はもっと冷静で理論的だったはずじゃん? チョーウケるんですけど!」

「……はあ?!」

なんだこの女…さっきまでとは雰囲気ガラリと変わり、妙に馴れ馴れしくて戸惑うしか出来ない。

「本職呼んでこい! キリツ!!…だって!」

再び俺がカクへ放った言葉を真似て笑い出す。しかも、腹を抱えて

笑ったかと思うと今度は地べたを転げ回っている。

なんだこれ：どうしてこうなった。

天を仰ぎ、無意識に右手を額に当てると思考が声に出ていた。

※ ※ ※ ※ ※

「ああ、笑った笑った！

：コホン！妾の名はヘクアト・L・メレファイア。世間ではロロノア・リイナだという事になっておるがな。メレファイアで構わんぞ。」

なんだコイツ：今更取り繕っても遅いだろ。っていうか、ちゃんと名前があるんだな。いきなり名前呼びは敷居が高いわ！

「いや、ホントに意味分かんないんだけど：『妾の』とか『お主の』とか高飛車な言動と、『チョーウケる』とか『くじゃん』のどっちが素なんだよ？」

そう問い掛けるとメレファイアは再び態度をガラリと変えて呆れた様に息を吐いた。

「ああ、そーいえばキミって細かい事気にするタイプだったね。

えつとね、私は元王族だからさ。人前ではそれなりの威厳を保たなきゃいけない訳よ。ドリちゃん：あ、ドリフトね？あいつとはその頃からの知り合いだから素で話そうとしたら口うるさくてさ。だから基本的には威厳のある言動を保つ様にしてるって訳。

：その点キミは二年間の記憶を共有してるから、私的には初対面じゃないし気楽で良いかな〜って！

俺が死にかけた時の第一声は超上から目線の発言だったはずですがね？しかも、見た目15、6才の少女に「ちゃん」付けされるおつドリフトさんって……

ん?!王族の頃からの知り合い?二年前よりももっと以前の話だろうから、幼い頃からの知り合いって事だよな。でも、『元』王族がイースト・ブルー東の海のニツパ村、しかも森の中に全裸で居たって何でだろう…と、自身の一番古い記憶に謎でしかない疑問が浮かぶ。

それに、ドリフトさんの態度はロロノア・リイナに対して初対面の

対応をしていたはずだ。そこに嘘や動揺は無かった様に見えたけど

： 「因みに『ヘクアト』が地母神ヘカテの系譜って意味で、『L』が一族の略名。王って意味の『メレフ』に、女の名前で『メレフィア』！なんと、私は生まれながらの神であり王であるのだ。参ったか！えっへん!!」

“えっへん”なんて擬音を直接言葉にする人って居るんだ……

「あ、因みにこの身体は真正銘私のだから返せないからね。女の子って色々不便だから代わってあげたいのは山々なんだけど残念ですが無理！そうそう、キミが考えてた『転生ではなく憑依ではないか説』は大正解っ☆だから、新しい身体をプレゼントしましたっ♪

それから、能力については詳しく教える事は出来ませう！なぜなら、まだ時期じゃないから。たぶんあと二年後くらいかな。

今教えて良いのは、私が元々持ってた『万物と同化する能力』とキミの『とある能力』は融合しちやってるから分離は不可能って事くらい！ま、能力は諦めて下さうい!!オツケー?」

「……いや、ホントちよつと待つて。理解が追い付かない。俺が憑依してたつて言うけど、そもそも何で憑依しちやっただよ?それに能力が融合してるって、なんで融合すんだよ?」

本当に理解が追い付かないしツツコミも追い付かない。

「まだだ、まだ慌てるような時間じゃ無い。まずは素数を数えて落ちて着くんだ。」

1、3、5、7、9、11……って、これ奇数じゃねえか!これ前にもやったよ!!

「憑依しちやっただのはホントに偶然。じゃなければ、キミのいた世界の神様のイタズラかなあ?」

「能力はねえ……ま、しちやっただものはしよーが無いって!ドンマイ!」

「……意味分かんねえよ。」

俺は堪らず地面に蹲り頭を抱える。…あ、これあれだ。俺が事ある毎に事情説明した時のナミさんがよくやってた体勢だ。今更ナミさんの苦勞に気付いた。御免なさいお姉ちゃん。

俺がそうしていると、メレファイアはアハハと申し訳なさそうに空笑いして、コホンと一つ咳払いをしてからおどけた口調を改めて語り始めた。

「私はこの二年間キミの中で共に在ったけど、キミにはキミの二年間しか記憶が無い。だけど、私はキミの二年間の記憶を共有してる。だから、キミが見て聞いて感じた事は全て私は知ってる。」

その二年間のキミは、本来のキミと本来の私の性格を足して2で割ったような不安定な性格だったはず。思い至る面はあるでしょ？」
言われてみれば確かに浮き沈みの激しい不安定な性格だったような気はする。自身の性格は自身で良く分からない面もあるが、沈む時はとことん沈んで他人とは壁を作っていたし、ゾロと再会してからは変な事を口走るくらい浮かれたりもした。

「私は基本的に楽観主義者でキミは基本的に悲観主義者。今のキミは転生前の記憶が無いから『ロロノア・リーナ』としての性格や感情が落ち着かない状態なの。だから、今までの二年間は一旦頭の隅に追い遣ってキミ自身を見つめ直しなさい。分かった？」

そう言われて俺は黙って頷くしかなかった。

「さっきみたいに形振り構わず喧嘩売っちゃ駄目よ。ドリちゃんにはキミの事言つて無いんだから、今はまだ極力大人しくしててほしいの。」

私は私であいつの計画邪魔するつもりだったけどなんか既に無理っぽいし、ここぞで時にキミが颯爽と登場してドリちゃんの計画がアバババーっと崩壊するようにしたいのよ。」

なんだよアバババーって。ドリフトさんの計画って空島でシールが言つてたやつか？詳しい内容は知らないけど、こいつに聞いてもも教えてくれなさそうさ。

それにしても、俺の事をドリフトさんに伝えてないとはどういうつもりだ？

「…っーか、お前って俺の敵じゃなかった？」

「ん？違うよ。別にドリちゃん味の方って訳でもないけど、敢えて言うなら『時代』の味方かな♪」

「余計に分かんねえよ……そもそも、あのタイミングで俺とお前に別れた意味はあるのか？」

ロビンさんの仮説が正しければあのタイミングしか無かつただろう事は理解出来る。しかし、この女の言動を見る限り、あの襲撃が好機だった様には感じられない。

「私的にはいつでも分離は出来たし、あのタイミングじゃなきゃいけない理由なんて無かつたよ。

強いて言うなら……キミ、あの時諦めたでしょ？後悔する事はあつたにしても『良い人生だつた』なんて考えてさ？」

メレフィアは前半をアツケラカンと言いのけて、後半は怒つた表情を浮かべて言い放つた。

確かに、死が脳裏を過ぎつた時に抵抗は無かつた。悔やまれる事を思い返しはしたが、それでも死を受け入れた自分がいたのは事実だつた。

「ああいう時つて諦めたらホントに終わりなの。

三途の川を渡つてる船の上で『仕方ない』つて大人しくしてたらそのまま連れてかれちゃう。けど、船頭に掴み掛かつて『戻れ・降ろせ・引き返せ』つて反抗すれば案外死なないもんなのよ。

だから、あの時は私がキミを引つ張り上げるのが最善だつたと思つておきなさい。

あ、アラバスタの時は瀕死つて訳でも無かつたから放つておいただけ。」

「……つてことは、あの時は本当に死ぬ寸前だつた訳か。」

「そ。十二回も死の淵を体験してきた私が言うんだから間違いない。

あ、これは前世での話ね。いやあ、前世ではホントに苦労したのよ。例えるなら『ベリーハード・ザ・おにちく』つて感じ！おかげで転生した後は人生イージーモード！」

「……………」

コイツ……いくつ爆弾投下する気なんだよ。いや、コイツが転生者だつてことは予想通りだけど……

「で、神様で元王族で転生者なメレフィア様は結局俺と話をしにきた

だけ？」

未だに蹲ったままの体勢だった俺は深く息を吐き立ち上がる。もう困惑や混乱を通り越して感情は諦念へと振り切っていた。

そんな俺を見たメレフィアは、たははと苦笑し今一度居住まいを正して口を開く。

「一気に話し過ぎちゃったね、ごめんね。

私はキミと分離してからも能力でずっと見てたよ。だから今回は止められた。キミの存在は露呈しなかった。

私は表面上ドリフトの仲間だって事になってるからキミを助ける事はあまり出来ない。それを悟られる訳にはいかない。

そして、今はまだドリフトはキミに気付いてない。キミの存在は気付かれてはいけない。私の裏切りにも気付かれてはいけない。

だから、今キミにしか出来ない事を頼みに来たの。勿論、強制じゃ無いけどね。」

そして、メレフィアは優しく微笑んで言った。

「ポートガス・D・エースを救ってほしい。」

27・重なる問題 続く不運

『ポートガス・D・エースを救ってほしい』

メレフィアが俺へ頼んだ事。強制はしないとは言っていたが、俺としては受けてやりたいと思っっている。

しかし、一味の皆に何と説明しよう。

転生者集団はローグタウンで塵殺した黒ひげを復活させて何やら策略を立てている。

その策略の結果、ポートガスが捕縛され投獄・処刑となる未来は確定的だそうだ。

ある転生者からそういう情報が届いた、と素直に伝えるべきか悩むところだ。

現時点ではポートガスは白ひげの下で健在らしいが、それが何時起こるのかは不明だそうで、出来るだけ早く俺に行動してほしいと言われた。

そう言われても正直困る。

回収した「悪魔の実」はポートガスに渡したので、黒ひげが復活しているとしても今は無能力者のはずである。黒ひげがポートガスをどうしようしようとも、白ひげの下に居るのならソコが一番安全だろうと思うが。

ポートガス自身も含め「億単位」賞金首の隊長が数人と、それを纏めている「白ひげ」は『世界最強の男』なのだ。

普通に考えれば、ソコからポートガスを無力化し捕縛するのは不可能だ。

…普通なら、だけど。

メレフィアの話が確かならば、転生者集団六人と海軍大将クザンさんを合わせた七人……いや、他にも協力者がいるだろうな。

戦力的に見ればこちらの優位性はほぼ無いと言って良いだろう。最悪の場合『白ひげ海賊団』が壊滅するかもしれないと密かに戦慄する。

“原作重視”の転生者集団からすればポルトガスの投獄が目的なので本当に秘密裏に動くそうだが、実際のところどうなるのか原作知識の無い俺には判らない。

こちらにとつて幸いなことは転生者集団が『俺』の存在を知らない事と、メレフィアが密かに情報を提供してくれる事を約束してくれたのみ。

転生者集団の裏をかけるのが俺だけだという状況が吉と出るか凶と出るか……

※ ※ ※ ※

メレフィアとの邂逅が済み、俺はメリー号に戻ったていでゾロと話をしていた。メリー号の修理査定の場に俺は居なかったものとして扱われているからだ。

メリー号の修理は不可能だと俺は既に知ってる。だけど、それが記憶にないゾロは言い辛そうに口籠もっているので、言わなくていいよと察したフリをした。

一度感情的になった後なので二度目を聞いても俺は冷静でいられるが、一味の皆はどんな反応を示すだろう。

やっぱり、俺がリイナの時に能力である程度復元出来ていれば……と思ってしまう。実際に言葉で罵られる事は無いだろうけど、内心でそう思われてしまうのではないかと少し不安になる。

まあ、一応だがメレフィアの能力でメリー号の復元を頼んでみたがすげなく断られた。

メリー号の“原作運命”を知る身として、それは変えてはいけないモノなのだ。

メリー号は元々海賊船として造られた船では無い。そんな船がここまで保った気持ちを君なら、メリー号に宿るクラバウターマンの存在を知る君ならば汲んであげるべきだ、とも。

皆が皆、理性で割り切る事が出来るとは思わないでくれよ。感情がそれを許してはくれない時もあるんだから。

※ ※ ※

「…どういうこと?」

メリー号の修理依頼に行っていたルフィさんたちと買い出しに行っていたサンジさんが共に岬へと戻って来たのだが、メリー号の修理依頼は不可能だという話と共にロビンさんが迷子になったと聞かされた。

いや、迷子って。ロビンさんは子供じゃないんだから。

「まあ、待ってればその内戻って来るんじゃないですか?」

「いや、ちつとばかし様子がへんなんだ。チョッパーに匂いで追ってもらったんだが、水路で匂いが途絶えてた。態々ヤガラに乗ったり水路を越えて何処かに行くんなら俺たちに一言告げてからでも良いだろ?つまり…」

「攫われた。若しくは、自ら姿を隠したって事ですか。」

「あのロビンちゃんだぞ。そう易々と誘拐なんて出来ると思うか?こんなこと言いたくねえが…何らかの理由で、後者なんだろうよ」

サンジさんなりの葛藤が若干言葉を濁らせているのが理解出来た。普段よりも荒く煙草の煙を燻らせている。

何か理由があるのだろうけどロビンさんが誰にも何も告げずに居なくなってしまった。

そして、ゴーイング・メリー号の修理不能問題。

尚且つ、未だ伝えられていないがエースの投獄・処刑問題もある。

タイミング悪過ぎだろっ!!何でこのタイミングで次から次へと!デービーバックファイトの時も良いところ襲撃される、し…:…メレフィアが、分離して、能力、無く、なる、し?…:…?!…:…っ!!

「そーだったっ?!つい?うっかり!忘れてた!?!失念だ?!うわっ?どうしよー!どーする?!」

「なっ、なに?どうしたのよ!」

突然慌てだした俺に一同ビクリと肩を揺らすのが、一味のまとめ役でもあるナミさんが問うてくる。

「……クザンさんがデービーバックファイトを仕掛けた意味が無くなったってのと、もしかするとロビンさんが消息不明な理由が分かったかも……なんて♪」

※ ※ ※ ※ ※

ロングリングロングランドでのデービーバックファイト。あれには一味の船長であるルフィさんの器と気概を計る目的と、副次的にロビンさんの『仲間意識』を高める効果も期待されていた。と、俺は推測していた。

二勝された時点でロビンさんの移籍が確定してしまう条件で、予定通り一戦目は敗北してしまい後が無い状況に晒された。

二戦目、三戦目共に一敗も出来ない状況で死力を尽くし『ニコ・ロビンは仲間だ』と奮闘する姿を当人に見せ付ける事で暗い過去を少しでも払拭させようとした。と、俺は考えていた。

しかしだ、ロロノア・リィナ襲撃のせいで三戦目を丸々見ていない。ボロボロになりながらも勝利した後のルフィさんを見ただけでは伝わらない雰囲気や言葉、思いはロビンさんへ届いていないのだ。

クザンさん本人がメレフィアと共に転移してしまい最後はグダグダと終わってしまったので尚更だろう。

よって、ロビンさんの暗い過去は払拭されていないだろうとわかる。

ロビンさんが麦わら海賊団を好ましく思えば思う程に、過去の暗い記憶・経験が『尚更ココに居てはいけない』と考えさせてしまう呪い。これが一つ目の情報。

そして二つ目は俺だからこそ知り得た“CP9”の情報。

以前会ったスパイス、素パスタ？とかいう長官が得意気に言っていたウォーターセブンへの潜伏任務の事だ。

『古代兵器の設計図』なる代物の奪取。その為にガレーラカンパニーの船大工として二人と秘書として一人、あとの一人は一般市民としての潜伏任務に就いているらしい。

その二つの情報を掛け合わせると……『古代文字を読める 悪魔の子』ニコ・ロビン』と『古代兵器の設計図』が『世界政府直轄機関 CP9』の潜伏している『ウォーターセブン』に集っている。

ロビンさんが麦わら一味に属しているのは周知の事実。その麦わら一味が船の修理の為ウォーターセブンに訪れたとなると潜伏中であるCP9としても好都合なことだ。

CP9は『麦わら一味』を見逃す事を条件にロビンさんの拘束を交渉。ロビンさんは自分一人で済むのならとそれに承諾って感じかな。

悲しい事だが、ロビンさんは過去の不幸は自分のせいだと感じている。だからこそ、麦わら一味の為に自分一人が犠牲になろうとしているんだろう。

と、一味の皆に俺の考えた推測を話した。

「……っ、なんだよそれ!!」

当然、皆一様に憤慨の声をあげる。

ルフィさんとサンジサンジはガレーラに今すぐ乗り込みそうな勢いだったのでロープで簀巻きにしてある。

「取り敢えず、さっきのは推測でしかありません。だから落ち着いてこれからの事を考えましょう。」

一味の頭脳であるナミさんすら今は冷静ではない。少し時間を置いて幾つかの事を同時進行で考えた方が良いだろう。